

2002

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第98集

FUKABORI

第2・3・5次調査

深堀

Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ

長野県佐久市志賀川、滑津川合流地点河岸段丘、及び田切台地上の遺跡群の調査

長野県土地改良課
佐久市教育委員会

2002

佐久市埋蔵文化財部報告書 第99集

FUKAHOHI

深堀

第2・3・5次調査

Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ

長野県佐久市本郷川、津野川合流沖原河原地区、及び同地区周辺の埋蔵文化財調査

埋蔵文化財調査員
佐久市埋蔵文化財部

2002

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第98集

FUKABORI

深堀

第2・3・5次調査

Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ

長野県佐久市志賀川、滑津川合流地点河岸段丘、及び田切台地上の遺跡群の調査

深堀遺跡群
八反田城跡
瀬戸狐塚古墳群
東千石平遺跡群

長野県土地改良課
佐久市教育委員会



【蛙】線刻面土師器杯(H33号住居址)



三葉環頭大刀柄頭 (H11号住居址出土)



綠釉陶器 (東千石遺跡群)



(H58)



東千石遺跡群出土帯金具



遺跡全景(H11)



遺跡遺景(西から)



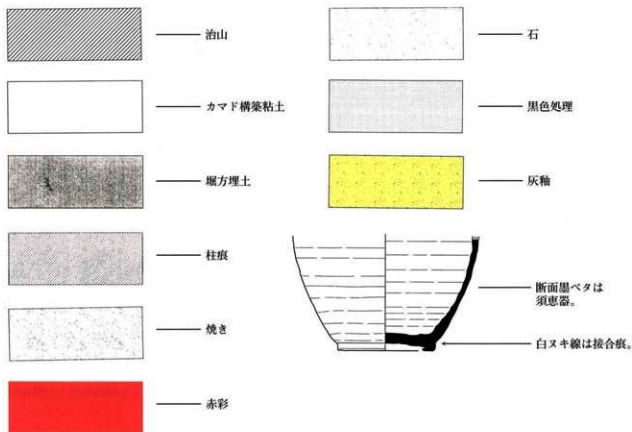
遺跡遺景(東から)

例 言

1. 本書は、景宮田園整備事業瀬戸原地区に伴う、埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査委託者 長野県土地改良課
3. 調査受託者 佐久市教育委員会
4. 遺跡名及び発掘調査所在地
遺跡名 深堀遺跡群、八反田城跡、瀬戸孤塚古墳群350-4号墳・350-5号墳、東千石平遺跡群
所在地 佐久市大字瀬戸
5. 調査期間・面積
試掘調査 平成9年11月18日～12月25日
平成10年9月28日～10月23日
発掘調査
深堀Ⅱ 平成10年8月3日～12月9日
深堀Ⅲ 平成11年4月26日～8月9日
深堀Ⅴ 平成12年7月11日～7月27日
整理調査 平成11年8月10日～平成12年1月25日
平成12年9月26日～平成13年2月8日
平成13年
調査面積 49,400㎡
6. 試掘調査は平成9年度は三石宗一、平成10年度は富沢一明が担当した。
発掘調査は平成10年度は羽毛田卓也・富沢一明が、平成11年度は小林眞寿・出澤 力が、平成12年度は小林眞寿が担当した。
整理調査は平成11年度は小林眞寿・出澤 力が、平成12年度は小林眞寿が担当した。
本書の執筆・編集は、付編の執筆を除き小林眞寿が行った。
付編の執筆者は以下のとおりである。
深堀遺跡Ⅲ・Ⅴ出土土器の胎土分析—兼第四紀地質研究所 井上 巖
佐久市深堀遺跡の自然科学分析—兼古環境研究所
深堀遺跡出土人骨の鑑定—長野県看護大学社会経済学研究室 教授 多賀谷昭
7. 出土土器の胎土分析は兼第四紀地質研究所に依頼した。
出土人骨の鑑定は長野県看護大学社会経済学研究室教授多賀谷昭氏に依頼した。
出土炭化材・種夾の同定は兼古環境研究所に依頼した。
8. 航空写真撮影及び深堀Ⅱの航空測量全体図作成、瀬戸孤塚350-4号墳の測量は兼こうそくが行った。
9. 八反田城跡の堀址＝M12の測量及び、調査全体の測量基準点の設定は兼浅間エンジニアリングが行った。
10. 本書に使用した土器写真の一部は兼こうそくが撮影した。
11. 本書の挿図のほとんどは兼アースネットがトレース及び版下の作成を行った。
12. 本書及び深堀遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ出土遺物等のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。
13. 山梨県明野村埋蔵文化財センターからは、当遺跡より出土した、甲斐系土器と思われる土師器の胎土分析試料の比較試料を提供して頂いたことを感謝いたします。

凡 例

1. 遺跡の略記号はSFHである。
2. 遺構の略記号は、住居址-H、掘立柱建物址-F、土坑-D、溝址-Mである。
3. 挿図の縮尺は遺構-1/80、遺物-1/4を基本としたが、該当しない場合は図中にスケールを示してある。
4. 遺構の海拔標高は各遺構毎に統一し、水系標高を「標高」として示した。
5. 土層の色調は、1999年版『新版 標準土色帖』に基づいた。
6. 挿図中の方位は真北を示す。
7. 住居址の面積は床面積であり、カマド部分を含んでいる。掘立柱建物址の面積は、四隅の柱の芯により囲まれた範囲である。
8. 遺構図に●1と表現されているものは、遺物実測図の2(1)の()内の番号と同一であり、遺物観察表備考欄に№1と表記されている。
9. 写真図版の遺物の縮尺は、実測図の縮尺と基本的に同一である。
10. 本書に使用されているスクリーントーン表現は以下のとおりである。



目次

口 絵
例 言
凡 例

第1章 調査の概要	1
第1節 調査の経緯と経過	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査日誌	4
第4節 遺跡の位置と周辺遺跡	5
第5節 基本層序	7
第6節 検出遺構遺物の概要	8
第II章 遺構と遺物	8
第1節 住居址	8
第2節 掘立柱建物址	73
第3節 土坑	77
第4節 溝址	96
第5節 Pit	101
第6節 古墳	101
第7節 竪穴	131
第8節 遺構外出土遺物	131
第9節 試掘調査出土遺物	134
第III章 総括	180
第1節 土器様相	180
第2節 文字関係資料	192
付編	195
1 深堀遺跡Ⅲ・Ⅴ出土土師器の胎土分析	兼第四紀地質研究所 井上 巖
2 佐久市深堀遺跡の自然科学分析	株式会社 古環境研究所
3 長野県佐久市深堀遺跡から出土した近世およびそれ以前の古人骨について	長野県看護大学 多賀谷昭

付図 深堀遺跡全体図

挿 図 目 次

第1図 深堀遺跡群・東千石平遺跡群位置図(1:50,000).....1	第46図 H39号住居址.....44
第2図 深堀遺跡第1次調査出土の弥生土器.....5	第47図 H40号住居址(1).....45
第3図 周辺遺跡位置図(1:5,000).....6	第48図 H40号住居址(2).....46
第4図 基本層序模式図.....7	第49図 H41号住居址.....46
第5図 H1号住居址.....9	第50図 H42号住居址.....47
第6図 H2号住居址.....10	第51図 H43号住居址.....47
第7図 H3号住居址.....11	第52図 H44号住居址.....48
第8図 H4号住居址.....12	第53図 H45号住居址.....49
第9図 H5号住居址.....13	第54図 H46号住居址.....48
第10図 H6号住居址.....13	第55図 H47号住居址.....50
第11図 H7号住居址(1).....14	第56図 H48号住居址.....51
第12図 H7号住居址(2).....15	第57図 H49号住居址.....52
第13図 H8号住居址.....16	第58図 H50号住居址.....53
第14図 H9号住居址.....17	第59図 H51号住居址.....54
第15図 H10号住居址(1).....18	第60図 H52号住居址.....55
第16図 H10号住居址(2).....19	第61図 H53号住居址.....56
第17図 H11号住居址.....20	第62図 H54号住居址.....57
第18図 H12号住居址.....21	第63図 H55号住居址.....58
第19図 H13号住居址.....20	第64図 H56号住居址(1).....59
第20図 H14号住居址.....22	第65図 H56号住居址(2).....60
第21図 H15号住居址.....23	第66図 H56号住居址(3).....61
第22図 H16号住居址.....24	第67図 H57号住居址.....61
第23図 H17号住居址(1).....25	第68図 H58号住居址.....62
第24図 H17号住居址(2).....26	第69図 H59号住居址.....63
第25図 H18号住居址.....27	第70図 H60号住居址.....64
第26図 H19号住居址.....28	第71図 H61号住居址.....65
第27図 H20号住居址.....29	第72図 H62号住居址.....64
第28図 H21号住居址.....29	第73図 H63号住居址.....64
第29図 H22号住居址.....30	第74図 H64号住居址.....64
第30図 H30号住居址.....31	第75図 H65号住居址.....66
第31図 H24号住居址.....32	第76図 H66号住居址.....68
第32図 H25号住居址.....33	第77図 H67号住居址.....69
第33図 H26号住居址.....33	第78図 H68号住居址.....70
第34図 H27号住居址.....34	第79図 H69号住居址.....70
第35図 H28号住居址.....35	第80図 H70号住居址.....70
第36図 H29号住居址.....36	第81図 H71号住居址.....71
第37図 H30号住居址.....37	第82図 H72号住居址.....71
第38図 H31号住居址.....37	第83図 H73号住居址.....72
第39図 H32号住居址.....38	第84図 F1・2・3号掘立柱建物址.....74
第40図 H33号住居址.....38	第85図 F4・5号掘立柱建物址.....75
第41図 H34号住居址.....39	第86図 F6・7号掘立柱建物址.....76
第42図 H35号住居址.....40	第87図 D1号～D7号土坑.....86
第43図 H36号住居址.....41	第88図 D8号～D16号土坑.....87
第44図 H37号住居址.....43	第89図 D17号～D25号土坑.....88
第45図 H38号住居址.....45	第90図 D26号～D32号土坑.....89

第91図	D 33号～D 41号土坑	90
第92図	D 42号～D 49号土坑	91
第93図	D 50号～D 57号土坑	92
第94図	D 58号～D 64号土坑	93
第95図	D 65号～D 68号土坑	94
第96図	D 70号～D 79号土坑	96
第97図	M 1・3号溝址	102
第98図	M 2・7号溝址	103
第99図	M 4号溝址	104
第100図	M 5・6号溝址	105
第101図	M 8・10号溝址	106
第102図	M 9・11号溝址	107
第103図	M 12・13号溝址	108
第104図	M 14・15号溝址	109
第105図	M 17・18・21・22号溝址	110
第106図	M 19・24号溝址	111
第107図	M 23・25・26号溝址	112
第108図	M 20・27・29・30号溝址	113
第109図	M 28・33・34号溝址	114
第110図	M 31・32・35号溝址	115
第111図	M 36・37・38号溝址	116
第112図	M 39・40・41号溝址	117
第113図	M 42・45号溝址	118
第114図	M 43・44号溝址	119・120
第115図	M 46・47・49号溝址	121
第116図	M 48・50～52号溝址	122
第117図	M 53～56号溝址	123
第118図	M 56～59号溝址	124
第119図	M 60・62・63号溝址	125
第120図	M 61・64・65号溝址	126
第121図	M 66～69号溝址	127
第122図	Pr 出土遺物	128
第123図	Ta 1・環状溝址・柱列 1	129
第124図	350-4号墳(1)	130
第125図	350-4号墳(2)	131
第126図	350-5号墳(1)	132
第127図	350-5号墳(2)	133
第128図	遺構外出土遺物(1)	135
第129図	遺構外出土遺物(2)	136
第130図	遺構外出土遺物(3)	137
第131図	遺構外出土遺物(4)	138
第132図	遺構外出土遺物(5)	139
第133図	遺構外出土遺物(6)	140
第134図	遺構外出土遺物(7)	141
第135図	遺構外出土遺物(8)	142
第136図	試掘調査出土遺物(1)	144
第137図	試掘調査出土遺物(2)	145
第138図	試掘調査出土遺物(3)	146

第139図	壺口縁部の分類	181
第140図	壺の計測位置	183
第141図	壺の文様帯	183
第142図	佐久市弥生時代中期後半編年表(1)	185
第143図	佐久市弥生時代中期後半編年表(2)	186
第144図	佐久市弥生時代中期後半編年表(3)	187
第145図	佐久市弥生時代中期後半編年表(4)	188
第146図	古墳時代土師器坪の分類	189
第147図	古墳・奈良・平安時代編年表(1)	190
第148図	古墳・奈良・平安時代編年表(2)	191
第149図	出土文字・記号資料写真	194

付編

第 1 図	三角ダイヤグラム位置分類図	202
第 2 図	菱形ダイヤグラム位置分類図	202
第 3 図	土師器 Mo - Mi - Hb 三形ダイヤグラムズ	203
第 4 図	土師器 Mo - Ch, Mi - Hb 菱形ダイヤグラムズ	203
第 5 図	土師器 Qt - Pi 図	204
第 6 図	土師器 SiO ₂ - Al ₂ O ₃ 図	204
第 7 図	土師器 Fe ₂ O ₃ - MgO 図	205
第 8 図	土師器 K ₂ O - CaO 図	205
第 9 図	須恵器 Mo - Mi - Hb 三形ダイヤグラムズ	206
第10図	須恵器 Mo - Ch, Mi - Hb 菱形ダイヤグラムズ	206
第11図	須恵器 Qt - Pi 図	207
第12図	須恵器 SiO ₂ - Al ₂ O ₃ 図	207
第13図	須恵器 Fe ₂ O ₃ - MgO 図	208
第14図	須恵器 K ₂ O - CaO 図	208
図-1	須恵器 Qt - Pi 図(佐久市)	209
図-2	須恵器 SiO ₂ - Al ₂ O ₃ 図(佐久市)	209
図-3	須恵器 Fe ₂ O ₃ - MgO 図(佐久市)	210
図-4	須恵器 K ₂ O - CaO 図(佐久市)	210
	深板遺跡の種実	220
	深板遺跡の木材 1	221
	深板遺跡の木材 2	222
	D 52号土坑出土土骨	227
図 1	7項目の顔面部測値に基づく形状の比較	228

表 目 次

第1表	住居址計測表	147
第2表	土坑計測表	148
第3表	竪立柱建物址計測表	148
第4表	出土遺物観察表1	149
第5表	出土遺物観察表2	150
第6表	出土遺物観察表3	151
第7表	出土遺物観察表4	152
第8表	出土遺物観察表5	153
第9表	出土遺物観察表6	154
第10表	出土遺物観察表7	155
第11表	出土遺物観察表8	156
第12表	出土遺物観察表9	157
第13表	出土遺物観察表10	158
第14表	出土遺物観察表11	159
第15表	出土遺物観察表12	160
第16表	出土遺物観察表13	161
第17表	出土遺物観察表14	162
第18表	出土遺物観察表15	163
第19表	出土遺物観察表16	164
第20表	出土遺物観察表17	165
第21表	出土遺物観察表18	165
第22表	出土遺物観察表19	166
第23表	出土遺物観察表20	167
第24表	出土遺物観察表21	168
第25表	出土遺物観察表22	168
第26表	出土遺物観察表23(遺構外)	169
第27表	出土遺物観察表24(遺構外)	170
第28表	出土遺物観察表25(遺構外)	171
第29表	出土遺物観察表26(遺構外)	172
第30表	出土遺物観察表27(遺構外)	173
第31表	出土遺物観察表28(遺構外)	174
第32表	出土遺物観察表29(遺構外)	175
第33表	出土遺物観察表30(遺構外)	176
第34表	出土遺物観察表31(遺構外)	177
第35表	出土遺物観察表32(遺構外)	178
第36表	出土遺物観察表33(遺構外)	179
第37表	時期別住居址一覧表	180
第38表	口縁部形態と文様帯	183
第39表	壺分類・計測表	184
第40表	文字関係資料一覧表 ^[1]	192
第41表	文字関係資料一覧表 ^[2]	193

第3表	タイプ分類表	213
第4表	組成分類表	214
第5表	胎土性状表	215
第6表	化学分析表	216
第7表	タイプ分類表	217
第8表	組成分類表	217
表1	D52号土坑出土の近世人骨(男性)の頭蓋計測値と示教	226
表2	D52号土坑出土の近世人骨(男性)の四肢骨計測値と示教	226

付 編

第1表	胎土性状表	211
第2表	化学分析表	212

图 版 目 次

- 1 H1·H2号住居址
- 2 H3·H4号住居址
- 3 H5·6·7号住居址
- 4 H8·9号住居址
- 5 H10·11号住居址
- 6 H12·13号住居址
- 7 H14·15号住居址
- 8 H16·17号住居址
- 9 H18·19号住居址
- 10 H20·21·22号住居址
- 11 H23·24号住居址
- 12 H25·26·27号住居址
- 13 H28·29号住居址
- 14 H29·30号住居址
- 15 H31·32号住居址
- 16 H33·34号住居址
- 17 H34·35号住居址
- 18 H36·37号住居址
- 19 H37·38号住居址
- 20 H39·40号住居址
- 21 H41·42·43号住居址
- 22 H44·45·46号住居址
- 23 H47·48·49号住居址
- 24 H49·50号住居址
- 25 H50·51号住居址
- 26 H51·52号住居址
- 27 H53号住居址
- 28 H54·55号住居址
- 29 H56·57号住居址
- 30 H58·59号住居址
- 31 H60·61号住居址
- 32 H62·63·64号住居址
- 33 H65号住居址
- 34 H66号住居址
- 35 H67·68号住居址
- 36 H69·70·71号住居址
- 37 H72·73号住居址
- 38 F1·2·3号独立柱建物址
- 39 F4·5·6号独立柱建物址
- 40 F7号独立柱建物址、D1~4号土坑
- 41 D6~10号土坑
- 42 D11~15号土坑
- 43 D16~20号土坑
- 44 D21~24·26·27号土坑
- 45 D28·29·31~33号土坑
- 46 D34·38~40号土坑
- 47 D41~46号土坑
- 48 D50·51号土坑
- 49 D52~54号土坑
- 50 D55~58号土坑
- 51 D59·60号土坑
- 52 D61·63·64号土坑
- 53 D65·66·68·70号土坑
- 54 D67·69号土坑
- 55 D71·73·74号土坑
- 56 D75~77号土坑
- 57 D47·78·79号土坑
- 58 M1~3号溝址
- 59 M4·7·10号溝址
- 60 M5·8号溝址
- 61 M9·11号溝址
- 62 M12·13号溝址
- 63 M14·15号溝址
- 64 M16·17·19号溝址
- 65 M18·19号溝址
- 66 M21·23号溝址
- 67 M22·24号溝址
- 68 M25·26·28·29号溝址
- 69 M30~32号溝址
- 70 M33·34·38号溝址
- 71 M35号溝址
- 72 M36号溝址
- 73 M37·40号溝址
- 74 M39~41号溝址
- 75 M42号溝址
- 76 M42·43号溝址
- 77 M43·44号溝址
- 78 M44·45号溝址
- 79 M46号溝址
- 80 M47·48·50号溝址
- 81 M51~53号溝址
- 82 M54~57号溝址
- 83 M58·60·61号溝址
- 84 M61~63号溝址
- 85 M64·65·68号溝址
- 86 M66·67·69号溝址
- 87 350-4号坑
- 88 350-4号坑
- 89 350-4号坑
- 90 350-4·350-5号坑

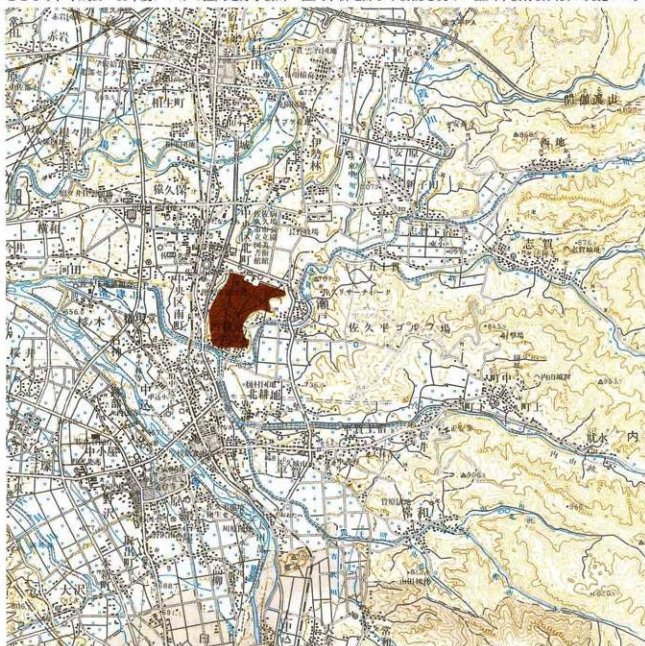
- 91 350—5号塔
92 350—5号塔、碟状清渣1
93 H1·2
94 H4~7
95 H7·8
96 H9·10
97 H11~15
98 H16·17
99 H17~19
100 H20~23
101 H24·25·27
102 H28~30
103 H31~35
104 H35~37
105 H37~40
106 H40·42~45
107 H45·47~49
108 H49~51
109 H52~56
110 H56
111 H56~58
112 H59~65
113 H65~67
114 H68~73、F8
115 D1·6·7·13·16·22·26·28~30·32·41·44·45·49·
50·56·57·61
116 D63~67·69·72·77
117 M4·5·8·12·16·17·19·20·23·25·28·41·42·45·
46
118 M43·44·57·62·65·68、P21·133·147·159·170·195·200
·202·208·211·270·275
119 350—4、350—5号塔
120 道槽外1~50
121 道槽外51~104
122 道槽外105~163
123 道槽外164~210
124 道槽外211~261
125 道槽外262~293
126 道槽外294~347
127 试掘H1~66
128 试掘H88~119、D2~5、M1~10、道槽外

第 I 章 調査の概要

第 1 節 調査の経緯と経過

深堀遺跡群は佐久市大字瀬戸に所在し、東方を志賀川、西方を田切谷に挟まれた台地上に展開する複数の遺跡により構成され、標高670～690mを測る。また、東千石平遺跡群は志賀川により形成された、深堀遺跡群南隣の河岸段丘状に展開し、標高は670m内外を測る。

経緯は、両遺跡群内において佐久地方事務所による瀬戸原農村活性化住環境整備事業が計画されたため、平成9年度と平成10年度試掘調査を実施し、遺構の分布状況が把握された。その結果をふまえた協議により、農地部分は削平を行わないため調査の対象外とし、遺構が破壊される道路部分については、記録保存のための発掘調査を実施することとなり、平成10～13年度にかけて佐久地方事務所・佐久市耕地課より委託を受けた佐久市教育委員会が実施した。



第 1 図 深堀遺跡群・東千石平遺跡群位置図(1:50,000)

第2節 調査体制

平成9年度

調査受託者	教育長	依田 英夫				
事務局	教育次長	市川 源				
	埋蔵文化財課長	須江 仁胤				
	管理係長	棚沢 慶子				
	埋蔵文化財係長	大塚 達夫				
	埋蔵文化財係	林 幸彦	三石 宗一	須藤 隆司	小林 眞寿	
		羽毛田卓也	富沢 一明	上原 学		
	調査担当者	三石 宗一				

平成10年度

調査受託者	教育長	依田 英夫				
事務局	教育次長	北沢 馨				
	埋蔵文化財課長	須江 仁胤				
	管理係長(兼)	須江 仁胤				
	埋蔵文化財係長	荻原 一馬				
	埋蔵文化財係	林 幸彦	三石 宗一	須藤 隆司	小林 眞寿	
		羽毛田卓也	富沢 一明	上原 学		
	調査担当者	羽毛田卓也	富沢 一明			
	調査員	浅沼ノブ江	荒井 利男	磯貝 はな	岩下 友子	岩下 文子
		速藤しづか	大井みつる	柏木 義雄	柏原 松枝	川多アヤ子
		小須田サケエ	田中 章雄	中嶋 良造	並木ことみ	橋詰 陽子
		橋詰 信子	花岡 文雄	花岡美津子	花里八重子	平林 泰
		堀籠 因	依田 みち			江原 富子
						神津ツネヨ
						橋詰けきよ
						網萱ミスズ

平成11年度

調査受託者	教育長	依田 英夫				
事務局	教育次長	小林 宏造				
	文化財課長	草間 芳行				
	文化財係長	荻原 一馬				
	文化財係	林 幸彦	須藤 隆司	小林 眞寿	羽毛田卓也	
		富沢 一明	上原 学	山本 秀典	出澤 力	
	調査担当者	小林 眞寿	出澤 力			
	調査主任	佐々木宗昭				
	調査員	阿部 和人	荒井ふみ子	石川 横子	井出 惺永	岩崎 重子
		上原 幸子	碓氷 知子	唯水 英之	内堀 団	江原 富子
		大井みつる	荻原千鶴子	小田川 栄	柏木 貞夫	遠藤しづか
		柏木 義雄	川多アヤ子	木内 明美	菊池 康一	柏原 松枝
		神津ツネヨ	小金澤たけみ	小須田サケエ	菊池 康一	倉見 渡
		小林 裕	小林まさ子	小林よしみ	小林 幸子	小林 妙子
		佐々木 正	佐々木久子	浅沼ノブ江	小山 功	小林 剛
		沢井 翠月	藤崎 清	清水佐知子	須藤 理帆	園口 正
		高橋サチコ	高橋 陽一	田中 章雄	角田すづ子	角田トミエ
		東城 幸子	樋田 咲枝	中篤武二郎	並木ことみ	成沢 富子
		花里八重子	林 幸男	比川井久美子	平林 泰	網萱ミスズ
		堀籠 因	堀籠みさと	真嶋 保子	増野 深志	宮川白合子
		山崎 直	若林 希	和久井義雄	渡辺久美子	武者 幸彦
						波辺 信男

平成12年度

調査受託者	教育長	依田 英夫											
事務局	教育次長	小林 宏造											
	文化財課長	草間 芳行											
	文化財係長	萩原 一馬											
	文化財係	林 幸彦	須藤 隆司	小林 眞寿	羽毛田卓也								
		富沢 一明	上原 学	山本 秀典	出澤 力								
	調査担当者	小林 眞寿											
	調査員	阿部 和人	碓氷 英之	菊池 康一	小須田サクエ	小林喜久子	清水佐知子						
		関口 正	成沢 富子	堀籠 滋子	堀籠みさと	増野 深志	若林 希						
													和久井義雄

平成13年度

調査受託者	教育長	依田 英夫(4月～6月)	高柳 勉(7月～)										
事務局	教育次長	小林 宏造(4月～5月)	黒沢 俊彦(5月～)										
	文化財課長	草間 芳行											
	文化財係長	萩原 一馬(4月～5月)	森角 吉晴(5月～)										
	文化財係	林 幸彦	須藤 隆司	小林 眞寿	羽毛田卓也								
		富沢 一明	上原 学	山本 秀典	出澤 力								
	調査担当者	小林 眞寿											
	調査員	阿部 和人	上原 幸子	木内 明美	小林喜久子	小林 妙子	佐久本眞樹子						
		徳崎 清一	清水佐知子	田中ひさ子	成沢 富子	林 幸男	平林 泰						
		堀籠 滋子	堀籠みさと	増野 深志	宮川百合子	森角 雅子	柳沢 孝子						
													和久井義雄

第3節 調査日誌

平成9年度

試掘調査(平成9年11月18日～12月25日)

平成10年度 深堀Ⅱ

試掘調査(平成10年9月28日～10月23日)

10年 8月3日～12月9日一集落道1号線と2号線部分の調査。

平成11年度 深堀Ⅲ

11年 4月26日一重機による表土の削平。

遺物の検出・掘り下げ・記録。

5月7日一狐塚350-4号古墳着手。

5月10日一中込史談会現場見学。

6月3日一狐塚350-5号古墳着手。

6月14日一狐塚350-4号古墳写真測量。

現場終了部分の航空写真撮影

6月15日一狐塚350-4号古墳写真測量。

7月9日一深堀遺跡群、狐塚350-4・350-5号古墳調査終了。

東千石半遺跡群調査に着手。

8月9日一本年度の現場調査終了。

8月10日一土器洗浄・図面整理。

8月17日一土器洗浄終了。注記開始。図面整理継続。

8月25日一航空写真撮影。

9月27日一注記終了。遺物の接合・復元開始。

図面整理終了。図面修正及び版下作成開始。

12年 1月25日—11年度調査終了

平成12年度 深堀Ⅴ

12年 7月11日—調査範囲の確認及び草刈り。

7月12日—重機による表土の削平。

プレハブ設置。

機材搬入。

7月19日—測量基準点の設定。

7月21日—遺構の検出・掘下げ・記録。

7月27日—現場調査終了。

9月26日—遺物洗浄・注記・遺物の接合・復元開始・写真撮影・図面整理・修正・版下作成開始。

13年 2月8日—12年度の調査終了。

平成13年度 深堀Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ整理調査

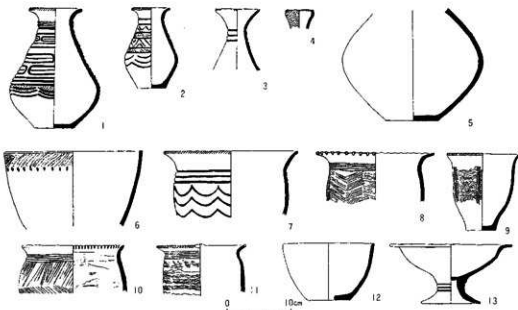
13年5月15日—14年3月29日—整理調査・報告書刊行。

第4節 遺跡の位置と周辺遺跡

○位置—深堀遺跡群は佐久市瀬戸に所在し、湯川と滑津川により区画された中込原台地の滑津川寄り先端部分に位置する。東方は志賀川、西方は安原用水井尻下に発達し、滑津川まで延びる田切り谷により区画される。また、この台地は浅間火山の火山灰流の最南端部分でもある。標高は670～690mを測り、沖積地からの比高差は約10mである。

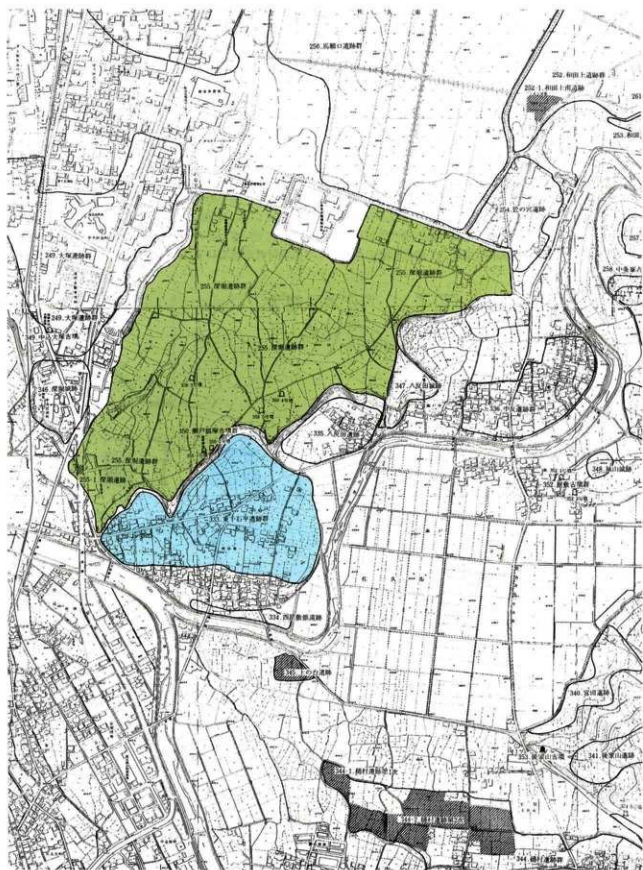
東千石平遺跡群も瀬戸に所在し、志賀川と滑津川により形成された2段目の河岸段丘上に立地し、深堀遺跡群の南隣に位置する。深堀遺跡群が所在する台地とは10mほどの断崖により隔絶されているが、東千石平遺跡群の集落はこの断崖の直下まで及んでいる。浅間火山の火山灰流の堆積はこの断崖が境界となっており、東千石平の地山は灰白色～黄橙色を呈する粘質土である。この粘質土層は2m程の堆積が認められ、その下には樹木等の植物遺体の多く含まれる堆積層が存在し、湧水が激しい。

○周辺遺跡—深堀遺跡群内には、5基からなる狐塚古墳群と平安・古墳・弥生の集落址が包括されており、東千石平遺跡群には奈良～平安時代の集落址と須恵器窯が存在すると言われている。昭和40年に国道141号線の新設工事に伴い調査が実施されており、弥生時代中期の竪穴住居址が2軒検出されている。このとき出土した土器群は、佐久地方の弥生時代中期後半の土器編年において最古段階の土器として位置付けられている。



第2図 深堀遺跡第1次調査出土の弥生土器

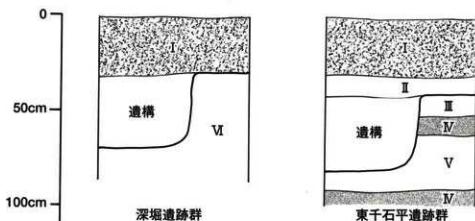
深堀遺跡群の西方には八反川城跡、東方には深堀城跡がそれぞれ隣接している。この両城跡は平賀氏の支流である上原氏の居城とされている。八反田城跡の半郭は現在八幡社が存在する部分であり、これを扇状に取り囲む2つの郭が2条の堀により区画され、更にその内部が区画されている様子が地表面から観察される。深堀城跡は様々な破壊により現状では縄張りが判然としませんが、2条の空堀により台地から隔絶し、その先端部分に主郭を設ける構成や縄張り様子は八反田城と酷似している。八反田城跡と東千石平遺跡群に挟まれて存在する八反田遺跡は、地形的つながりから見て東千石平遺跡群に包括されて然るべき遺跡であろう。東千石平遺跡群の志賀川対岸には種村遺跡群が展開しており、弥生時代・古墳時代の総数300軒を越える大規模な集落址が昭和57・58年、平成11・12年の調査で明らかとなっている。深堀遺跡群内の狐塚古墳群や屋敷古墳群、後家山古墳、東久保古墳群などの周辺に広がる古墳群の被葬者との関係も注目される。深堀遺跡群の北西には志賀川を挟んで奇山遺跡群が存在する。平成1年～平成4年にかけて実施された調査により縄文時代中期の大規模な遺跡であることが判明した。出土した中期中葉の土器のなかには、当地方独自の土器群が含まれており注目されている。また、浅間火山第1軽石流により埋没した12,000～13,000年前の立木が炭化して発見されている。深堀遺跡群の北隣に存在する馬瀬口遺跡群や西方に展開する大塚遺跡群の内容は未調査のため不明である。



第3図 周辺遺跡位置図(1 : 5,000)

第5節 基本層序

深堀遺跡群・東千石平遺跡群の基本層序は以下のとおりである。



第4図 基本層序模式図

第I層 耕作土。

第II層 黒褐色土層(10YR2/3)。粘質土。

第III層 灰黄褐色土層(10YR4/2)。粘質土。本層の上面が東千石平遺跡群の遺構検出面である。

第IV層 褐色土層(10YR4/4)。鉄分の沈殿層。

第V層 にぶい黄褐色土層(10YR4/3)。粘土。

第VI層 浅間第1軽石流(P1)の堆積層。深堀遺跡群での遺構検出面は本層の上面である。

- * 東千石平遺跡群の第V層下の第IV層下には再び第V層が堆積しており下層に植物遺体が多量に含まれている。その下部は岩盤となる。



深堀遺跡群



東千石平遺跡群

第6節 検出遺構・遺物の概要

検出された遺構・遺物の概要は以下のとおりである。

○遺構

竪穴住居址—73棟（弥生中期・古墳後期・奈良～平安時代）

掘立柱建物址—7棟（奈良～平安時代）

土坑—79基（弥生・奈良～平安・不明）

溝址—69条

竪穴—1基

環状溝址—1基

柱列—1列

古墳—2基（後期）

Pit—384基

○遺物

縄文時代—中期後半・後期の上器片、打製石斧、打製石鏃

弥生時代—中期の土器、磨製石斧

古墳時代—土師器・須恵器・鉄器・銅製品・石器・石製品

奈良・平安時代—土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・鉄器・銅製品・石器・人骨

中世以降—土器・人骨

第Ⅱ章 遺構と遺物

第1節 住居址

○H1号住居址（第5図、図版1・93）

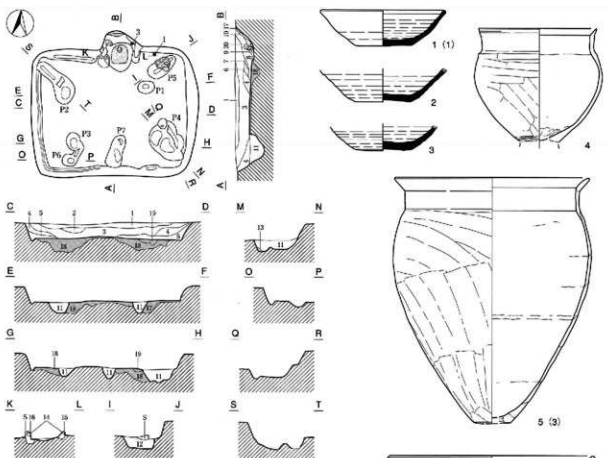
遺構—I区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。隅丸長方形の平面形態を呈し、N-89°-Eに長軸方位をとる。長軸長2.92m×短軸長2.1m、壁残高36cm、面積7.6㎡の規模を有する。主柱穴は均等位置に4基が配されるが、柱痕は確認できなかった。カマドは北壁中央に粘土と石で構築されていた。両半の壁下に屈溝を有し、主柱穴以外のPitが3基が存在した。

遺物—須恵器、土師器、石器、石製品が出土した。須恵器は全て坏で、底部には右回転糸切痕が残されている。また、2・3には火傷が認められる。土師器は全て甕である。4は台付の武蔵甕、5は武蔵甕である。共に「コ」字口縁を呈する。6・7はロクロ甕で、6が「く」字状の口縁、7が直立気味の口縁を呈している。石器は9の礫石が出土しており、3面に使用痕が認められた。石製品は8の軽石製のもので、立方体状に研磨が加えられている。用途は不明である。

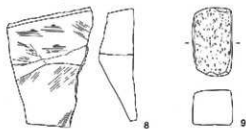
○H2号住居址（第6図、図版1・93）

遺構—I区で検出された。擾乱による破壊を受けている。隅丸長方形の平面形態を呈し、N-79°-Eに長軸方位をとる。長軸長3.4m×短軸長2.72m、壁残高36cm、面積11.9㎡の規模を有する。掘方を含め6基のPitが検出されたが、主柱穴は判然としない。また、柱痕も確認されなかった。床面の中央西南には灰を多含する土坑が、床面構築後につくられ、再度床を貼り埋設されていた。このような床下の土坑は佐久市北部の遺跡では、平安時代の住居址に普遍的に認められるが、その性格は不明である。ただ、住居完成後に構築されることや、灰が純白になるような燃焼や素材が選択され、時間をおかずに埋め戻されていることから、宗教的な行為を想像させられる。カマドは北壁の中央西寄りに粘土と石で構築されていた。

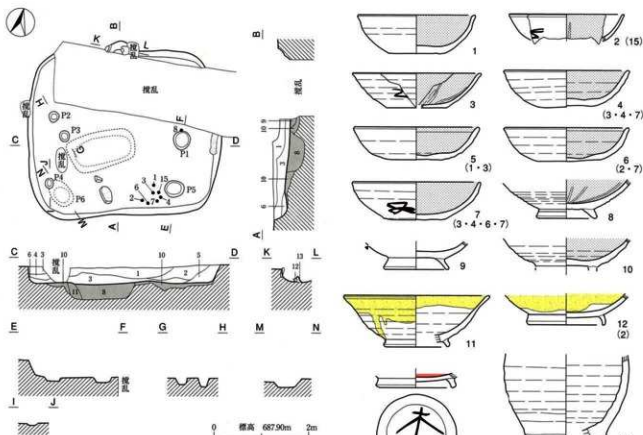
遺物—土師器、灰釉陶器、石器、縄文土器が出土した。土師器には坏・甕が認められる。坏は全て黒色処理が施されているが、2・3に暗文が認められる他は、ヘラミガキは施されていない。ロクロからの切離方法は3が回転ヘラズリ調整により不明な他は、底部が残存するものは右回転糸切である。2・3・7は体部に墨書が認められる。



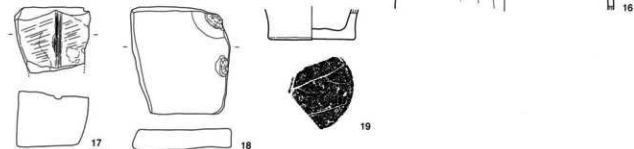
1. 黒褐色土層 (10YR3/1) ϕ 1~2mm 白色粒子多含。
2. 暗褐色土層 (10YR3/3) 黒色土と褐色土の混在土層。
3. 暗褐色土層 (10YR3/3) ϕ 1~2mm ローム粒子含。
4. 黒色土層 (10YR2/1) 白色粒子極少含。
5. 暗褐色土層 (10YR3/4) ϕ 1~3mm パミス含。
6. ぶい黄褐色土層 (10YR7/2) 灰色粘土ブロックを含。
7. 黒色土層 (10YR2/1) 炭化物含。
8. 灰白色土層 (10YR7/1) 炭化物を下部に多含。カマド流出層。
9. 明赤褐色土層 (2.5YR5/10)。
10. 黒色土層 (10YR2/1)。
11. 黒色土層 (10YR2/1) 白色粘土含。
12. 褐色土層 (10YR4/4) 灰・粘土含。
13. 黄褐色土層 (10YR5/3) 灰・粘土含。
14. 黄褐色土層 (10YR6/1) 褐色土・白色粘土含。
15. 黒色土層 (10YR2/1) 粘土極少含。
16. 黒褐色土層 (10YR3/2) 黒色土・ロームブロック含。
17. 浅黄褐色土層 (10YR8/3)。
18. 暗褐色土層 (10YR3/3) 黒色土・ロームブロック含。
19. 灰黄褐色土層 (10YR5/2)。
20. 黒色土層 (10YR2/1) ロームブロック含。



第5図 H1号住居址



1. 黒褐色土層 (10YR3/1) ϕ 1~2cm/パミス含。
2. 褐色土層 (10YR6/1) ϕ 2~3cm/パミス・炭化物極少含。
3. 黒褐色土層 (10YR2/2) 炭化物極少含。
4. 黄褐色土層 (10YR5/6)。
5. 褐色土層 (10YR4/1) 炭化物極少含。
6. 黒褐色土層 (10YR3/2)。
7. 黒色土層 (10YR2/1)。
8. 褐色土層 (10YR4/6) 10YR2/1ブロック・灰多含。床下土被覆土。
9. 黒色土層 (10YR2/1) 掘方埋土。
10. 暗褐色土層 (10YR3/3) ロームブロック・パミス多含。掘方埋土。
11. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 床下土被覆土。
12. 灰黄褐色粘土 (10YR5/2) カマド構築土。
13. 暗褐色粘土 (10YR3/4) カマド構築土。



第6図 H2号住居址

碗も坏同様に内面黒色処理が施されている。8は暗文、9・10はヘラミガキ調整が認められる。高台は付高台で、ロクロからの切離方法は9が回転ヘラケズリにより不明な他は、方向不明の回転糸切痕が認められる。9の内面には漆状の付着物が残存している。甕はすべてロクロ甕で14・15が小型、16は大型である。14の底部には方向不明の回転糸切痕が認められる。15は受口状、16はやや外反する「く」字口縁を呈している。また、16の体部には縦位にヘラケズリが施されている。灰釉陶器はすべて碗である。つけかけの施釉や、高台の形状から3点共に大原2号窯期の所産と

思われる。13は高台内に「木」の墨書が書かれ、内面には朱層が付着しており、円滑な器面を呈していることから、甕に転用されたものと推測される。石器は17の砥石と18の磨石が出土している。17は4面、18は2面が使用されていた。使用痕の差異から、18を磨石としたが、砥石としても支障はない。19の縄文土器は混入遺物である。底部には木葉痕が認められる。器形から後期縄文内式の深鉢と思われる。

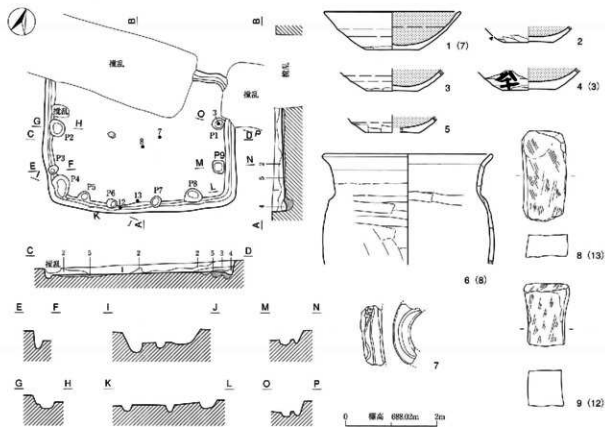
○H3号住居址 (第7図、図版2・94)

遺構-I区で検出された。攪乱による破壊により、平面形態、規模等は明確ではない。壁残高は28cmであった。壁下には周溝が巡り、その内側に9基のPitが巡らされていたが、柱痕は確認できなかった。カマドも残存部分には存在しなかった。

遺物—上師器、石器、縄文土器が出土した。上師器には坏と甕が認められる。坏はすべてのものに、内面ヘラミガキ調整後、黒色処理が施されている。ロクロからの切離方法は回転糸切であるが、3は底部全面ヘラケズリ、他は周縁部にヘラケズリ調整が加えられている。また、4は体部に墨書が書かれている。甕は6の「コ」字口縁を呈する武蔵甕が1点出土している。石器は8・9共に砥石である。8は4面、9は5面が使用されている。縄文土器7は把手の破片であるが、詳細は不明である。

○H4号住居址 (第8図、図版2・94)

遺構-N区で検出された。D5号土坑に切られる。隅丸長方形の平面形態を呈し、N-71°-Eに長軸方位をとる。



1. 黒褐色土層 (10YR3/2) ロームブロック多含。
2. 黒色土層 (10YR2/1) 炭化物極少含。
3. 暗褐色土層 (10YR3/3)。
4. 褐色土層 (10YR4/4)。
5. 黒褐色土層 (10YR3/2) ローム粒多含。

第7図 H3号住居址

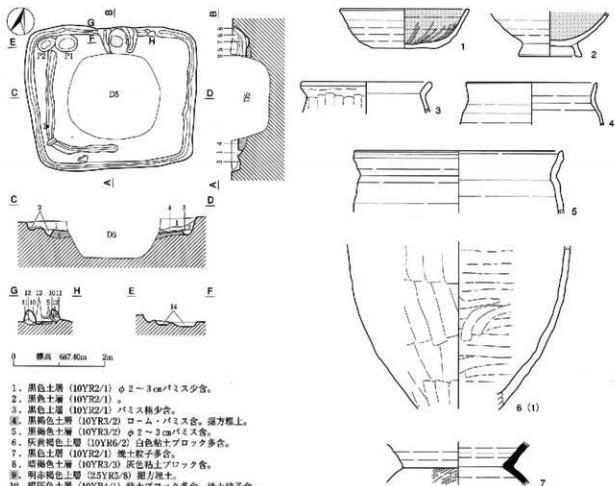
長軸長3.08m×短軸長2.64m、壁残高28cm、面積8.9㎡の規模を有する。Pitは北西隅に2基確認されたが、主柱穴は不明である。カマドは北壁の中央に粘土と石で構築されていた。壁下には周溝が巡らされ、北西から南壁の中央までは2重に周溝が巡っていた。

遺物—土師器、須恵器が出土している。土師器には坏・碗・甕が認められる。1の坏は内面に放射状暗文と黒色処理が施され、底部には右回転の糸切痕が残されている。碗2はヘラミガキ調整後に内面黒色処理が施され、底部は回転ヘラケズリ調整後に高台が貼付されている。甕は3が不明な他はロクロ甕である。6の体部には外面ヘラケズリ、内面ナデ調整が施されている。須恵器は7の甕が1点出土した。外面には平行甲目痕が認められる。

○H5号住居址 (第9図、図版3・94)

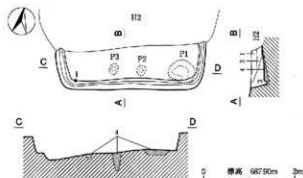
遺構一I区で検出された。H2号住居址に切られるため、平面形状・規模等は不明である。壁残高36cmを測る。掘方から3基のPitが検出され、P2は主柱穴を構成する可能性を有するが、3基共に柱痕は確認されなかった。カマドは残存部分には存在しない。壁下には周溝が巡る。

遺物—土師器の坏が1点出土している。完形品で内面にはヘラミガキ後黒色処理が施され、底部は手持ヘラケズリ調整のため、ロクロからの切離方法は不明である。体部に「方」の墨書が書かれている。

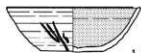


1. 黒色土層 (10YR2/1) φ2~3cmパミス少含。
2. 黒色土層 (10YR2/1)。
3. 黒色土層 (10YR2/1) パミス極少含。
4. 黒褐色土層 (10YR3/2) ローム・パミス含。遠方層上。
5. 黒褐色土層 (10YR3/2) φ2~3cmパミス含。
6. 灰黄褐色土層 (10YR6/2) 白色粘土ブロック多含。
7. 黒色土層 (10YR2/1) 焼土粒子多含。
8. 暗褐色土層 (10YR3/3) 灰色粘土ブロック含。
9. 明赤褐色土層 (2.5YR5/8) 細方粒土。
10. 橙灰色土層 (10YR4/1) 粘土ブロック多含、焼土粒子含。
11. 灰褐色土層 (10YR3/2) パミス含。
12. 暗褐色土層 (10YR3/4)。
13. 明黄褐色土層 (10YR6/8)。
14. 褐色土層 (10YR6/1) 灰・粘土の混在。

第8図 H4号住居址

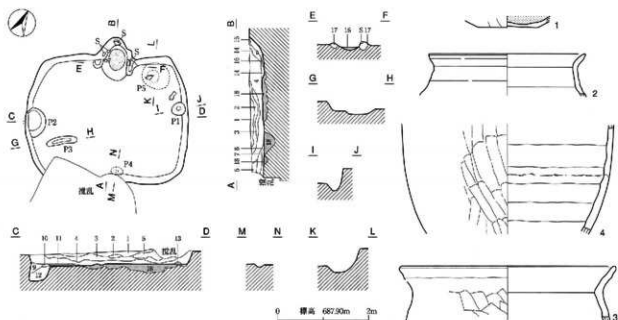


1. 褐色土層 (10YR4/4) φ2~3cmパミス含。
2. 明黄褐色土層 (10YR7/6)。
3. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 炭化物極少量。
- 基: 黄褐色土層 (10YR5/6) 腐敗。炭化物極少量。



第9図 H5号住居址

遺構—L区で検出された。攪乱による破壊を受けている。隅丸長方形の平面形態を呈し、N-90°-Eに長軸方位をとる。



1. 黒褐色土層 (10YR3/1) ロームブロック含。
2. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) パミス多含。
3. 黒色土層 (10YR2/1) ロームブロック少含。
4. におい黄褐色土層 (10YR4/3) ロームブロック・φ1~2cmパミス・炭化物極少量。
5. におい黄褐色土層 (10YR4/3) ロームブロック多含。
6. 黒色土層 (10YR2/1) ロームブロック含。
7. におい黄褐色土層 (10YR5/3) φ1~2cmパミス・ローム混合。
8. 黒色土層 (10YR2/1) φ3~4cmパミス少含。
9. におい黄褐色土層 (10YR6/3)。
10. 黒色土層 (10YR2/1)。
11. 黄褐色土層 (10YR8/8) ローム主体。
12. 褐色土層 (10YR4/6)。
13. 明黄褐色土層 (10YR6/8) ローム主体。
14. 黒色土層 (10YR2/1)。
15. 褐色土層 (10YR4/6) カマド天井崩落層。
16. 流土 (25YR4/8)。
17. 褐灰色粘土 (10YR4/1) カマド構築粘土。
- 基: 黒褐色土層 (10YR3/1) 掘方填土。

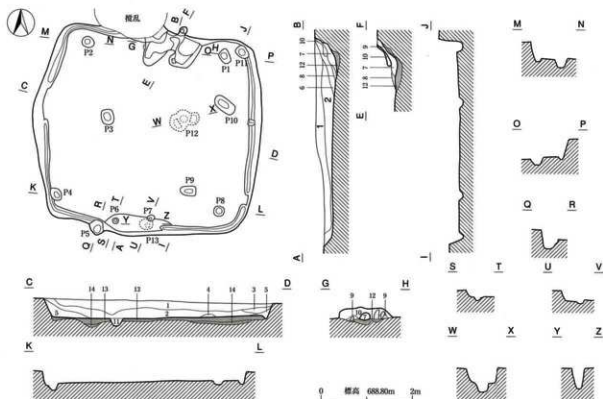
第10図 H6号住居址

○H6号住居址 (第10図、図版3・94)

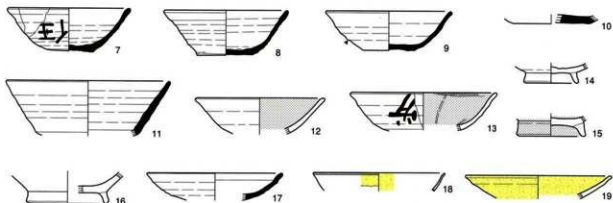
遺構—N区で検出された。攪乱による破壊を受けている。隅丸長方形の平面形態を呈し、N-65°-Eに長軸方位をとる。長軸長2.92m×短軸長2.4m、壁残高32cm、面積7.7㎡の規模を有する。東壁と西壁の中央に構築された、P1とP2の2基のPitが主柱穴と思われるが、柱痕は確認できなかった。掘方から検出された2基のPitの性格はP3と共に不明である。カマドは北壁の中央部に粘土と石で構築されていた。周囲は有さない。

遺構—上師器が出土している。坏・甕が認められる。坏1は、内面にヘラミガキ後黒色処理が施され、底部には回転方向不明の糸切後、周縁部にヘラズリ調整が施されている。甕には2の「コ」字口縁を呈する武蔵甕と、3・4のロクロ甕が認められる。ロクロ甕は2点共に体部にはヘラズリ調整が施されている。また、口縁部が残存している3の形状は「く」字である。

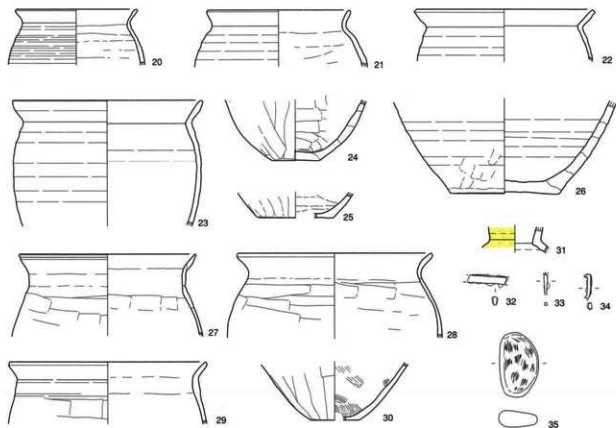
○H7号住居址 (第11・12図、図版3・94・95)



1. 暗褐色土層 (10YR3/4) ローム少含、バミス極少含。
2. 暗褐色土層 (10YR3/3) ローム少含、バミス極少含。
3. 黒褐色土層 (10YR2/3) ローム・炭化物極少含。
4. 黒褐色土層 (10YR2/2) ローム・炭化物極少含。
5. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) ローム多含、バミス極少含。
6. 暗赤褐色土層 (5YR3/3) 粘土粒子・ローム極少含。
7. にぶい赤褐色土層 (5YR4/4) 粘土、焼土粒子極少含。
8. 褐灰色土層 (5YR4/1) 粘土多含、ローム極少含。
9. 褐色土層 (5YR4/2) 粘土多含、ローム少含。
10. 褐灰色土層 (5YR5/1) 粘土主体。
11. 黄褐色土層 (10YR2/3)。
12. 暗褐色土層 (10YR3/3) ローム少含、粘土極少含。
13. 褐色土層 (10YR4/4) ローム多含、掘方理土。
14. 褐色土層 (10YR4/6) ローム多含、掘方理土。



第11図 H7号住居址(1)



第12図 H7号住居址(2)

長軸長3.88m×短軸長3.6m、壁残高40cm、面積16.9㎡の規模を有する。柱痕が確認されたPitは1基も存在しないが、床面及び掘方から検出された13基のPitにより上屋を支えたものと推測される。カマドは北壁の中央部分に粘土と石で構築される。周溝は断続的に壁下を巡っている。

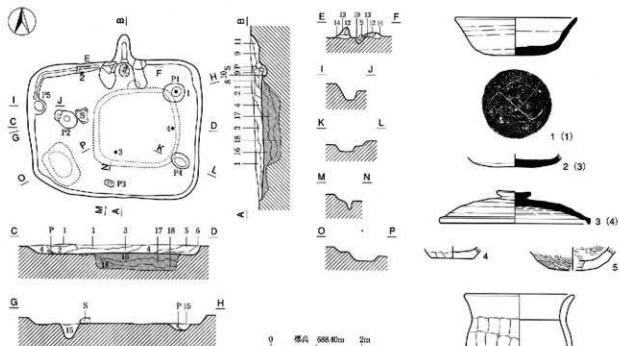
遺物—土師器、須恵器、灰軸陶器、鉄器、石器が出土している。土師器には坏・碗・甕が認められる。坏1～6は6が内面十字暗文で黒色処理が施される他は、ヘラミガキ調整後黒色処理が施されている。また、ロクロからの切離方法はすべてのものが右回転の糸切である。碗12～16は12・13・15が内面黒色処理で、13は内面口唇部のヘラミガキ調整と十字暗文が施される。また、15は放射状暗文、16はヘラミガキ調整が認められる。ロクロからの切離方法は15が回転方向不明糸切の他は、不明である。高台が残存するものは付高台である。なお、13の体部には「？」の墨書が書かれている。甕は20～26のロクロ甕と、27～30の武蔵甕が認められる。口縁部が残存するものは、ロクロ甕は「く」字、武蔵甕は「こ」字である。須恵器には坏・有台坏・皿が認められる。坏7～10はすべて回転糸切によりロクロから切離されており、その方向は10が不明な他は右である。また、10には火薄、その他のものには黒斑が認められる。7の体部には「任」の墨書が書かれている。有台坏11は底部を欠損するが、身の深い形態を呈している。皿17は須恵器としては特異な器形である。底部を欠損するため全容は不明である。灰軸陶器には碗・皿・壺が認められる。破片のため詳細は不明である。32～34の鉄器は32が刀子？、34が釘と思われるが、33は不明である。石器は35の砥石が1点出土しており、2面が使用されていた。

○H8号住居址（第13図、図版4・95）

遺構—M区で検出された。M7号溝址を切る。隅丸長方形の平面形態を呈し、N-90°-Eに長軸方位をとる。長軸長3.4m×短軸長2.64m、壁残高20cm、面積9.2㎡の規模を有する。床面上に検出された5基のPitの配置には規則性は見いだせないが、これらが上屋を支えたものと推測される。柱痕は確認されなかった。カマドは北壁の中央部分に粘土と石で構築される。周溝は北西隅の壁下にだけ認められた。掘方からは2基の土坑が検出されているが、住居中央に構築された大きなものは、土坑範囲にだけ貼床が存在することから、本址より古いものではなく、本址の使用時

に構築されたことが明らかである。2基共に性格は不明である。

遺物—須恵器、土師器が出土している。須恵器には坏と坏蓋が認められる。坏1は右回転の糸切によりロクロから切離されており、「X」の窯印が底部に刻書されている。坏2は回転ヘラ切りによりロクロから切離され、その後手持ちのヘラズリ調整が施されている。坏蓋3は扁平な擬宝珠つまみが貼付されており、外面には6cmの重焼痕、内面には火痺が認められる。土師器には甕・壺が認められる。甕4は底部片、6は小型で外面にはヘラミガキ調整が施されている。



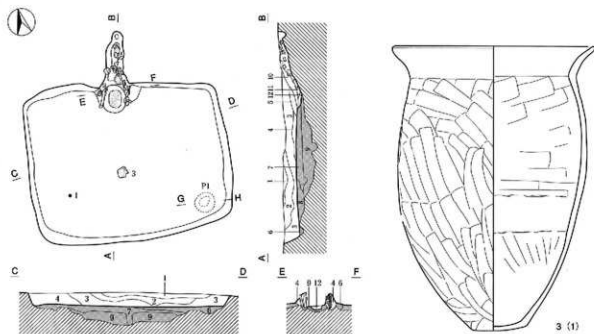
1. 褐色土層 (10YR4/1)
 2. 黒褐色土層 (10YR3/1) ϕ 2mm大ローム粒子多含。
 3. 黒色土層 (10YR2/1) ローム粒子・炭化物極少含。
 4. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) ϕ 1~2cmパミス・ローム粒子多含。
 5. 暗褐色土層 (10YR2/3) パミス・ローム粒子多含。
 6. 黒色土層 (10YR2/1) パミス含。
 7. 黒褐色土層 (10YR3/2) ローム粒子多含。
 8. 褐色土層 (10YR4/6) 焼土粒子多含。炭化物極少含。
 9. 褐色土層 (10YR4/1) 灰・粘土ブロック含。
 10. 焼土 (10YR4/8)。
 11. 暗褐色土層 (10YR3/4) 炭化物極少含。
 12. におい黄褐色土層 (10YR5/6) 粘土・炭化物含。
 13. 赤褐色土層 (2.5YR4/8) 焼土主体。
 14. 暗褐色土層 (10YR3/1) ローム粒子多含。
 15. 黒褐色土層 (10YR4/6) ローム粒子多含。
 16. 赤褐色土層 (10YR5/8) ϕ 1~2cmパミス・ロームブロック多含。
 17. 暗褐色土層 (10YR3/3) ϕ 1~2cmパミス・褐色土ブロック多含。
 18. 黒色土層 (10YR2/1) 褐色土ブロック多含。
- *床下土層部分のみ炭が存在。

第13図 H8号住居址

○H9号住居址 (第14図、図版4・96)

遺構—M区で検出された。M7号溝址を切る。隅丸長方形の平面形態を呈する。長軸長をN-80°-Wにとり、長軸長3.84m×短軸長2.64m、壁残高32cm、面積12.3m²の規模を有する。Pitは掘方から1基が検出されたが、柱穴は有さない。カマドは北壁の中央に粘土と石で構築され、比較的長い煙道をもつ。周溝は有さない。

遺物—須恵器、土師器、縄文土器、石器、鉄器が出土している。須恵器は1の坏蓋が1点出土した。口縁部片で全容は不明である。土師器は2の鉢と、3の甕が出土している。鉢は内面がヘラミガキ後黒色処理、外面はヘラズリ後にヘラミガキ調整が施されている。甕は武蔵甕で、「く」字口縁を呈し、最大径を口縁部に有している。縄文土器は中期後半加曾利E式の口縁部片である。石器5は自然石を利用した砥石である。鉄器6は性格不明である。



G H



0 経高 600.40m 2m

1. 灰黄褐色土層 (10YR6/2) ϕ 2~3cmパミス含。
2. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) ϕ 2~3cmパミス・ローム粒子含。
3. 黒褐色土層 (10YR3/2) ローム粒子多含。
4. 暗褐色粘土 (10YR3/4) 黒色土ブロック・2~3cmパミス含。
5. 暗褐色土層 (10YR3/3) 炭化物・焼土粒子含。
6. 黄褐色土層 (10YR5/6) ロームブロック・黒色土多含。
7. 黒褐色土層 (10YR3/1) パミス極少含。
8. 黒褐色土層 (10YR5/1)。
9. 濃い黄褐色土層 (10YR4/3) ロームブロック・パミス多含。
10. 灰黄褐色土層 (10YR6/2) 焼土少含。
11. 暗褐色土層 (10YR3/3) 焼土粒子・炭化物含。
12. 焼土 (2.5YR4/8)。



1



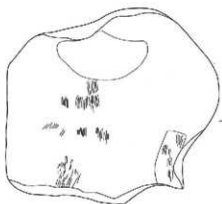
2



6

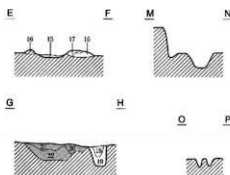
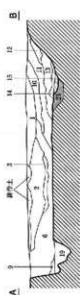
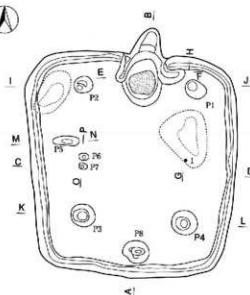


4

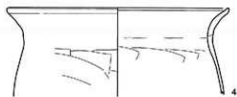
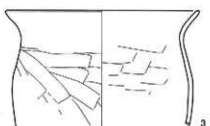
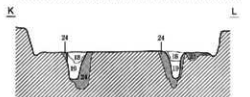
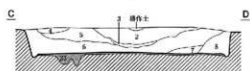


5 (3)

第14図 H9号住居址

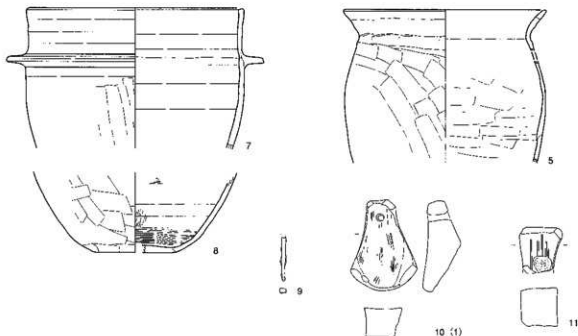


0 標高 688.20m 2m



1. 黒褐色土層 (10YR3/1) パミス多含。
2. 暗褐色土層 (10YR3/2) パミス含。
3. 暗褐色土層 (10YR3/3) φ2~3cm炭化物多含。
4. 黒褐色土層 (10YR3/1) パミス含。
5. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) φ2~3cmパミス含。
6. 暗褐色土層 (10YR3/3) φ2~3cmパミス・炭化物含。
7. 暗褐色土層 (10YR3/3) ローム・パミス含。
8. 暗褐色土層 (10YR3/4)
9. 黒色土層 (10YR2/1) ローム粒子少含。
10. 灰黄褐色土層 (10YR4/2)
11. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) パミス・粘土ブロック少含。
12. 黒色土層 (10YR2/1) パミス粒少含。
13. 暗灰色土層 (10YR4/1) 粘土・黒色土ブロック・粒土含。
14. にぶい黄褐色土層 (10YR3/4) 粒土と焼土の混在層。
15. 焼土 (25YR4/8)
16. にぶい黄褐色粒土 (10YR6/3) パミス含。
17. にぶい黄褐色粒土 (10YR4/3)
18. 黒褐色土層 (10YR3/2)
19. にぶい黄褐色土層 (10YR5/4) ローム・黒色土ブロック含。
20. 明黄褐色土層 (10YR6/6) パミス多含。
21. 黄褐色土層 (10YR5/8) 粘土・ロームブロック含。
22. 暗褐色土層 (10YR3/2) ローム・パミス多含。
23. 黄褐色土層 (10YR7/8) φ1~2cmパミス多含。
24. 明黄褐色土層 (10YR6/6)

第15図 H10号住居址(1)



第16図 H10号住居址(2)

○H10号住居址 (第15・16図、図版5・97)

遺構—M区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。隅丸長方形の平面形態を呈し、長軸方位N-8°-Wにとる。長軸長3.92m×短軸長3.36m、壁残高56cm、面積16.8㎡の規模を有する。床面上で8基検出されたPitのうち、P1-P4が柱穴を構成するものと推測される。覆土19層が柱痕であり、12cm前後の規模である。カマドは北壁の中央に粘土で構築されていた。壁下には周溝が巡っている。掘方から検出された2基の土坑の性格は不明である。

遺物—土師器、鉄器、石器が出土している。土師器には甕1-6、羽釜7・8が認められる。甕はすべて武蔵甕であり、口縁部が残存するものは「く」字である。また、最大径は口縁部に有している。羽釜7・8は同一個体と思われるが、接合はしない。所謂「クロコ土師器」である。体部外面にはヘラケズリ、内面にはハケメ調整が認められる。鐙のつくりはシャープであり、11世紀以降のものとは異なる。鉄器9は長頸鎌の筥被部分である。石器10・11は2点共に砥石である。10は携帯用であろう。10は4面、11は3面が使用されている。

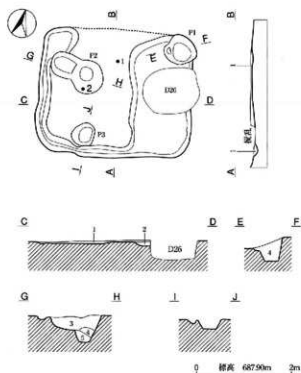
○H11号住居址 (第17図、図版5・97)

遺構—I区で検出された。D26号上坑に切られる。耕作等により掘方の状態に削平されていた。隅丸長方形の平面形態を呈し、N-74°-Eに長軸方位をとる。長軸長2.72m×短軸長2.21m、壁残高20cm、面積6.9㎡の規模を有する。3基のPitが検出されているが柱穴は判然としない。カマドは残存していなかった。西壁下から南壁下の西半部に周溝が認められた。

遺物—銅製の三累環頭大刀柄頭1と鉄器2が出土している。柄頭が本来付随する刀は存在しないことから、柄頭だけが本来の用途とは別の性格を与えられ用いられていたと推測される。いずれにしても、住居址からの出土品としては極めて特殊な遺物である。鉄器はコ字型を呈する金具と思われる。

○H12号住居址 (第18図、図版6・97)

遺構—N区で検出された。M3号溝址に切られるため、平面形態・規模等は判然としない。壁残高は44cmであった。東北隅に2基のPitが検出された他は、Pitは存在しないため、柱穴は有さない可能性が高い。カマドは北壁の東北隅よりに1基と、東南隅に1基の計2基が存在した。いずれも粘土と石で構築される。北壁のカマドの方が残存状況は良好であったが、東南隅のカマドも稼働可能な状況であることから、2基が同時に使用されていた可能性も存在する。周溝は存在しない。



1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) ローム粒子含。
2. 黒褐色土層 (10YR3/2) ローム粒子と黒色土の混在土層。
3. 暗褐色土層 (10YR3/3) ロームブロック多含。
4. 黒褐色土層 (10YR3/2) 黒色土主体。
5. 黄褐色土層 (10YR5/8) ロームと黒色土の混在土層。



1 (1)



2 (2)

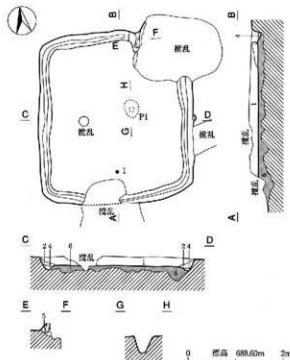
第17図 H12号住居址

○H13号住居址 (第18図、図版6・97)

遺構M区で検出された。攪乱による破壊を受けている。隅丸方形の平面形態を呈し、N-8°-Eに長軸方位をとる。長軸長2.8m×短軸長2.6m、壁残高20cm、面積8.5㎡の規模を有する。Pitは掘方から1基検出されただけであり、本址は柱穴を有さない。カマドは、北壁の中央東よりに粘土と石で構築されていたが、大部分は攪乱により消滅していた。壁下には周溝が巡らされている。

遺物-須恵器と石器が出土している。須恵器1・2は2点共に有台環である。回転ヘラケズリ後高台が貼付されており、ロクロからの切離方法は不明であるが、ヘラ切りであろう。石器は3の砥石が1点出土しており、4面が使用されていた。

遺物-土師器と須恵器が出土している。土師器には、環、碗、甕1、鉢が認められる。環1は内面にヘラミガキ後黒色処理が施され、ロクロから右回転の糸切により切離されている。碗2も環1同様の成形・調整であり、高台は付高台である。土師器甕の内、7~10は武藏甕である。9が「コ」字口縁の他は、口縁部が残存するものは「く」字口縁である。最大径も9を除き口縁部に有する。甕11はロクロ小型甕である。口縁部は「く」字を呈する。鉢12は環を大型化したもので、内面はヘラミガキ後黒色処理、外面体部下半にはヘラケズリ調整が施されるが、底部は欠損している。須恵器は4点の環が出土している。底部が残存するものの内、3は右回転糸切、4・5は手持ヘラケズリ調整が認められる。また、4・5には火押が認められる。



1. 黒褐色土層 (10YR3/2) パミス極少含。
2. 黒褐色土層 (10YR3/1) φ2~3cmのパミス・ローム粒子含。
3. 黒褐色土層 (10YR3/2) 炭化物・焼土粒子多含。
4. 黒色土層 (10YR2/1) パミス少含。
5. 黄灰色粘土 (10YR4/1)

Ⅷ. 黄褐色土層 (10YR4/4) パミス含。塊方埋土



1

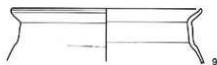
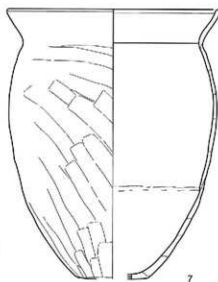
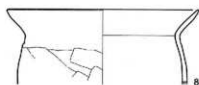
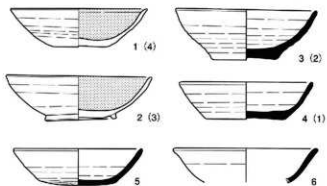
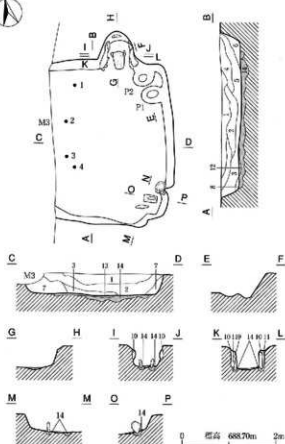


2 (1)

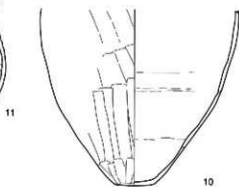
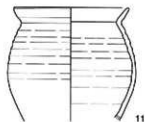


3

第18図 H13号住居址



1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) φ2-3cmのパミス含。
2. 黒褐色土層 (10YR3/1) φ2-3cmのパミス含。
3. 黒褐色土層 (10YR3/1) パミス・ローム粒子含。
4. 褐色土層 (10YR4/4) パミス・ローム粒子含。
5. 褐色土層 (10YR4/4) パミス多含。
6. 褐色土層 (10YR4/4) パミス・ロームブロック多含。
7. 黒色土層 (10YR2/1) ロームブロック含。
8. 黄褐色土層 (10YR5/8) ロームブロック多含。
9. 赤色土層 (10R5/8)。
10. 明黄褐色粘土 (10YR6/6)。
11. 暗褐色土層 (10YR3/3) ローム粒子・焼土粒子多含。
12. 黄褐色土層 (10YR5/8) ロームブロック含。
13. 黒色土層 (10YR2/1) パミス多含。
14. 灰い黄褐色土層 (10YR5/4) 焼上。

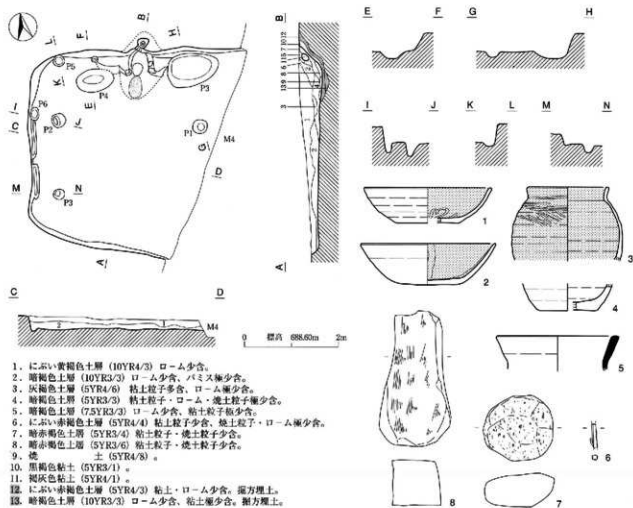


第18図 H12号住居址

○H14号住居址 (第20図、図版7・97)

遺構—L区で検出された。M4号溝址に切られるため、平面形態・規模等は不明である。壁残高は24cmであった。P1～P3の3基のPitが主柱穴と推測される。柱痕は確認されなかった。カマドは、北壁の中央と思われる位置に粘土と石で構築される。周溝は西壁下に部分的に検出された。

遺物—土師器、須恵器、鉄器、石器、石製品が出土している。土師器には環1・2、甕3・4が認められる。環は2点共に、内面に暗文と黒色処理が施されている。ロクロからの切離方法は、1が手持ヘラズリのために不明、2は右回転の糸切である。甕は2点共に小型のロクロ甕である。3は内外面共に黒色処理が施され、外面には部分的なヘラミキ調整も認められることから、鉢とした方が良いのかも知れない。4は底部片で右回転の糸切痕が認められる。須恵器は5の壺の口縁部片が1点出土している。鉄器は6の釘と思われる破片が認められる。石器は8の砥石が出土している。3面が使用されていた。石製品7は軽石製である。円盤状に加工する過程の未製品と思われる。



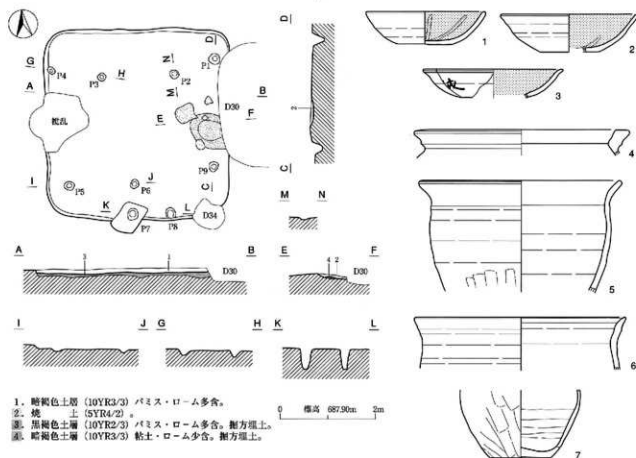
第20図 H14号住居址

○H15号住居址 (第21図、図版7・97)

遺構—M区で検出された。D30・34に切れ、攪乱による破壊も受けている。隅丸方形の平面形態を呈し、N-7°-Eに長軸方向をとる。長軸長3.6m×短軸長3.44m、壁残高8cm、面積14.6㎡の規模を有する。床面上に検出された9基のPitが上屋を支えていたものと推測される。柱痕は確認されていない。カマドは東壁の中央部分に粘土と石で構築されていた。周溝は有さない。

遺物—土師器だけが出土している。1・2は坏で、2点共に底部には手持ヘラズリ調整、内面には暗文と黒色処理が施される。3は碗と思われるが、底部を欠損するため判然とはしない。内面には黒色処理が施されている。また、

体部には「？」の墨書が書かれている。4は甲斐系の甕と思われる口縁部片である。5～7はロクロ甕で、7は小型、他の2点は大型である。5・7の体部にはヘラケズリ調整が施されている。



第21図 H15号住居址

○H16号住居址 (第22図、図版8・98)

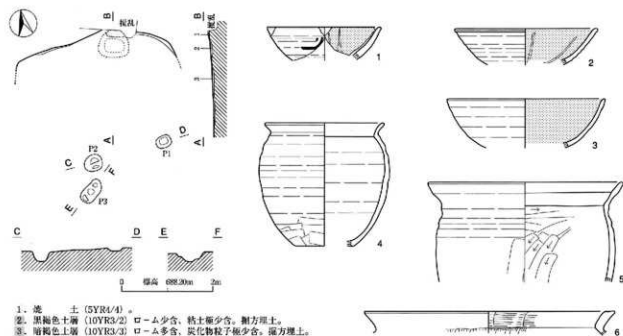
遺構—M区で検出された。耕作による削平などの擾乱により、住居の大半は消滅していた。そのため、平面形態・規模等は不明である。壁残高は2.5cmであった。3基検出されている Pit の性格と共に、その帰属もさだかではない。カマドは北壁の中央部分に粘土と石で構築されていた。周溝は有さない。

遺物—土師器が出土している。環・碗・甕が認められる。環は1・2の2点が出土している。2点共に内面は暗文と黒色処理が施される。底部は欠損しているためロクロからの切離方法は不明である。1は体部に墨書が書かれている。碗は3が1点出土している。ヘラミガキ後黒色処理が施されている。甕は、小型ロクロ甕4と、大型のロクロ甕5、甲斐系の甕と思われる6が出土している。ロクロ甕は外面体部—底部にヘラケズリ調整が施される。また、甲斐系の6はハケメ調整が認められる。

○H17号住居址 (第23・24図、図版8・98・99)

遺構—M区で検出された。擾乱による破壊を受けている。カマドに対峙する南壁に、長方形の張り部を有する隅丸方形の平面形態を呈する。N-58°—Eに長軸方位をとり、長軸長3.0m×短軸長2.8m、壁残高44cm、面積8.9m²の規模を有する。Pitは2基検出されたが、性格は不明である。カマドは北壁の中央部分に、粘土と石と土器で構築されていた。周溝は有さない。

遺物—土師器だけが出土している。1～3は環である。1は有段口縁環で内面はナデ、外面にはヘラケズリが施される。2は須恵器環蓋の模倣を原型とするもので、内面にはヘラミガキ、外面にはヘラケズリ後ヘラミガキ調整が施さ



第22図 H16号住居址

れる。3は半球状を呈し、内面ナデ、外面にはヘラケズリ後ヘラミガキ調整が施される。4は小型甕である。口縁部には有段口縁環と同様な手法による段が認められる。内面ナデ、外面ヘラケズリ調整が施される。5は壺である。4同様な段が口縁部に認められる。内面ハケメ、外面にはハケメ調整後ヘラケズリが施される。6～11は甕で、すべて長胴である。11が底部に木炭痕、内面ハケメ、外面ハケメ後ヘラケズリ調整の他は、内面ナデ、外面ヘラケズリ調整である。12・13は甕で2点共に多孔である。

○H18号住居址 (第25図、図版9・99)

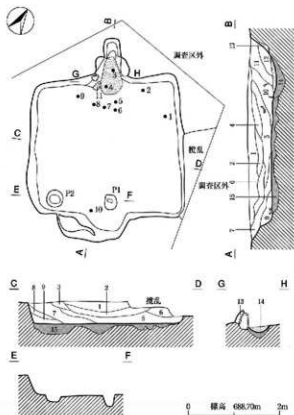
遺構—M区で検出された。D42・D43号土坑に切れ、攪乱による破壊を受ける。隅丸長方形の平面形態を呈し、N-10°-Eに長軸方位をとる。長軸長3.72m×短軸長3.28m、壁残高32cm、面積14.3㎡の規模を有する。4基検出されたPit、及び掘方から検出された土坑の性格は不明である。カマドは東壁の中央部分に粘土と石で構築される。周溝は東南隅から東壁のカマドまでを除き巡らされている。また、北壁の西半中央部分から直角に、所謂「間仕切り」の溝が周溝から延びている。

遺物—土師器、土製品、鉄器が出土している。土師器には坏、碗、甕が認められる。坏は1・2の2点であり、2点共に内面はヘラミガキ後黒色処理、底部はヘラケズリ調整が施されている。碗は3～6の4点である。3は内面に放射状ヘラミガキ、4・5はヘラミガキ後黒色処理が施される。ロクロからの切痕方法が分かるのは、4だけであり、方向不明の回転糸切痕が残されている。5・6は判読不明の墨書が体部に書かれている。甕は7～11ですべてロクロ甕である。7・8は小型、9～11は大型である。7・9が直立気味の口縁部を呈すのに対し、他は「く」字である。8は外面にカキメ、9～11は体部にヘラケズリ調整が施される。土製品は12の羽口が1点出土している。鉄器は13の釘と思われるものが1点出土した。

○H19号住居址 (第26図、図版9・99)

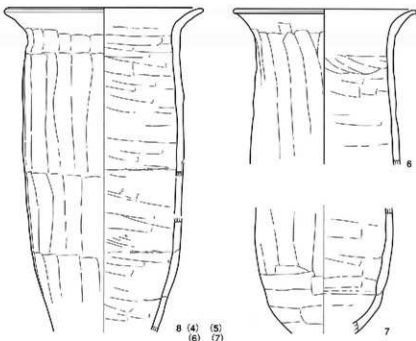
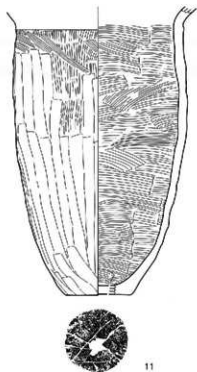
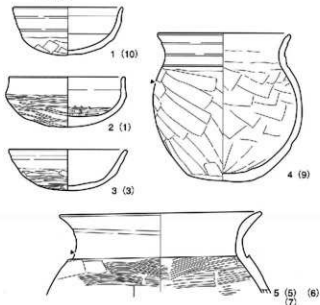
遺構—M区で検出された。隅丸長方形の平面形態を呈し、N-80°-Wに長軸方位をとる。長軸長2.88m×短軸長2.48m、壁残高42cm、面積9.0㎡の規模を有する。掘方を含め4基検出されたPitの性格は不明である。カマドは北壁の中央部分に粘土と石で構築されていた。周溝は壁下に巡らされているが、南西隅部分が断絶する。

遺物—土師器、須恵器、石器が出土している。土師器には坏、有台坏、甕が認められる。坏は1・2の2点が出土している。内面は2点共にヘラミガキ後黒色処理、底部は1が回転ヘラケズリ、2は右回転糸切である。有台坏3は須恵器の模倣である。底部は回転ヘラケズリ後高台が貼付されている。甕は5～8の武蔵甕と、混入と思われる9が認

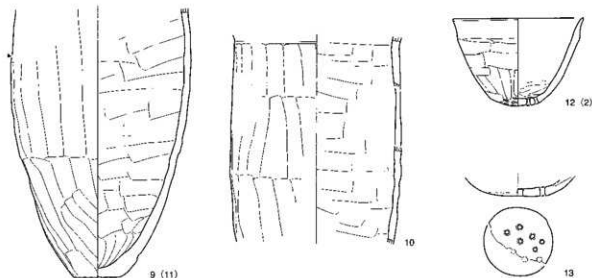


1. 陶灰色土層 (10YR4/2) ローム粒子含。
2. 黒色土層 (10YR2/1) ローム粒子・パミス含。
3. 陶灰色土層 (10YR4/2) ローム粒子・パミス多含。
4. 陶灰色土層 (10YR4/2) パミス多含。
5. 褐色土層 (10YR4/4) ローム粒子・パミス多含、炭化物極少含。
6. に近い黄褐色土層 (10YR3/4) 褐色土と黒色土の混在土層。
7. に近い黄褐色土層 (10YR4/3) ローム粒子多含、炭化物極少含。
8. 黄褐色土層 (10YR5/8) ロームプロック多含。
9. 黒褐色土層 (10YR3/2) 褐色土と黒色土の混在土層。
10. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 灰色粘土プロック多含。
11. に近い黄褐色土層 (10YR4/3) ローム・焼土粒子多含。
12. 灰黄褐色土層 (10YR5/2) 粘土プロック含。
13. 陶灰色土層 (10YR4/1) ローム粒子含。
14. 灰黄褐色土層 (10YR4/2)。
15. 褐色土層 (10YR4/4) ロームプロック・パミス多含。

焼土



第23図 H17号住居址(1)



第24図 H17号住居址(2)

められる。武蔵甕の内5～7は「コ」字口縁を呈する大型のもの、8は白付甕の台部である。9は縦方向のヘラケズリが施される長胴甕であり、古墳時代後期の所産と思われる。須恵器は4の環が1点だけ出土した。ロクロからは右回転の糸切により切離され、内面には火跡が認められる。石器は10・11の砥石が2点出土している。2点共に4面が使用されている。

○H20号住居址 (第27図、図版10・100)

遺構—G区で検出された。北方向に調査区外にのびるため、平面形態・規模等は判然とはしない。壁残高は36cmであった。Pitは1基検出されたが性格は不明である。本址は柱穴を有さないと思われる。カマドは北壁の中央西寄りに火床が検出されたが、袖等は調査範囲内には存在しなかった。そのため構築材は不明である。周溝は有さない。

遺物—上師器、須恵器、灰釉陶器が出土している。上師器には環、碗、甕が認められる。環は1～3の3点である。3点共に内面はヘラミガキ後黒色処理が施されている。ロクロからの切離方法は3点共に回転糸切であるが、2は欠損のため、1・3は周縁部に加えられたヘラケズリ調整により、方向は不明である。1は外面口唇部にも横位のヘラミガキ調整が施されている。碗は4・5で内面はヘラミガキ後黒色処理、ロクロからの切離方法は2点共に回転糸切であるが、方向は4は不明、5は右である。高台は2点共に付高台である。甕は7が武蔵甕、8がロクロ甕である。2点共に底部の破片であるため、口縁部の形態は不明である。7が内面ナデ、外面ヘラケズリ、8が内面ハケメ、外面ヘラケズリ調整が施されている。須恵器は9の甕の底部が出土している。底部には方向不明の回転糸切痕が認められる。高台は貼付されている。灰釉陶器は6の碗が1点出土している。底部は回転ヘラケズリ後に高台が貼付され、内面には重複痕が認められる。高台の形状等から大塚2号窯期の所産と思われる。

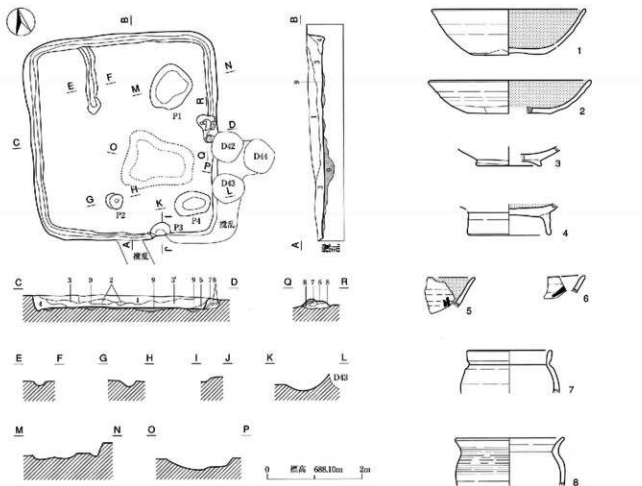
○H21号住居址 (第28図、図版10・100)

遺構—G区で検出された。西方向に調査区外に延びるため、平面形態・規模等は判然とししない。壁残高24cmを測る。調査範囲内には、Pit・カマド等は存在しない。調査部分の壁下には周溝が巡っていた。

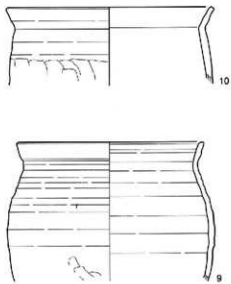
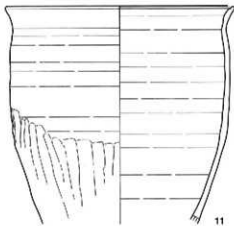
遺物—灰釉陶器の小瓶が1点出土している。底部には右回転糸切痕がのこされ、体部下半にはヘラケズリ調整が施されている。

○H22号住居址 (第29図、図版10・100)

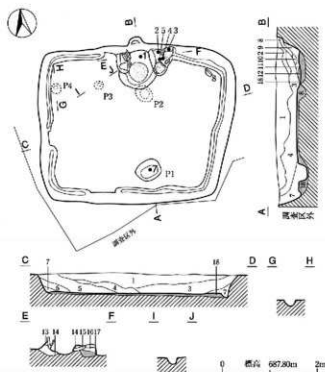
遺構—G区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。隅丸方形の平面形態を呈し、N-25°Eに長軸方位をとる。長軸長2.8m×短軸長2.68m、壁残高12cm、面積9.7㎡の規模を有する。Pitは7基検出され、この内のP1～P4の4基が主柱穴である。φ20cm大の柱痕が確認されている。主柱穴の位置は、佐久市内の他遺跡で検出される、東南隅にカマドを有する住居址と同様な配置である。前記のようにカマドは東南隅に粘土と石で構築される。周溝は有



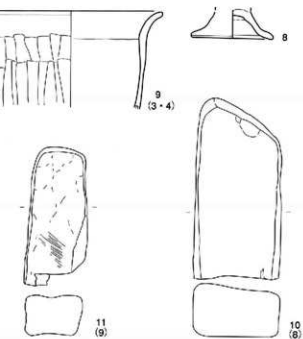
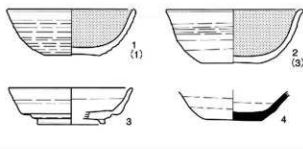
1. 褐色土層 (10YR4/1) ローム粒子多含。
 2. 黒色土層 (10YR2/1) ローム少含、パミス含。
 3. 褐色土層 (10YR4/4) ローム多含、炭化物層少含。
 4. 褐色土層 (10YR4/4) ローム多含、炭化物層少含。
 5. 黒褐色土層 (10YR3/2) 褐色土ブロック含、パミス・ロームブロック少含。
 6. 褐色土層 (10YR4/1)
 7. 灰褐色粘土 (10YR6/2)。
 8. 黒褐色粘土 (10YR2/3)。
- 図. にふい黄褐色土層 (10YR4/3) 掘方埋土。



第25図 H18号住居址



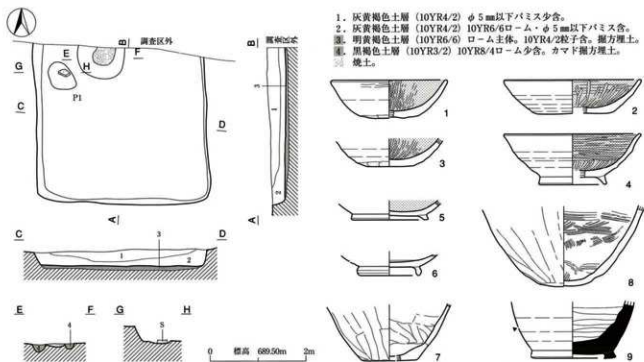
1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) ϕ 1~2cm パミス・穀合。
2. にぶい黄褐色土層 (10YR5/4) ロームブロック合・粘土少含。
3. 黒褐色土層 (10YR3/1) ロームブロック・パミス少含。
4. 褐色土層 (10YR4/4) ローム粒子・パミス多含。
5. 黒褐色土層 (10YR3/2) ローム粒子・パミス少含。
6. 黒色土層 (10YR2/1) ローム粒子・パミス多含。
7. 褐色土層 (10YR4/6) ローム粒子・パミス多含。
8. 褐色土層 (10YR4/4) 焼土・粘土ブロック多含。
9. にぶい黄褐色土層 (10YR5/4) 粘土ブロック少含。
10. 暗褐色土層 (10YR3/3) 焼土・炭化物極少含。
11. 明黄褐色土層 (10YR6/8) 焼土・粘土ブロック合。
12. 焼土 (2.5YR4/8)。
13. 黒色土層 (10YR2/1)。
14. にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4)。
15. 褐色粘土 (10YR4/6)。
16. 黒褐色粘土 (10YR2/3)。
17. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) ローム粒子多含。湿方埋土。
18. にぶい黄褐色土層 (10YR6/4) 湿方埋土。



第26図 H19号住居址

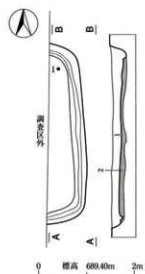
さない。

遺物—土師器、灰陶器、弥生土器が出土している。土師器は1の環が出土している。内面には暗文と黒色処理が施され、底部には回転方向不明の糸切痕が残されている。また、外面体部には判読不明な墨書が書かれている。灰陶器は2の皿が1点出土している。回転ヘラケズリ後高台が貼付されており、内面には重焼痕が認められる。施釉はつけかけ施釉である。高台の形態等から大原2号窯期の所産と思われる。弥生土器は混入遺物である。甕の口縁部片であり、筒歯状工具による刺突列が頸部に施されている。



第27図 H20号住居址

1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) ϕ 5mm以下パミス少含。
2. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR6/6ローム・ ϕ 5mm以下パミス含。
3. 明黄褐色土層 (10YR6/6) ローム主体。10YR4/2粒子含。掘方埋土。
4. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR8/4ローム少含。カマド掘方埋土。
5. 焼土。



第28図 H21号住居址

1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR6/6ローム粒子・ ϕ 1cm以下パミス少含。
2. 浅黄褐色土層 (10YR8/4) 10YR3/2・ ϕ 2cm以下パミス少含。掘方埋土。

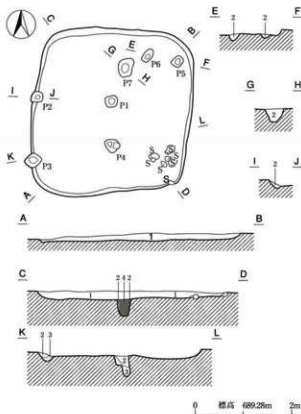
○H23号住居址 (第30図、図版11・100)

遺構—G区で検出された。隅丸長方形の平面形態を呈する。他遺構と₁(1)の重複関係は有さない。N-2°-Eに長軸方位をとり、長軸長2.88m×短軸長2.4m、壁残高23cm、面積8.9㎡の規模を有する。Pitは床面上で2基、掘方において5基の計7基検出されたが、柱痕は確認されておらず、柱穴は判然としない。カマドは東壁の中央やや南寄りに粘土と石で構築されていた。周溝は北半部分の壁下を巡り、P1とP2を連結している。

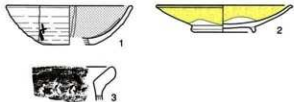
遺物—土師器、石器、縄文土器が出土している。土師器には環、碗、甕が認められる。環は1~10、9・13であり、11・15・16は環なのかわからない。7・10・13を除き内面はヘラミガキ後黒色処理が施される。ロクロからの切離方法は1・2・7を除き回転糸切であり、方向がわかるものは右である。1・2はヘラケズリ調整が施され、ロクロからの切離方法は不明である。また、1は外面体部に「生」の墨書が書かれている。墨書はこの他に13~16に認められるが、判読できるものは14「南」、16「上」だけである。碗は12と14である。12は内面ヘラミガキ後黒色処理、14は暗文と黒色処理が施される。ロクロからの切離方法は12が回転方向不明糸切、14はヘラケズリ調整により不明である。高台は2点共に貼付されている。環か碗かが判断できない11・15・16は内面ヘラミガキ後黒色処理が施されている。甕は17のロクロ甕が1点出土している。内面にはハケメ、外面体部にはヘラケズリが施されている。石器は19の織物石が1点出土した。縄文土器18は混入遺物である。中期後半加曾利E式土器であろう。

○H24号住居址 (第31図、図版11・101)

遺構—G区で検出された。Ta1 壁穴に切られる。隅丸方形の平面形態を呈し、N-2°-Eに長軸方位をとる。長軸長3.44m×短軸長3.36m、壁残高32cm、面積15.1㎡の規模を有する。7基検出されたPitの内、P1とP2の2基が主柱穴と思われるが、柱痕は確認されていない。カマドは北壁の中央部に構築されていたが、掘方の状態に破壊され



1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR6/6ローム少含。
 2. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR6/6ローム少含。
 3. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR6/6ローム多含。
- 基、柱 根 (10YR3/2)。



第29図 H22号住居址

られるが、判読はできない。灰軸陶器は3の段Ⅲが1点出土した。外面底部には回転ヘラケズリ後高台が掲付されているが、高台の断面形状は角高台である。また、内面には竈道具の痕跡が認められ、施軸される。黒笹14号窯期の所産と思われる。

○H26号住居址 (第33図、図版12)

遺構—G区で検出された。攪乱による破壊のため、平面形態・規模等は不明である。壁残高は32cmを測る。Pitは掘方から2基検出されたが、性格は不明である。調査部分にはカマド・周溝共には存在しなかった。
 遺物—出土遺物は皆無である。

○H27号住居址 (第34図、図版12・101)

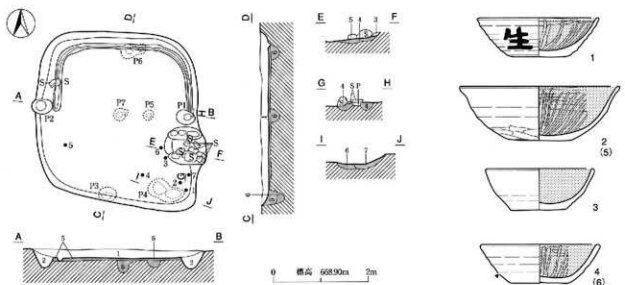
遺構—G区で検出された。Pit50に切られ、東方向に調査区外に延びるため、平面形態・規模等は不明である。壁残高44cmを測る。調査範囲内にはPit・カマドは存在しなかった。周溝は南壁の一部を除き壁下を巡っている。
 遺物—土師器、須恵器、土製品、鉄器、石器が出土している。土師器には坏と甕が認められる。坏1は内面ヘラミガ

ており、構築材は石が確認された。周溝は北壁と西壁、南壁の西半部の壁下に認められた。
 遺物—土師器、須恵器、灰軸陶器、鉄器が出土した。土師器には坏と甕が認められる。坏は1～8であり、内面は1・2がヘラミガキ後黒色処理、7が放射暗文と黒色処理、4～5・8が黒色処理が施されている。また、3は内外面に黒色処理が施される。底部が残存するもの内、1・4は右回転糸切痕が認められる。5～8の外面体部には墨書が認められるが、判読できるのは1の「☆」5の「上」・6の「万」だけである。甕は12・13の2点共にロクロ甕で、12は小型、13は大型である。13の内面にはハケメ、外面体部にはヘラケズリが認められる。須恵器は14の壺と15～17の甕が出土した。14の底部には回転方向不明の糸切痕が認められる。15・17は外面に平行印目とヘラケズリ調整、16はヘラケズリ調整が施される。また、17は碗に転用されたらしく、内面が極めて円滑であり、形態も長方形に整形されている。灰軸陶器は9～11の碗と、18の長頸壺が出土した。底部が残存する9と11の内、9は回転ヘラケズリ調整後、高台が掲付されていることが観察できる。施軸は3点共につけかけであり、大塚2号窯期の所産と思われる。鉄器は断面円形の棒状のものが1点出土している。紡錘車の軸であろうか？

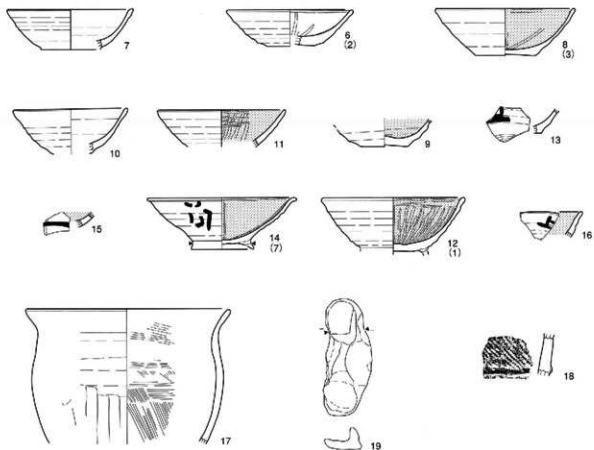
○H25号住居址 (第32図、図版12・101)

遺構—G区で検出された。D49号土坑に切られ、攪乱による破壊を受けている。また、西方向に調査区外に延びるため、平面形態・規模等は判然とし難い。壁残高56cmを測る。調査範囲内においてPitは検出されていない。カマドは、北壁の北東隅寄りに粘土と石で構築される。調査範囲内においては、壁下に周溝が巡る。

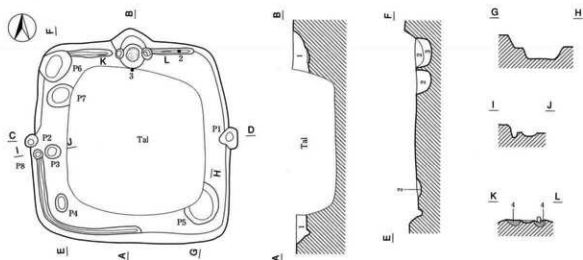
遺物—土師器、灰軸陶器が出土している。土師器は坏が2点出土している。1は内面ヘラミガキ後黒色処理、2はヘラミガキが施される。ロクロからの切離方法は2点共に右回転糸切である。また、2の外底には墨書が認め



1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR6/6ロ-ム・φ 5 mm以下バリミ含。
2. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR6/6ロ-ム・φ 5 mm以下バリミ少含。
3. 細灰色粘土 (10YR6/1) カマド構築土。
4. 黒褐色土層 (10YR3/2) カマド築方埋土。
5. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 築方埋土。
6. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR8/4ロ-ム含。
7. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR6/6ロ-ム含。

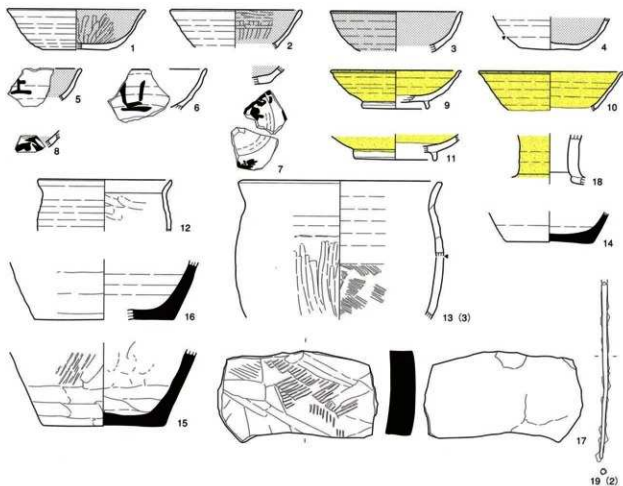


第30図 H23号住居址

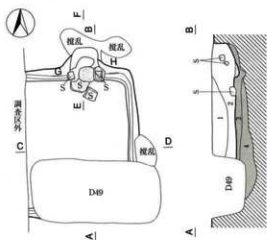


0 標高 688.90m 2m

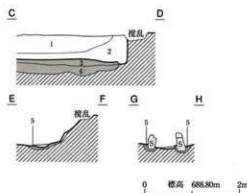
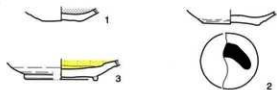
1. 褐色土層 (10YR4/3) 10YR6/6ローム少含。
 2. 灰黄褐色土層 (10YR5/2) 10YR6/6ローム・φ5mm以下パミス少含。
 3. 明黄褐色ローム (10YR6/6) と黒褐色土 (10YR3/2) の混在土層。
φ5mm大パミス少含。
- 濃い黄褐色土層 (10YR5/3) 10YR6/6ローム・10YR3/2土少含。
● 焼土。



第31図 H24号住居址

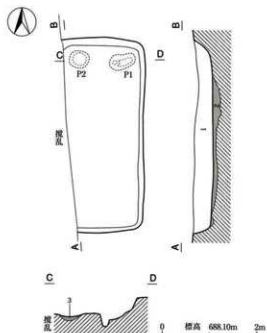


1. 灰黄褐色土 (10YR4/2) と10YR8/4ロームの混在土層。φ 5mm大バミス少含。
2. 明黄褐色土層 (10YR6/6) 10YR5/3・10YR2/2粒子・ブロック含。
3. 黒褐色土層 (10YR2/2) 底床。
4. 明黄褐色土層 (10YR6/6) 10YR8/4ローム主体。掘方埋土。
5. 灰黄褐色土層 (10YR4/3) カマド構築土。
6. 黒灰色粘土 (10YR5/1) カマド構築土。
7. 焼土



第32図 H25号住居址

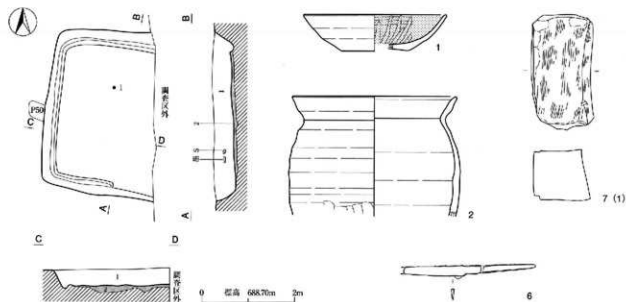
キ後黒色処理で、底部には回転方向不明糸切痕を残している。甕2はロクロ甕である。外面の体部下半にヘラケズリ調整が施される。口縁部は「く」字である。須恵器は3の凸帯文付四耳壺が1点出土している。耳の孔は貫通している。外面に平行叩目、内面には当具痕が認められる。土製品は4・5の羽口が出土している。本址を切るPit50は内部に多量の鉄滓が包含されていた。また、本址からも未図化であるが鉄滓が出土しており、本址を含めた周辺部で、鍛冶が行われていたものと推測される。鉄器は6の切先を欠損する刀子が1点出土している。石器は7の砥石が出土している。4面が使用されていた。



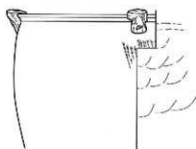
第33図 H26号住居址

○H28号住居址 (第35図、図版13・102)

遺構-M区で検出された。攪乱による破壊を受け、調査区外に遺構が延びるため、平面形態・規模は不明である。壁残高は54cmであった。PitはP1が1基検出されたが柱穴ではなく、カマドに付随する施設のようなものである。カマドは北壁の中央と思われる位置に、粘土と石で構築されていた。調査範囲においては壁下に周溝が認められる。遺物—土師器が出土している。器種的には坏と甕が認められる。坏は1・2の2点が出土している。2点共にロクロからの切離は回転糸切であるが、1は方向不明、2は右回転である。内面は1がヘラミガキ、2は暗文と黒色処理が施されている。甕は3点出土している。3は小型のロクロ甕で、「く」字口を呈し、内外面にロクロナデが施される。4は「コ」字口縁を呈する武蔵甕である。内面には部分的にハケメが認められ、外面にはヘラケズリ調整が施される。5はロクロ甕で、外面体部にヘラケズリが施される。



1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR6/6ローム粒子・φ1cm以下/バミス含。
 2. 浅黄褐色土層 (10YR8/4) 薄方型土上。



第34図 H27号住居址

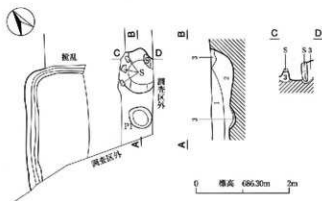
○H29号住居址 (第36図、図版13・14・102)

遺構—M区で検出された。M17号溝址に切られ、攪乱による破壊を受ける。隅丸方形の平面形態を呈し、長軸方位をN-71°-Wにとる。長軸長3.72m×短軸長3.48m、壁残高39cm、面積16.5㎡の規模を有する。Pitは6基検出されているが、柱穴は判然としない。ただ、P1～P3・P6の4基を主柱穴と捉えることも可能かも知れない。カマドは北壁の中央に粘土と石で構築されていた。周溝は北西隅から南西隅の間を壁下に巡らされている。

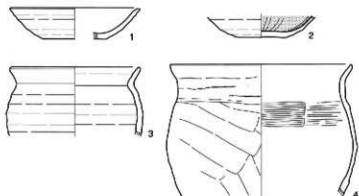
遺物—土師器、須恵器、鉄器、縄文土器が出土している。土師器には坏1～7、碗8～11、甕13～16が認められる。坏は、2を除き内面はヘラミガキ後黒色処理が施される。2はヘラミガキ調整だけが施されている。ロクロからの切離方法は2・3・5が右回転の糸切りである。3はその後周縁にヘラケズリを加えている。また、1・7は回転ヘラケズリ、4は手持ヘラケズリにより切離方法は不明である。7は外面体部に「寺」の墨書が書かれている。碗はすべてのものが内面ヘラミガキ後黒色処理である。ロクロからの切離方法は底部が残存する8・9は回転糸切である。8は右回転、9は糸切後、回転ヘラケズリ調整が施されるため方向は不明である。高台は2点共に貼付されている。9は「生」、11は判読不明な墨書が外面体部に書かれている。甕は13・14がロクロ小型甕、15は中型のロクロ甕である。3点共に内外面にロクロナデが施される。16は「コ」字口縁を呈する武蔵甕である。内面にはハケメ、外面にはヘラケズリ調整が施される。須恵器は12の坏が1点だけ出土している。ロクロからは右回転の糸切により切離されている。鉄器は17・18の2点が出土しているが、性格は不明である。縄文土器は混入遺物である。中期後半加曽利E式である。

○H30号住居址 (第37図、図版14・102)

遺構—B区で検出された。M23号溝址に切られる。残存状況が良くないため、平面形態・規模等は不明である。壁残



1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR6/4不定大ブロック・φ5mm大バミス少。
2. ぶい黄褐色土層 (10YR6/4) φ5mm大バミス少。
3. 黄灰色粘土 (10YR6/1) カマド構築土。



第35図 H28号住居址

の糸切りである。鉄器は鋏先が1点出土している。完形品である。小型であるが、「U」字状の平面形態から鋏先ではなく鋏先とした。

○H32号住居址 (第39図、図版15・103)

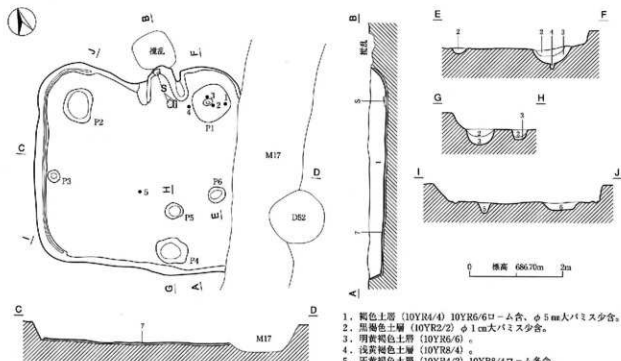
遺構—G区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。隅丸方形の平面形態を呈し、N-90°-Eに長軸方位をとる。長軸長2.88m×短軸長2.68m、壁残高28cm、平面積8.5㎡の規模を有する。床面上で2基、掘方から1基のPitが検出されたが柱痕は確認されず、性格は不明である。カマドは北壁の中央やや西寄りに構築されていたが、掘方の状態に破壊されており、構築材は不明である。周溝はカマドと対峙する南壁部から東南隅を除き壁下に巡らされる。遺物—土師器、鉄器、石器が出土している。土師器には坏1~3、碗4・5、甕6・7が認められる。坏はすべてのもが、内面ヘラミガキ後黒色処理が施されている。ロクロからの切離方法もすべて回転糸切りであるが、2は周縁部に施されたヘラケズリにより方向は不明である。1・3は右回転であった。碗も坏同様内面はヘラミガキ後黒色処理、ロクロからの切離方法も回転糸切りであるが、その後加えられたヘラケズリにより方向は不明である。高台は貼付されている。4は体部外面に墨書が認められるが、故意に削り取られており、判読はできない。墨書の性格を知るう

高は8cmであった。本址は消失住居であり、床面上には炭化材や灰が散乱していた。1基検出されたPitはカマドの掘方のものであり、本址は柱穴を有さない。カマドは北壁の中央部分に粘土と石で構築されていたらしいが、ほとんど掘方の状態であった。煙道の先端は調査区域外に延びている。周溝は有さない。遺物—土師器、鉄器、縄文土器が出土している。土師器には坏1~8、碗9・10、甕11が認められる。坏のロクロからの切離方法は回転糸切りであり、方向はGが不明な他は右である。内面は1・4が十字暗文と黒色処理、2・5・6がナデ、3がヘラミガキ後黒色処理である。また、7・8には外面に黒斑が認められる。碗は9が高台の貼付ともなうナデ調整によりロクロからの切離方法は不明、10は方向不明の回転糸切りである。内面は9が十字暗文と黒色処理、10がヘラミガキ後黒色処理が施されている。9の外面体部には刻書が認められるが判読はできない。甕はロクロ小型甕である。外面底部とその周縁にはヘラケズリ調整が施される。鉄器は12の刀子の刃部片が1点出土している。縄文土器13は混入遺物である。中期後半加曾利E式である。

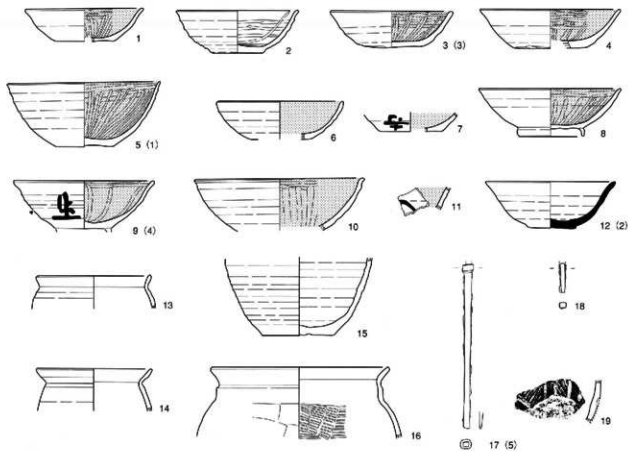
○H31号住居址 (第38図、図版15・103)

遺構—B区で検出された。D63号土坑、Pit88に切れ、北方向に調査区外に延びるため平面形態、規模等は判然としない。壁残高は28cmであった。Pitは1基検出されたが性格は不明である。調査範囲内にはカマドは存在しなかった。周溝は有さない。

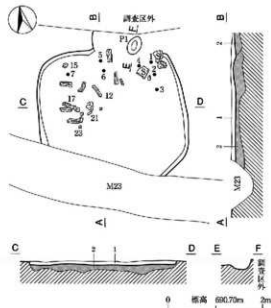
遺物—土師器、鉄器が出土している。土師器は坏が1点出土している。内面はヘラミガキ後黒色処理、ロクロからの切離方法は右回転



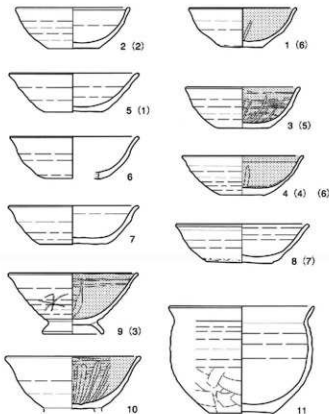
1. 紅色土層 (10YR4/4) 10YR6/6ローム含、φ 5mm大バミス少含。
2. 黒褐色土層 (10YR2/2) φ 1cm大バミス少含。
3. 明黄褐色土層 (10YR8/6)。
4. 浅黄褐色土層 (10YR8/4)。
5. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR8/4ローム多含。
6. 灰黄褐色土 (10YR4/2) と 10YR8/4ロームの混在土層。
7. 浅黄褐色土層 (10YR8/4) 10YR5/3粒子少含。掘方掘上。



第36図 H29号住居址



1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 稜土・炭化物多含。
 2. 濃い黄褐色土層 (10YR5/3) ローム多含、 ϕ 1cm大バミス含。



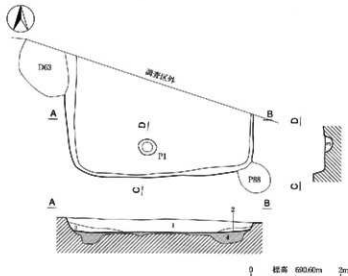
第37回 H30号住居址

えで興味深い資料である。壺は2点共に武蔵壺である。6は「コ」字口縁を呈する口縁部で、外面にはヘラケズリ調整が施される。7は体部から底部にかけての破片である。内面ナデ、外面ヘラケズリ調整が施される。鉄器は鎌が1点出土した。先端を欠損している。着柄部分には木質が認められる。石器は混入遺物の黒曜石製の石鎌が1点出土した。

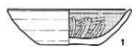
○H33号住居址 (第40回、図版16・103)

遺構一A区で検出された。東西方向に調査区外に延びるため、平面形態・規模等は不明である。調査範囲内においては他遺構との重複関係は有さない。P1は2基検出されたが性格は不明である。カマドは北壁に構築されていたが、掘方の状態に破壊されているため、構築材は不明である。調査範囲内には周溝は認められない。

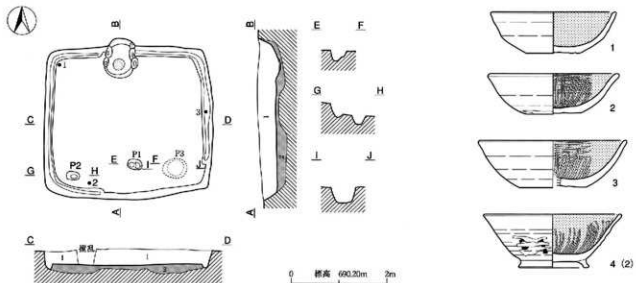
遺物一土師器、須恵器が出土している。土師器には坏1～3と壺5・6が認められる。坏は3点共に内面はヘラミガキ後黒色処理が施される。ロクロからの切離方法は、3点すべてが底部を欠損するため不明である。1は外面体部に焼成



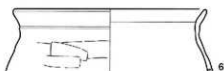
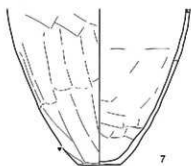
1. 10YR2/2, 10YR5/3, 10YR6/4ロームの混在土層。 ϕ 5mm位米バミス含。
 2. 10YR2/2, 10YR8/4ロームの混在土層。
 3. 濃い黄褐色土層 (10YR5/3) 10YR2/2・10YR6/6稜土を含む。
 4. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) ローム主体。 ϕ 1cm大バミス含。概方照土。



第38回 H31号住居址



1. 10YR4/2, 10YR5/3の混在土層, 10YR6/6ローム含。
 基. 浅黄褐色土層 (10YR8/4) ローム主体, 10YR4/2少含。掘方埋土。
 ① 礎土

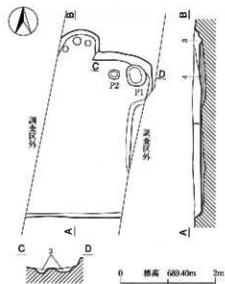


9 (釦寸)



8 (3)

第39図 H32号住居址



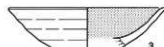
1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR8/4ローム少含。
 2. 灰黄褐色土層 (10YR4/2)。
 3. 黒褐色土層 (10YR2/2) 炭化物少含。
 基. 10YR6/6ロームと10YR4/2の混在土層。φ1cm大パミス多含。掘方埋土。



1



2



3



4



5



6

第40図 H33号住居址

前に刻まれた蛙と思われる線画が認められる。長野県内でも極めて希な出土例であろう。甕は2点共に武蔵甕である。5は「コ」字を呈する口縁部、6は底部である。須恵器は4の坏が1点だけ出土した。底部を欠損するためロクロからの切離方法は不明である。

○H34号住居址 (第41図、図版16・17・103)

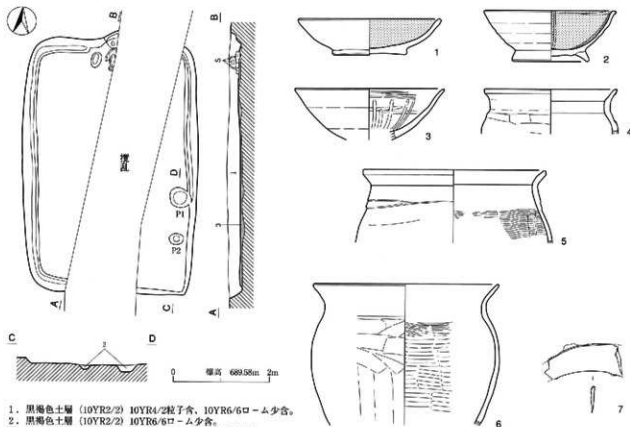
遺構-A区で検出された。攪乱による破壊を受ける。隅丸長方形の平面形態を有し、 $N-3^{\circ}-W$ に長軸方位をとる。長軸長4.6m×短軸長3.0m、壁残高28cm、面積15.3m²の規模を有する。2基検出されたPitの性格は不明である。カマドは北壁の中央部分に石で構築されているが、攪乱による破壊が著しい。東南隅部分を除き、壁下には周溝が巡っている。

遺物-土師器と鉄器が出土している。土師器には坏1、碗2・3、甕4〜6が認められる。坏は内面ヘラミガキ後黒色処理、ロクロからの切離方法は回転切であるが、方向は不明である。碗2は内面に十字暗文と黒色処理が施される。ロクロからは右回転切により切離され、高台が貼付される。碗3は底部を欠損する。内面にはヘラミガキ調整が施される。甕は3点共に武蔵甕である。口縁部は「コ」字を呈し、5・6は内面にハケメ調整が認められる。外面はヘラケズリ調整が施される。鉄器は鎌が1点出土している。基部と先端部を欠損している。

○H35号住居址 (第42図、図版17・103・104)

遺構-M区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。隅丸長方形の平面プランを呈し、 $N-65^{\circ}-W$ に長軸方位をとる。長軸長2.76m×短軸長2.52m、壁残高32cm、面積8.0m²の規模を有する。北東隅で検出されたPit覆土はカマド構築粘土と同じ粘土であった。性格は不明である。他にPitは存在しないことから、本址は柱穴を有さないものと思われる。カマドは北壁の中央に粘土と石で構築されていた。周溝は有さない。

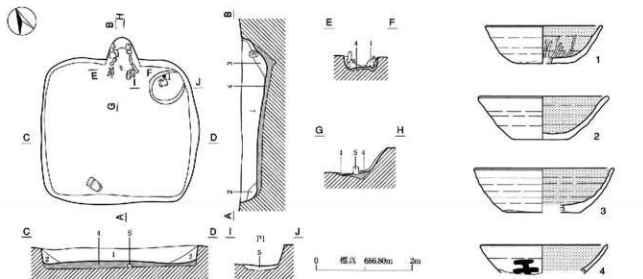
遺物-土師器、須恵器、縄文土器、石器が出土した。土師器には坏1〜4、碗5、甕7〜9が認められる。坏は1が内面ヘラミガキの他は、ヘラミガキ後黒色処理が施されている。ロクロからの切離方法は、底部を欠損する4以外は



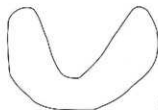
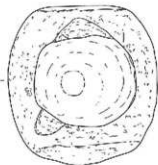
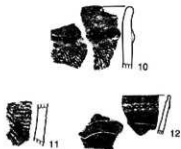
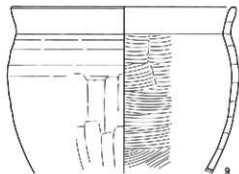
1. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR4/2粒子含、10YR6/6ローム少含。
2. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR6/6ローム少含。
図. 10YR6/4と10YR8/4の現在土層。10YR2/2含。細方土土。

第41図 H34号住居址

回転糸切である。方向は1が不明、他は右である。4は体部外面に墨書が認められるが、判読できない。碗は内面ヘラミガキ後黒色処理で、ロクロから方向不明の回転糸切で切離され、高合が貼付されている。甕は7が小型ロクロ甕、9が大型のロクロ甕、8は武蔵甕である。7は外面体部下半にヘラケズリ調整が施される。武蔵甕は「コ」字口縁で、内面にハケメ、外面にはヘラケズリ調整が施される。ロクロ甕9は内面ハケメ、外面体部下半にヘラケズリ調整が施される。須恵器は6の坏が1点出土している。右回転の糸切によりロクロから切離されている。縄文土器は混入遺物である。10・11は中期後半加曾利E式、12は後期堀之内式である。石器は13の臼が1点出土している。側面には鉄器によると思われる削痕が認められる。砥石としても利用したようである。



1. 濃い黄褐色土 (10YR6/4) と灰黄褐色土 (10YR4/2) の混在土層。ローム含。
2. 濃い黄褐色土 (10YR6/4) と灰黄褐色土 (10YR4/2) の混在土層。ローム多含。
3. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) カマド焼出層。
- ※ 浅黄褐色土層 (10YR8/4) ローム主体。強方埋土。
5. 黄灰色粘土 (10YR5/1) カマド構築土。



第42図 H35号住居址

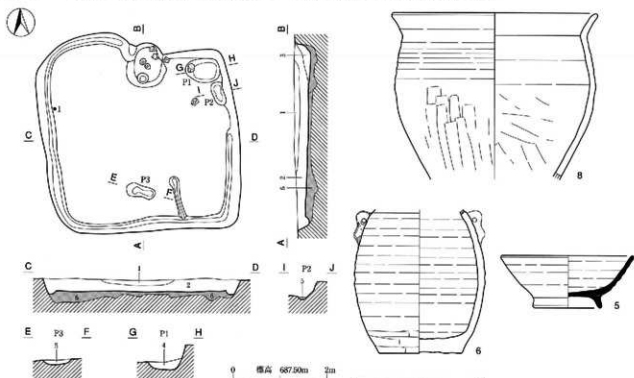
○H36号住居址 (第43図、図版18・104)

遺構ⅠH区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。北西隅が張り出した、変形の隅丸正方形の平面プランを呈し、N-3°-Wに長軸方位をとる。長軸長3.6m×短軸長3.12m、壁残高24cm、面積13.2㎡の規模を有する。Pitは3基検出されたが性格は不明である。カマドは北壁の中央部分に粘土と石で構築される。周溝は北東隅を除き壁下に巡らされる。南壁の東半中央から、直角に所謂「間仕切溝」が1m程伸びている。

遺物—土師器、須恵器、鉄器が出土している。土師器には坏1-3、碗4、壺6、甕7・8が認められる。坏は、底部を欠損する3を除きロクロからの切離方法は回転糸切りである。方向は1が右、2は不明である。内面は1がナデ後黒色処理、2がヘラミガキ、3はヘラミガキ後黒色処理である。碗4は、回転方向不明糸切りから高台を貼付している。内面はヘラミガキ後黒色処理が施される。壺6はロクロ土師器である。双耳壺と思われるが、口縁部は欠損する。甕は2点共にロクロ甕である。7は小型、8は大型である。8は外面体部下半にヘラケズリ調整が施される。須恵器は5の碗が1点出土している。土師器類と同一な形態のため、有台坏ではなく碗とした。回転方向不明糸切りから高台を貼付している。鉄器は9の刀子が1点出土している。

○H37号住居址 (第44図、図版18・19・104・105)

遺構ⅠH区で検出された。Pitに切られる。北方向に調査区外に延びるため、平面形態・規模等は判然としなない。壁残高は64cmであった。床面上で2基、掘方から5基検出されたPitの性格は判然としなない。カマドは北壁の中央に存在するらしく、袖の先端が検出された。構築材としては石が確認された。周溝は有さない。



1. 濃い黄褐色土層 (10YR6/4) φ1cm大パミス含。
2. 濃い黄褐色土層 (10YR6/4) ローム・φ1cm以下パミス含。
3. 濃い黄褐色土層 (10YR6/4) 粘土多含。カマド流失層。
4. 濃い黄褐色土層 (10YR6/4) 焼土・炭化物・粘土・土器片含。
5. 黒褐色土層 (10YR2/3) カマド構築土。
6. 淡黄褐色土層 (10YR8/4) ローム主体。掘方埋土。



第43図 H36号住居址

遺物—土師器、須恵器、石器が出土した。土師器には環1～4、碗5～7、甕8が認められる。環は1・3がロクロから右回転糸切で切離され、内面はヘラミガキ後黒色処理が施される。2・4は底部に手持ちヘラケズリが施され、内面には十字暗文と黒色処理が施される。碗5は高台穴後、環として使用されている。内面ヘラミガキ、ロクロからは方向不明の右回転糸切で切離されている。6・7はロクロから右回転糸切により切離され、高台が貼付されている。内面はヘラミガキ後黒色処理が施される。また、7の外面部には判読不明な黒書が認められる。甕8はロクロ甕である。内面にはハケメ、外面にはヘラケズリ調整が施される。須恵器は10の壺と9の甕が認められる。壺は把手付きの長頸壺と思われる。頸部一口縁部と、底部を欠損する。甕は底部片である。内面はナデ、外面はヘラケズリ調整が施される。石器は11の砥石が1点出土している。5面が使用されている。

○H38号住居址 (第45図、図版19・105)

遺構—M37号溝址に切れ、南方向に調査区外に延びるため平面形態・規模等は判然としにくい。壁残高は20cmであった。床面上で検出された3基のPitは柱穴の可能性も有するが、柱痕は確認されていない。掘方から検出された1基のPit、ないし土坑は本址に先行する可能性もあるが、判断できない。カマドは北壁の中央東寄りに石と粘土で構築されていたが、掘方状態に破壊されていた。周溝は有さない。

遺物—土師器、須恵器、土製品が出土している。土師器には環1～3、碗4が認められる。環は3点共に内面はヘラミガキ後黒色処理、ロクロからの切離方法は右回転糸切である。3はその後周縁部にヘラケズリを施している。碗も内面はヘラケズリ後黒色処理が施されている。ロクロからの切離方法は底部を欠損するため不明である。須恵器は5・6の環が出土している。ロクロからの切離方法は5が底部を欠損するため不明、6は右回転糸切である。土製品は7・8の土師が2点出土している。

○H39号住居址 (第46図、図版20・105)

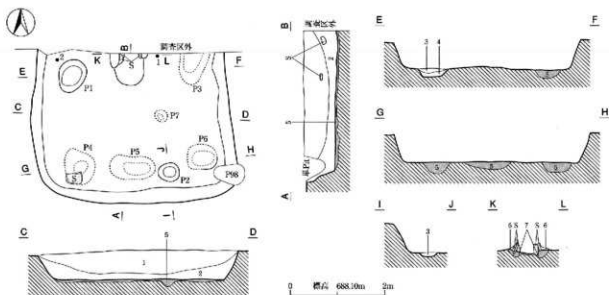
遺構—V区で検出された。東方向に調査区外に延びるため、平面形態・規模等は判然としにくい。調査範囲内では、他遺構との重複関係は有さない。壁残高は60cmであった。Pitは南西隅に1基検出されたが性格は不明である。調査範囲内にはカマドや周溝は認められなかった。

遺物—土師器の環が1点出土している。内面はヘラミガキ後黒色処理が施される。ロクロからの切離方法は右回転糸切である。外面面部の黒書は肉眼では判読できなかったが、赤外線カメラによる観察で横位に「守」と書されていることが判明した。

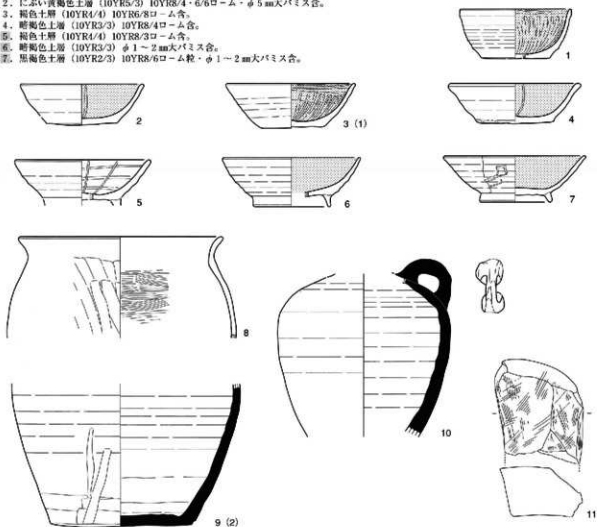
○H40号住居址 (第47・48図、図版20・105・106)

遺構—V区で検出された。北西隅が調査区外に延びる。長芋耕作による攪乱も著しい。隅丸方形の平面形態を呈し、N-48°-Eに長軸方位をとる。長軸長4.48m×短軸長4.44m、壁残高32cm、面積23.2㎡の規模を有する。床面上で検出されたP1～P4の4基のPitが主柱穴であるが、柱痕は確認できなかった。P5は柱痕が確認されており、柱穴であることは明らかである。本調査の北西隅に対応するPitが存在するのかも知れない。掘方から検出されたP6の性格は不明である。カマドは北壁の中央やや東寄りに粘土で構築されていた。周溝は有さない。

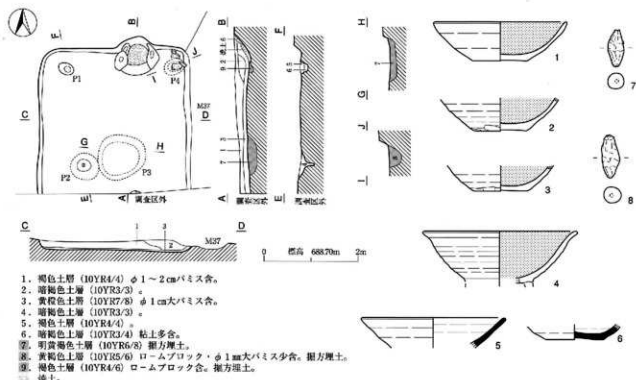
遺物—土師器、須恵器、鉄器、石製品、石器が出土した。土師器には環1～4、高杯9、壺10、甕11～18、甕19が存在する。環1は内面ナデ、外面にはヘラケズリが施される。環2は内面ヘラミガキ、外面底部にヘラケズリが施される。甕期の環としては希少な平底を呈する。環3は所謂「有段口縁環」である。内面にはナデ調整後暗文が施され、口唇部に凹線が巡る。外面はヘラケズリ調整が施される。環4は底部を欠損する。橙色で極めて良好な焼成が施される。内面ナデ、外面にはヘラケズリが施されている。高杯9は坏部の稜線が不明瞭で、脚は比較的短い。内面にナデ調整後、部分的にヘラミガキが施される。外面はヘラケズリ後、部分的なヘラミガキが施されている。壺10は小型の無頸甕である。口縁部に卑孔が焼成前に穿たれている。内面ヘラミガキ、外面はヘラケズリ後にヘラミガキが施される。甕11・15が小型である他は長胴の大型甕である。調整は外面ヘラケズリ、内面ナデを基本とするが、15は外面ナデ、11・12はナデ気味のヘラケズリである。内面は18がハケメ調整である。18は器形的にも他とは異質であり武蔵窯に近い。また、口縁部には「有段口縁環」と同じ手法による段が認められる。甕19は底部を欠損するが、器形・調整から甕と思われる。須恵器には環5、有台杯6、坏甕7・8が認められる。7以外は混入遺物と思われる。環5の底部には黒字「X」が認められる。鉄器は20の鎌が1点出土している。先端部を欠損する。石製品は21・22の紡錘車が出土している。文様は認められない。石器は23の砥石と24～27の礪物石が出土している。砥石23は3面が使用されている。



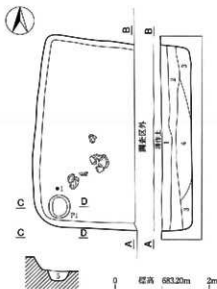
1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR8/4ローム脱子・φ5mm大パミスを下層に少含。
2. にぶい黄褐色土層 (10YR5/3) 10YR8/4・6/6ローム・φ5mm大パミス含。
3. 褐色土層 (10YR4/4) 10YR6/8ローム含。
4. 暗褐色土層 (10YR3/3) 10YR8/4ローム含。
5. 褐色土層 (10YR4/4) 10YR8/3ローム含。
6. 暗褐色土層 (10YR3/3) φ1~2mm大パミス含。
7. 黒褐色土層 (10YR2/3) 10YR8/6ローム粒・φ1~2mm大パミス含。



第44図 H37号住居址



第45図 H38号住居址



第46図 H39号住居址

1. 濃い黄褐色土層 (10YR6/4) シルト質。
2. 黒褐色土 (10YR2/2)、濃い黄褐色土 (10YR5/3) の混在土層。
3. 浅黄褐色土層 (10YR8/4) ローム主体。灰黄褐色粘土 (10YR4/2) 含。
4. 濃い黄褐色土層 (10YR5/3) 10YR8/6ローム・ ϕ 1cm 大パミス含。
5. 濃い黄褐色土層 (10YR6/4) シルト質。10YR8/4ローム多含。



○H41号住居址 (第49図、図版21)

遺構-V区で検出された。遺構の大部分は北方向に調査区外に延びるため、東南隅が調査されたにすぎない。長半の耕作による攪乱を受けている。以上のような状況のため、平面形態・規模等は不明である。壁残高32cmであった。調査範囲内には Pit・カマド・周溝等は認められなかった。遺物一出土遺物は皆無であった。

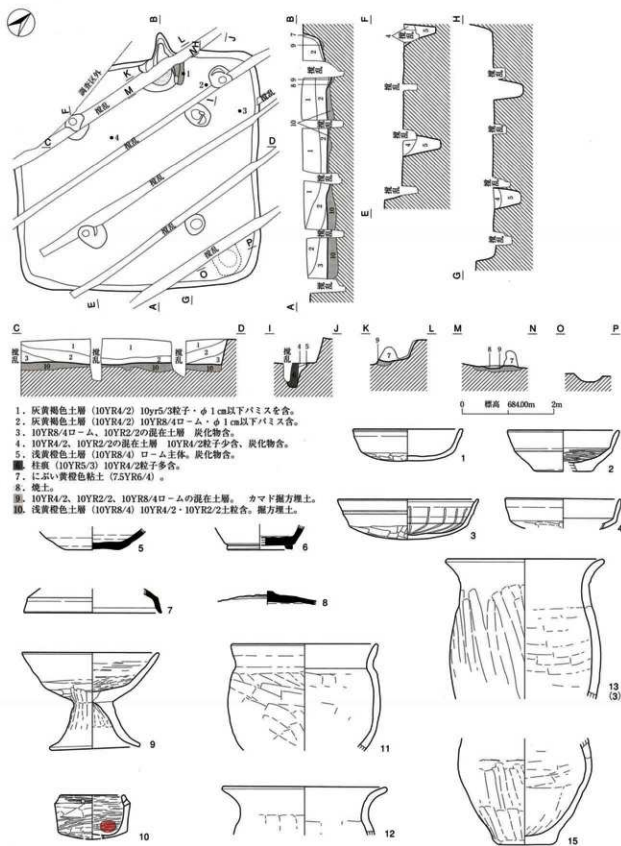
○H42号住居址 (第50図、図版21・106)

遺構-Y区で検出された。攪乱による破壊と、南方向に調査区外に延びるために、平面形態・規模等は判然としなない。壁残高63cmであった。調査範囲内には Pit・カマド・周溝等は存在しなかつた。

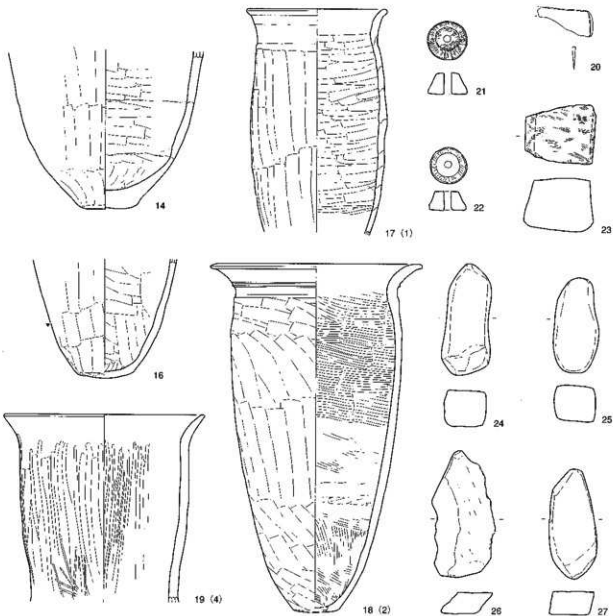
遺物一土師器と鉄器が出土した。土師器には坏1と甕2が認められる。坏は内面に暗文状ヘラミガキが施され、外面底部にはヘラケズリ調整が施されている。甕は底部片で、内面ハケメ、外面にはヘラケズリ調整が施される。鉄器は3の釘が1点出土している。

○H43号住居址 (第51図、図版21・106)

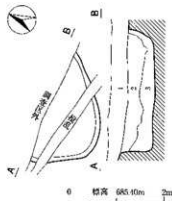
遺構-Y区で検出された。M48号溝址に切れ、攪乱による破壊を受ける。東方向に調査区外に延びるため、平面形態・規模等は判然としなない。壁残高21cmである。2基検出された Pit の性格は不明である。また、調査範囲内にはカマド・周溝等は存在しなかつた。



第47図 H40号住居址(1)



第48図 H40号住居址(2)



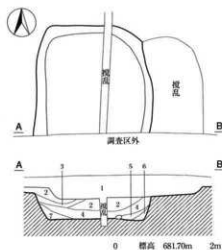
第49図 H41号住居址

1. 耕作土。
2. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR2/2粒子・φ2cm大バミス含。
3. におい黄褐色土層 (10YR5/3) 10YR8/4ロ・ム・10YR2/2粒子・φ2cm大バミス含。

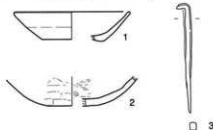
遺物—土師器と灰釉陶器が出上した。土師器には鉢1と甕2が認められる。鉢は内面ヘラケズリ調整が施されるが、ロクロからの切離方法は底部が欠損するため不明である。甕2は底部片である。内面ナデ、外面ヘラケズリ調整が施されている灰釉陶器は3の長頸壺の口縁部片が出土している。内外面に施釉が認められる。

○H44号住居址 (第52図、図版22・106)

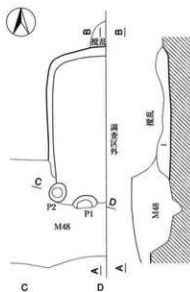
遺構—Z区で検出された。北方向に調査区外に伸びるため、平面形態・規模等は判然としない。壁残高は8cmであった。3基検出されたPitの内、P1とP2は柱穴を構成するものと思われる。2基共にφ14cmの柱痕が確認された。



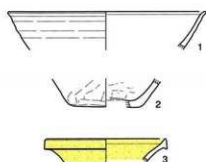
1. 表土。
2. 暗褐色土層 (10YR3/3) ϕ 2~3cmパミ少含。
3. 褐色土層 (10YR4/4) ϕ 2~3cmパミ多・10YR7/8ロームブロック少含。
4. 暗褐色土層 (10YR3/4) ϕ 2~3cmパミ少含。
5. 黒褐色土層 (10YR2/3)。
6. 暗褐色土層 (10YR3/3)。
7. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) ϕ 2~3cmパミ少含。



第50図 H42号住居址



1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR2/2・ローム含。
2. にぶい黄褐色土層 (10YR5/3) 10YR8/6ローム多含。



第51図 H43号住居址

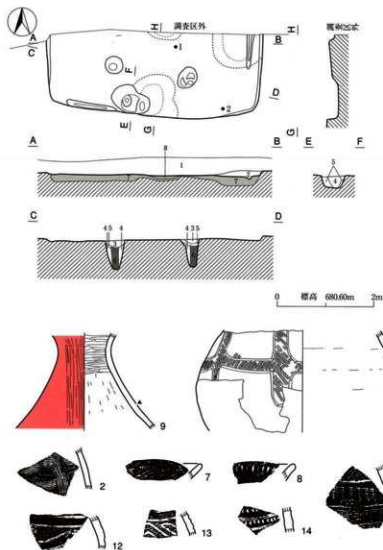
が址は調査範囲内には存在しなかった。周溝は南壁と東壁の一部に認められた。

遺物—弥生土器が出土している。鉢1、甕2・3、壺4~15が認められる。鉢は内外が赤色塗彩される。底部は欠損する。甕2は体部の破片である。櫛歯状工具による縦位の波状文により分割された区画内に横位の波状文が施されている。3は底部片である。内面ヘラミガキ、外面ヘラケズリ調整が施される。壺4・6は口唇部が面取りされ縄文が施される。5も同様な口唇部で、頸部に篋状工具による平行沈線が数本巡る。9は残存部分に文様は認められないが、外面が赤彩されている。7・8は口縁部片で、7は外面に縄文が、8は口唇部に刻目が施文される。10~14は体部片である。10・12・13は篋状工具による沈線区画内に縄文が施文される。11は櫛歯状工具による条線や麻状文が横位に施文され、頸部には縄文が認められる。14は篋状工具による沈線と刺突列が施文されている。15は底部片で、内面ハケメ、外面にはヘラミガキが施される。

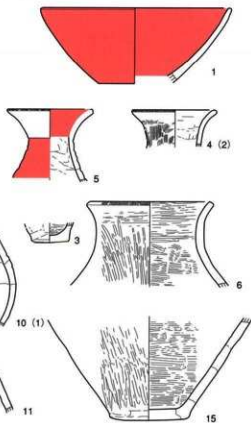
○H45号住居址 (第53図、図版22・106・107)

遺構—Y区で検出された。D74号土坑に切れ、長芋の耕作による攪乱を受ける。隅丸長方形の平面形態を呈し、N-90°Eに長軸方位をとる。長軸長3.6m×短軸長2.88m、壁残高26cm、面積12.7m²の規模を有する。床面上に検出されたP1~P6の6基のPitが主柱穴であり、柱間は1.6~2.68mである。 ϕ 16cm大の柱痕も確認されている。カマドは北壁の中央部に構築されているが、掘方の状態に破壊されており構築材は存在しなかった。周溝は有さない。

遺物—土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄器が出土している。土師器には坏1~4、鉢7、甕8~13が認められる。坏1・2・4は内面に暗文と黒色処理、3はナデ調整が施される。底部が残存する1・2のロクロからの切離方法は右回転糸切である。鉢7は内面ヘラミガキ後黒色処理、ロクロからの切離方法は方向不明の回転糸切である。甕は8・9が小型のロクロ甕、10・13が大型のロクロ甕、11・12が「コ」字口縁の武蔵甕である。ロクロ甕13は外面にハケメとヘラケズリが、12の武蔵甕は内面にハケメ、外面ヘラケズリ、11の武蔵甕



1. 耕作土。
2. 暗褐色土層 (10YR3/4) ϕ 3~4mm大バミス少含。
3. 10YR2/2, 10YR3/4の混在土層。
4. 淡黄褐色土層 (10YR8/4) ローム主体。10YR4/2含。
5. 黒褐色土層 (10YR3/2)。
- 柱痕 (10YR3/2)。
7. 黄褐色土層 (10YR5/8) ϕ 1~2cm大バミス多含。
8. 黄褐色土層 (10YR5/8) 焼土・炭化物・バミス含。



第52図 H44号住居址

は内面ナデ、外面ヘラケズリ調整が施される。須恵器は5の坏が1点出土している。ロクロからの切離方法は右回転の糸切である。灰釉陶器は6の皿が1点出土した。内外面に施釉されるが、底部を欠損する。鉄器は14・15の刀子と16の紡錘車が出土した。14と15は同一個体の可能性が高い。

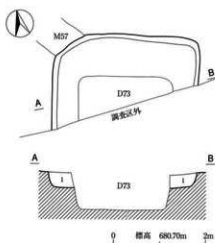
○H46号住居址 (第54図、図版22)

遺構一Z区で検出された。M57号溝址・D73号土坑に切られ、南方向に調査区外に伸びるため、平面形態・規模等は判然としない。壁残高は32cmであった。調査範囲内にはPit・カマド・周溝等は存在しなかった。

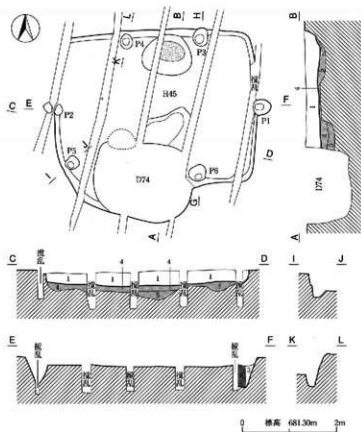
遺物一出土物は皆無であった。

○H47号住居址 (第55図、図版23・107)

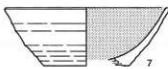
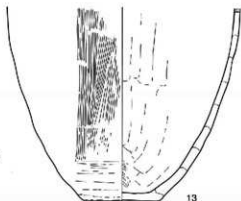
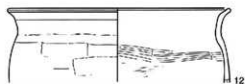
遺構一Z区で検出された。攪乱による破壊を受け、北方向に調査区



1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR3/2・10YR8/6ローム含。
第54図 H46号住居址

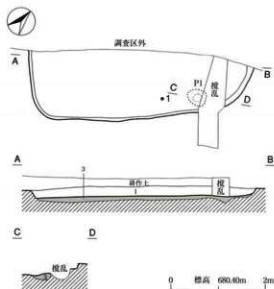


1. 暗褐色土層 (10YR3/3) φ2~3cmパミス・炭化物を含む。
2. 柱頭 (10YR4/2) 炭化物多量。
3. 浅黄褐色土層 (10YR8/4) コーム主体。
4. 黄褐色土 (10YR3/2)、灰黄褐色土 (10YR4/2) の混在土層。
5. 10YR8/4コーム含む。圓方層土。
6. 浅黄褐色土層 (10YR8/4) 10YR4/2土粒・パミス含。
7. 硬土。



16

第53図 H45号住居址



1. 暗褐色土層 (10YR3/4) ϕ 3-4mm/ベシ多含、10YR8/3ロームブロック多含。
2. 明黄褐色土層 (10YR7/6) ϕ 1-2cm/ベシ多含。
3. 褐色土層 (10YR4/4) ϕ 5mm-1cm/ベシ少含。掘方埋土。



第55図 H47号住居址

められる。坏は1が内面ナデ処理の他は暗文と黒色処理が施されている。ロクロから切離方法は底部が残存する1-3の内、1・2は右回転糸切、3は手持ヘラケズリのため不明である。なお、1は「内」、2は「儀」の墨書が外面体部に書かれている。鉢8は甕型土器の内面に黒色処理が施されているため、鉢とした。甕9-11はすべてロクロ甕である。9・11は内面にハケメが認められ、11は外面にヘラケズリ調整が施される他は、内外面にロクロナデが施されている。灰軸陶器は6・7の碗が出土している。内面には2点共に重複痕が認められ、つけかけ施軸である。大原2号窯式期の所産と思われる。鉄器は12の刀子と13の不明品2点が出土している。

○H49号住居址 (第57図、図版23・24・107・108)

遺構一Z区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。北方向に調査区外に延びるため、平面形態・規模等は不明である。壁残高45cmであった。東南隅に検出された1基以外にPitは存在しない。カマドは東壁の東南隅寄りに構築されるが、掘方状態に破壊されており構築材は不明である。カマドから東南隅を除く壁下には周溝が巡らされている。遺物一土師器、灰軸陶器、鉄器、縄文土器、石器が出土している。土師器には坏1・2、碗3、甕5・6が認められる。坏のロクロからの切離方法は、底部が残存する1の両面回転糸切であるが、方向は不明である。内面は1がナデ、2は黒色処理が施される。また、2は外面体部に「宝」の墨書が認められる。碗3は底部片で回転方向不明糸切後に高台が貼付されている。甕5・6は2点共にロクロ甕で、内面は5・6共にハケメ、外面は5はロクロナデ、6はヘラケズリ調整が施される。灰軸陶器は4の碗が出土している。底部を欠損するため詳細は不明である。内外面に施軸されている。鉄器は9・10の2点が出土しているが、性格は不明である。縄文土器7は混入遺物である。後期堀之内式と思われる。石器は打製石斧8が出土している。混入遺物である。

○H50号住居址 (第58図、図版24・25・108)

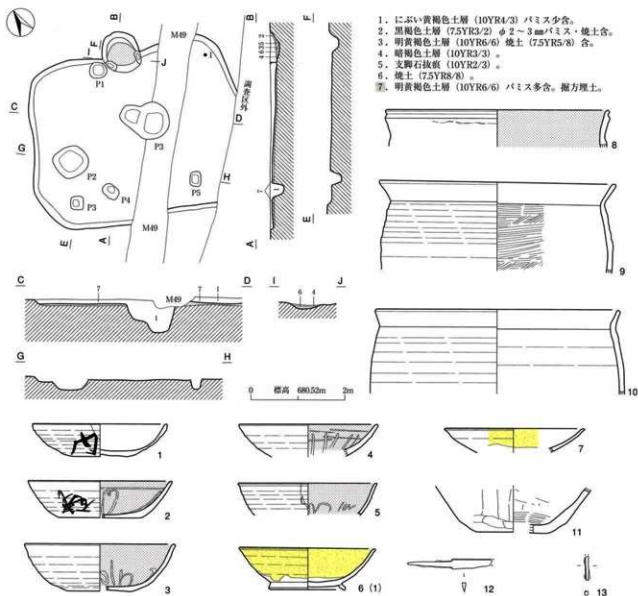
遺構一W区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。東方向に調査区外に延びるため、全容は不明である。楕円形の平面形態を呈し、N-22°-Eに長軸方位をとる。長軸長4.48m×短軸長3.44m、壁残高32cm、面積約10.6㎡の規模を有する。3基検出されたPitと、調査区外に存在するであろう1基を加えた4基が主柱穴を構成すると思われる。柱痕は確認できなかった。炉址は住居のほぼ中央に位置する地焼炉である。80×48cmの楕円形を呈する。周

外に延びるため、平面形態・規模等は判然としなない。壁残高は20cmであった。床面上からは炉址・Pit・周溝等は確認されなかったが、掘方からPit1基が検出された。性格は不明である。遺物一弥生土器が出土した。1は甕の底部である。内面にはハケメ後ヘラミガキ、外面にはハケメ調整が施される。2は壺の体部である。内面ハケメ、外面は篋状工具による平行沈線と山形文が施され、赤彩されている。

○H48号住居址 (第56図、図版23・107)

遺構一Z区で検出された。M49号溝址に切られ、南東隅が調査区外に延びる。隅丸長方形の平面形態を呈し、N-72°-Wに長軸方位をとる。長軸長3.72m×短軸長2.92m、壁残高12cm、面積約13.4㎡の規模を有する。6基検出されたPitの内、P1・P4・P5とM49により消滅したと思われる1基のPitを含めた4基が本址の主柱穴と思われる。その他のPitの性格は不明である。カマドは北壁の中央に構築されているが、掘方の状態に破壊されており、構築材は残存していない。周溝は有さない。

遺物一土師器、灰軸陶器、鉄器が出土している。土師器には1-5の坏、8の鉢、9-11の甕が認められる。



1. におい黄褐色土層 (10YR4/3) バミス少含。
2. 黒褐色土層 (7.5YR3/2) φ2~3mmバミス・焼土含。
3. 明黄褐色土層 (10YR6/6) 焼土 (7.5YR5/8) 含。
4. 暗褐色土層 (10YR3/3)。
5. 支脚石残痕 (10YR2/3)。
6. 焼土 (7.5YR4/8)。
7. 明黄褐色土層 (10YR6/6) バミス多含。掘方埋土。

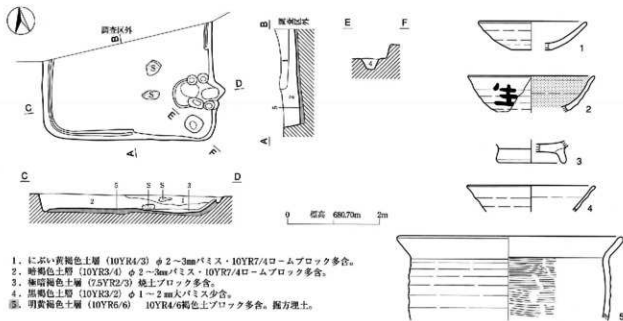
第56図 H48号住居址

溝は、調査範囲の東壁部分が途切れる他は壁下を巡っている、未調査部分が存在するため、全容は不明である。住居覆土はロームを主体とする人為埋土であった。

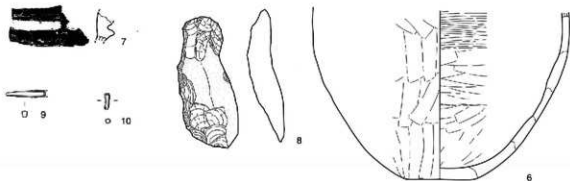
遺物—弥生土器と縄文土器が出土している。弥生土器には鉢1、高杯2、甕3、壺4・5が認められる。鉢1は内外面に赤彩が施される。口唇部には1条の凹線が巡る。高杯2は脚部片である。外面には赤彩が施され、脚内部にはヘラケズリ・ヘラミガキが施される。甕は口縁部が短く、口唇部には縄文、頸部下から体部には櫛歯状工具による斜走文が施文される。壺4は頸部片である。篋状工具による平行沈線と、刺突列が施文されている。5は口唇に面取りが施され、縄文が施文される。頸部下には、篋状工具による平行沈線間に櫛歯状工具による横位条線や、縦位・斜位の刺突列が施文されている。外面と内面口縁部は赤彩が施される。縄文土器6は混入遺物である。中期後半加曾利E式である。

○H51号住居址 (第59図、図版25・26・108)

遺構—W区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。東方向に調査区外に延びるため平面形態・規模等は不明である。壁残高は24cmであった。Pitは3基検出されている。これらと調査区外に存在するであろう1基を加えた



1. 赤い黄褐色土層 (10YR4/3) φ2~3mmパミス・10YR7/4ロームブロック多含。
2. 暗褐色土層 (10YR3/4) φ2~3mmパミス・10YR7/4ロームブロック多含。
3. 黒暗褐色土層 (7.5YR2/3) 焼土ブロック多含。
4. 黒褐色土層 (10YR3/2) φ1~2mm大パミス多含。
5. 明黄褐色土層 (10YR6/6) 10YR4/6褐色土ブロック多含。極方理土。



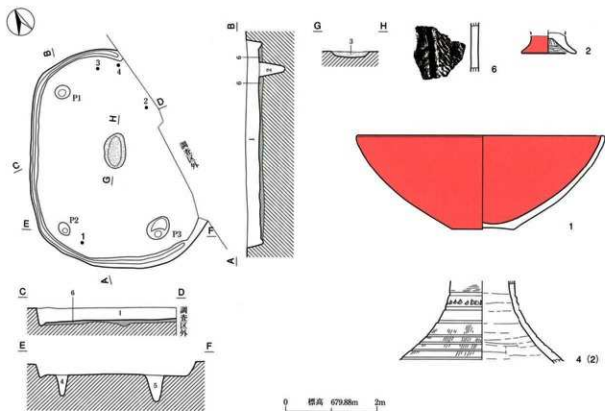
第57図 H49号住居址

4基のPitが主柱穴を構成すると思われる。φ12cmの柱痕がP2、P3で確認されている。炉は住居のほぼ中央と推測される場所に存在し、84×44cmの楕円形を呈する地焼炉である。周溝は調査範囲内においては壁下に巡らされている。遺物—弥生土器が出土している。器種的には鉢1・2、手捏3、蓋4、甕5、壺6~9が認められる。鉢1は内外面ともに赤彩が施される。口縁部が水平に外屈する特徴的な形態を呈す。2は内外面ともにハケメ後ヘラミガキ調整が施されている。蓋の可能性も有する。手捏3は鉢型を呈するが口縁部は欠損する。蓋4も口縁部を欠損する。内外面にヘラケズリを施し、内面にはその後ナデが加えられる。甕5は底部片である。内外面にヘラミガキが施され、外面底部付近にはその後ヘラケズリ調整が加えられる。壺6は頸部から体部上半の破片である。頸部には篋状工具による平行沈線間に縄文が施される。この文様帯と篋状工具による平行沈線間に櫛歯状工具による横走条線が施された文様帯間には篋状工具による垂下文が展開し、櫛歯状工具による縦位条線が充填される。壺7は口唇部が面取りされ、縄文が施される。頸部には篋状工具による平行沈線が数条巡る。壺8は口縁部片である。残存部の内外面は赤彩が施される。口唇部には刻目が巡る。壺9は底部片である。内外面に赤彩が施される。

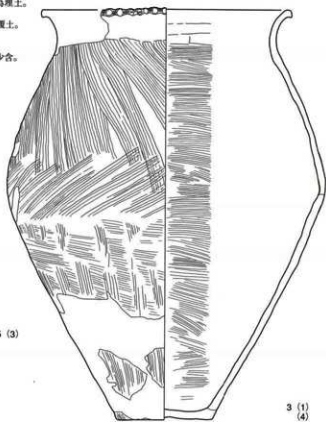
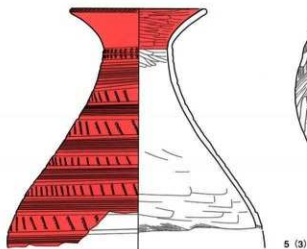
○H52号住居址 (第60図、図版26・109)

遺構—W区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。東方向に調査区外に伸びるため、平面形態・規模は判然としない。壁残高は56cmであった。調査範囲内にPit・カマドは存在しなかった。周溝は調査範囲の北壁から西南隅までは存在する。

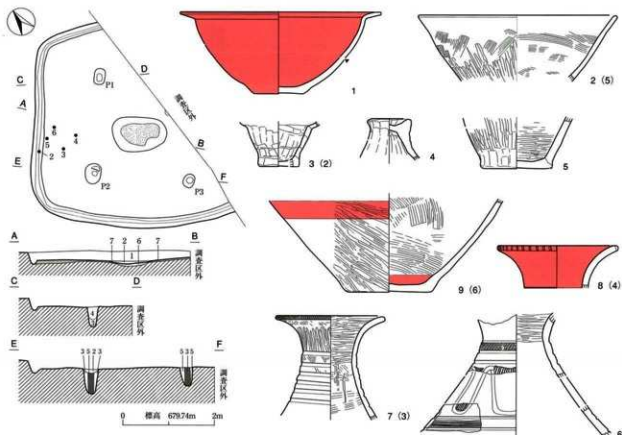
遺物—土師器の坏が1点出土した。内面には放射暗文と黒色処理が施され、外面底部にはヘラケズリ調整が施される。



1. 黄褐色土層 (10YR8/6) ローム主体。10YR4/2・10YR3/2含。人為埋土。
2. 柱 痕 (10YR4/4)。
3. 褐色土層 (10YR4/6) 堆積層の下面に焼土含。炭化物多含。砂土覆土。
4. 柱 痕 (10YR4/6) ϕ 1cm大バミス少含。
5. 柱 痕 (10YR5/6) ϕ 1cm大バミス少含。
6. 浅黄褐色土層 (10YR8/4) ローム主体。10YR4/2・10YR2/2土粒少含。羅方埋土。



第58図 H50号住居址



1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR2/2多含、10YR8/4ローム含。
 2. 黒褐色土層 (10YR2/2) が址覆土。
 3. 浅黄棕色土層 (10YR8/4) ローム主体、砂粒多含。
 4. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 砂粒多含。
 ■ 柱 痕 (10YR5/3)。
 ■ 土 層。
 ■ 須、10YR8/4ローム、10YR6/4砂粒の混在土層。面方覆土。

第59図 H51号住居址

○H53号住居址 (第61図、図版27・109)

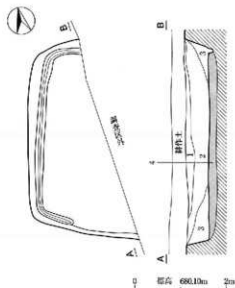
遺構-J区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。南方向に調査区外に延びるため、平面形態・規模等は判然としなない。Pitは4基検出されているが、柱痕は確認されていない。カマドは北壁の北西隅際に粘土で構築されていた。

遺物-須恵器、土師器、石器が出土している。須恵器には有台環1と環蓋2が認められる。有台環1は底部片である。右回転糸切でロクロから切離され、ヘラケズリ後高台が貼付されている。環蓋は扁平な擬宝珠つまみを有する。外面天井部にはヘラケズリ調整が施され、内面面に火漚が認められる。土師器には3~5の3点の武蔵甕が認められる。3・4は「コ」字気味の口縁部を呈し、3は体部に最大径を有する。5の底部片を含め、内面ナデ、外面ヘラケズリ調整が施される。石器は6の砥石が1点出土している。4面に使用痕が認められる。

○H54号住居址 (第62図、図版28・109)

遺構-M区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。東北隅と西南隅が調査区外に延びている。隅丸長方形の平面形態を呈し、N-6°-Eに長軸方位をとる。長軸長3.16m×短軸長2.72m、壁残高52cm、面積約10.6㎡の規模を有する。調査範囲でPit・カマドは検出されなかったが、推測される未調査範囲の面積では存在しない可能性が高い。周溝は東壁の中央から東北隅に向かい途切れる他は壁下を巡る。

遺物-土師器と須恵器が出土している。土師器には環1~4と甕7~10が認められる。環1は内面ヘラミガキで、ロクロからは右回転糸切により切離されている。環2は内面に放射暗文状のヘラミガキが施された後、黒色処理が施さ



1. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR4/3・ロームブロックを含む。
2. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR6/6ロームブロック含、バミス粒少含。
3. 褐色土層 (10YR4/6) バミス粒少含。
4. 明黄褐色土層 (10YR6/6) 10YR2/2ブロック・ローム・φ1~21cmバミス含、腐方理土。



第60図 H52号住居址

他のものを含め、攪乱が激しく判然としない。カマドは調査範囲内には存在しなかった。周溝は東壁下に認められた。遺物一土師器、灰軸陶器、鉄器が出土している。土師器には環1~3と甕5~7が認められる。環の内面は1がナデ、2が放射暗文状ヘラミガキ後黒色処理、3はヘラミガキ後黒色処理が施される。ロクロからの切離方法は、2が底部を欠損するため不明、1・3は方向不明回転糸切である。3はその後ヘラズリが加えられる。甕は3点共にロクロ製である。5は小型で、底部に右回転糸切痕が認められる。7は外面にナデ気味のヘラズリ調整が認められる。灰軸陶器は4の碗が1点出土している。底部は欠損しており、内外面に施釉が認められる。鉄器は8が1点出土した。鎌の基部の可能性が高い。

○H56号住居址 (第64図~66図、図版29・109~111)

遺構一U区で検出された。攪乱による破壊を受ける。東方向に調査区外に延びるため、平面形態・規模等は判然としない。壁残高は67cmであった。内部に礎石を伴うP3・P5と、P6北の礎石、P4南の礎石が本址の支柱を支えたものと推測される。その他数多く検出されたPitの一部は柱穴と思われるが、住居の全容が不明なため、判然としない。柱痕はいずれのPitからも検出できなかった。カマドは北壁の中央西寄りに地山削りだしの炉芯を、粘土と石で被覆して構築されていたが、焚口~かけ穴部分は破壊され、掘方状態であった。P12内の石材はカマド構築材の可能性が高い。周溝は調査範囲内には存在しなかった。

遺物一土師器、須恵器、灰軸陶器、鉄器が出土している。遺物の出土量は極めて多い。土師器には、環1~15、碗16~21、皿22~33、坏蓋34、甕60~63が認められる。環は13が内面ナデ処理他は、黒色処理である。また、2~8・11・14・15はその前にヘラミガキが施され、10は暗文が認められる。1はナデ調整である。ロクロからの切離方法は5・8がヘラズリにより、14が底部欠損のため不明の他は回転糸切であり、方向は6・7が不明の他は右である。11・15は糸切後底部周縁にヘラズリが加えられる。3の外面体部には「午」、14の外面体部には「U」、15の外面底部付近には判読不能の墨書が認められる。7は回転糸切時に大きく窪んだ底部に粘土板を貼付して平坦に修正している。碗は17が内面に暗文と黒色処理が施される他は、ヘラミガキ後黒色処理が施される。16・18・19は底部に方向不明の回転糸切痕が認められる。高台は貼付である。20・21の外面体部には判読不能の墨書が認められる。皿はすべて内面

れる。ロクロからの切離方法は回転糸切であるが、方向は底部周縁に施されたヘラズリにより不明である。環3は内面に十字暗文と黒色処理が施される。底部には手持ちヘラズリが施されるため、ロクロからの切離方法は不明である。外面口縁部には肉眼では「土」と判読される墨書が存在するが、赤外線カメラにより「寺」であることが判明した。環4は口縁部片である。内面には粗いヘラミガキ後黒色処理が施され、外面には判読不能な墨書が書かれている。甕は7・8のロクロ製と9・10の武蔵製が出土している。ロクロ製7は小型、8は大型で、2点共に内外面にロクロナデが施され、口縁部は「く」字であるが、緩く内湾する。武蔵製は「コ」字口縁で、内面ナデ、外面ヘラズリ調整が施される。須恵器は5・6の環が2点出土している。2点共に右回転糸切によりロクロから切離されている。

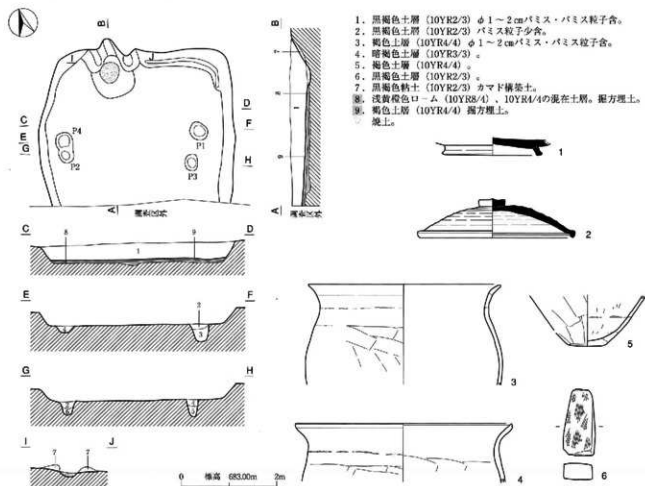
○H55号住居址 (第63図、図版28・109)

遺構一M区で検出された。M67号溝址・D79号土坑により切られる。攪乱による破壊を受け、南北方向に調査区外に延びるため、平面形態・規模等は判然としない。8基検出されたPitの内P2とP8の2基は主柱穴の可能性を有するが、

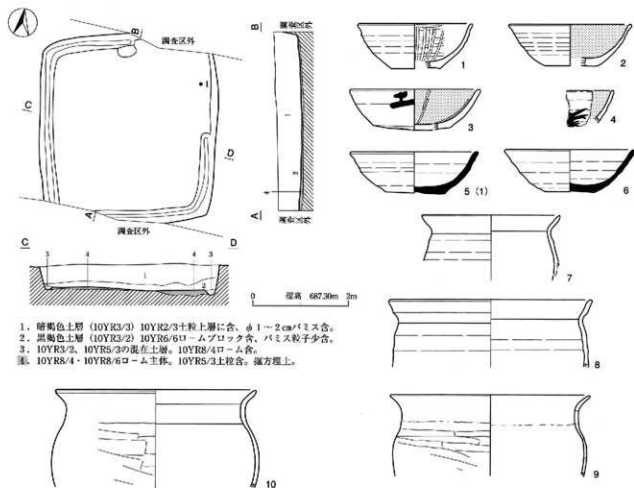
ヘラミガキ後黒色処理である。ロクロからの切離方法も回転糸切を基本とするが、高台貼付の際の調整等により方向がわかるものは存在しない。また墨書が23・24・30・33に認められ、23は「卸」？、24は「卸大十午」？、30は「十」？と判読できる。33の口唇部には輪花状の加工が認められ、墨書も存在するが判読できない。坏蓋34は内外面黒色処理が施され、内面には螺旋暗文が認められる。坏蓋としたが、金属器の模倣であろう。甕は60が小型のロクロ甕の他は武蔵甕である。61・62の武蔵甕口縁部片は「コ」字口縁を呈している。須臾器は35～54の坏、55・56の有台坏、57・58の坏蓋、64～66の甕が認められる。坏のロクロからの切離方法は、38・43がヘラケズリにより不明な他は回転糸切であり、方向は54が不明な他は右である。52は外面体部に「午？」の墨書が、53は赤外線カメラにより数文字の墨書が存在することが確認されたが、判読はできなかった。48・49・51～53には黒斑が認められる。有台坏55は回転ヘラケズリ後高台が貼付されており、ロクロからの切離方法は不明である。56も同様であるが、底部中央に回転糸切痕が認められ、その方向は右である。坏蓋は2点共に扁平な擬宝珠つまみを有し、外面天井部には回転ヘラケズリが施されている。58は火澤が認められる。甕は64が比較的小型で、広口短頸のもの、65は長頸である。66は底部片で外面には平行印目後ヘラケズリ、内面はナデ調整により、当具痕を消去している。灰釉陶器は59の皿が出土している。施釉は内面にのみ全面認められ、重焼痕は認められない。また、高台の断面形状も梯形である。K-14期の所産と思われる。鉄器は67の斧、68の刀子、69～72の不明品が出土している。

○H57号住居址 (第67図、図版29・111)

遺構-U区で検出された。H61号住居址とP165に切られるため、平面形態・規模等は判然としなない。壁残高27cmであった。2基検出されたPitは礎石を伴っている。主柱穴であろう。柱痕は確認されなかった。カマドは北壁の中央と思われる部分に存在するが、掘方状態に破壊されていた。調査範囲内では周溝は認められなかった。



第61図 H53号住居址



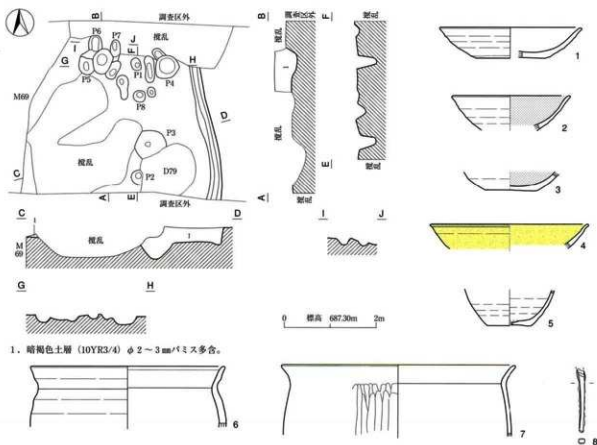
第62図 H54号住居址

遺物—土師器、須恵器、鉄器、石器が出土している。土師器には坏1、碗2、甕7が認められる。坏は内面ヘラミガキ後黒色処理が施される。ロクロからの切離方法は右回転糸切である。赤外線カメラによる観察では、外面体部に墨書と思われる存在が確認されたが判読はできなかった。碗2は内面ヘラミガキ後黒色処理が施される。底部には棒状工具による同心円がみとめられ、貼付されていた高台は欠損している。甕7は武蔵甕である。外面にはヘラケズリ調整が施される。須恵器は3~6の坏と8の甕が出土している。ロクロから切離方法は3・5・6が回転糸切、4はヘラ切りである。回転糸切の方向は5が右の他は不明である。3・5・6は内外面に火葬が認められる。甕8は底部片である。外面は平行目後ヘラケズリ、内面は当具痕をナデ調整により消去している。鉄器は9の不明品が1点出土している。石器は黒曜石製の石鎌が1点出土した。混入遺物である。

○H58号住居址 (第68図、図版30・111)

遺構—U区で検出された。P167に切られ、北西方向に調査区外に延びる。隅丸長方形の平面プランを呈し、N-24°-Wに長軸方位をとる。長軸長5.04m×短軸長3.84m、壁残高44cm、面積約22.2m²の規模を有する。床面上で検出されたP1~P3は支柱穴と思われる。P2・P3は礎石を有する。P1からは ϕ 12cmの柱痕が確認された。掘方から検出された3基のPitの性格は不明である。調査範囲内からはカマド・周溝は確認されなかった。

遺物—土師器、須恵器、銅製品、石器が出土している。土師器には坏1・2、甕9が認められる。坏は2点共に、内面ヘラミガキ後黒色処理、底部には手持ヘラケズリ調整が施される。甕9は武蔵甕で「コ」字状の口縁部を呈する。内面ナデ、外面ヘラケズリ調整が施される。須恵器には坏3~7、坏蓋8、甕10が認められる。すべてに火葬が認められ、ロクロからの切離方法は4がヘラ切り後ヘラケズリの他は、回転糸切である。方向は6が不明な他は、右である。坏蓋はつまみを欠損する、天井部に回転ヘラケズリが施される。甕は長頸広口である。銅製品は11の帯金具の巡



第63図 H55号住居址

方が1点出土した。石器は12の黒曜石製の石鏃が1点出土した。混入遺物である。

○H59号住居址 (第69図、図版30・112)

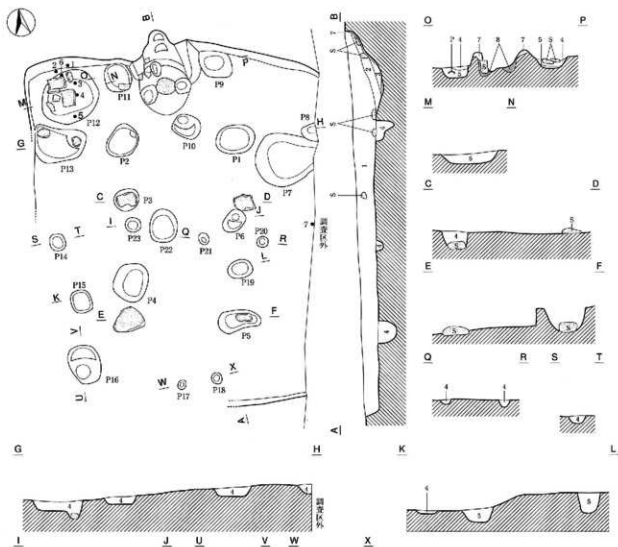
遺構-U区で検出された。P148・172に切られる。隅丸方形の平面形態を呈し、N-67°-Wに長軸方位をとる。長軸長3.72m×短軸長3.76m、壁残高24cm、面積17.4㎡の規模を有する。主柱穴はP1~P4の4基であり、P11を除く他のPitは補助である。カマドは北壁の中央に位置するが、掘方状態に破壊されており、構築材は不明である。住居の南半には壁下に周溝が巡っている。

遺物-須恵器、土師器、鉄器が出土している。須恵器には坏1~5、有台坏6、坏蓋7が認められる。坏のロクロからの切離方法はすべて右回転糸切である。また、3・4を除き火漕が認められる。有台坏は大型で身の深いもので、回転ヘラケズリ後高台が貼付されている。坏蓋はつまみを欠損する。法量的に、6の有台坏とセットとなるようである。土師器は8~10の甕が出土している。すべて武蔵甕である。8は小型、9・10は大型である。9の口縁部は「く」字を呈する。鉄器は11の刀子が1点出土した。

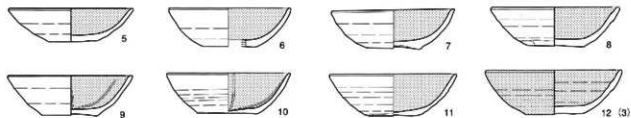
○H60号住居址 (第70図、図版31・112)

遺構-X区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。西方向に調査区外に延びるため、平面形態・規模等は不明である。壁残高は9cmであった。床面上で3基検出されたPitの性格は不明である。柱痕は認められなかった。カマドは北壁の中央と思われる位置に検出されたが、掘方状態に破壊されており、構築材は不明である。周溝は有さない。

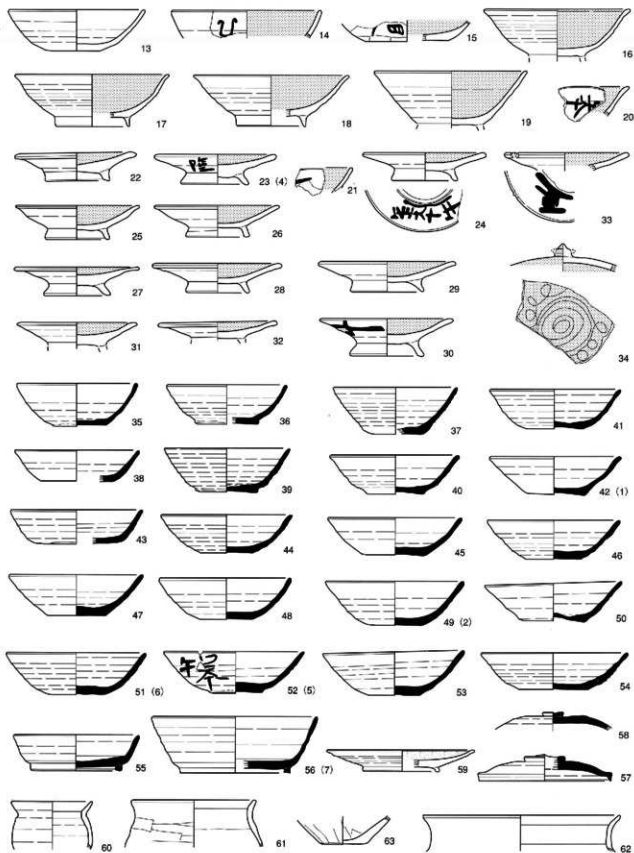
遺物-土師器、須恵器、土製品が出土している。土師器には碗1、甕3が認められる。碗は内面ヘラミガキ後黒色処理が施される。ロクロからの切離方法は回転糸切であるが、方向は不明である。貼付されていた高台は欠損している。甕は小型ロクロ甕の口縁部片である。須恵器は2の坏が1点出土した。右回転糸切によりロクロから切離されている。土製品は4の羽口が1点出土している。



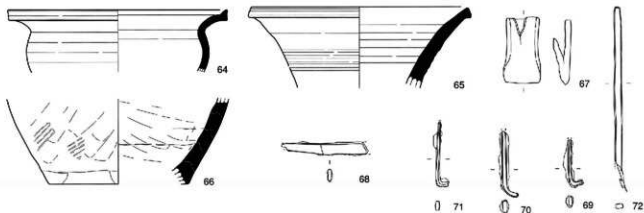
1. 褐色土層 (10YR2/4) φ 2~3mm²ミス・10YR2/4・10YR2/2ブロック含。
2. にぶい黄褐色土層 (10YR6/4) 炭化物・10YR2/2ブロック含。
3. 灰・椀土の混在土層。
4. にぶい黄褐色土層 (10YR6/4)。
5. 10YR6/4、10YR2/2の混在土層。
6. 5層中に10YR8/6粒子多含。遺物多含。
7. にぶい黄褐色粘土 (10YR6/4) カマド跡多含。
8. 褐色土層 (10YR2/2) 粘土・10YR6/4土粒多含。造土。



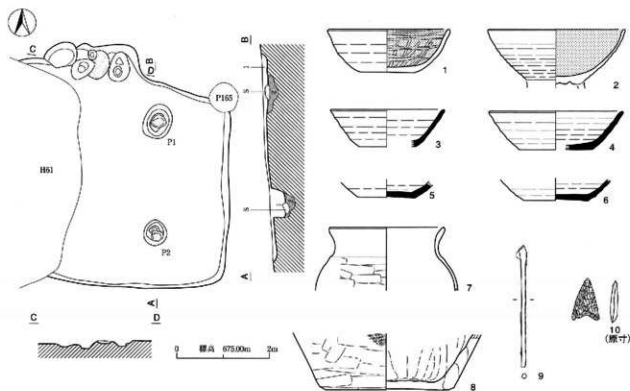
第64図 H56号住居址[1]



第65图 H56号住居址(2)



第66図 H56号住居址³⁾



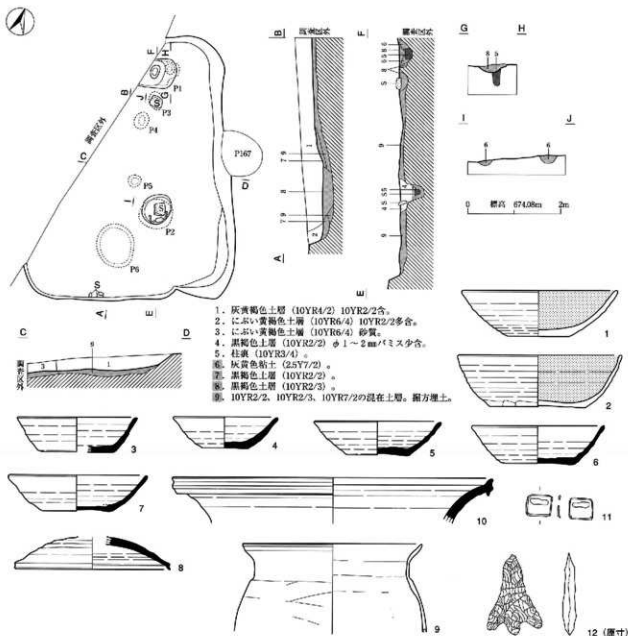
1. 濃い黄褐色土層 (10YR6/4) 10YR2/2粘土少含。
 2. 黒褐色土層 (10YR2/2) バミ土少含。
 3. 成土。

第67図 H57号住居址

○H61号住居址 (第71図、図版31・112)

遺構—U区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。南西隅が調査区外に延びる。隅丸長方形の平面形態を呈し、N-88°-Eに長軸方位をとる。長軸長4.32m×短軸長3.68m、壁残高36cm、面積約19.8㎡の規模を有する。床面上に検出された8基のPitの内、P1~P4の4基が主柱穴である。P3・P4からはφ16cmの柱痕が確認された。主柱穴4基の柱間は南北が2.24~2.36m、東西が1.32~1.52mである。カマドは北壁の中央に石で構築されていた。周溝は有さない。

遺物—土師器、須恵器、鉄器、縄文土器が出土している。土師器には坏1~7、皿12、碗13~15、鉢16が認められる。坏は1が内面暗文と黒色処理の他は、内面はヘラミガキ後黒色処理が施される。ロクロからの切離方法は底部が残存しない7を除き回転糸切であり、方向は3が不明の他は右である。6・7には外面体部に「信」の墨書が認められる。皿は12が1点出土している。内面はヘラミガキ後黒色処理、ロクロからは右回転糸切で切離され、高台が貼付されて

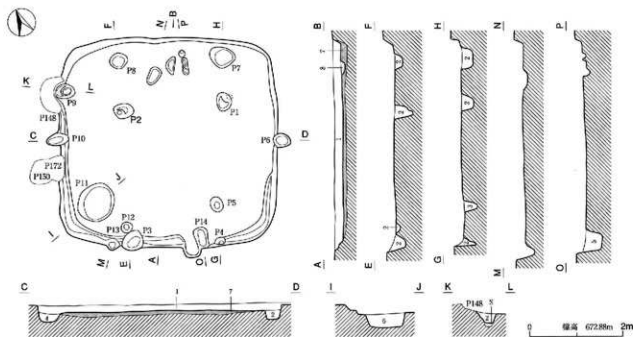


第68図 H58号住居址

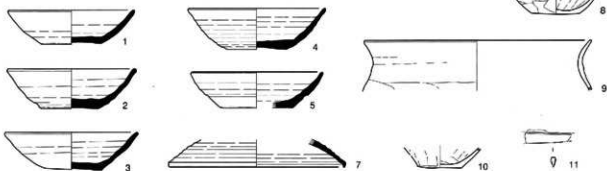
いる。碗は3点共に内面はヘラミガキ後黒色処理が施される。ロクロからの切離方法は13・14が方向不明回転糸切、15は回転ヘラズリ調整により、不明である。高台は3点共に付高台である。鉢16は底部を欠損する。内面はヘラミガキ後黒色処理が施される。須臾器は坏8~10、坏蓋11、甕17が認められる。坏は3点共に右回転糸切によりロクロから切り離されている。坏蓋11は口縁部を欠損する。外面天井部には回転ヘラズリが施され、扁平な擬宝珠つまみが貼付されている。甕17は広口瓠頭のもので、内外面にロクロナデが施される。鉄器は19が1点出土している。性格は不明である。縄文土器18は混入遺物である。後期の所産と思われる。

○H62号住居址 (第72図、図版32・112)

遺構—U区で検出された。遺構の大部分は西方向に調査区外に延びるため、平面形態・規模等は不明である。壁残高16cmであった。北東隅には土坑状の落ち込みが認められるが、全容が不明なため性格は不明である。Pit・カマド・周溝等は認められなかった。



1. 暗褐色土層 (10YR3/4)。
2. 黒褐色土層 (10YR2/3)。
3. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR4/2粘土含。
4. 暗褐色土層 (10YR2/3) $\phi 1-2\text{mm}$ 粘土少含。
5. 暗褐色土層 (10YR3/3) 10YR6/1粘土ブロック含。
6. 黒褐色土層 (10YR2/3) 10YR6/3粘土ブロック少含。
7. 暗褐色土層 (10YR3/2) 10YR7/3粘土多含、炭化物少含。掘方黒土。
8. 焼土。



第69図 H59号住居址

遺物—土師器と須恵器が出土している。土師器は1の坏が1点認められる。内面ヘラミガキ後黒色処理で、ロクロからの切離方法は、手持ヘラケズリ調整により不明である。外面は全面に赤彩が施されている。須恵器も2の坏が1点認められる。ロクロからの切離方法は回転糸切であるが、方向は不明である。内外面に火障が認められる。

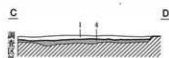
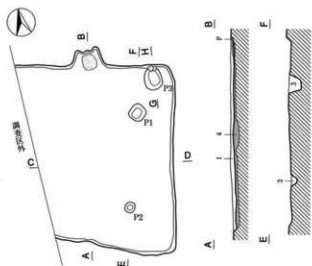
○H63号住居址 (第73図、図版32・112)

遺構—X区で検出された。F5号掘立柱建物址を切る。東方向に調査区外に延びるため、平面形態・規模等は判然としない。壁残高12cmであった。1基検出された Pit の性格は不明である。カマド・周溝は調査範囲内には存在しなかった。

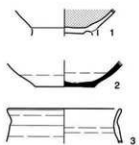
遺物—黒曜石製の石織が1点出土した。混入遺物である。

○H64号住居址 (第74図、図版32・112)

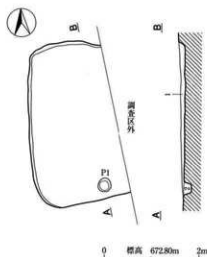
遺構—X区で検出された。遺構の大半は東方向に延びるため、平面形態・規模等は判然としない。壁残高は24cmで



1. 黒褐色土層 (10YR3/2)。
 2. 黒褐色土層 (10YR2/3)。
 3. 暗褐色土層 (10YR3/3)。
- 10YR2/2, 10YR7/3の混在土層。掘方埋土。
 ○ 焼土。



第70図 H60号住居址

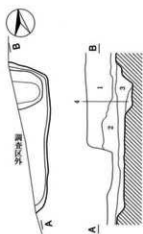


1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR2/2・10YR7/3粒子含。
2. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR6/4~10YR6/6鉄分多含。



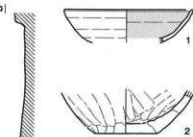
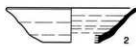
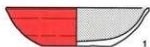
1 (原寸)

第73図 H63号住居址

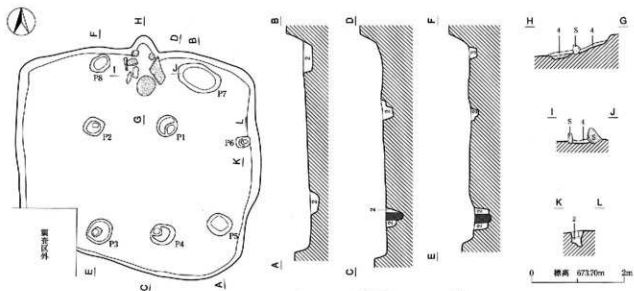


第72図 H62号住居址

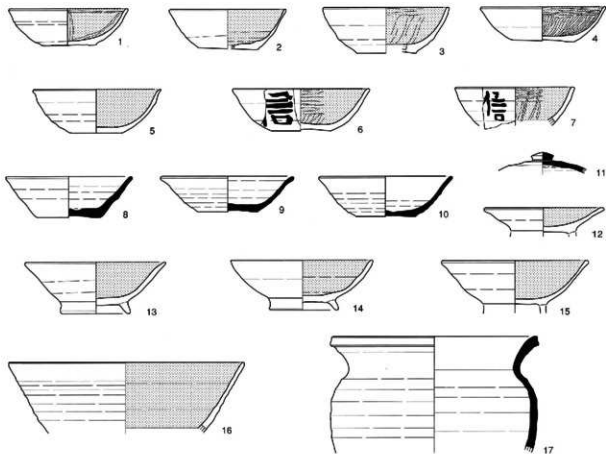
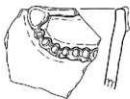
1. 褐色土層 (10YR4/4) ϕ 1~2mm大バミス含。
2. 暗褐色土層 (10YR3/4)。
3. 黒褐色土層 (10YR2/3) 10YR5/3ブロック少含、 ϕ 2~3mm大バミス少含。
4. にぶい黄褐色土層 (10YR5/3) 粘質土。鉄分の



第74図 H64号住居址



1. にぶい黄褐色土層 (10YR5/4)。
 2. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR8/4粒子含。
 3. 褐色土層 (10YR4/4) 10YR2/2ブロック含。
 4. 黒褐色土層 (10YR2/2) パミス・10YR5/6ブロック含。
- 柱痕。
 ▨ 焼土。



第71図 H61号住居址

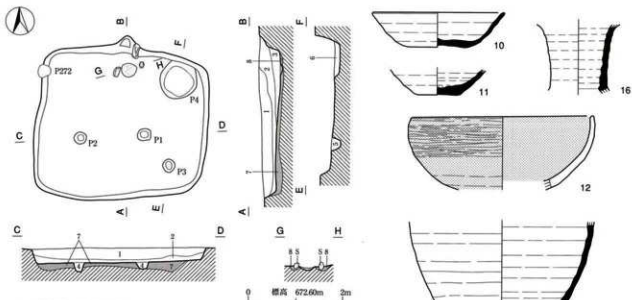
あった。Pit・カマド・周溝等は調査範囲内には存在しなかった。

遺物—土師器が出土している。1は坏で、内面はヘラミガキ後黑色処理が施される。ロクロからの切離方法は底部を欠損するため不明である。2はロクロ甕の底部である。内面ナデ、外面にはヘラケズリ調整が施される。

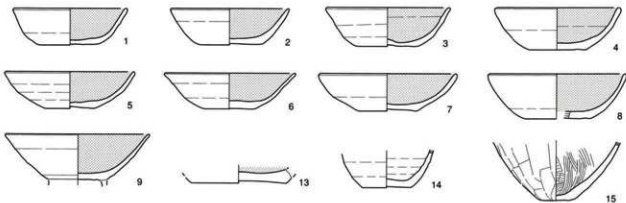
○H65号住居址（第75図、図版33・112・113）

遺構—X区で検出された。P272に切られる。隅丸長方形の平面プランを呈し、N-86°-Wに長軸方位をとる。長軸長3.08m×短軸長2.6m、壁残高38cm、面積9.8㎡の規模を有する。4基のPitが検出されたが、柱痕は確認されなかった。P1・P2が主柱穴の可能性も想定される。カマドは北壁の中央に粘土と石で構築されていたが、掘方状態に破壊されていた。周溝は有さない。

遺物—土師器、須恵器、灰軸陶器が出土している。土師器には坏1～8、碗9、鉢12・13、甕14・15が認められる。坏はすべてが内面ヘラミガキ後黑色処理で、ロクロからは右回転糸切により切り離されている。碗は内面ヘラミガキ後黑色処理で、回転方向不明の糸切によりロクロから切離される。貼付された高台は欠損している。鉢12は金属器の



1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2)。
2. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR2/2・10YR8/6土粒多含。
3. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR2/2・10YR8/6土粒多含、焼土・炭化物含。
4. 暗褐色土層 (10YR3/3) 10YR2/2鉄分多。
5. 暗褐色土層 (10YR3/3) 鉄分少。
6. 黒褐色土層 (10YR2/3) 鉄分多。
7. におい黄褐色土層 (10YR7/3) 10YTR3/2含。掘方埋土。
8. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR2/2・粘土・鉄分含。カマド掘方埋土。
9. 焼土。



第75図 H65号住居址

横である。内外面ヘラミガキ後黒色処理が施される。底部は欠損する。鉢13は底部片である。内面ヘラミガキ後黒色処理、ロクロからは右回転糸切により切離されている。甕14・15はロクロ甕である。2点共に底部片で、小型の14は右回転糸切によりロクロから切離されている。大型の15は内面ハケメ、外面にはヘラケズリ調整が施される。須恵器には坏10・11、壺16・17が認められる。16は長頸甕の頸部である。17は体部～底部の破片である。ヘラケズリ後高台が貼付されている。灰軸陶器は18の碗と器種不明の底部19が出土している。19の外面高台内には、肉眼では確認できなかった黒書が存在が、赤外線カメラにより明らかとなった。全容が不明なため判読はできない。

○H66号住居址（第76図、図版34・113）

遺構-U区で検出された。H57・58・61号住居址、P119・122・132・133・135～141・167・169・170・173に切られるため平面形態・規模等は判然とし難い。壁残高58cmであった。主柱穴は礎石を伴うP1～P3の3基と均等位置に設定された礎石が存在したものと推測される。柱間は3.08～3.36mである。これらとは別にP4・P5・P12からはφ16cmの柱痕が確認された。北半部の壁沿いに壁柱穴が巡らされるようである。カマドは北壁の中央に粘土と石で構築されていた。自然に崩壊した状態である。周溝は東北隅～北壁下に巡らされていた。

遺物-土師器、須恵器、土製品が出土している。土師器には坏1・2、甕12・13が認められる。坏は2点共に内面ヘラミガキ後黒色処理で、外面底部には手持ヘラケズリ調整が施される。甕は2点共に武蔵甕である。12は「K」字口縁を呈し、内面ナデ、外面ヘラケズリ調整が施される。13は底部片である。須恵器は坏3～5、有台坏6～8、坏蓋9～11、甕14が認められる。坏は3点共に火罨が認められ、ロクロからの切離方法は3が右回転ヘラ切り、4が方向不明回転糸切、5が右回転糸切である。有台坏もすべてに火罨が認められる。底部は回転ヘラケズリ後高台が貼付されている。坏蓋は3点共につまみを欠損する。9・11には火罨が認められ、外面天井部に回転ヘラケズリが施される。甕は底部片で、外面は格子甲日後底部周縁にヘラケズリを加える。内面はナデ調整により当具痕を消去している。土製品は15の羽口片が1点出土した。

○H67号住居址（第77図、図版35・113）

遺構-X区で検出された。F7号獨立柱建物址に切られ、西方向に調査区外に延びる。隅丸長方形の平面プランを呈し、N-12°-Eに長軸方位をとる。長軸長4.48m×短軸長3.68m、壁残高20cm、面積約19.3㎡の規模を有する。掘方を含め12基のPitが検出されたが、柱痕は確認されていない。P1～P4の4基が主柱穴の可能性が高い。カマドは北壁の中央に検出されたが、掘方状態に破壊されていた。周溝は有さない。

遺物-土師器、須恵器、石器が出土している。土師器には坏1・2が認められる。2点共に内面ヘラミガキ後黒色処理で、ロクロからは右回転糸切により切離されている。須恵器は坏3～7、壺8が認められる。坏は底部を欠損する5を除き、ロクロからは右回転糸切により切離される。4・7は火罨が認められる。壺は底部片である。回転ヘラケズリ後高台が貼付されている。石器は9の黒曜石製の石鏃が出土している。混入遺物である。

○H68号住居址（第78図、図版35・114）

遺構-U区で検出された。H58・61号住居址に切られ、北西方向に調査区外に延びるため、平面形態・規模等は不明である。壁残高68cmであった。調査範囲内にはPit・カマド・周溝等は存在しなかった。

遺物-土師器と須恵器が出土している。土師器は1の坏が1点認められる。外面にヘラケズリ調整が施される。須恵器も2の有台坏が1点出土した。回転ヘラケズリ後高台が貼付されている。

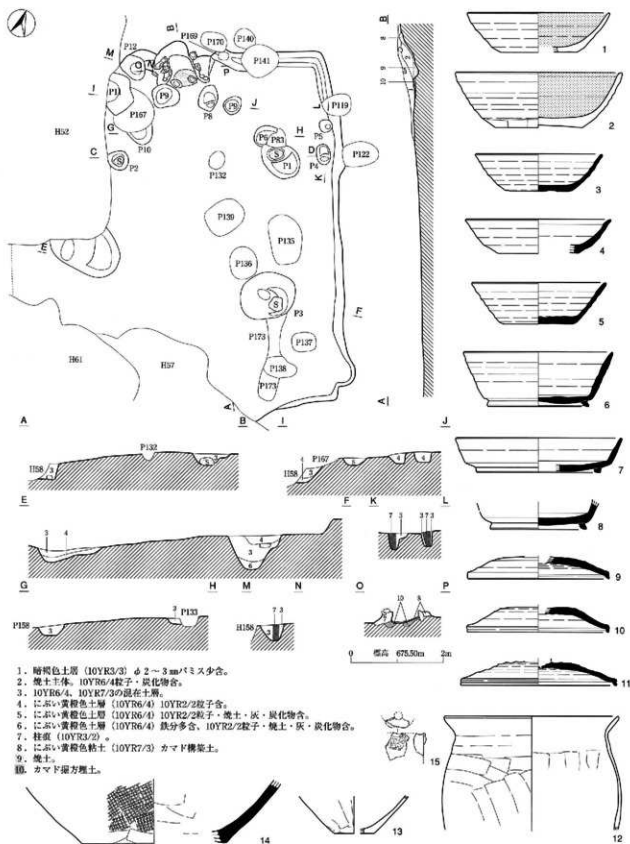
○H69号住居址（第79図、図版36・114）

遺構-X区で検出された。P317に切られる。東方向に調査区外に延びるため、平面形態・規模等は不明である。壁残高は26cmであった。調査範囲内にはPit・カマド・周溝等は存在しなかった。

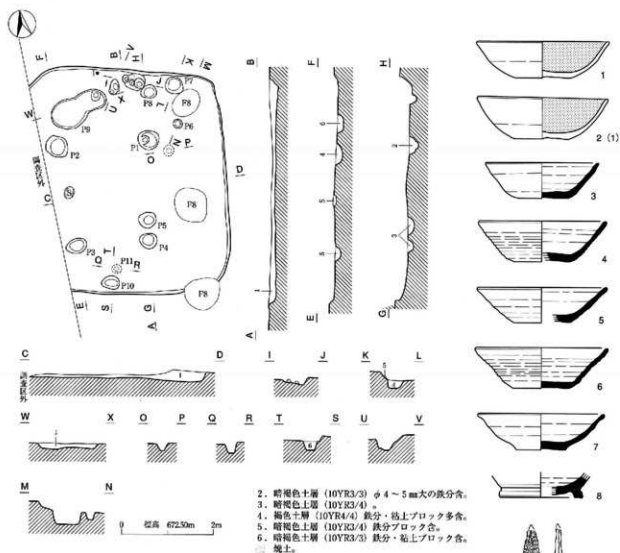
遺物-須恵器坏が2点出土している。ロクロからの切離方法は2点共に回転糸切りであるが、方向は不明である。火罨が認められる。

○H70号住居址（第80図、図版36・114）

遺構-X区で検出された。H67号住居址・F7号獨立柱建物址・Pit等に切られたため、平面形態・規模等は不明である。壁残高24cmであった。7基検出されたPitからは柱痕は確認されなかった。柱穴のあり方、Pitの性格は判然としない。カマドは北壁の中央と思われる位置に存在する。掘方状態に破壊されているため、構築材等は不明である。周溝



第76図 H66号住居址



第77図 H67号住居址

は調査範囲内には存在しなかった。

遺物—須恵器と土師器が出土した。須恵器には環1・2と環蓋3が認められる。環は2点共に右回転糸切によりロクロから切離されており、内外面には火跡が認められる。環蓋3はつまみを欠損する。器高が高い。土師器は4の鉢が1点出土している。内面はヘラミガキ後黒色処理が施され、外面底部とその周縁にはヘラケズリ調整が施される。

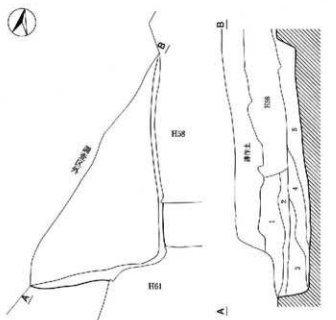
○H71号住居址 (第81図、図版36・114)

遺構—X区で検出された。Pitに切れ、攪乱による破壊を受け、西方向に調査区外に延びるため、平面形態・規模等は不明である。壁残高24cmであった。1基検出されたPitの性格は不明である。調査範囲内にはカマド・周溝等は存在しなかった。

遺物—土師器と須恵器が出土している。土師器には環1、甕6・7が認められる。環は内面に暗文と黒色処理が施され、ロクロからは右回転糸切により切離される。口縁部は欠損する。甕は2点共にロクロ甕である。6は体部外面にヘラケズリが施される他は、ロクロナデである。口縁部は「く」字で、外傾は少ない。4は底部片で、内面ナデ、外面にはヘラケズリ調整が施される。須恵器は環2、有台環3、壺5が認められる。環はロクロからヘラで切離されている。口縁部は欠損する。有台環は底部片で付高台である。ロクロからの切離方法は不明である。壺も底部片である。ヘラケズリ後高台が貼付されている。

○H72号住居址 (第82図、図版37・150)

遺構—G区で検出された。カマドの煙道部が検出されただけであり、住居の本体は調査区外に存在するため、他遺構との重複関係・平面形態・規模等は不明である。カマドが北壁に石と粘土で構築されていることが判明したにすぎない。



1. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR6/4少含。
2. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR7/3含。
3. 黒褐色土層 (10YR2/2)
4. 10YR2/2, 10YR7/3の褐色土層。10YR6/4含。
5. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR7/3多含。

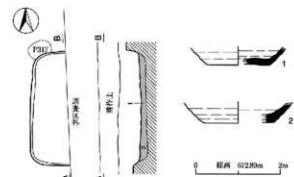


第78図 H68号住居址

遺物—土師器が出土している。1は坏である。内面には黒色処理が施され、ロクロからは回転方向不明の糸切で切離されている。2はロクロ甕である。受口気味の「く」字口縁を呈し、口唇部内側には凹線が巡る。内面にはカキメ状のナデ、外面は体部下半にヘラケズリ調整が施される。

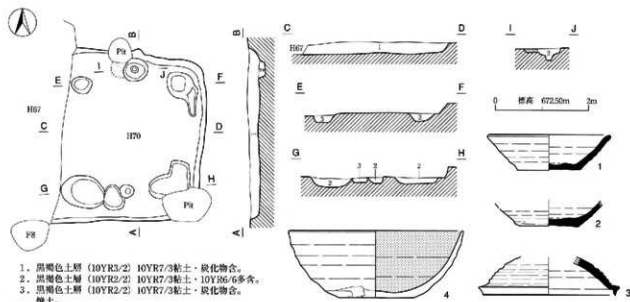
○H73号住居址 (第83図、図版37・114)

遺構—H区で検出された。Pitにより切られ、攪乱による破壊を受ける。隅丸方形の平面形態を呈し、N—6°—Wに長軸方位をとる。長軸長4.2m×短軸長4.12



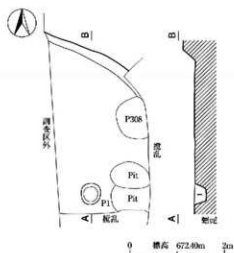
1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR2/2・10YR6/4砂子多含。下部は厚2—3cmの炭化薄層。
2. 濃い黄褐色土層 (10YR5/3) 10YR2/2・10YR7/3・炭分含。磁方埋土。

第79図 H69号住居址

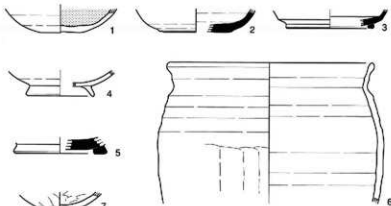


1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR7/3粘土・炭化物含。
2. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR7/3粘土・10YR6/6多含。
3. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR7/3粘土・炭化物含。焼土。

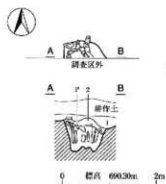
第80図 H70号住居址



1. 黄褐色土 (10YR5/3)、黒褐色土 (10YR2/2) の混在上層。



第81図 H71号住居址



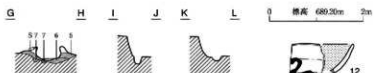
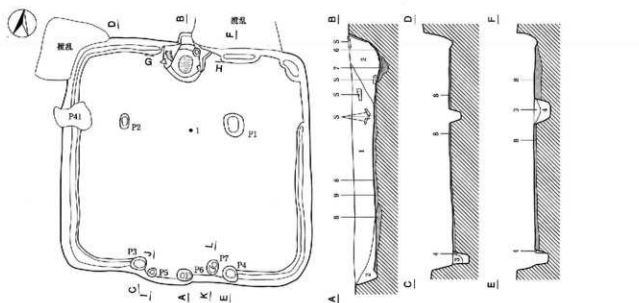
1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR6/6・10YR5/3含。
2. 10YR8/4ローム、10YR2/3、10YR4/2の混在上層。

H72号住居址

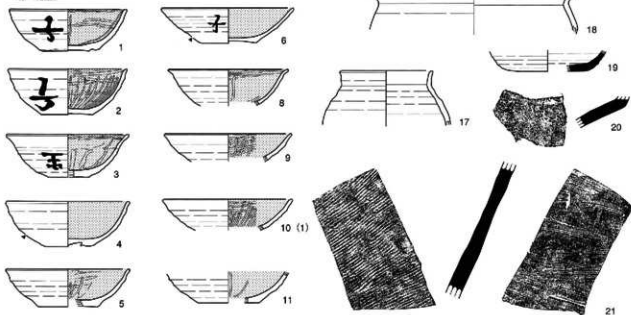
第82図 H72号住居址

m、壁残高52cm、面積20.6㎡の規模を有する。P1～P4の4基のPitが支柱穴を構成する。柱痕は確認できなかった。柱間は長軸方向に3.08～3.24m、短軸方向に2.0～2.28mであった。南壁下中央に構築されるP5～P7の3基のPitは出入りに係わるものかも知れない。カマドは北壁の中央部分に石と粘土で構築されていた。カマド前方には構築材と思われる石が散乱していたが、覆上の観察から、住居址内部に土砂が進入・堆積してから、これらの石の大部分は散乱したことが明らかであり、人為的な破壊ではない。周溝はカマド部分や南壁中央、北東隅部分で部分的に途切れるが、壁下を全周している。

遺物—土師器、須恵器、土製品、石器が出土している。土師器には坏1～12、碗13・14、耳皿15・16、甕17・18が存在する。坏は底部が残存する1～7はロクロから回転糸切により切離される。方向は不明な5を除き、右である。内面は1・3が放射状暗文と黒色処理、2・5・6・7・9・10・12が粗いヘラミガキ調整後黒色処理、4がヘラミガキ後黒色処理、8・11が暗文と黒色処理が施される。また、1～3・6・12は外面体部に墨書が書かれる。字は3が倒位の「生」、他は正位の「子」である。碗は2点共に右回転糸切によりロクロから切離される。13が内面ヘラミガキ後黒色処理、14が内面十字暗文後黒色処理、外面は粗いヘラミガキ後黒色処理が施される。15は焼成前に単孔が口縁部に穿たれている。甕は2点共にロクロ甕である。17は小型、18は大型である。内外面にロクロナデが施される。須恵器は19の坏、20・21の甕が出土している。坏のロクロからの切離方法は回転糸切であるが方向は不明である。甕は2点共に破片である。20は肩部片で、内外面共にナデ調整、21は体部片で、外面平行印目、内面当具痕とカキメが施されている。土製品は土鍾が1点出土している。石器は使用痕が認められる黒曜石剥片と、粗大石匙状の打製石器が出土している。2点共に混入遺物である。



1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR6/6ロ-ム・10YR2/2多含。人為埋土。
2. 淡黄褐色土層 (10YR8/4) ロ-ム主体。10YR6/6・10YR5/3含。人為埋土。
3. 黄褐色土層 (10YR2/2) 10YR6/6ロ-ム少含。
4. 10YR6/6・10YR8/4ロ-ム主体。10YR4/2少含。
5. 10YR8/4ロ-ム主体。10YR4/2少含。
6. 10YR8/4ロ-ム、10YR2/3、10YR4/2の混在土層。
7. 10YR8/4ロ-ム主体。10YR3/2・10YR4/2少含。
8. 10YR8/4ロ-ム主体。10YR4/2少含。
9. におい黄褐色土層 (10YR6/4) 10YR8/4ロ-ム多含。
10. カマド構築積土。
11. 焼土。



H73号住居址

第83回 H73号住居址

第2節 掘立柱建物址

○F1号掘立柱建物址 (第84図、図版37)

遺構-G区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。東方向に調査区外に延びるため、形態・規模は不明である。南北2間×東西?の総柱式の掘立柱建物址と思われるが、全容は不明である。南北を桁行と仮定するならば、桁行4.56m、桁行柱間2.12m、梁間?、梁間柱間2.12mで、N-82°-Wに長軸方位をとる。柱穴の規模は径64~68cm、深度36~70cm、柱痕φ20~24cmであった。

遺物-出土遺物は皆無であった。

○F2号掘立柱建物址 (第84図、図版38)

遺構-U区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。2間×1間の側柱式で、桁行2.88×梁間2.84m、桁行柱間1.4~1.44m、梁間柱間2.84mで、N-5°-Eに長軸方位をとる。柱穴の規模は径24~44cm、深度8~52cmであった。柱痕は確認されなかった。面積は8.2㎡である。

遺物-出土遺物は皆無であった。

○F3号掘立柱建物址 (第84図、図版38)

遺構-U区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。1間×1間の側柱式である。桁行3.96×梁間1.18mでN-81°-Wに長軸方位をとる。柱穴規模は径108~112cmで深度52~72cmである。柱痕は確認できなかった。面積は4.7㎡である。

遺物-出土遺物は皆無であった。

○F4号掘立柱建物址 (第85図、図版39)

遺構-Q区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。南北方向に調査区外に延びるため、全容は不明である。側柱式で、N-52°-Wに長軸方位をとる。桁行柱間1.56~2.6m、梁間柱間3.04mである。柱穴規模は径44~52cm、深度8~32cm、柱痕φ16cmであった。

遺物-出土遺物は皆無であった。

○F5号掘立柱建物址 (第85図、図版39)

遺構-X区で検出された。H63号住居址に切られる。3間×2間の側柱式で、桁行6.08m×梁間4.64m、桁行柱間1.76~2.28m、梁間柱間2.24~2.4mである。長軸方位はN-83°-Wにとる。柱穴規模は径28~76cm、深度20~56cm、柱痕φ12~18cm、面積27.1㎡である。

遺物-出土遺物は皆無であった。

○F6号掘立柱建物址 (第86図、図版39)

遺構-X区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。2間×2間の総柱式で、桁行4.44m×梁間4.0m、桁行柱間2.2~2.24m、梁間柱間2.0mである。長軸方位はN-4°-Wにとる。柱穴規模は径76~140cm、深度28~44cm、柱痕φ20cm、面積17.8㎡であった。

遺物-出土遺物は皆無であった。

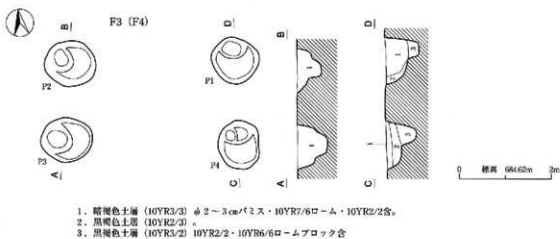
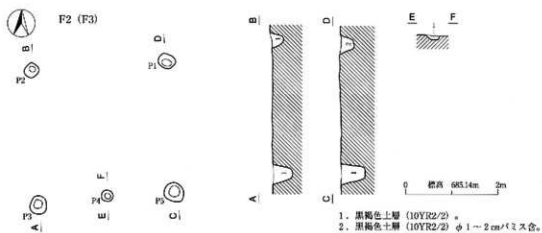
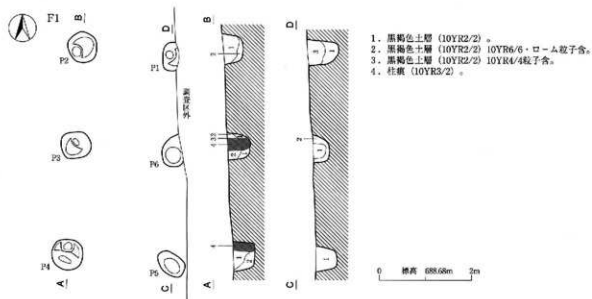
○F7号掘立柱建物址 (第86図、図版40・114)

遺構-X区で検出された。H67・70号住居址を切る。P8・P9の2基の柱穴が東方向に調査区外に延びる。3間×2間の側柱式で、桁行5.6m×梁間4.12m、桁行柱間1.76~2.0m、梁間柱間1.88~2.24mである。N-6°-Eに長軸方位をとる。柱穴規模は径68~96cm、深度20~52cm、柱痕φ16~20cm、面積23.1㎡であった。

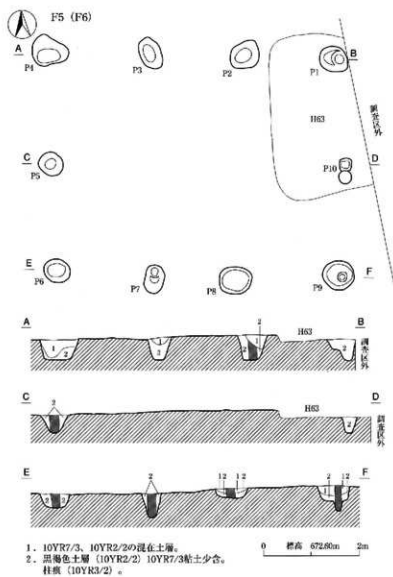
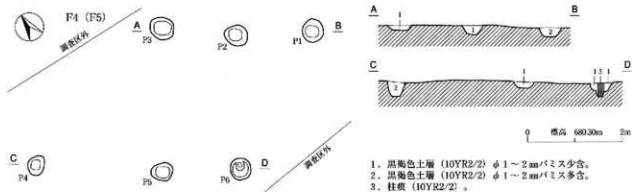
遺物-鉄錐の茎部片が1点出土した。

○柱列1 (第123図)

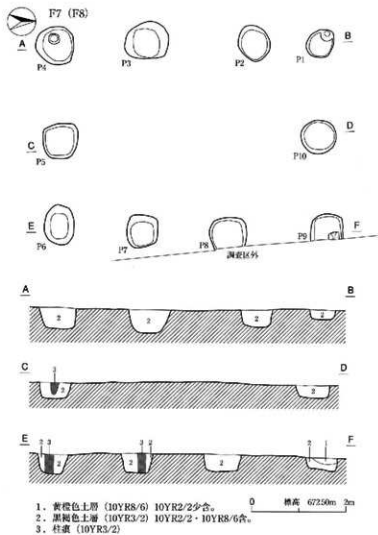
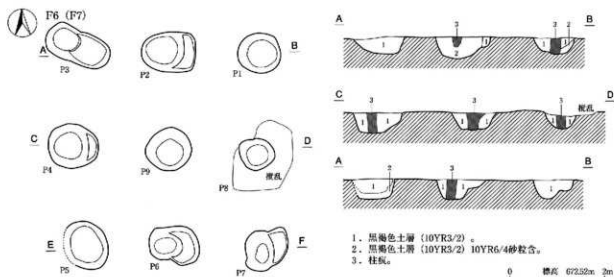
遺構-1区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。4基1列の柱列である。長さは芯から芯で4.4m、深度15~35cmである。柱痕は確認できなかった。



第84図 F1・2・3号掘立柱建物址



第85図 F4・5号掘立柱建物址



第86图 F6·7号独立柱建物址

遺物—出土遺物は皆無であった。

第3節 土坑

○D1号土坑（第87図、図版40・115）

遺構—I区で検出された。D6号土坑を切る。方形の平面形態を呈し、 $N-76^{\circ}-W$ に長軸方位をとる。長軸長 $2.0\times$ 短軸長 $1.92m$ 、壁残高 $76cm$ 、面積 $3.2m^2$ の規模を有する。

遺物—土師器と須恵器の坏が各1点と図化不可能な鉄滓が1点出土している。土師器坏1は内面に暗文と黒色処理が施される。ロクロからは右回転糸切により切離される。須恵器坏2も右回転糸切によりロクロから切離される。火障が認められる。

○D2号土坑（第87図、図版40）

遺構—I区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。長方形の平面形態を呈し、 $N-8^{\circ}-W$ に長軸方位をとる。長軸長 $1.8\times$ 短軸長 $1.32m$ 、壁残高 $44cm$ 、面積 $2.0m^2$ の規模を有する。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D3号土坑（第87図、図版40）

遺構—I区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。楕円形の平面形態を呈し、 $N-53^{\circ}-E$ に長軸方位をとる。長軸長 $1.90\times$ 短軸長 $1.36m$ 、壁残高 $52cm$ 、面積 $2.2m^2$ の規模を有する。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D4号土坑（第87図、図版40）

遺構—N区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。長方形の平面形態を呈し、 $N-0^{\circ}-W$ に長軸方位をとる。長軸長 $2.84\times$ 短軸長 $2.0m$ 、壁残高 $84cm$ 、面積 $5.8m^2$ の規模を有する。覆土は人為埋土であった。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D5号土坑（第87図、図版2）

遺構—N区で検出された。H4号住居址を切る。円形の平面形態を呈し、 $N-75^{\circ}-E$ に長軸方位をとる。長軸長 $2.28m\times$ 短軸長 $2.12m$ 、壁残高 $88cm$ 、面積 $3.8m^2$ の規模を有する。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D6号土坑（第87図、図版41・115）

遺構—I区で検出された。D1号土坑に切られる。平面形態は、長方形の土坑3基の切り合い状態の観を呈する不整形であるが、覆土からは同一のものとして捉えられた。 $N-36^{\circ}-E$ に長軸方位をとり、長軸長約 $2.96m\times$ 短軸長 $2.12m$ 、壁残高 $48cm$ 、面積約 $4.3m^2$ の規模を有する。

遺物—土師器坏と灰釉陶器小瓶が各1点出土している。土師器坏1は内面に暗文と黒色処理、底部にはヘラケズリ調整が施される。灰釉陶器小瓶2は頸部片である。

○D7号土坑（第87図、図版41・115）

遺構—I区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。楕円形の平面形態を呈し、 $N-15^{\circ}-E$ に長軸方位をとる。長軸長 $0.8\times$ 短軸長 $0.52m$ 、壁残高 $16cm$ 、面積 $0.3m^2$ の規模を有する。

遺物—土師器坏が1点出土した。内面ヘラミガキ後黒色処理、ロクロからは右回転糸切により切離されている。

○D8号土坑（第88図、図版41）

遺構—N区で検出された。北方向に調査区外に延びるため、平面形態・規模等は判然としない。短軸長約 $1.2m$ 、壁残高 $28cm$ であった。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D9号土坑（第88図、図版41）

遺構-N区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。円形の平面形態を呈し、N-80°-Wに長軸方位をとる。長軸長1.28×短軸長1.24m、壁残高40cm、面積1.3㎡の規模を有する。

遺物-出土遺物は皆無であった。

○D10号土坑（第88図、図版41）

遺構-N区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。長方形の平面形態を呈し、N-80°-Wに長軸方位をとる。長軸長2.0×短軸長10.4m、壁残高26cm、面積1.9㎡の規模を有する。

遺物-出土遺物は皆無であった。

○D11号土坑（第88図、図版42）

遺構-N区で検出された。攪乱による破壊を受ける。不整な楕円形の平面形態を呈し、N-85°-Wに長軸方位をとる。長軸長約2.56×短軸長1.08m、壁残高48cm、面積約2.15㎡の規模を有する。

遺物-出土遺物は皆無であった。

○D12号土坑（第88図、図版42）

遺構-N区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。東方向に調査区外に延びるため、平面形態・規模等は判然としない。短軸長約1.2m、壁残高10cmであった。

遺物-出土遺物は皆無であった。

○D13号土坑（第88図、図版42・115）

遺構-N区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。長方形の平面形態を呈し、N-5°-Eに長軸方位をとる。長軸長2.12×短軸長0.84m、壁残高28cm、面積1.7㎡の規模を有する。

遺物-土師器環が1点出土している。内面には十字暗文と黒色処理が施され、ロクロからは右回転糸切で切離される。

○D14号土坑（第88図、図版42）

遺構-N区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。長方形の平面形態を呈し、N-14°-Wに長軸方位をとる。長軸長1.45×短軸長0.64m、壁残高28cm、面積0.6㎡の規模を有する。

遺物-出土遺物は皆無であった。

○D15号土坑（第88図、図版42）

遺構-N区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。長方形の平面形態を呈し、N-78°-Eに長軸方位をとる。長軸長1.4×短軸長1.12m、壁残高60cm、面積1.5㎡の規模を有する。

遺物-出土遺物は皆無であった。

○D16号土坑（第88図、図版43・115）

遺構-N区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。長方形の平面形態を呈し、N-83°-Wに長軸方位をとる。長軸長2.08×短軸長0.88m、壁残高40cm、面積1.8㎡の規模を有する。

遺物-土師器環が1点出土している。内面へラミガキ後黒色処理、ロクロからは右回転糸切により切離される。

○D17号土坑（第89図、図版43）

遺構-C区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。楕円形の平面形態を呈し、N-30°-Wに長軸方位をとる。長軸長1.2×短軸長1.0m、壁残高28cm、面積0.9㎡の規模を有する。

遺物-出土遺物は皆無であった。

○D18号土坑（第89図、図版43）

遺構-C区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。突出部を有する長方形の平面形態を呈し、N-4°-Wに長軸方位をとる。長軸長2.24×短軸長1.36m、壁残高26cm、面積2.2㎡の規模を有する。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D19号土坑（第89図、図版43）

遺構—N区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。楕円形の平面形態を呈し、 $N-10^{\circ}-E$ に長軸方位をとる。長軸長1.72×短軸長1.24m、壁残高24cm、面積1.9㎡の規模を有する。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D20号土坑（第89図、図版43）

遺構—I区で検出された。攪乱による破壊を受ける。長方形の平面形態を呈し、 $N-10^{\circ}-E$ に長軸方位をとる。長軸長1.92×短軸長約1.6m、壁残高48cm、面積約2.7㎡の規模を有する。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D21号土坑（第89図、図版44）

遺構—M区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。円形の平面形態を呈し、 $N-35^{\circ}-W$ に長軸方位をとる。長軸長1.16×短軸長1.12m、壁残高68cm、面積1.0㎡の規模を有する。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D22号土坑（第89図、図版44・115）

遺構—M区で検出された。D31号土坑を切る。楕円形の平面形態を呈し、 $N-40^{\circ}-E$ に長軸方位をとる。長軸長1.2×短軸長0.92m、壁残高48cm、面積0.8㎡の規模を有する。

遺物—土師器環が1点出土している。底部を欠損する。内面にはヘラミガキ後黒色処理が施される。

○D23号土坑（第89図、図版44）

遺構—M区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。楕円形の平面形態を呈し、 $N-87^{\circ}-W$ に長軸方位をとる。長軸長1.0×短軸長0.88m、壁残高40cm、面積0.7㎡の規模を有する。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D24号土坑（第89図、図版44）

遺構—M区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。長方形の平面形態を呈し、 $N-3^{\circ}-E$ に長軸方位をとる。長軸長1.64×短軸長0.92m、壁残高16cm、面積1.3㎡の規模を有する。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D25号土坑（第89図、図版44）

遺構—M区で検出された。東方向に調査区外に延びるため、平面形態・規模等は判然としない。短軸長約0.96m、壁残高28cmの規模を有する。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D26号土坑（第90図、図版44・115）

遺構—I区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。楕円形の平面形態を呈し、 $N-73^{\circ}-E$ に長軸方位をとる。長軸長1.24×短軸長0.96m、壁残高40cm、面積1.0㎡の規模を有する。

遺物—土師器環1・甕2、須恵器甕3が出土した。土師器環1は底部を欠損する。内面にはヘラミガキ後黒色処理が施される。土師器甕2は口クロ甕の底部である。須恵器甕3も底部片である。内面ナデ、外面ヘラケズリ調整が施される。

○D27号土坑（第90図、図版44）

遺構—M区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。円形の平面形態を呈し、 $N-35^{\circ}-E$ に長軸方位をとる。長軸長1.0×短軸長0.92m、壁残高36cm、面積0.7㎡の規模を有する。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D28号土坑 (第90図、図版45・115)

遺構—M区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。円形の平面形態を呈し、 $N-9^{\circ}-E$ に長軸方位をとる。長軸長0.96×短軸長0.92m、壁残高24cm、面積0.7㎡の規模を有する。

遺物—鉄線が1点出土した。長頸・寛被で線身は柳葉・両丸、逆刺は腸状である。筥被部分には内部空洞の貝殻形の付着物が認められる。

○D29号土坑 (第90図、図版45・115)

遺構—M区で検出された。D40号土坑・M5号溝址を切る。長方形の平面形態を呈し、 $N-69^{\circ}-E$ に長軸方位をとる。長軸長2.0×短軸長1.84m、壁残高28cm、面積2.8㎡の規模を有する。

遺物—上師器帯が1点出土している。

○D30号土坑 (第90図、図版45・115)

遺構—M区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。長方形の平面形態を呈し、 $N-4^{\circ}-E$ に長軸方位をとる。長軸長2.56×短軸長2.28m、壁残高32cm、面積5.3㎡の規模を有する。

遺物—上師器帯の底部が1点出土した、内面ヘラミガキ後黒色処理、底部にはヘラケズリ調整が施される。

○D31号土坑 (第90図、図版45)

遺構—M区で検出された。D22号土坑に切られるため、平面形態・規模等は判然としにくい。短軸長約0.96m、壁残高32cmの規模を有する。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D32号土坑 (第90図、図版45・115)

遺構—M区で検出された。D40号土坑・M5号溝址を切る。方形の平面形態を呈し、 $N-13^{\circ}-E$ に長軸方位をとる。長軸長2.20×短軸長2.16m、壁残高16cm、面積4.2㎡の規模を有する。

遺物—上師器ロクロ甕の口縁部が1点出土した。甕形には壺形である。

○D33号土坑 (第91図、図版45)

遺構—L区で検出された。擾乱による破壊を受ける。長方形の平面形態を呈し、 $N-77^{\circ}-W$ に長軸方位をとる。長軸長1.88×短軸長約1.52m、壁残高52cm、面積2.4㎡の規模を有する。覆土は人為埋上である。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D34号土坑 (第91図、図版46)

遺構—M区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。円形の平面形態を呈し、 $N-0^{\circ}-E$ に長軸方位をとる。長軸長0.76×短軸長約0.72m、壁残高8cm、面積0.4㎡の規模を有する。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D35号土坑 (第91図、図版46)

遺構—M区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。楕円形の平面形態を呈し、 $N-8^{\circ}-E$ に長軸方位をとる。長軸長0.76×短軸長約0.64m、壁残高8cm、面積0.4㎡の規模を有する。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D36号土坑 (第91図、図版46)

遺構—M区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。楕円形の平面形態を呈し、 $N-68^{\circ}-E$ に長軸方位をとる。長軸長1.2×短軸長約0.92m、壁残高16cm、面積0.8㎡の規模を有する。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D37号土坑 (第91図、図版46)

遺構—M区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。楕円形の平面形態を呈し、 $N-0^{\circ}-W$ に長軸方位をとる。

る。長軸長1.2×短軸長約1.08m、壁残高16cm、面積0.9㎡の規模を有する。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D38号土坑（第91図、図版46）

遺構—M区で検出された。D38号土坑を切る。楕円形の平面形態を呈し、N-6°-Eに長軸方位をとる。長軸長0.84×短軸長約0.68m、壁残高16cm、面積0.4㎡の規模を有する。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D39号土坑（第91図、図版46）

遺構—M区で検出された。D39号土坑に切られる。楕円形の平面形態を呈し、N-30°-Wに長軸方位をとる。長軸長約1.0×短軸長約0.8m、壁残高20cm、面積0.6㎡の規模を有する。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D40号土坑（第91図、図版46）

遺構—M区で検出された。D29号・D32号土坑に切られ、M5号溝址を切る。方形の平面形態を呈し、N-0°-Eに長軸方位をとる。長軸長2.36×短軸長約2.32m、壁残高11cm、面積5.2㎡の規模を有する。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D41号土坑（第91図、図版47・115）

遺構—M区で検出された。M8号溝址を切る。長方形の平面形態を呈し、N-44°-Eに長軸方位をとる。長軸長1.44×短軸長0.76m、壁残高40cm、面積1.0㎡の規模を有する。

遺物—土師器環が2点出土した。2点共に内面ヘラミガキ後黒色処理、ロクロからの切離方法は右回転糸切である。1は外面体部に「方」？墨書が認められる。

○D42号土坑（第92図、図版47）

遺構—M区で検出された。攪乱による破壊を受ける。円形の平面形態を呈し、N-10°-Eに長軸方位をとる。長軸長0.68×短軸長0.68m、壁残高45cm、面積0.4㎡の規模を有する。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D43号土坑（第92図、図版47）

遺構—M区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。楕円形の平面形態を呈し、N-60°-Wに長軸方位をとる。長軸長0.72×短軸長0.6m、壁残高11cm、面積0.3㎡の規模を有する。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D44号土坑（第92図、図版47・115）

遺構—M区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。円形の平面形態を呈し、N-0°-Eに長軸方位をとる。長軸長0.72×短軸長0.68m、壁残高52cm、面積0.3㎡の規模を有する。

遺物—土師器の底部片が1点出土した。右回転糸切によりロクロから切離されている。

○D45号土坑（第92図、図版47・115）

遺構—M区で検出された。D46号土坑に切られる。長方形の平面形態を呈し、N-20°-Wに長軸方位をとる。長軸長1.36×短軸長0.8m、壁残高40cm、面積約0.9㎡の規模を有する。

遺物—土師器環が1点出土した。内面はヘラミガキ後黒色処理、右回転糸切によりロクロから切離され、周縁部にはヘラケズリ調整が施される。また、外面体部には「W」の墨書が書される。

○D46号土坑（第92図、図版47）

遺構—M区で検出された。D45号土坑を切る。楕円形の平面形態を呈し、N-16°-Wに長軸方位をとる。長軸長0.76×短軸長0.44m、壁残高48cm、面積0.3㎡の規模を有する。

遺物一本址は墓であり、1体分の人骨が出土している。

○D47号土坑（第92図、図版47）

遺構—M区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。楕円形の平面形態を呈し、N-10°-Eに長軸方位をとる。長軸長0.72×短軸長0.52m、壁残高34cm、面積0.3m²の規模を有する。

遺物—本址は墓であり、1体分の人骨が出土している。

○D48号土坑（第92図）

遺構—M区で検出された。M5号溝址に切られ、南方向に調査区外に延びるため、平面形態・規模等は判然としなない。壁残高60cmであった。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D49号土坑（第92図、図版115）

遺構—G区で検出された。H25号住居址を切り、攪乱による破壊を受ける。長方形の平面形態を呈し、N-90°-Eに長軸方位をとる。長軸長2.72×短軸長1.32m、壁残高68cm、面積3.3m²の規模を有する。

遺物—土師器、灰釉陶器、鉄器が出土している。土師器には坏1～3、甕4・5が認められる。坏は3点共に内面は十字暗文と黒色処理が施される。ロクロからの切離方法は1・2が右回転糸切、3はヘラケズリ調整により不明である。甕は2共に小型ロクロ甕である。右回転糸切によりロクロから切離されている。灰釉陶器は6の皿の口縁部が出土した。内面にのみ施釉される。鉄器は7が1点出土した。性格は不明である。

○D50号土坑（第93図、図版48・115）

遺構—G区で検出された。Pitに切られ、西方向に調査区外に延びるため平面形態・規模は推測の部分も存在する。長方形の平面形態を呈し、N-15°-Eに長軸方位をとる。長軸長2.12×短軸長1.76m、壁残高20cm、面積約3.1m²の規模を有する。

遺物—土師器、土製品、鉄滓が出土している。土師器は出土した3点すべて坏である。1・2は底部を欠損する。1・3は内面に暗文と黒色処理が認められる。3はロクロから右回転糸切により切離される。土製品4・5は羽目である。2点共に損壊した、先端部の破片である。鉄滓は未図化のものが1点出土した。以上の遺物から本址は鍛冶址の可能性を有する。

○D51号土坑（第93図、図版48）

遺構—M区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。楕円形の平面形態を呈し、N-25°-Eに長軸方位をとる。長軸長1.2×短軸長1.0m、壁残高18cm、面積1.0m²の規模を有する。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D52号土坑（第93図、図版49）

遺構—M区で検出された。M17号溝址を切る。楕円形の平面形態を呈し、N-60°-Wに長軸方位をとる。長軸長1.2×短軸長1.08m、壁残高120cm、面積1.0m²の規模を有する。

遺物—本址は墓であり、1体分の人骨が出土している。

○D53号土坑（第93図、図版49）

遺構—M区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。方形の平面形態を呈し、N-53°-Wに長軸方位をとる。長軸長1.2×短軸長1.16m、壁残高48cm、面積1.1m²の規模を有する。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D54号土坑（第93図、図版49）

遺構—G区で検出された。M20号溝址に切られる。長方形の平面形態を呈し、N-5°-Wに長軸方位をとる。長軸長1.72×短軸長約0.68m、壁残高48cm、面積約1.1m²の規模を有する。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D55号土坑 (第93図、図版50)

遺構-B区で検出された。北方向に調査区外に延びるため、平面形態・規模等は判然としない。壁残高約1.6m、壁残高32cmであった。

遺物-出土遺物は皆無であった。

○D56号土坑 (第93図、図版50・115)

遺構-H区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。楕円形の平面形態を呈し、N-70°-Eに長軸方位をとる。長軸長1.28×短軸長0.84m、壁残高36cm、面積0.9㎡の規模を有する。

遺物-土師器の坏1と碗2が出土している。坏は、内面放射状暗文と黒色処理が施され、ロクロからは右回転糸切で切離されている。碗は高台を欠損する。内面はヘラミガキ後黒色処理、ロクロからは方向不明回転糸切により切離され、高台が貼付される。

○D57号土坑 (第93図、図版50・115)

遺構-H区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。長方形の平面形態を呈し、N-61°-Eに長軸方位をとる。長軸長1.72×短軸長1.0m、壁残高10cm、面積1.6㎡の規模を有する。

遺物-土師器の坏が1点出土している。内面はヘラミガキ後黒色処理、ロクロからは右回転糸切により切離されている。

○D58号土坑 (第94図、図版50)

遺構-H区で検出された。M36号溝域に切られるため、平面形態・規模等は判然としない。壁残高は48cmであった。

遺物-出土遺物は皆無であった。

○D59号土坑 (第94図、図版51)

遺構-U区で検出された。攪乱による破壊を受けるため、平面形態・規模等は判然としない。壁残高は32cmであった。覆土中には人頭人の腰が詰まっており、その下から人骨が出土した。埋葬時に墓床の上に置かれた石が、埋没したものと推測される。

遺物-本址は墓であり、1体分の人骨が出土した。

○D60号土坑 (第94図、図版51)

遺構-F区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。方形の平面形態を呈し、N-8°-Eに長軸方位をとる。長軸長0.96×短軸長0.88m、壁残高36cm、面積0.7㎡の規模を有する。

遺物-出土遺物は皆無であった。

○D61号土坑 (第94図、図版52・115)

遺構-Z区で検出された。攪乱による破壊を受け、平面形態・規模等は判然としない。壁残高は48cmであった。

遺物-弥生土器と石器が出土している。土器はすべて壺の体部片である。1・3は縄文と縄文が、2は縄文が施文される。石器は磨製石斧が1点出土した。基部と刃部を欠損する。

○D62号土坑 (第94図)

遺構-Z区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。楕円形の平面形態を呈し、N-45°-Eに長軸方位をとる。長軸長0.88×短軸長0.68m、壁残高16cm、面積0.5㎡の規模を有する。

遺物-出土遺物は皆無であった。

○D63号土坑 (第94図、図版52・116)

遺構-Z区で検出された。D64号土坑を切る。長方形の平面形態を呈し、N-13°-Eに長軸方位をとる。長軸長1.64×短軸長1.48m、壁残高68cm、面積2.0㎡の規模を有する。

遺物-土師器と鉄器が出土した。1は坏である。内面にヘラミガキ後黒色処理が施される。2は碗で、内面にヘラミガキ後黒色処理、ロクロからは方向不明の回転糸切で切離され、高台が貼付される。高台内には「考」?ないし「上

万] ? の墨書が書される。鉄器は3の鎌の破片が1点出土した。

○D64号土坑 (第94図、図版52・116)

遺構—Z区で検出された。D63号土坑に切られるため、規模は判然としない部分もある。長方形の平面形態を呈し、N-73°-Wに長軸方位をとる。短軸長1.68m、壁残高64cmの規模を有する。

遺物—土師器と灰軸陶器が出土した。1は土師器環である。内面にヘラミガキ後黒色処理が施され、判読不能な墨書が外面体部に認められる。2は灰軸陶器碗で、内面に施釉が認められる。ロクロからの切離方法は回転ヘラケズリにより不明である。高台が貼付される。3は土師器ロクロ甕の底部片である。

○D65号土坑 (第95図、図版53・116)

遺構—Z区で検出された。M57号溝址に切られ、南方向に調査区外に延びるため、平面形態・規模等は判然としない。壁残高は80cmであった。

遺物—土師器環が1点出土した。内面黒色処理で、ロクロから方向不明回転糸切により切離された後、周縁部にヘラケズリ調整が施される。

○D66号土坑 (第95図、図版53・116)

遺構—Y区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。長方形の平面形態を呈し、N-90°-Eに長軸方位をとる。長軸長2.12×短軸長1.64m、壁残高96cm、面積2.9㎡の規模を有する。

遺物—土師器ロクロ甕のL縁部片が1点出土している。

○D67号土坑 (第95図、図版54・116)

遺構—Z区で検出された。北方向に調査区外に延びるため、平面形態・規模等は判然としない。壁残高は52cmであった。

遺物—土師器環の底部が1点出土している。内面はヘラミガキ後黒色処理、ロクロからは右回転糸切により切離される。

○D68号土坑 (第95図、図版53)

遺構—Z区で検出された。M14号溝址を切る。長方形の平面形態を呈し、N-33°-Eに長軸方位をとる。長軸長2.24×短軸長1.36m、壁残高12cm、面積2.6㎡の規模を有する。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D69号土坑 (第95図、図版54・116)

遺構—W区で検出された。攪乱による破壊を受け、北方向に調査区外に延びるため、規模は判然としない部分を有する。円形の平面形態を呈し、短軸長1.48m、壁残高208cmの規模を有する。

遺物—打製石斧の基部が1点出土している。

○D70号土坑 (第96図、図版53)

遺構—Z区で検出された。北方向に調査区外に延びるため、平面形態・規模等は判然としない。壁残高は20cmであった。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D71号土坑 (第96図、図版55)

遺構—M区で検出された。南方向に調査区外に延びるため、平面形態・規模等は判然としない。壁残高は92cmであった。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D72号土坑 (第96図、図版55・116)

遺構—X区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。楕円形の平面形態を呈し、N-37°-Eに長軸方位をと

る。長軸長1.20×短軸長0.88m、壁残高20cm、面積0.9㎡の規模を有する。

遺物—須恵器、土師器、鉄器が出土している。須恵器には坏1・2、坏蓋5～7、壺8が認められる。坏は2点共にロクロからは右回転糸切により切離される。2は火澤が認められる。坏蓋は5が扁平な擬宝珠つまみが残存する他は欠損する。6・7には火澤が認められる。壺は長頸壺のL緑部片である。土師器は3・4の碗が2点出土した。3は内面に暗文と黒色処理、4はヘラミガキが施される。ロクロからの切離方法は、3が底部を欠損するため不明。4は回転ヘラケズリ調整により不明である。鉄器は9の紡錘車と10の短頸、篋被で柳葉・両丸・両刃・扇袂の鏝が出土している。

○D73号土坑 (第96図、図版55)

遺構—G区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。長方形の平面形態を呈し、N-70°-Eに長軸方位をとる。長軸長1.64×短軸長1.2m、壁残高20cm、面積1.7㎡の規模を有する。内部に数個の礫を包含する。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D74号土坑 (第96図、図版55)

遺構—H区で検出された。攪乱による破壊を受ける。方形の平面形態を呈し、N-88°-Wに長軸方位をとる。長軸長約1.28×短軸長1.2m、壁残高124cm、面積約0.8㎡の規模を有する。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D75号土坑 (第96図、図版56)

遺構—C区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。長方形の平面形態を呈し、N-30°-Eに長軸方位をとる。長軸長1.32×短軸長1.04m、壁残高40cm、面積1.3㎡の規模を有する。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D76号土坑 (第96図、図版56)

遺構—H区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。楕円形の平面形態を呈し、N-5°-Eに長軸方位をとる。長軸長1.0×短軸長0.68m、壁残高28cm、面積0.6㎡の規模を有する。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D77号土坑 (第96図、図版56・116)

遺構—G区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。円形の平面形態を呈し、N-90°-Eに長軸方位をとる。長軸長1.2×短軸長1.12m、壁残高44cm、面積1.0㎡の規模を有する。

遺物—弥生土器の宍塚部片が1点出土した。頸部との境に平行沈線を巡らし、この沈線間に楕円状工具による重三角文を充填している。

○D78号土坑 (第96図、図版57)

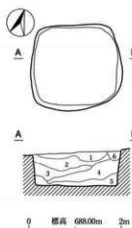
遺構—G区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。楕円形の平面形態を呈し、N-50°-Eに長軸方位をとる。長軸長1.2×短軸長1.04m、壁残高28cm、面積0.8㎡の規模を有する。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○D79号土坑 (第96図、図版57)

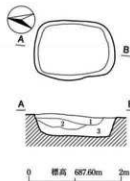
遺構—G区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。円形の平面形態を呈し、N-45°-Eに長軸方位をとる。長軸長1.32×短軸長1.2m、壁残高28cm、面積1.2㎡の規模を有する。

遺物—出土遺物は皆無であった。



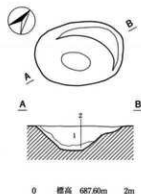
D1号土坑

1. におい黄褐色土層 (10YR5/4) パミス多含。
2. 黄褐色土層 (10YR7/8) ローム主体。φ2~3cm²パミス含。
3. 暗褐色土層 (10YR3/4) 黒色土ブロック多含。
4. 黄褐色土層 (10YR5/6) パミス・黒色土の傘状堆積。
5. 黄褐色土層 (10YR5/6) パミス・黒色土のブロック状堆積。
6. 灰黄褐色土層 (10YR4/2)。



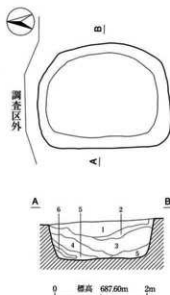
D2号土坑

1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) φ2~3cm²パミス・ロームブロック含。
2. 黒褐色土層 (10YR3/2) ロームブロック含。
3. 黒色土 (10YR2/1) φ1~2cm²パミス極少含。



D3号土坑

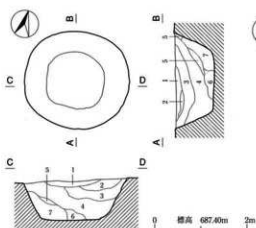
1. 黒色土層 (10YR2/1) φ1~2cm²パミス含。
2. 明黄褐色土層 (10YR6/8) 黒色土多含。



D4号土坑

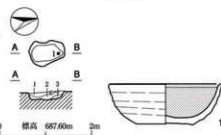
1. 灰黄褐色土層 (10YR5/2) パミス・ロームブロック含。
2. 黒褐色土層 (10YR3/2) 黒色土・パミス含。
3. におい黄褐色土層 (10YR5/4) 黒色土ブロック・φ3~4cm²パミス含。
4. におい黄褐色土層 (10YR5/3) パミス・ロームのブロック状堆積。
5. 黒色土層 (10YR2/1) パミス・ロームを含。
6. 明黄褐色土層 (10YR6/6) ローム主体。

*本址覆土は人為埋土。



D5号土坑

1. 黒褐色土層 (10YR3/1) φ2~3cm²パミス多含。
2. 黄褐色土層 (10YR5/8) パミス・ローム主体。
3. 黒褐色土層 (10YR3/1) φ3~4cm²パミス含。
4. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) パミス粒少含。
5. におい黄褐色土層 (10YR6/4) ロームブロック主体。
6. におい黄褐色土層 (10YR5/4) ローム主体。
7. 黒褐色土層 (10YR3/2) φ2~3cm²パミス多含。

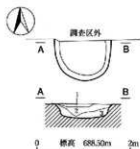


D6号土坑

1. 黒褐色土層 (10YR3/1) ローム粒子少含。
2. 暗褐色土層 (10YR3/3) ローム粒子多含。
3. 黒褐色土層 (10YR2/3) ローム粒子・パミス含。

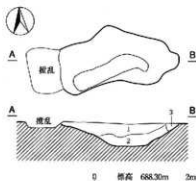
D7号土坑

第87図 D1号~D7号土坑



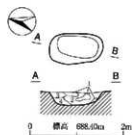
1. 褐灰色土層 (10YR4/1)
ロームブロック含。
2. 黒色土層 (10YR2/1)
φ1~2cmパミス含。
3. 暗褐色土層 (10YR3/3)
φ3~4cmパミス含。

D8号土坑



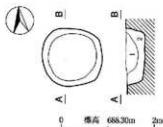
1. 褐色土層 (10YR4/6)
パミス・ロームブロック含。
2. 暗褐色土層 (10YR3/3)
紫色ブロック・黒色ブロック含。
3. 黄褐色土層 (10YR8/8)

D11号土坑



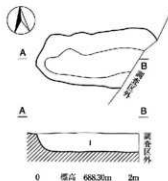
1. 黒色土層 (10YR2/1)。
2. 褐灰色土層 (10YR4/1)
φ1~2cmパミス・ローム含。
3. 黒褐色土層 (10YR2/3)
ローム粒子少含。
4. 黒褐色土層 (10YR2/3)
ローム粒子多含。

D14号土坑



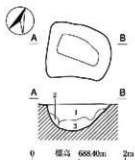
1. 黒色土層 (10YR2/1)
φ1~2cmパミス含。
2. 暗褐色土層 (10YR3/3)
φ1~2cmパミス・ロームブロック含。

D9号土坑



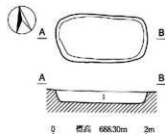
1. 暗褐色土層 (10YR3/4)
φ2~3cmパミス多含。
下層に黒色ブロック含。

D12号土坑



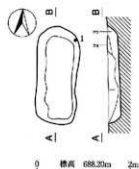
1. 黒色土層 (10YR2/1)
φ2~3cmパミス含。
2. 褐色土層 (10YR4/4)
ローム主体。
3. 明黄褐色土層 (10YR6/6)
ロームブロック・φ2~3cmパミス含。

D15号土坑



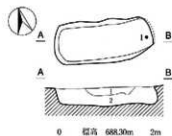
1. ぶい黄褐色土層 (10YR5/4)
炭化物物少含、パミス多含。

D10号土坑



1. 黒色土層 (10YR2/1)
ローム粒子含。
2. 褐色土層 (10YR4/6)
ローム主体。
3. ぶい黄褐色土層 (10YR5/4)。

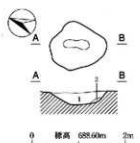
D13号土坑



1. 黒褐色土層 (10YR3/1)
ローム粒子多含。
2. 褐灰色土層 (10YR4/1)
φ2~3cmパミス含。

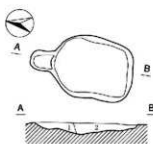
D16号土坑

第88図 D8号~D16号土坑



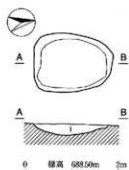
1. 黒褐色土層 (10YR3/1) パミズ少含。
2. 黄褐色土層 (10YR5/8)。

D17号土坑



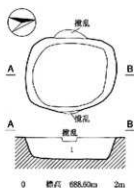
1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) ϕ 3~4cm パミズ少含。
2. 黄褐色土層 (10YR5/8)。

D18号土坑



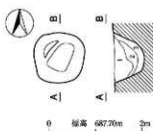
1. 黒褐色土層 (10YR3/2) ϕ 1~2cm パミズ多含。

D19号土坑



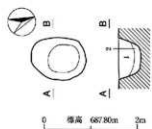
1. 暗褐色土層 (10YR3/4) ローム少含。人為埋土。

D20号土坑



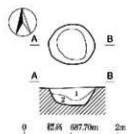
1. 黑褐色土層 (10YR2/3) ローム極少含。
2. 暗褐色土層 (10YR3/3) ローム少含。
3. 暗褐色土層 (10YR3/4) ローム少含、パミズ極少含。

D21号土坑



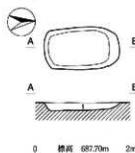
1. 黑褐色土層 (10YR2/3) ローム極少含。
2. 暗褐色土層 (10YR3/4) ローム少含、パミズ極少含。

D22号土坑



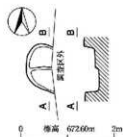
1. 黑褐色土層 (10YR2/3) ローム極少含。
2. 暗褐色土層 (10YR3/4) ローム少含、パミズ下層に極少含。

D23号土坑



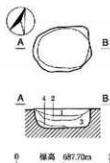
1. 暗褐色土層 (10YR3/3) ローム少含、パミズ極少含。

D24号土坑



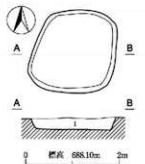
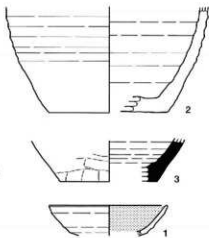
D25号土坑

第89図 D17号~D25号土坑



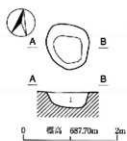
1. 濃い黄褐色土層 (10YR4/3)
φ 1 ~ 2 cm炭化物含。
2. 暗褐色土層 (10YR3/3)
炭化物・粘土含。
3. 黒褐色土層 (10YR3/1)
φ 2 ~ 3 cmパリス含。
4. 黒褐色土層 (10YR3/2)
ローム粒子和黒色土の混在土層。

D26号土坑



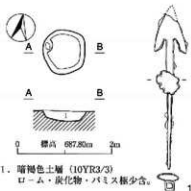
1. 暗褐色土層 (10YR3/3)
ローム少含、パリス極少含。

D29号土坑



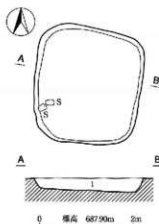
1. 暗褐色土層 (10YR3/3)
ローム・炭化物・パリス極少含。

D27号土坑



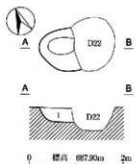
1. 暗褐色土層 (10YR3/3)
ローム・炭化物・パリス極少含。

D28号土坑



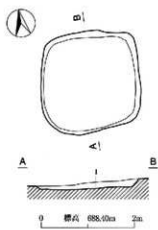
1. 暗褐色土層 (10YR3/3)
ローム少含、パリス極少含。

D30号土坑



1. 暗褐色土層 (10YR3/3)
ローム少含、パリス極少含。

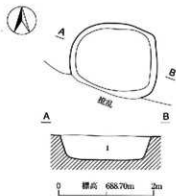
D31号土坑



1. 暗褐色土層 (10YR3/3)
ローム少含、パリス極少含。

D32号土坑

第90図 D26号~D32号土坑



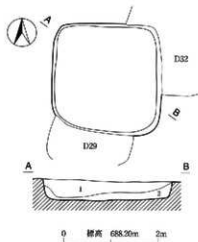
1. 暗褐色土層 (10YR3/3)
ローム少含、人為層土。

D33号土坑



1. 暗褐色土層 (10YR3/3)
ローム少含、パミス極少含。

D36号土坑



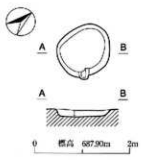
1. 黒色土層 (10YR2/1)
ローム・炭化物極少含。
2. 暗褐色土層 (10YR3/3)
ローム少含、パミス極少含。

D40号土坑



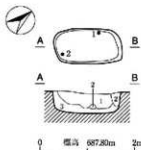
1. 暗褐色土層 (10YR3/3)
ローム少含、パミス極少含。

D34号土坑

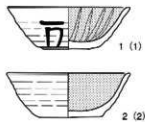


1. 暗褐色土層 (10YR3/3)
ローム少含、パミス極少含。

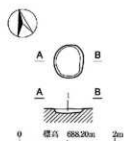
D37号土坑



1. に近い黄褐色土層 (10YR5/3)
ロームブロッタ多含。
2. 黒褐色土層 (10YR2/3)
ローム粒子極少含。
3. 灰黄褐色土層 (10YR4/2)
φ 1 ~ 2 cm 礫含。

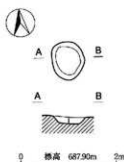


D41号土坑



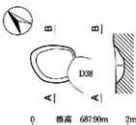
1. 暗褐色土層 (10YR3/3)
ローム少含、パミス極少含。

D35号土坑



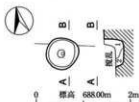
1. 黒褐色土層 (10YR2/3)
ローム・パミス極少含。

D39号土坑



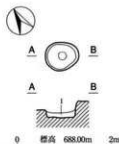
1. 黒褐色土層 (10YR2/3)
ローム・パミス極少含。

D38号土坑



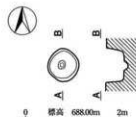
1. 黒褐色土層 (10YR3/1)
ロームブロック多含。
2. にぶい黄褐色土層 (10YR5/4)。

D42号土坑

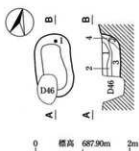


1. にぶい黄褐色土層 (10YR5/4)
ローム粒子含。

D43号土坑

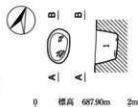


D44号土坑



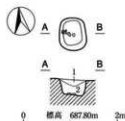
1. 黒褐色土層 (10YR3/1)
ローム粒子・炭化物を極少含。
2. にぶい黄褐色土層 (10YR5/3)
ローム粒子多含。
3. 黒褐色土層 (10YR2/2)
ローム粒子極少含。
4. にぶい黄褐色土層 (10YR6/3)。
ローム粒子・黒色土ブロック含。

D45号土坑



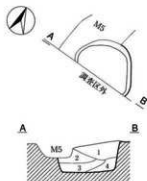
1. 黒褐色土層 (10YR3/2)
黒色土とロームブロックの混在土層。

D46号土坑



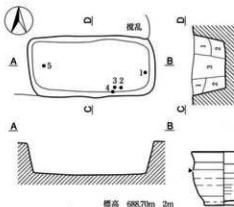
1. 暗褐色土層 (10YR3/3)
黒色土・ロームブロック多含。
2. にぶい黄褐色土層 (10YR5/4)
ロームブロックとパミスの混在土層。

D47号土坑



1. 黒褐色土層 (10YR2/3)
ローム・炭化物極少含。
2. 褐色土層 (10YR4/6)
ローム多含、パミス極少含。
3. 暗褐色土層 (10YR3/3)
ローム少含。
4. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)
パミス粒子、ローム粒極少含。

D48号土坑

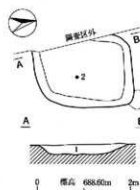


1. 黒褐色土層 (10YR2/3)
φ 5mm大OAミスと10YR6/6ローム少含。
2. 黒褐色土層 (10YR2/3)
φ 5mm大パミス10YR6/6ローム極少含。
2. 黒褐色土層 (10YR2/3)
φ 5mm大パミス少含。



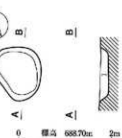
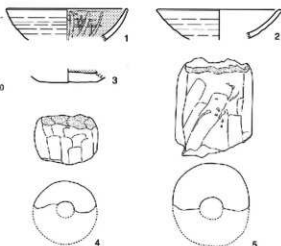
D49号土坑

第92図 D42号~D49号土坑



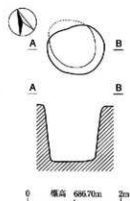
1. 黒褐色土層 (10YR2/3)
10YR6/6ロ-ム粒子・
φ 1cm大バミス少含。

D50号土坑

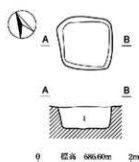


1. 黒褐色土層 (10YR3/2)
10YR6/6ロ-ム・φ 1cm
大バミス少含。

D51号土坑

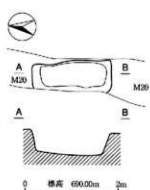


D52号土坑

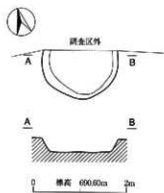


1. におい黄褐色土層 (10YR5/3)
10YR8/3ロ-ム多含。

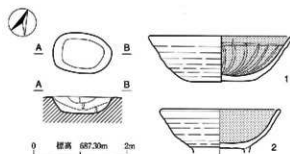
D53号土坑



D54号土坑

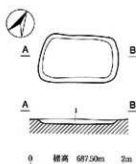


D55号土坑



1. におい黄褐色土層 (10YR5/3)
10YR8/4ロ-ム多含。
2. におい黄褐色土層 (10YR5/3)
10YR8/4ロ-ム少含。
3. におい黄褐色土層 (10YR5/3)
10YR8/417-ム含。

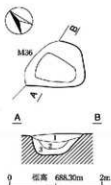
D56号土坑



1. 黒褐色土層 (10YR3/2)
10YR6/6ロ-ム含。

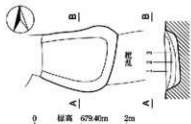
D57号土坑

第93図 D50号～D57号土坑



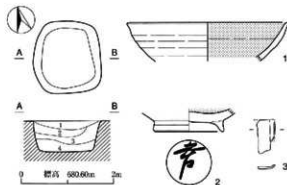
1. 暗褐色土層 (10YR3/4)
φ 1 cm パミリス含。
2. 黒褐色土層 (10YR2/3)。
3. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)
10YR6/6ローム多含、φ 1~2 cm パミリス含。

D58号土坑



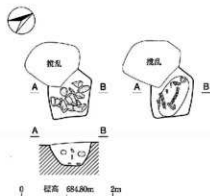
1. 黒褐色土層 (10YR3/2)
10YR8/4ローム少含。
2. 黒褐色土 (10YR3/2) と 10YR8/4ロームの混在土層。
φ 1 cm パミリス含。
3. 黒褐色土層 (10YR3/2)
10YR8/4ローム含。

D61号土坑



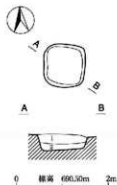
1. 黒褐色土層 (10YR3/2)
φ 2 cm 以下パミリス、10YR8/4ローム少含。
2. 黒褐色土層 (10YR3/2)
φ 2 cm 以下パミリス、10YR8/4ローム多含。
3. 黒褐色土層 (10YR3/2)
10YR4/2、10YR8/6ローム少含。
4. 10YR3/2、10YR8/4ロームの混在土層。

D63号土坑



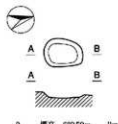
1. にぶい黄褐色土層 (10YR5/4)
ローム・φ 1 cm 大パミリス含。

D59号土坑

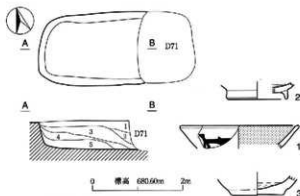


1. 暗褐色土層 (10YR3/3)。
2. 10YR3/4、10YR3/2の混在土層。
ロームブロック多含、φ 2~3 cm パミリス

D60号土坑



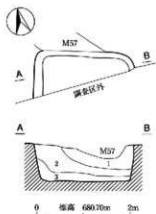
D62号土坑



1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2)
10YR8/4ローム少含。
2. 黒褐色土層 (10YR3/2)
10YR8/4ローム少含。
3. 浅黄褐色土層 (10YR8/4)
ローム主体。
4. 10YR3/2、10YR8/4ロームの混在土層。
5. 10YR3/2、10YR2/2、10YR1/2の混在土層。
10YR8/4ローム含。

D64号土坑

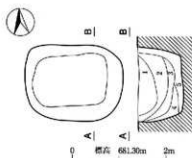
第94図 D58号~D64号土坑



1. 浅黄褐色土層 (10YR8/3) ローム主体。
2. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR8/6ローム含。
3. 10YR8/6ローム、10YR3/2、10YR4/2の混在土層。



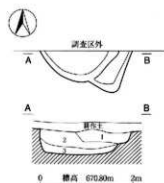
D65号土坑



1. 黒褐色土層 (10YR3/4) ϕ 2~3cmパミス含。
2. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) ϕ 2~3cmパミス・炭化物少含。
3. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) パミス・10YR7/8・10YR8/3ローム多含。
4. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) ϕ 2~3cmパミス・10YR7/8ローム少含。
5. 褐色土層 (10YR4/4) ϕ 2~3cmパミス・炭化物少含。



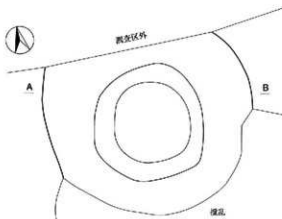
D66号土坑



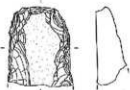
1. 暗褐色土層 (10YR3/4) ϕ 1~3cmパミス少含。
2. にぶい黄褐色土層 (10YR3/4) ϕ 2~3cmパミス少含。
3. 黄褐色土層 (10YR5/6) ϕ 2~3cmパミス少含。



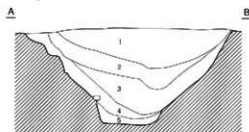
D67号土坑



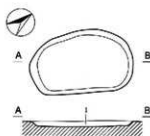
1. 黒褐色土層 (10YR3/1) ϕ 1cm以下パミス・10YR4/3粒子少含。
2. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) ϕ 1.5cm以下パミス・10YR3/1極少含。
3. にぶい黄褐色土層 (10YR5/3) ϕ 1.5cm以下パミス・10YR3/1極少含。
4. 褐色土層 (10YR4/6) 10YR3/4ローム、 ϕ 1cm以下パミス・雜含。
5. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR7/2粘土・10YR4/6・10YR8/4ローム含。



D69号土坑



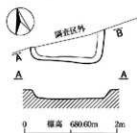
0 標高 679.90m 2m



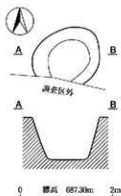
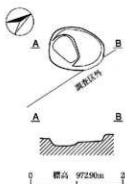
1. 褐色土層 (10YR4/4) ϕ 1~2cmパミス含。

D68号土坑

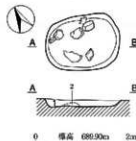
第95図 D65号~D68号土坑



D70号土坑

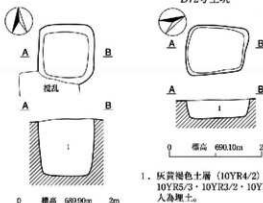


D71号土坑



1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR6/6ローム少含。
2. 10YR6/6ローム主体。10YR3/2粒子少含。

D73号土坑



D72号土坑

1. 10YR6/6ローム主体。10YR3/2・10YR4/2含。人為埋土。

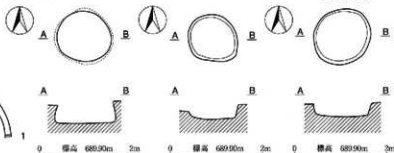
D74号土坑
(土器のみ3個)

D75号土坑

1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2)。10YR5/3・10YR3/2・10YR6/6ローム多含。人為埋土。

1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2)。10YR8/4ローム少含。
2. 10YR4/2、10YR3/2、10YR8/4ロームの混在土層。
3. 黒褐色土層 (10YR3/2)。

D76号土坑



D77号土坑

D78号土坑

D79号土坑

第96図 D70号~D79号土坑

第4節 溝址

○M1号・M69号溝址 (第97・121図、図版58・86)

遺構—N・G区で検出された。北東から南西に向かい延びている。幅1.5～2.7m、深度40～80cmであった。性格は不明である。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○M2号溝址 (第98図、図版58)

遺構—M区で検出された。東南に延びている。幅0.65～1.1m、深度20cm前後であった。性格は不明である。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○M3号・M9号・M13号・M14号・M19号・M25号・M67号溝址

(第97・102・103・104・106・107・121図、図版58・61・62・63・64・65・68・86・117)

遺構—F・G・N・M区で検出された。H12号住居址を切り、D68号土坑に切られる。東北—南西を長軸とする長径53m×短径35mの楕円形に上記の溝が連結していることが、試掘調査及び調査により推測される。幅0.5～1.0m、深度10～70cmであった。性格は不明である。

遺物—M19号から打製石斧出土している。

M25から打製石斧1点と須恵器環の底部片が1点出土している。須恵器環のロクロからの切離方法はヘラである。

○M4号・M21号・M22号・M27号・M45号溝址 (第99・105・108・113図、図版59・66・67・78・117)

遺構—F・L・M区で検出された。北北東から南南西に延びているM4・22・45号溝址に、M21・27号溝址が東方向から連結する。M27号溝址は、八反田城の堀であるM12号溝址から延びているため、本址も八反田城の堀の一部と考えられる。幅0.6～3.5m、深度10～150cmであった。

遺物—M45号溝址から土師器と灰釉陶器が出土している。土師器には坏及び碗1～3、ロクロ甕6が認められる。坏及び碗は3点共に内面黒色処理が施され、1・2には暗文も認められる。底部が残存する2は右回転によりロクロから切離される。また、2・3の外面には判読不能な墨書が書かれる。灰釉陶器4・5は碗である。回転ヘラケズリ調整後高台が貼付されている。

○M5号溝址 (第100図、図版60・117)

遺構—M区で検出された。D29・32・40号土坑に切られる。北東から南西に延びている。幅0.6m前後、深度30cm前後であった。性格は不明である。

遺物—土師器の坏が1点出土した。内面はヘラミガキから黒色処理、ロクロからは右回転糸切により切離されている。

○M6号溝址 (第100図)

遺構—M区で検出された。調査部分では他遺構との重複関係は有さない。M5号溝址と約5mの間隔で、平行に北東から南西に延びている。幅0.6m前後、深度20cm前後であった。性格は不明である。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○M7号・M26号・M35号・M38号溝址 (第98・107・110・111図、図版59・68・70・71)

遺構—M・H区で検出された。H8・9号住居址に切られる。東南東から南南西に延びている。幅0.55～2.6m、深度60～120cmであった。断面は狭く平坦な底面を有する「V」字形を呈しており、人工の溝址である。性格は不明である。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○M8号溝址 (第101図、図版60)

遺構—M区で検出された。D41号土坑に切られる。クランク状に曲がりながら、北から南に延びている。幅0.6～1.2m、深度30～50cmであった。断面形状、曲がり方などから人工の溝址である。性格は不明である。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○M10号溝址（第101図、図版59）

遺構—M区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。北東から南西に延びている。幅1.2～1.6m、深度50cm前後であった。性格は不明である。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○M11号・M40号・M65号溝址（第102・112・120図、図版61・73・74・85・118）

遺構—M区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。M11・40・65号溝址が連結し南から北に延びている。幅0.6～1.0m、深度30～100cmであった。比較的残存状態の良いM40号溝址付近の断面形状から、本址は人工の溝址と考えられる。性格は不明である。

遺物—M65から須恵器環と土師器式蒔薙が各1点出土している。須恵器環の底部にはヘラケズリ調整が施され、火葬が認められる。武蔵甕は「く」字口縁を呈し、口縁部に最大径を有している。

○M12号溝址（第103図、図版62・117）

遺構—I区で検出された。近世～現代の墓址に切られる。本址からM27号溝址は延びている。南北に延びており、北端部は台地縁を貫通している。幅7～13m、深度3m前後であった。本址は八反田城の堀址であり、城郭の縄張りにおいては最も外側に位置する。しかし、小規模な溝址は本址から更に延びており、また、西方の深堀城に向かい台地の縁辺には両城に関連すると思われる溝址も認められる。

遺物—土師器環と甕が各1点出土している。古墳時代のものであり、混入遺物である。

○M15号溝址（第104図、図版63）

遺構—G区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。東西に延びている。幅1.8m前後、深度40cm前後であった。性格は不明である。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○M16号溝址（第104図、図版64・117）

遺構—M区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。東西に延びている。幅0.7～1.2m前後、深度90cm前後であった。断面形状から本址は人工の溝址と考えられる。性格は不明である。

遺物—土師器、須恵器、灰釉陶器、弥生土器が出土している。土師器は坏が2点出土した。1は内面ヘラミガキ後黒色処理が施され、ロクロからは右回転糸切により切離されている。2は内面ヘラミガキ調整で、外面には「万」の墨書が認められる。須恵器は4・5の甕が出土している。5は接合点は認められないが同一個体と思われる。口縁部には波状文が巡り、体部外面には平行印目が認められる。内面はナデにより、当具痕を消去している。4も5同様に外面平行印目、内面は当具痕をナデにより消去している。灰釉陶器は3の皿口縁部片が1点出土した。弥生土器6は外面に赤彩が施された壺片である。

○M17号溝址（第105図、図版64・117）

遺構—M区で検出された。D52号土坑に切られ、H29号住居址を切る。北東—南西方向に延びている。幅0.8～1.6m、深度70cm前後であった。断面形状から本址は人工の溝址と思われる。性格は不明である。

遺物—土師器と弥生土器が出土している。1は土師器環である。内面黒色処理、ロクロからは方向不明の回転糸切で切離され、その後周縁部にヘラケズリ調整が施される。2は土師器碗で内面黒色処理、ロクロからは右回転糸切で切離され、高台が貼付されている。3は古墳時代前期の台付甕の破片である。内外面にハケメ調整が施されている。4・5は弥生土器の壺片である。

○M18号溝址（第105図、図版65）

遺構—M区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。東西に延びている。幅0.9～1.3m前後、深度20cm前後であった。性格は不明である。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○M20号溝址（第108図、図版117）

遺構—G区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。北東—南西に延びている。幅1.0m前後、深度20cm前後であった。性格は不明である。

遺物—上脣器が出土している。1は鉢である内面ナデ、外面ヘラケズリ調整が施される。2は甕の底部片である内面ナデ、外面ヘラケズリ調整が施される。

○M23号溝址（第107図、図版66・117）

遺構—B区で検出された。H30号住居址を切る。北西から南東に向かい延びている。幅0.6—1.6m、深度60cm前後であった。断面形状から本址は人工の溝址と思われる。性格は不明である。

遺物—須恵器と石器が出土している。1は須恵器甕である。体部の破片であり、外面には平行印目、内面には当具痕が認められる。2は黒曜石製の打製石鏃である。

○M24号溝址（第106図、図版67）

遺構—B区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。西から東に向かい延びている。幅1.0m前後、深度20cm前後であった。性格は不明である。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○M28号溝址（第109図、図版68・117）

遺構—F区で検出された。M33・34号溝址を切る。西北西—東南東に延びている。幅1.5m前後、深度30cm前後であった。性格は不明である。

遺物—土師の破片が1点出土した。

○M29号溝址（第108図、図版68）

遺構—F区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。南西—北東に延びている。幅1.3m前後、深度30—40cmであった。性格は不明である。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○M30号溝址（第108図、図版69）

遺構—F区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。南西—北東に延びている。幅1.8—2.4m、深度30cm前後であった。性格は不明である。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○M31号・M32号溝址（第110図、図版69・117）

遺構—F区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。南西—北東に延びている。2条の溝址は調査範囲での接点はないが、覆土・位置関係等から同一の溝址と判断した。幅0.9m前後、深度20cm前後であった。性格は不明である。

遺物—須恵器と石器が出土している。須恵器は1の甕片が1点出土した。外面には平行印目が認められる。石器は2の打製石斧が1点出土した。

○M33号溝址（第109図、図版70）

遺構—F区で検出された。M28号溝址に切られる。北—南に延びている。幅2.5m前後、深度70cm前後であった。断面形状から人工の溝址と思われる。性格は不明である。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○M34号溝址（第109図、図版70）

遺構—F区で検出された。M28号溝址に切られる。北—南に延びている。幅2.1m前後、深度40cm前後であった。性格は不明である。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○M36号溝址（第111回、図版72）

遺構—H区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。東から西に向かい延びて、直角に北へ折れている。幅1.0～2.0m前後、深度60cm前後であった。断面形状・平面形態等から本址は人工の溝址と思われる。性格は不明である。遺物—出土遺物は皆無であった。

○M37号溝址（第111回、図版73）

遺構—H区で検出された。H38号住居址を切る。北東から南西に向かい延びている。幅2.5m前後、深度20cm前後であった。性格は不明である。遺物—出土遺物は皆無であった。

○M39号・M42号・M43号・M44号・M58号溝址（第112～114・118回、図版74～77・83・117・118）

遺構—V・P区で検出された。H39号住居址を切る。M42・43号溝址が連結して南から北に向かい、M39号溝址部分で北西に向きを転じ、M58号に延びている。M44号はM43号部分で東方向から連結するが、切り合い関係は認められないことから、本址の枝分かれした一部分と認識した。幅1.2～4.0m、深度60cm前後であった。性格は不明である。遺物—M42号溝址で土師器環と鉄鏃が各1点出土した。環は内面ヘラミガキ後黒色処理が施される。鉄鏃は長頸・筈被で片刃階の鏃身である。

M43・44号溝址部分で土師器、須恵器、弥生土器、石器が出土した。土師器は1のロクロ甕の底部片が認められる。方向不明糸切によりロクロから切離された後、ヘラケズリが施される。須恵器は2の甕体部片が出土している。外面平行印目、内面ナデ調整である。弥生土器は3の高杯片と4の壺底部片が出土している。高杯は内面ヘラミガキ、外面ヘラケズリ調整が施される。壺は内面ハケメからナデ調整、外面ヘラミガキ調整が施される。石器は5の打製石鏃が出土している。

○M41号溝址（第112回、図版74・117）

遺構—V区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。東から西に向かい延びている。M39号とM42号溝址の間で連結するものと推測されるが、未調査であるため、別遺構とした。幅1.2m前後、深度40cm前後であった。性格は不明である。

遺物—土師器環の底部片が1点出土している。内面ヘラミガキ後黒色処理、ロクロからは回転糸切りにより切離される。

○M46号・M53号溝址（第115・117回、図版79・81・117）

遺構—Y・W区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。M46号とM53号溝址が連結して南東から北西に向かい延びている。幅2.4m前後、深度80～90cmであった。人工の溝址と思われる。性格は不明である。

遺物—M46号溝址部分で須恵器、土師器、弥生土器が出土している。須恵器は1の有台環と、3の壺が認められる。有台環は方向不明回転糸切によりロクロから切り離されている。壺は底部片で高台は貼付されている。土師器は2の甕体部片が出土している。外面にはハケメが認められる。弥生土器は4の壺片が1点出土した。

○M47号溝址（第115回、図版80）

遺構—T区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。東から西に向かい延びている。幅1.2m前後、深度40cm前後であった。性格は不明である。

遺物—出土遺物は皆無であった。

○M48号・M49号溝址（第115・116回、図版21・80）

遺構—T区で検出された。M48号溝址部分でH43号住居址を切る、M49号溝址部分でH48号住居址を切る。東から西に向かい延びている。幅0.8～2.2m、深度50cm前後であった。性格は不明である。

遺物—M49号溝址部分で土師器燻片が2点出土した。内面ナデ、外面ハケメ調整が施される。

○M50号溝址（第116回、図版80）

遺構—B区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。南—北方向に延びている。幅1.2m前後、深度30cm前後

であった。性格は不明である。
遺物—出土遺物は皆無であった。

○M51号・M54号・M55号・M56号溝址（第116～118図、図版81・82）

遺構—W・V・P区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。M51・54・56号溝址が連結し南西～北東方向に延び、M56号溝址の先でほぼ直向に北西に折れ、M55号溝址に連結する。幅1.0～2.0m、深度30～40cm前後であった。人工の溝址と思われる。性格は不明である。
遺物—出土遺物は皆無であった。

○M52溝址（第116図、図版81）

遺構—W区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。南西～北東方向に延びている。幅0.8m前後、深度50cm前後であった。性格は不明である。
遺物—出土遺物は皆無であった。

○M57号溝址（第118図、図版82・118）

遺構—Z区で検出された。H46号住居址、D65号土坑を切る。南東から「く」字に45°屈折して北に方向を転じる。幅0.8m前後、深度20cm前後であった。性格は不明である。
遺物—土師器碗の底部片が1点出土している。内面には十字暗文が認められ、ロクロからは右回転糸切により切離され、高台が貼付される。

○M59号溝址（第118図）

遺構—J区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。東—西方向に延びている。幅0.8～1.0m、深度30cm前後であった。性格は不明である。
遺物—出土遺物は皆無であった。

○M60号溝址（第119図、図版83）

遺構—J区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。南—北方向に延びている。幅0.6～1.4m、深度40cm前後であった。性格は不明である。
遺物—出土遺物は皆無であった。

○M61号・M64号溝址（第120図、図版83・85）

遺構—J区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。M61号とM64号溝址が連結して南—北方向に延びている。幅2.2～2.8m、深度100～120cm前後であった。人工の溝址と思われる。性格は不明である。
遺物—出土遺物は皆無であった。

○M62号・M63号溝址（第119図、図版84・118）

遺構—J区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。M62号とM63号溝址が連結して南—北方向に延びている。幅0.6～1.1m、深度30～50cm前後であった。性格は不明である。
遺物—M62号溝址部分から、中期後半加曾利E式期の深鉢胴部片が1点出土している。

○M66号溝址（第121図、図版86）

遺構—G区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。南—北方向に延びている。幅0.8m、深度40cm前後であった。性格は不明である。
遺物—出土遺物は皆無であった。

○M68号溝址（第121図、図版85・118）

遺構—H区で検出された。深堀Ⅳ調査区内で住居址との重複関係を有する。東—西方向に延びている。幅0.8～1.0m、深度40cm前後であった。人工の溝址と思われる。性格は不明である。

遺物—土師器、須恵器、灰釉陶器が出土した。1は土師器環で内面にヘラミガキ後黒色処理が施される。2は土師器碗で、内面はヘラミガキ後黒色処理、ロクロからは右回転糸切により切離され、高台が貼付される。3は灰釉陶器の碗の口縁部片である。4は須恵器甕の体部片で、内面ナデ、外面には平行甲目が認められる。

○環状溝址1(第123図、図版92)

遺構—N区で検出された。他遺構との重複関係は有さない。内径3.0m、外形4.2mのドーナツ状の平面形態を呈し、深度10cm前後であった。佐久市内の遺跡では散見される遺構であり、形態的には周溝葬や平地式住居などと同様であるが、性格は不明である。

遺物—出土遺物は尙無であった。

第5節 Pit

総数381基のPitが検出されている。その多くは掘立柱建物址や柱列等の一部と思われるが、調査範囲が道路部分に限定されているため、判然とはしない。遺物を包含する遺構が少ないことは、これらの性格が杜穴であることの傍証とも捉えられよう。東千石平部分に集中して遺物を出したPitは存在する。以下に出土遺物の概要を記しておく。

P133—須恵器の有台環が出土している。底部はヘラケズリ調整が施され、高台が貼付される。内外面に火傷が認められる。

P147—灰釉陶器長頸甕の頸部片が出土している。

P159—須恵器甕の口縁部片が出土している。櫛歯状工具による刺突列が認められる。

P170—須恵器環が出土している。ロクロからは右回転糸切により切離される。内外面に火傷が認められる。

P195—須恵器環が出土している。ロクロから右回転糸切で切離された後、ヘラケズリ調整が加えられている。

P200—土師器皿が出土している。内面はヘラミガキ後黒色処理、ロクロからは右回転糸切により切離され、高台が貼付されている。赤外線カメラにより判読不能な墨書が外面体部に認められた。

P202—須恵器坏蓋が出土している。犬井部には回転ヘラケズリが施される。つまみは欠損する。

P208—土師器鉢が出土している。内面はヘラミガキ後黒色処理、底部にはヘラケズリ調整が加えられる。

P211—須恵器と土師器が出土している。須恵器には坏1・2、有台坏3、坏蓋4、甕6が認められる。坏は2点共に右回転糸切によりロクロから切離される。2は火傷が認められる。有台坏は回転ヘラケズリ後高台が貼付される。「X」の窠印が高台内に認められる。坏蓋はつまみを欠損する。犬井部には回転ヘラケズリが施される。甕は長頸・広口の口縁部片である。土師器は5の鉢が出土している。内面ヘラミガキ後黒色処理である。底部は欠損する。

P270—坏蓋が出土している。口縁部は欠損する。扁平な擬宝珠つまみが貼付されている。

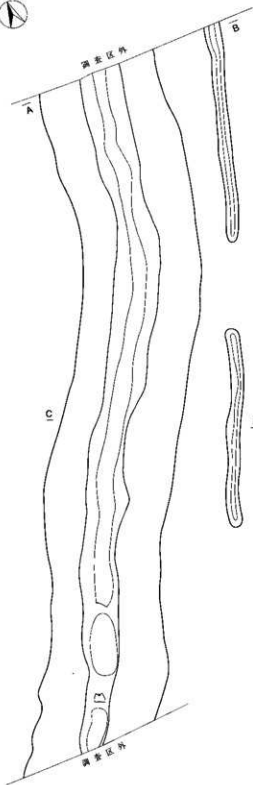
P275—須恵器が出土している。1は坏で右回転糸切によりロクロから切離される。2は有台坏でヘラケズリ後高台が貼付されている。3・4は坏蓋である。2点共につまみを欠損する。犬井部には回転ヘラケズリ調整が施される。

第6節 古墳

深堀遺跡群内には狐塚古墳群として、現在5基の古墳が存在している。今回、大規模な試掘調査が台地全面に実施されたが、新たな古墳は発見されなかった。調査は、開発により破壊が余儀なくされた350-4号墳と350-5号墳の2基に対して実施され、他の3基は現状で保存された。

○狐塚350-4号墳(第124・125図、図版87~90、119)—N区とT区の境で検出された。狐塚古墳群のなかでは、350-3号墳について台地内部に立地する。

標高685m前後の平坦面に構築されており、調査前の状態は草場で、應が散乱していた。草を除去した状態ですでに多くの礎が地表面に現れ、周溝も確認された。墳丘は高まりを残していたため、石室の床面は残存する可能性が期待されたが、石室は完全に消失していた。墳丘は最大部分で高さ90cm前後は残存しており、版築の状態が確認できた。

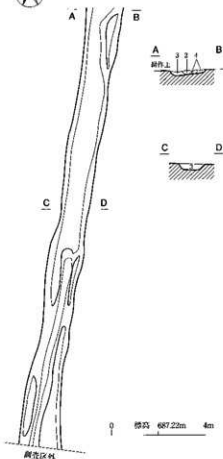


M1号溝跡



0 標高 685.58m 3m

1. 黒褐色土層 (10YR3/2) ϕ 2~3cmパミス含。
2. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) ϕ 2~3cmパミス含。
3. 黄褐色土層 (10YR5/6) ロームブロック含。
4. 黒色土層 (10YR2/1)。
5. にぶい黄褐色土層 (10YR5/4) $\text{U} \cdot \text{M}$ 粒子含。
6. にぶい黄褐色土層 (10YR7/4) 中間に砂粒含、流水の痕跡。

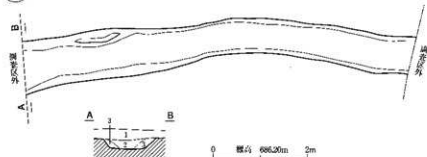


0 標高 687.22m 4m

1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) ϕ 2~3cmパミス・砂粒含。
2. 褐色土層 (10YR4/6) ロームブロックと黒色の混在土層。
3. 黒褐色土層 (10YR2/2) ロームブロック極少含。
4. 黄褐色土層 (10YR5/8) ロームブロック主体。

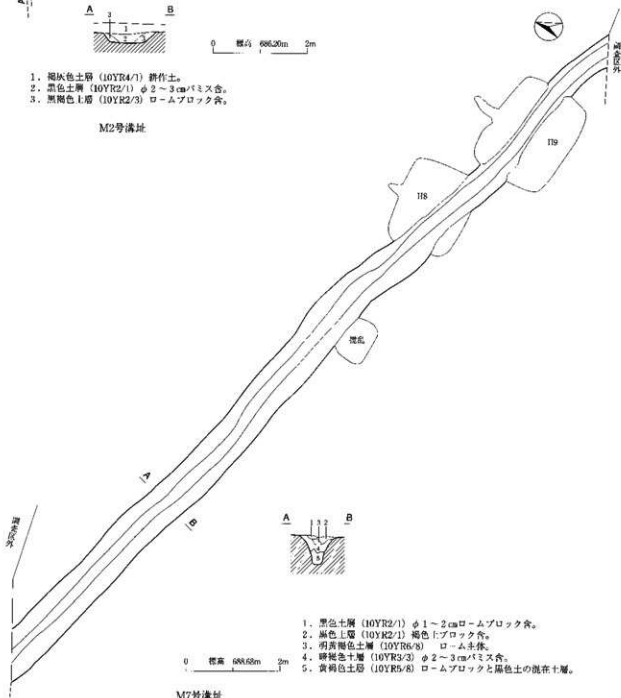
M3号溝跡

第97図 M1・3号溝址



1. 細灰色土層 (10YR4/7) 耕作土。
2. 黒色土層 (10YR2/1) ϕ 2~3cmパミス含。
3. 黒褐色土層 (10YR2/3) ロームブロック含。

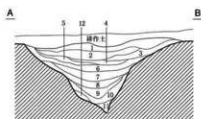
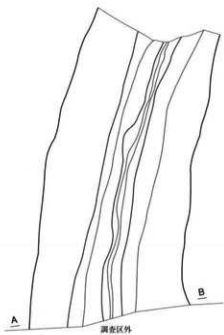
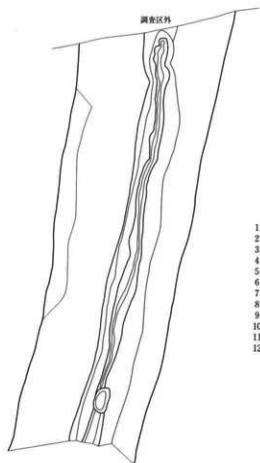
M2号溝址



1. 黒色土層 (10YR2/1) ϕ 1~2cmロームブロック含。
2. 黒色土層 (10YR2/1) 細色土ブロック含。
3. 明褐色土層 (10YR6/8) ローム土体。
4. 暗褐色土層 (10YR3/3) ϕ 2~3cmパミス含。
5. 黄褐色土層 (10YR5/8) ロームブロックと黒色土の混在土層。

M7号溝址

第98図 M2・7号溝址



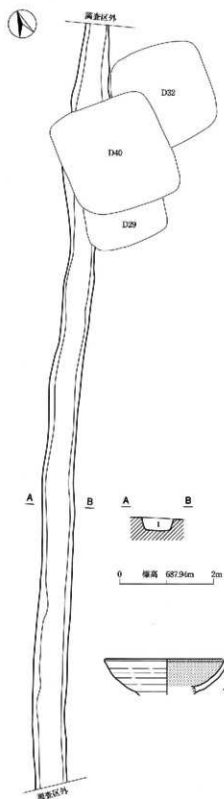
0 標高 688.10m 2m

1. 黒褐色土層 (10YR2/2) ローム極少含。
2. 暗褐色土層 (10YR3/3) ローム少含。
3. 褐色土層 (10YR4/4) ローム多含、パミス極少含。
4. 黒色土層 (10YR2/1) ローム極少含。
5. 黒褐色土層 (10YR3/2) ローム少含。
6. 褐色土層 (10YR4/6) ローム主体。
7. 暗褐色土層 (10YR3/3) ローム少含、炭化物極少含。
8. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) ローム・砂粒少含。
9. にぶい赤褐色土層 (2.5YR5/3) ローム少含。
10. にぶい赤褐色土層 (5YR5/3) ローム多含。
11. 灰褐色土層 (5YR5/2) ローム・砂粒主体。
12. にぶい赤褐色土層 (5YR5/3) ローム主体。



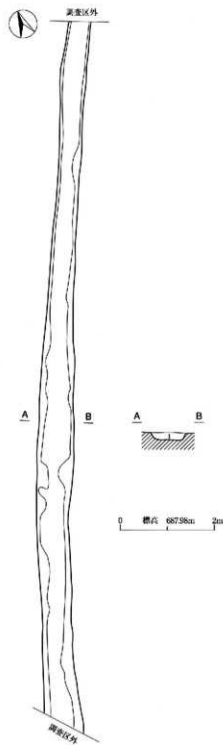
M4号溝址

第99図 M4号溝址



1. 黒褐色土層 (10YR2/3) パミス・ローム極少含。

M5号溝址



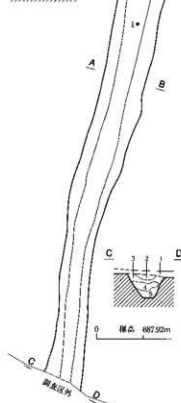
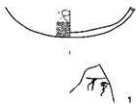
1. 黒褐色土層 (10YR3/2) ローム少含、炭化物・パミス板少含。

M6号溝址

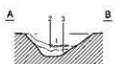
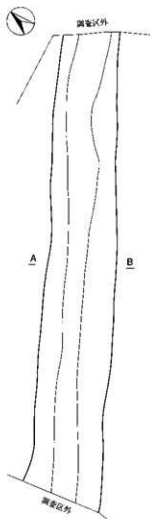
第100図 M5・6号溝址



1. 褐色土層 (10YR5/1) 耕作土。
2. 黒褐色土層 (10YR3/1) ϕ 1-2cm パミス多含。
3. 暗褐色土層 (10YR3/3) コム多含。
4. 紫色土層 (10YR2/1) ローム粒子少含。
5. 黒褐色土層 (10YR3/2) ローム粒子多含。
6. 黒褐色土層 (10YR3/2)。



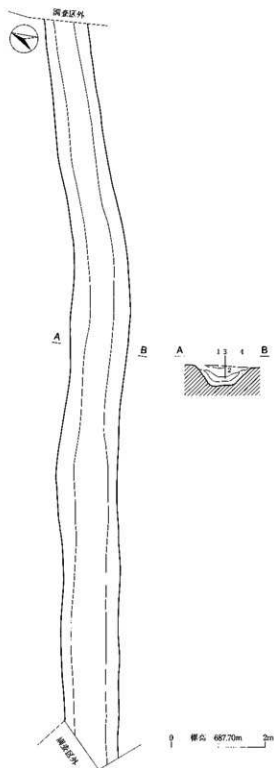
M8号溝址



1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) パミス・ローム多含。
 2. に近い黄褐色土層 (10YR5/3)。
 3. 褐色土層 (10YR4/6) ロームブロック・パミス多含。
- * 1層下に堅固な面が存在するが、M9ほど顕著ではない。

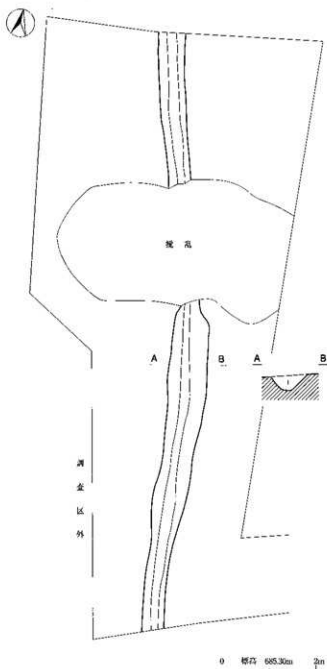
M10号溝址

第101図 M8・10号溝址



1. 褐色土層 (10YR6/1)。
 2. 黒褐色土層 (10YR3/4)。
 3. 黒褐色土層 (10YR3/4) ローム粒子多量。
 4. 暗褐色土層 (10YR3/4) ローム粒子・パミス多量。
- ※ 1層下に床状の堅固な面が存在し、道として使用されたことが推定される。

M9号溝址



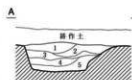
1. 暗褐色土層 (10YR3/4) ロームブロック・パミス多量。一部に堅固な床状の部分あり。

M11号溝址

第102図 M9・11号溝址

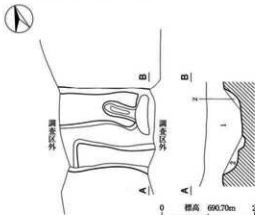


1. 暗褐色土層 (10YR3/3) ϕ 1~2cm/パリス含。
2. 黒褐色土層 (10YR3/2) ϕ 1~2mm/パリス含。
3. 暗褐色土層 (10YR3/4) ϕ 1~2cm/パリス含。
4. 黒褐色土層 (10YR2/3) パリス少含。
5. 黒褐色土層 (10YR2/3) パリス・10YR6/6ロームブロック含。

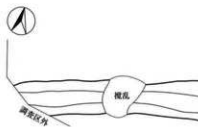


M14号溝址

0 標高 690.58m 2m



0 標高 690.70m 2m



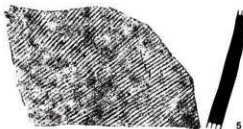
1. におい黄褐色土層 (10YR4/3) ϕ 2~3mm/パリス多含。
2. 褐色土層 (10YR4/4) ϕ 2~3mm/パリス・10YR8/3ロームブロック含。

M15号溝址



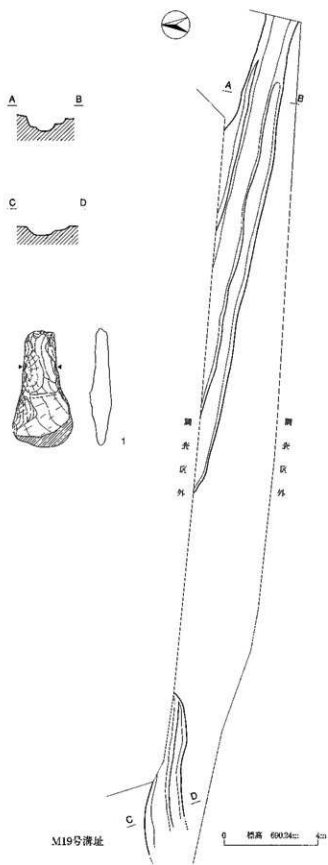
0 標高 686.95cm 4m

1. におい黄褐色土層 (10YR5/3) 10YR6/6ローム少含。
2. におい黄褐色土層 (10YR5/3) 10YR6/6ローム多含。
3. 浅黄褐色土層 (10YR8/4) ローム主体。10YR5/3粒子含。



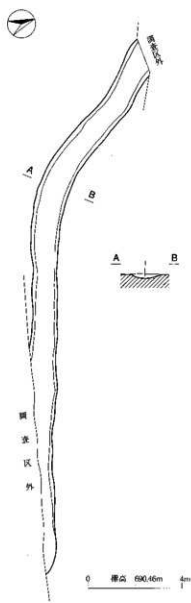
M16号溝址

第104図 M14・15・16号溝址



M19号溝址

0 標高 600.94m 4m

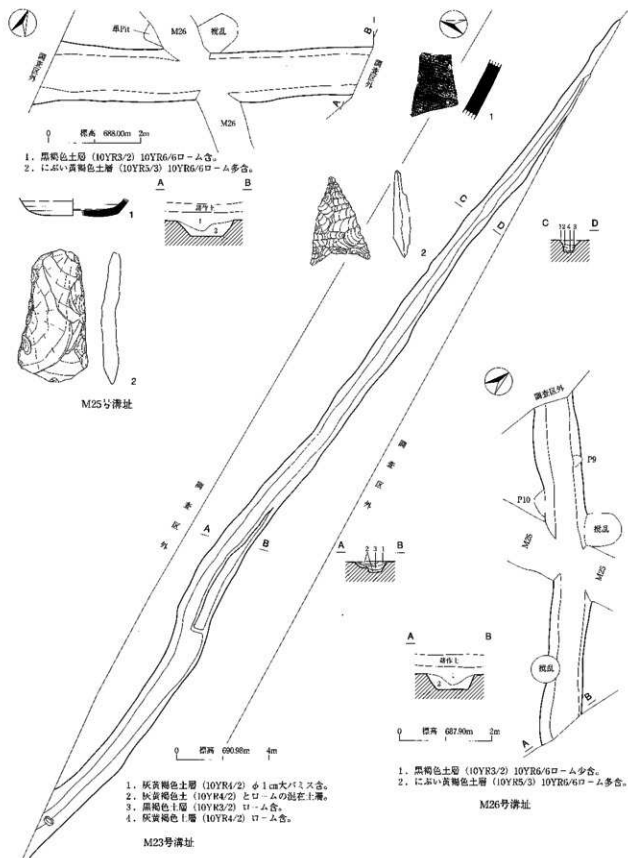


0 標高 600.46m 4m

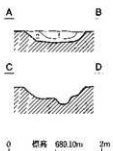
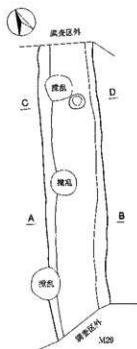
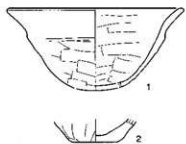
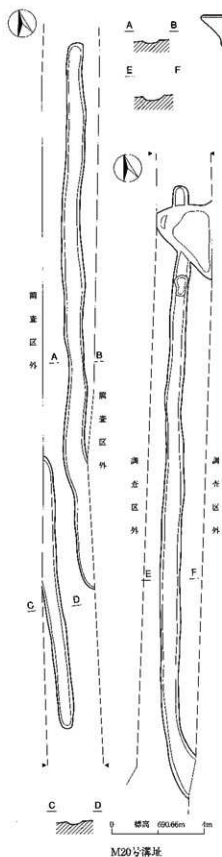
1. 黒褐色土器 (10YR3/2) 10YR6/6口 ム・φ5mm大バズルス合。

M24号溝址

第106図 M19・24号溝址

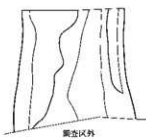
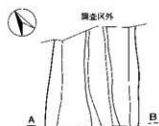
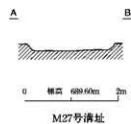
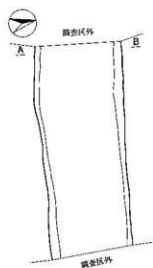


第107図 M23・25・26号溝址



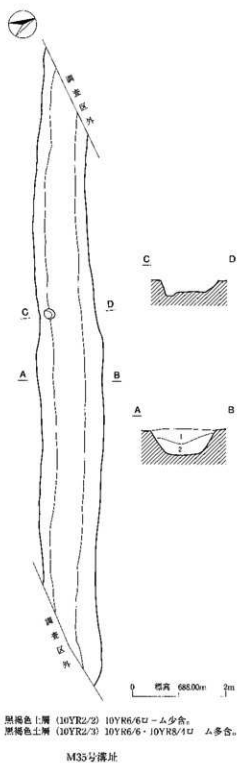
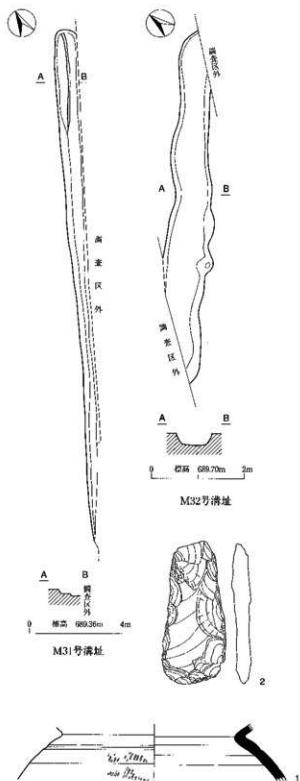
1. 灰褐色土層 (10YR4/2)
2. にぶい灰褐色土層 (10YR5/3) 10YR5/6の△区。

M29号溝址

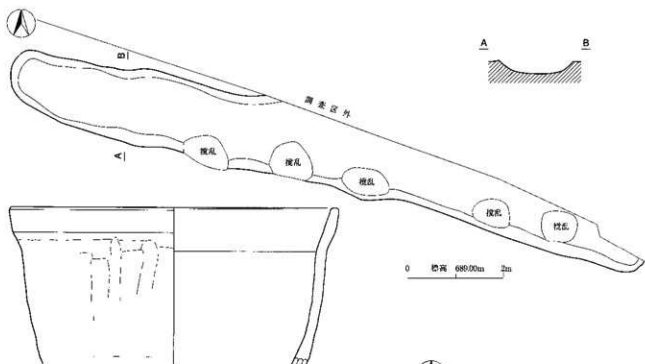


1. 黒褐色土層 (10YR2/2)
 2. 黒褐色土層 (10YR3/2) □-△区。
- M30号溝址

第108図 M20・29・27・30号溝址



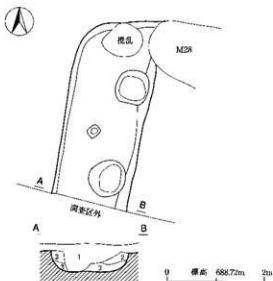
第109图 M28·33·34号溝址



M28号溝址

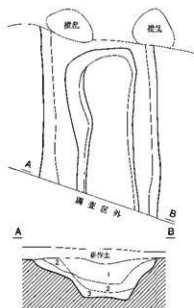


M28



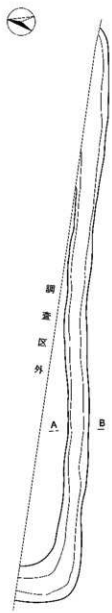
M34号溝址

1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR6/6ロ-A少含。φ1cm以下パミス含。
2. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR6/6ロ-A多含。
3. 浅黄棕色土層 (10YR8/4) 10YR6/6ロ-A主体。10YR3/2少含。



M33号溝址

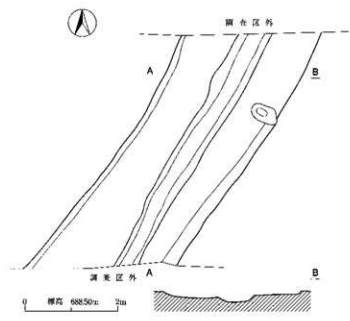
1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR6/6ロ-A少含。φ1cm以下パミス含。
2. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR6/6ロ-A多含。
3. 浅黄棕色土層 (10YR8/4) 10YR6/6ロ-A主体。10YR3/2少含。



0 標高 688.6m 4m

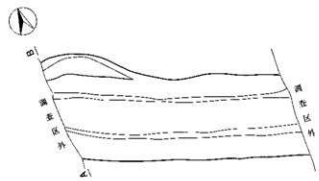
1. 黒褐色土層 (10YR3/2)
2. 褐色土層 (10YR4/4) φ3~4mmパミス含。
3. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) φ3~4mmパミス・ロームブロック含。
4. 黄褐色土層 (10YR5/6) 10YR2/2アロックス少。

M36号溝址



0 標高 688.50m 2m

M37号溝址



0 標高 689.20m 2m

1. 黒褐色土層 (10YR2/3) φ5mm大パミス・10YR6/1・8/4ローム含、炭化物少含。
2. 黒褐色土層 (10YR3/4) φ1~2cmパミス・10YR6/1ローム含。
3. 黒褐色土層 (10YR2/3) φ1~2cmパミス含。
4. 黒褐色土層 (10YR3/2) φ1~2cmパミス・ローム粒多含。
5. 黄褐色土層 (10YR6/6) φ1~2cmパミス多含。
6. 黄褐色土層 (10YR6/6) パミス・帯状10YR3/3含。

M38号溝址

第111図 M36・37・38号溝址



M42号溝址

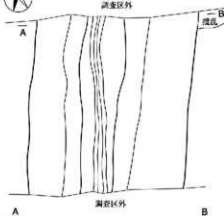
1. におい黄褐色土層 (10YR6/4) シルト質。
2. 10YR2/2, 10YR8/4ローム, 10YR6/4の混在土層。シルト質。
3. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR8/4ローム多含、 ϕ 1cm以下パズリス含。



0 標高 684.86m 4m



C 2



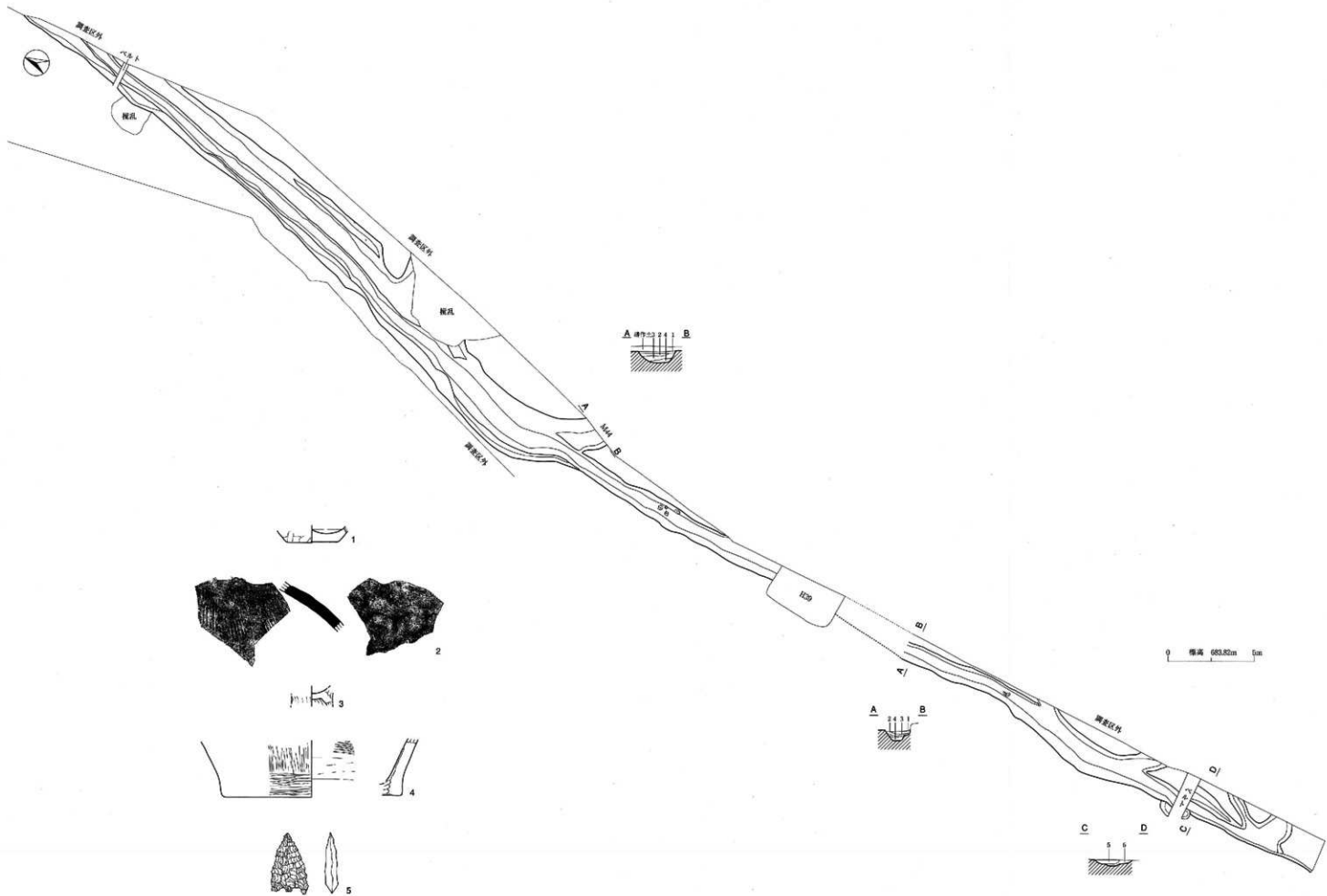
0 標高 487.60m 2m

1. 暗褐色土層 (10YR3/4) ϕ 1~2mmパズリス含。
2. 棕色土層 (7.5YR6/8) ϕ 1~2mmパズリス含。
3. 褐色土層 (10YR4/4) ϕ 1~2cmパズリス・10YR3/3ブロック少含。
4. 明褐色土層 (10YR5/6) 下層に10YR7/8含。

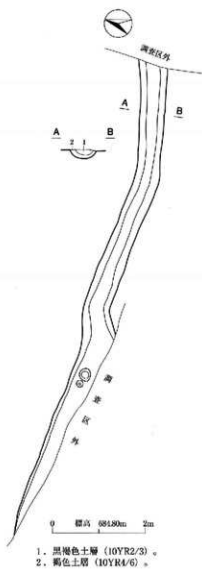
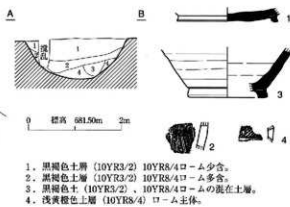
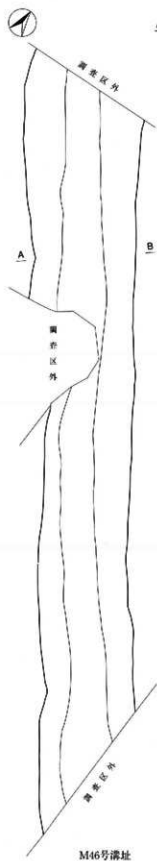


M45号溝址

第113図 M42・45号溝址

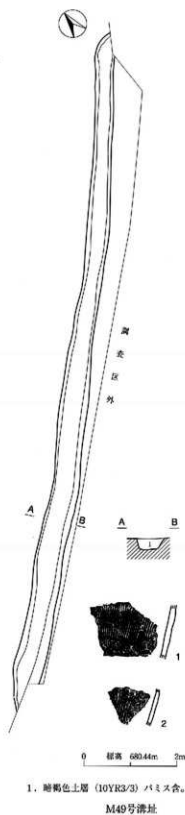


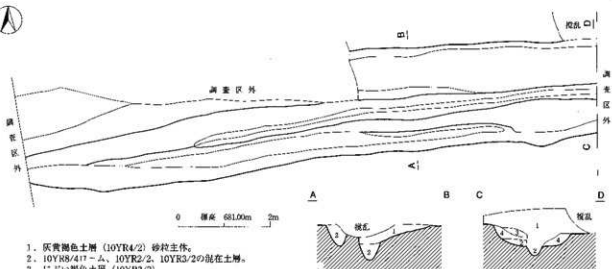
第114图 M43·44号遗址



M47号溝址

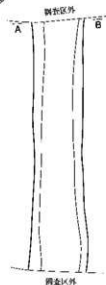
第115図 M46・47・49号溝址





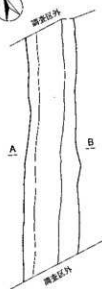
1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 砂粒主体。
2. 10YR8/417-ム、10YR2/2、10YR3/2の混在土層。
3. にぶい褐色土層 (10YR3/2)。

M48号溝址



1. 耕作土。
2. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR8/6ロ-ム少含。
3. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR8/6ロ-ム多含。

M50号溝址



1. 黒褐色土層 (10YR2/3) ϕ 3~2cm パミズ多含、パミズ粒子含。
2. 暗褐色土層 (10YK3/3) ϕ 3~2cm パミズ多含、パミズ粒子含。

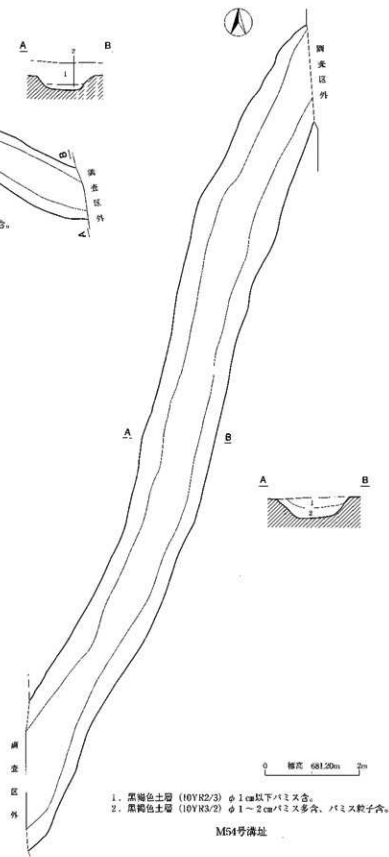
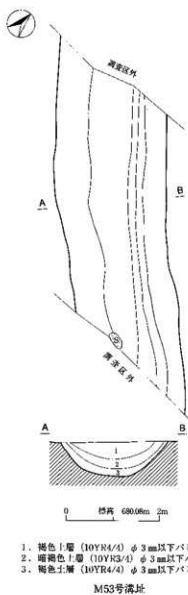
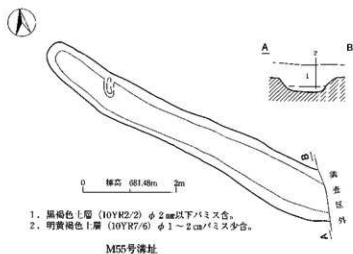
M51号溝址



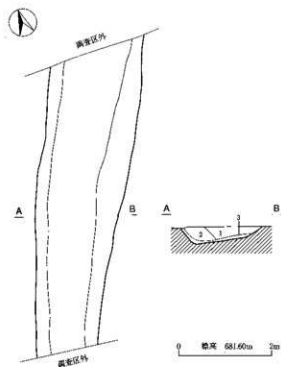
1. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR8/6ロ-ム少含。
2. 黄褐色土層 (10YR8/6) ロ-ム主体。 ϕ 1cm以下パミズ含。

M52号溝址

第116図 M48・50~52号溝址

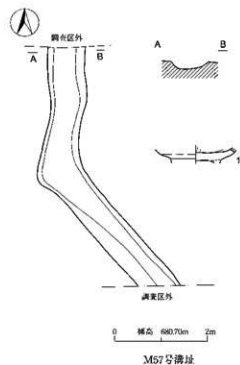


第117図 M53・54・55号溝址

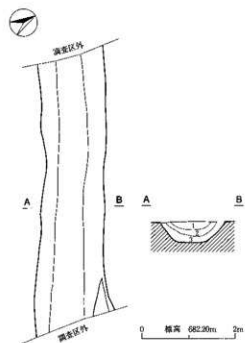


1. 黒褐色土層 (10YR2/1) ϕ 1cm大礫含。
2. 褐色土層 (10YR4/6) ϕ 2~3cm ϕ ミリス多含。
3. 黄褐色土層 (10YR7/8) ϕ 1~2cm ϕ ミリス含。

M56号溝址

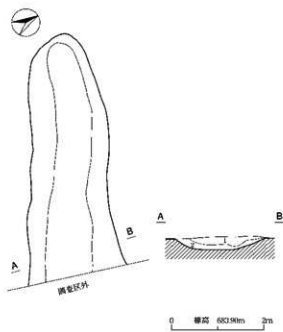


M57号溝址



1. 黒褐色土層 (10YR2/3) ϕ 2~3mm ϕ ミリス・礫含。
2. 黒褐色土層 (10YR2/2) ϕ 2~3mm ϕ ミリス・礫含。
3. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR7/8ローム・礫含。

M58号溝址

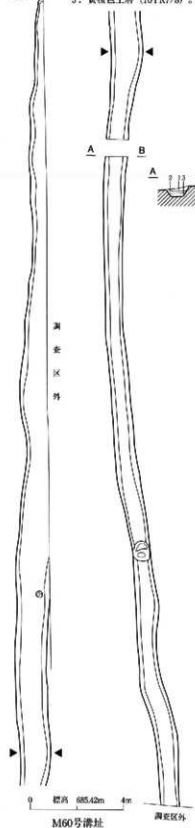


1. 暗褐色土層 (10YR3/4) 中層に10YR2/2の薄層積層存在。
2. 明褐色土層 (7.5YR6/8) 10YR7/4ロームブロック含。

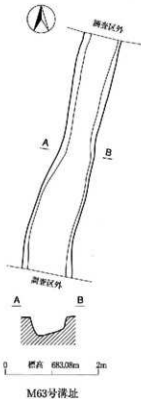
M59号溝址



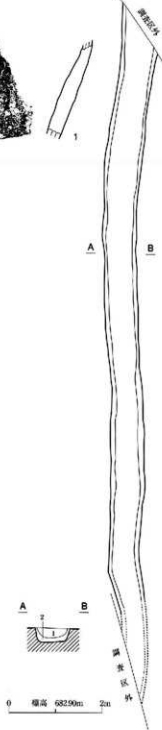
1. 暗褐色土層 (10YR3/4) ϕ 1~2mmパミス少含。
2. 褐色土層 (10YR4/4) 10YR6/6ロームブロック含、 ϕ 1~2cmパミス少含。
3. 黄褐色土層 (10YR7/8)。



M60号溝址



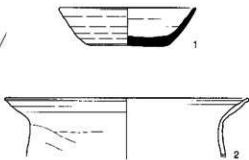
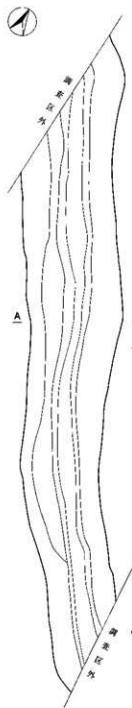
M63号溝址



M62号溝址

1. 黒褐色土層 (10YR2/3) ϕ 1cm大パミス・粒子多含。
2. 明黄褐色土層 (10YR6/6) ϕ 1~3cmパミス多含。

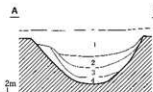
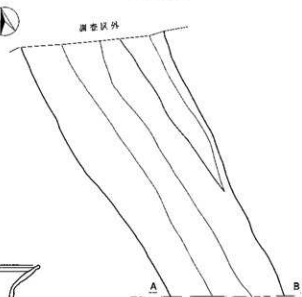
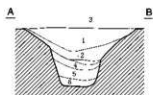
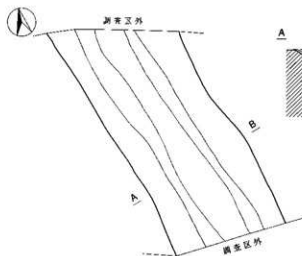
第119図 M60・62・63号溝址



0 標高 683.30m 2m

1. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR8/4ローム、 ϕ 1cm大パミス少含。
2. におい・黄褐色土層 (10YR5/3) 10YR8/4ローム多含、砂粒含。
3. 浅黄褐色土層 (10YR8/4) ローム主体、砂粒・10YR5/3粒子含。

M65号溝址

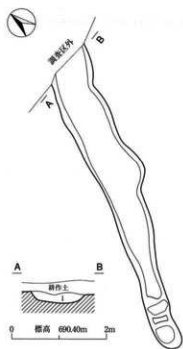


1. 黒褐色土層 (10YR2/2)
2. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR8/4ローム含。
3. 10YR3/2, 10YR8/4ロームの混在土層。
4. 砂層

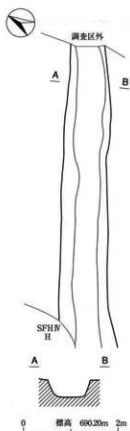
M64号溝址

1. 黒褐色土層 (10YR2/3) ϕ 1cm大パミス・パミス粒子多含、砂少含。
2. 暗褐色土層 (10YR3/3) ϕ 1cm大パミス多含、礫含。
3. 褐色土層 (10YR4/6) ϕ 1~2cm大パミス多含。
4. におい・黄褐色土層 (10YR4/3) ϕ 1cm大パミス・パミス粒子少含。
5. 黄褐色土層 (10YR5/6) ϕ 1~2cm大パミス多含。
6. 褐色土層 (10YR4/4) ϕ 3~4mmパミス多含。

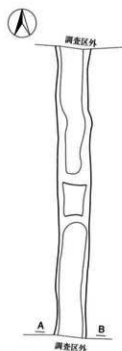
M61号溝址



M67号沟址

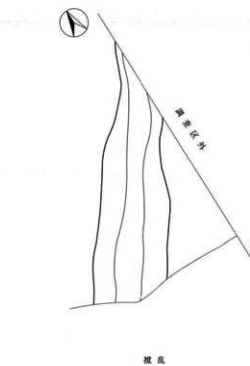


M68号沟址

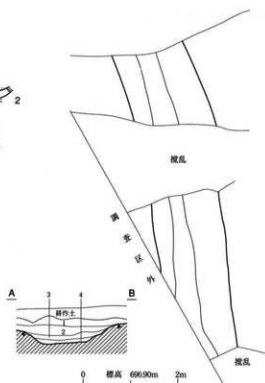


M66号沟址

1. 黑褐色土層 (10YR3/2) 10YR6/6口-ム少含。
2. 黑褐色土層 (10YR3/2) 10YR6/6口-ム多含。

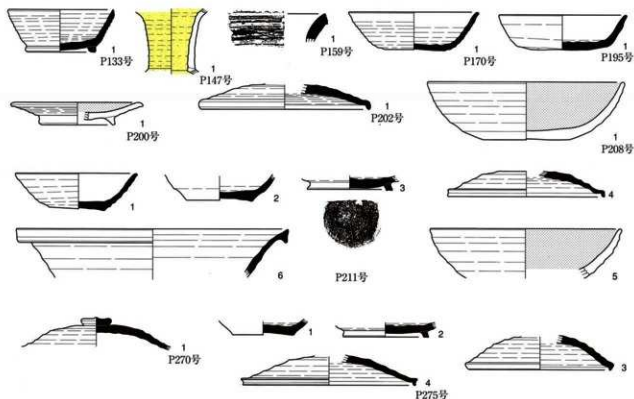


視孔



M69号沟址

1. 黑褐色土層 (10YR3/2) 10YR6/6口-ム少含。
2. 黑褐色土層 (10YR3/2) 10YR6/6口-ム含。
3. 明黄褐色口-ム層 (10YR6/6) 10YR3/2含。
4. 黑褐色土層 (10YR2/2) 10YR6/6口-ム少含。



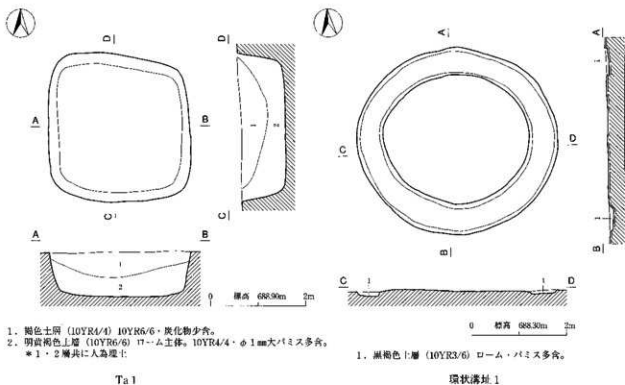
第122図 Pit 出土遺物

墳形は円形で、周溝の外周最大部分で直径20m、内周では13mである。周溝は、南側が掘り残される馬蹄形の平面形態を呈しており、深さは北側が最も深く、地表面から1.2mを測る。他の部分は70cm前後である。このことから、本社は南に石室が開いていたものと推測され、主軸方位はほぼN-Sにとる。周溝内には人頭大を主体とする川原石が堆積していた。外護列石は認められないことから、これらの川原石が所謂「葺石」状に傾丘を保護していたものと推測される。傾丘の残丘が最大90cm確認できる現状で、石室の痕跡が確認できないことから、本社は比較的高い傾丘を有していたことが想像される。版築土を除去した結果本社は石室掘方は有さないと明らかとなった。

調査時に現場見学に訪れた地元者の複数の古老の話を総合すると、本社は80年ほど前には、横穴式石室は開口していたようであるが古墳として体裁が整った状態であった。しかし、石室の石材を用水等に使用するため、破壊された。そして、石室破壊後の窪みに多年にわたり耕作に邪魔な石が放り込まれ、現在に至った。

出土遺物は以上のような状況から多くはない。また、本来の位置を保持しているものは存在しないと考えられる。装身具としては、1の耳環が1点出土している。銅芯金張である。この他に装身具類は1点も認められないことから、破壊に際して大規模な土砂の移動が伴ったか、遺物の残存状態・状況が極めて良好で、根こそぎ持ち去られたものと推測される。鉄器・鉄製品は8点出土している。2・3・8は金具や錠具の部分と思われる。4は轡の連結部分5〜7は錠具、9は弁である。鉄器・鉄製品からは馬具一式が副葬されていたことが想像される。土器は土師器と須恵器が出土している。土師器は10〜12の坏及び碗と14の甕が認められる。坏10は古墳内からの出土品ではなく、周溝の東縁から5m程はなれた場所に完形で正位で出土した。遺構には伴っていない。内面には放射暗文が施され、外面にはヘラケズリ調整が施される。11・12は内面に黒色処理が施される。11は外面に墨書が認められるが判読不能である。14の甕は底部片である。内面ハケメ、外面にはヘラケズリが施される。須恵器は13の坏、16・17の壺、15・18〜22の甕が認められる。坏13は底部にヘラケズリ調整が施され、内外面に火傷が認められる。壺16・17は同一個体と思われるが、接合点は認められない。長頸壺と思われる。甕は15・18が口縁部片、19・20・21が頸部付近、22が底部である。19・20には櫛歯状工具による波状文、21・22は外面に平行印目、21は内面に同心円状の当具痕が認められる。23の打製石斧、24・25の黒曜石製石鏃は混入遺物である。

以上の出土遺物は極めて断片的な資料であるが、これらから本古墳の年代を類推すると、古墳時代後期7世紀代の築造と思われる。その後何回かの追葬が行われたものと推測される。

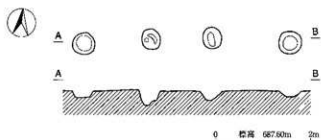


1. 褐色土層 (10YR4/4) 10YR6/6・炭化物少含。
 2. 明黄褐色土層 (10YR6/6) 17…ム主体。10YR4/4・φ1mm大パミス多含。
 * 1・2層共に人為層上

1. 黒褐色土層 (10YR3/6) ローム・パミス多含。

Ta 1

環状溝址 1

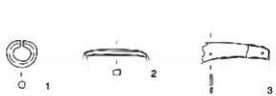
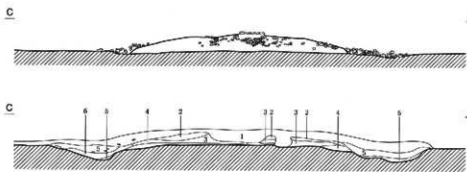


柱列 1

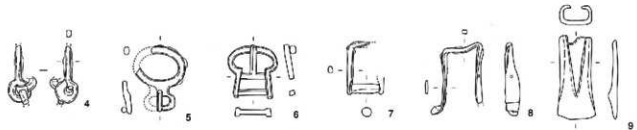
第123図 Ta 1、環状溝址 1、柱列 1

○孤塚350-5号墳(第126・127図、図版90-92、119) -U区とT区の境に所在する。標高680m前後の白地縁辺の平坦面に立地する。調査範囲外に延びるため全容は確認されていない。調査前の状態は畑地であり、墳丘はすでに存在していなかった。試掘調査により周溝と思われる溝が確認され、古墳の位置が把握された。表土の除去により、周溝以外は破壊され消滅していることが明らかとなった。墳丘は完全に削り取られ、地山白体が削平されていた。更に広範囲にわたり、深さ1m以上の塚穴が掘られ、現代の塚が大量に埋められていた。本古墳も地元の古老の話によれば、350-4号墳と同時期に石室の石材を利用するために破壊されたとのことであるが、近年に至り致命的な大破壊が耕作者により加えられたようである。以上の結果、本古墳の墳丘、埋葬施設については一切不明となった。残された唯一の遺構である周溝は外周が直径25m前後、内周が直径18m前後である。深度は最深部で130cm前後、最浅部でも70cm前後は有し、佐久市の古墳の中では極めて深い。また、特徴的なのは、周溝の幅が一定せず、広狭を繰り返す平面形態で、深度もこれに連動し広い部分では深く、狭い部分では浅くなっている。周溝の最大幅は5m前後、最小幅は2m前後である。以上の周溝規模から想像すると、本古墳の墳丘は高かったものと思われる。

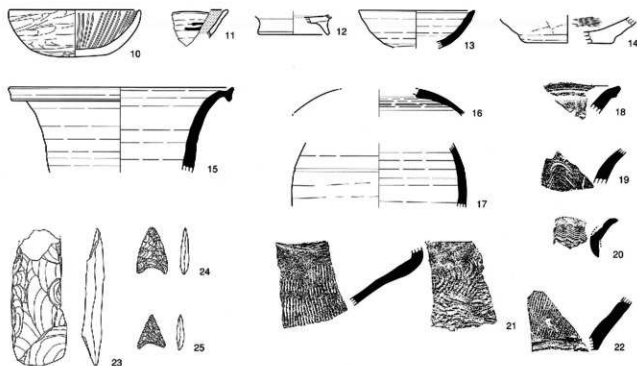
出土遺物は以上の理由から極めて少ない。また、本来の位置を保持しているものは存在しない。装身具としては1の銅芯金張の耳環、2の滑石製丸玉、3の水晶製切子玉、4の碧玉ないしは緑色凝灰岩製の管玉が出土している。鉄器及び鉄製品は5・6の鋭具、7の刀子、8・9・10の鎌、11の釘、12の不明品が出土した。これらは墓穴の上を陥って検出したものである。土器は須恵器と土師器が出土した。主に周溝内から出土したものである。須恵器には14



1. 耕作土及び雑草。
2. 黒褐色土層 (10YR2/2)。
3. 10YR8/4ロ-ムと10YR2/2黒色土の混在土層。φ 2cm以下パミス多含。
4. 黒褐色土層 (10YR2/2)。10YR8/4ロ-ム多含。φ 1cm以下パミス含。
5. 黒褐色土層 (10YR3/2)。10YR2/2・10YR8/4ロ-ム含。
6. 10YR8/4ロ-ム主体。10YR2/2稀少含。



第124図 350-4号墳(1)



第125図 350-4号墳(2)

~17の坏、18の長頸壺、19~23の甕が認められる。坏は底部が残存する14・16・17は右回転糸切によりロクロから切離されている。16・17には火押が認められる。甕は20が口縁部片、21・22が体部片、23が底部片である。21は外面格子甲目、内面ナデ、22は外面平行印目後カキメ、内面は同心円の当具痕、23は外面格子甲目、内面は同心円の当具痕である。土師器は24の高杯、25・26の甕が認められる。高杯は坏と脚の接合部である。甕25は武蔵甕で、「く」字口縁を呈する。甕26は内面ナデ、外面ヘラケズリから粗いヘラミガキ調整が施される。

以上の遺物から本址の年代を類推することは少なからぬ無理を生じるが、古墳時代後期7世紀代の築造と思われる。その後追葬が行われた可能性も高い。

第7節 竪穴

○Ta1 竪穴 (第123図、図版11)

遺構-G区で検出された。H24号住居跡を切る。隅丸方形の平面形態を呈する。N-0°-Eに長軸方位をとる。南北2.4m×東西2.44m、壁残高80~88cm、面積6.2㎡の規模を有する。規模から土坑と区別した。

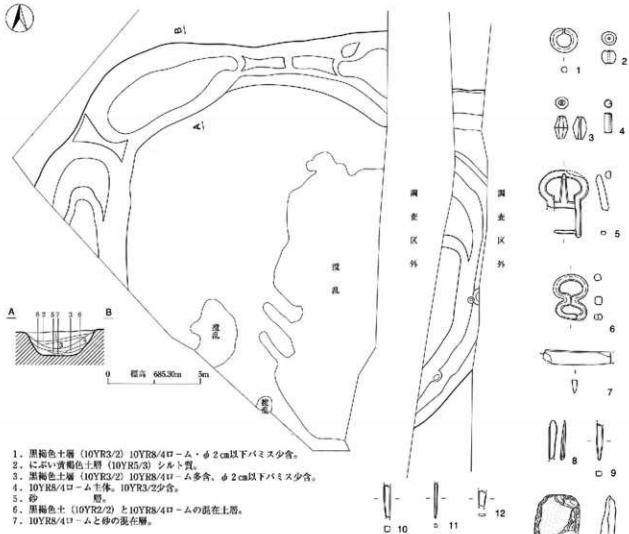
遺物-出土遺物は皆無であった。

第8節 遺構外出土遺物

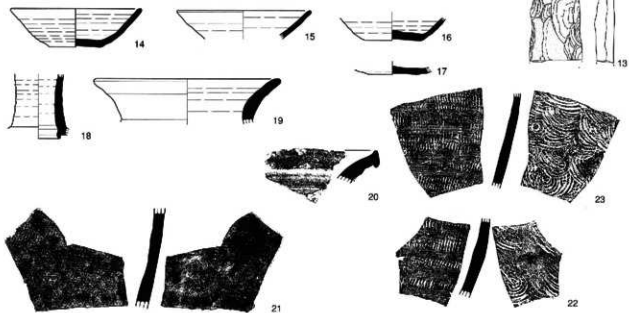
遺構外から出土した遺物の大半は東千石平から出土した。深堀遺跡群の段丘下に厚く堆積した包含層から夥しい量の遺物が出土し、その包含層中から住居址等の遺構が検出された。この包含層は段丘の近くほど厚く、その下は岩盤であった。以下に器種毎に概略を記していく。

○土師器 (第128・132図、図版120・124・125) 一坏、坏蓋、碗、皿、甕、甕が出土した。

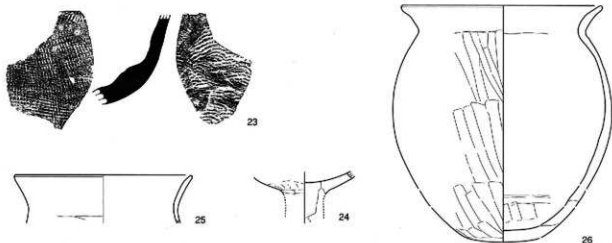
坏1~24-2・4・7を除き、内面はヘラミガキ後黒色処理、2・4・7は黒色処理だけが施される。外面底部には底部を欠損する19~22を除き、1~6は右回転糸切、7が回転ヘラケズリ、その他は手持ヘラケズリが施される。7



1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR8/4ローム・φ2cm以下バミス少含。
2. に近い黄褐色土層 (10YR5/3) シルト質。
3. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR8/4ローム多含、φ2cm以下バミス少含。
4. 10YR8/4ローム主体、10YR3/2少含。
5. 砂。
6. 黒褐色土 (10YR2/2) と10YR8/4ロームの混在土層。
7. 10YR8/4ロームと砂の混在層。



第126図 350-5号墳(1)



第127図 350-5号壺(2)

・8・14・16・21は周縁部にもヘラケズリが施されている。また、20は外面体部に「Ω」の墨書が認められる。環蓋191-1点のみの出土である。内面ヘラミガキ後黒色処理、外面にはヘラケズリ調整が施される。扁平な擬宝珠つまみが貼付されており、須臾器の横倣である。口縁部は欠損する。外面に判読不能な墨書が認められる。

腕245-248-すべてが内面ヘラミガキ後黒色処理が施される。247を除き回転糸切痕が底部に残されており、方向は248が右回転、他は不明である。高台は付高台である。246には「大?」、248には「罌木」の刻書が焼成前に刻まれている。

皿253-259-内面はヘラミガキ後黒色処理が施される。高台はすべてが付高台で、257は方向不明の回転糸切痕が認められる。また、259は逆「S」字状の焼成前刻書が認められた。

甕261-274-268-272がロクロ甕の他は武蔵甕である。口縁部が残存する武蔵甕は「コ」字口縁である。ロクロ甕は271の底部片を除き、小型である。三足甕275は内外面にヘラミガキ後黒色処理が施される。

○須臾器(第128-135図、図版120-126)一坏、有台坏、环蓋、甕、壺、円面甕が出上している。

坏1-146-137-144のロクロからの切離方法は1-82が右回転糸切、83-98は回転方向不明糸切、99-110はヘラ切りで、回転の場合右が多い。111-126は手持や回転のヘラケズリ調整のため切離方法が不明である。また、127-136・146は底部を欠損する。火澤は25・26・28-33・39-40・44-45・47-49・51・55・61・66-72・75-77・82-89・91・93-94・100-101・103-105・108-109・111-112・114-115・118-119・123-124・126・131-132・134-136・139・142-145に認められる。また、54は見込に判読不能な、63・111は外面体部に逆「∞」字状、128は外面体部に判読不能な、142・146は「Ω」の墨書が外面体部に認められた。142の場合、肉眼では存在が不明であったが、赤外線カメラにより確認された。103は外面底部に「大」の刻書が焼成前に刻まれている。

有台坏147-190-147-153・182-187は方向不明の回転糸切により、ロクロから切離される。その他の底部が残存するものは回転ヘラケズリや手持ヘラケズリ調整が施されている。高台は貼付されている。147・150・157・158・160・166-168・170・171・173・174・180・181・183・189・190は火澤が認められる。また、148は見込に「大」の焼成前刻書、152は外面体部に「又」?の墨書、168は外面底部に「X」の墨印が認められる。

環蓋192-244-すべて「かえり」は有さない。つまみは扁平な擬宝珠を基本とし、外面天井部にはヘラケズリ調整が施される。194-196・199-202・206・207・210・212・214・217・218・220・222-224・227・228・231・232・235-244には火澤が認められる。225の体部外面には「Ω」の墨書、235の体部外面にも判読できないが、墨書が存在することが赤外線カメラにより明らかとなった。

甕276-296-器形的には広口短頸の276-284と広口長頸の286-289が存在する。法量的には小型の277や、中型の281、284のような大型に3大別できそうである。成形は小型のものはロクロ成形、他は巻上げ、叩き成形である。叩きは平行叩き、当具痕はナデ調整により消去される。施文は288に櫛歯状工具による波状文が認められる。

壺297-315-器形が把握できる個体には長頸壺が多く認められる。305のような凸帯文付四耳壺も存在する。底部片は高台の有無により甕と識別した。306は欠損した壺の底部の破損面を研磨して口縁部に加工し、坏として再利用している。

円面視316—おそらく「十」字となるであろう透かしと、2条のヘラによる波状文が施文される。脚部のみ残存しており、視面部分は欠損する。

○灰釉陶器（第132・135図、図版124・126）—碗、皿、手付瓶が出土している。

碗249～251—3点共に、外面底部には回転ヘラクズリ調整が施され、高台が貼付されている。施釉は249・250が内外面、251は内面のみに認められる。

皿260—口縁部片である。内外面に施釉が施されている。

手付瓶317—把手の下部接合面付近の破片である。把手の断面は扁平である。

○緑釉陶器（第132図、図版124）—極めて小型の碗の口縁部片が1点出土している。胎土は黄白色、釉の色調は明るい黄緑である。

○縄文土器（第135図、図版126）—後期と思われる押捺隆帯施文の深鉢口縁部片318と、後期堀之内式の深鉢口縁部片319が出土している。

○土製品（第135図、図版126）—344の上製の紡錘車が1点出土している。

○鉄器（第135図、図版126）—刀子320～329、鎌330・331・333、紡錘車336・337、鎌338、鋤339、不明332・334・335が出土している。刀子329は、柄の長さや刃幅から、製作時の刀子の大きさを体現している可能性が認められる。刀子の規格については、研ぎ減ってかなり短くなっても使用しているため、刃部の長さは千差万別であるが、刃幅からは3種類ほどに大別できそうである。具体的には324のような幅広のもの、329のような中間のもの、325のような細いものである。鉄鎌は330が鎌又で兎被、331が片刃で兎被、長頭、333は長頭以外は不明である。紡錘車は2点共に円盤部分である。鎌は大型であり、先端部分が欠損する。鋤はほぼ真中から割れているが、鎌同様に大型である。不明品3点の内、332は金具、334は刀子の柄の可能性を有する。

○銅製品（第135図、図版126）—帯金具の溜方340・341と鉈尾の裏止金具、銅鍔?343が出土した。341は裏止金具も残存していた。これらはずべて東千手平から出土しており、遺跡の性格を知る上で重要な発見である。

○石器・石製品（第135図、図版126）—345の滑石製紡錘車の破片、346の礫石、347の打製石斧、348の打製石鎌が出土している。

第9節 試掘調査出土遺物

試掘調査時に検出された遺構は、本調査の調査区内にからない限り、基本的に未調査であるが、検出時に出土した遺物は取り上げられている。これらの遺物の概略を本節で説明する。

○H1号住居址（第136図、図版127）—W区で検出された。弥生土器が3点出土している。1・2は赤彩が施される高杯で、接合点は認められないが同一個体と思われる。比較的小ぶりであり、坏部には稜を有さない。3は外面に赤彩が施される無頸壺で、口縁部に凹孔が焼成前に穿たれる。

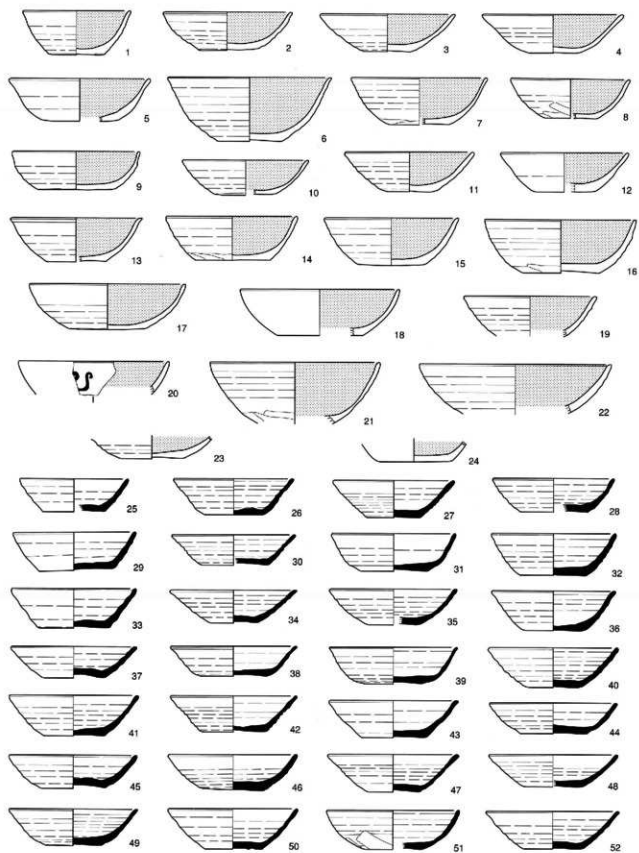
○H2号住居址（第136図、図版127）—W区で検出された。本調査時のH52号住居址と同遺構である。底部に新代痕が認められる。縄文時代後期と思われる深鉢底部片が1点出土している。混入遺物である。

○H5号住居址（第136図、図版127）—Z区で検出された。弥生土器8点と、石器4点が検出された。1・2は内外面赤色塗彩が施される鉢。3・4は甕で、4は縄文施文の口縁部、3は内外面にハケム調整後、ヘラミガキが施される。5～8は壺である。5は体部片で、横位文縁帯の土器である。縄文、櫛形波状文、櫛形波状文が施される。6は頸部片で、籠状文による平行沈線文が巡らされる。7も頸部片で、籠状工具による懸垂文内に櫛形工具による条線が充填される。8は体部片で籠状工具による区画内に縄文が充填される。石器9は片刃の磨製石斧、10は大ぶりの打製石斧、11・12は打製石鎌で、11はチャート、12は黒曜石製である。

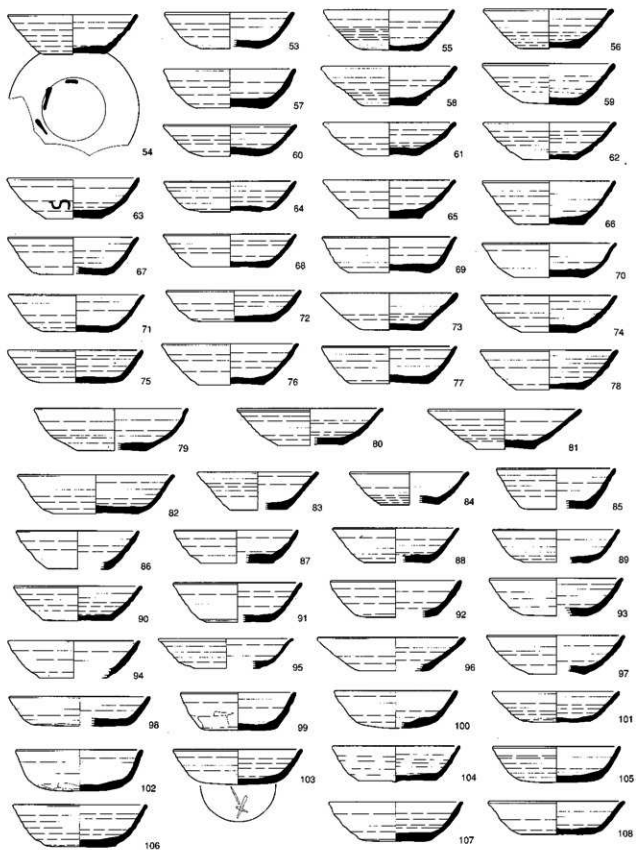
○H7号住居址（第136図、図版127）—Z区で検出された。灰釉陶器長頸壺頸部片1と磨石2が出土している。

○H8号住居址（第136図、図版127）—Z区で検出された。弥生土器が5点出土している。1～4は甕で、1は口唇部に櫛形状工具による刺突が加えられ、頸部には原状文が施される。2は底部片であるが、欠損面を研削して新たな口縁を削り出している。3は「コ」字重文が施される体部、4は櫛形状工具による斜走文が施される体部である。5は壺の体部片で、籠状工具による横位区画内に縄文と波状文が施される。

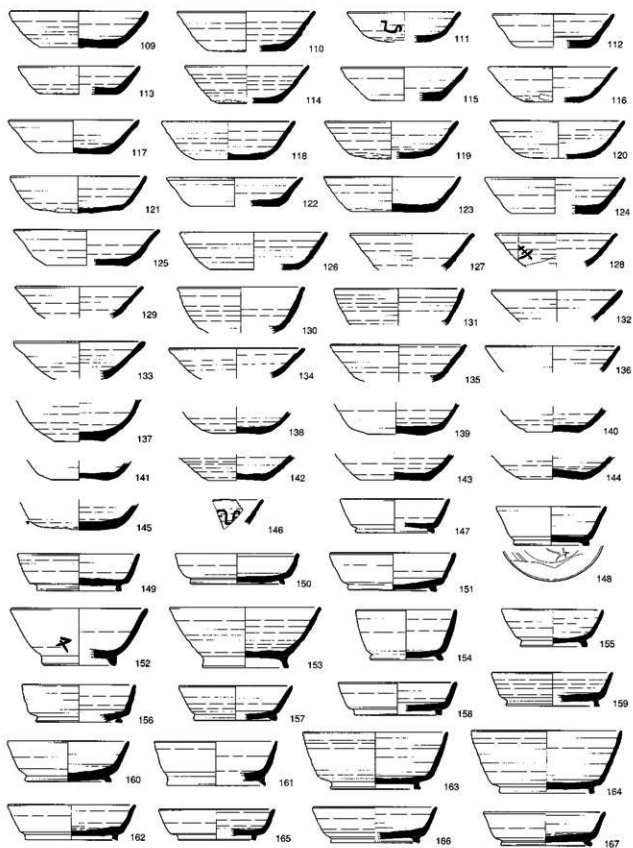
○H9号住居址（第136図、図版127）—Z区で検出された。弥生土器が5点出土している。すべて壺である。1は口縁部で、口唇～有段部に縄文を施し、籠状工具による波状文が施される。2は小型で、外面には赤彩が施される。3は体部片で、籠状工具による逆弧文内に縄文が充填される。



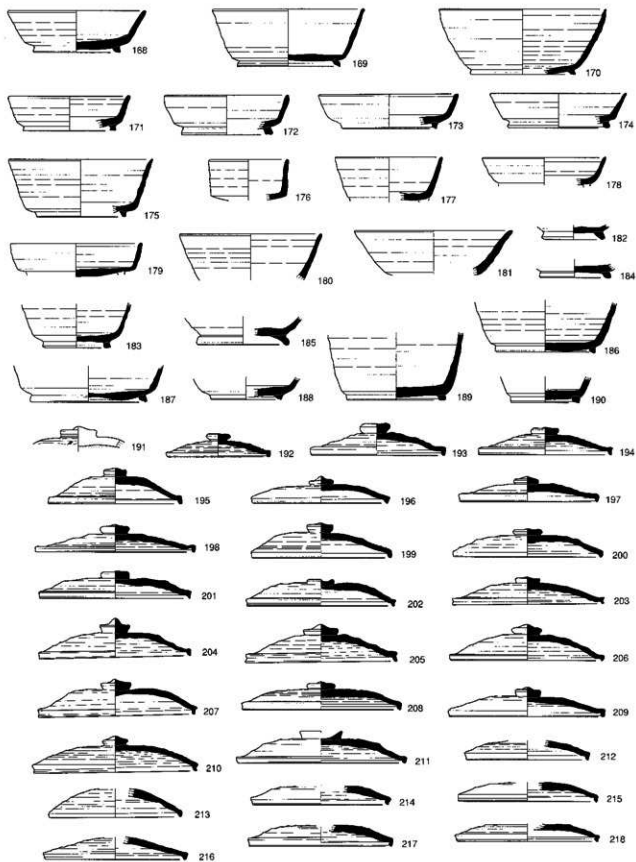
第126図 遺構外出土遺物(1)



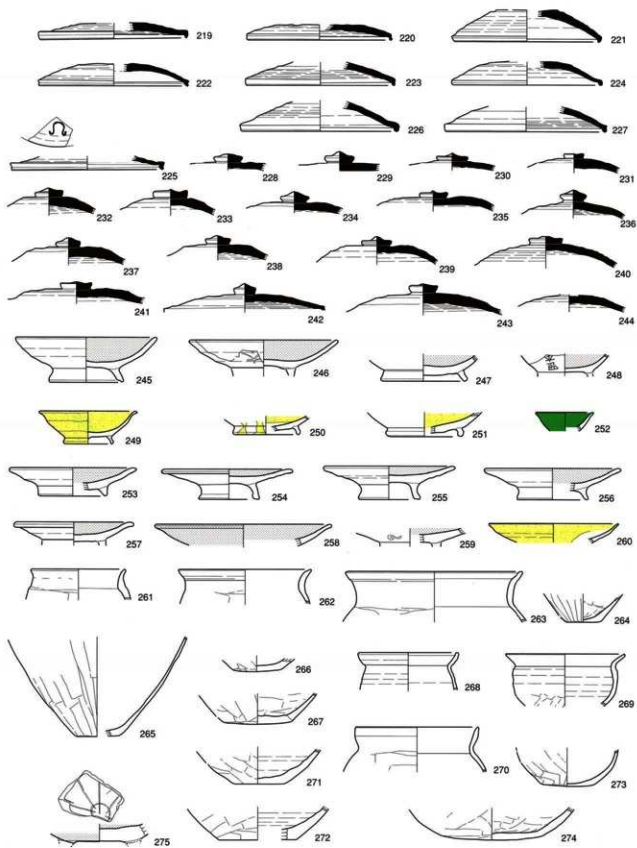
第129回 遺構外出土遺物2)



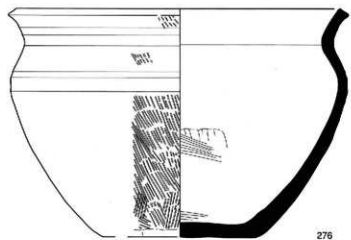
第130图 濠洲外出土遺物(3)



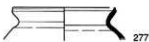
第131图 遼朝外出土遺物(4)



第132図 遺構外出土遺物(5)



276



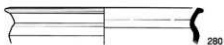
277



278



279



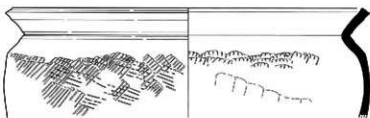
280



281



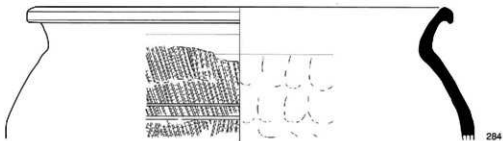
282



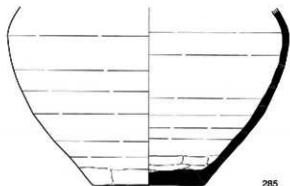
283



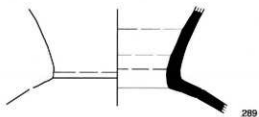
288



284

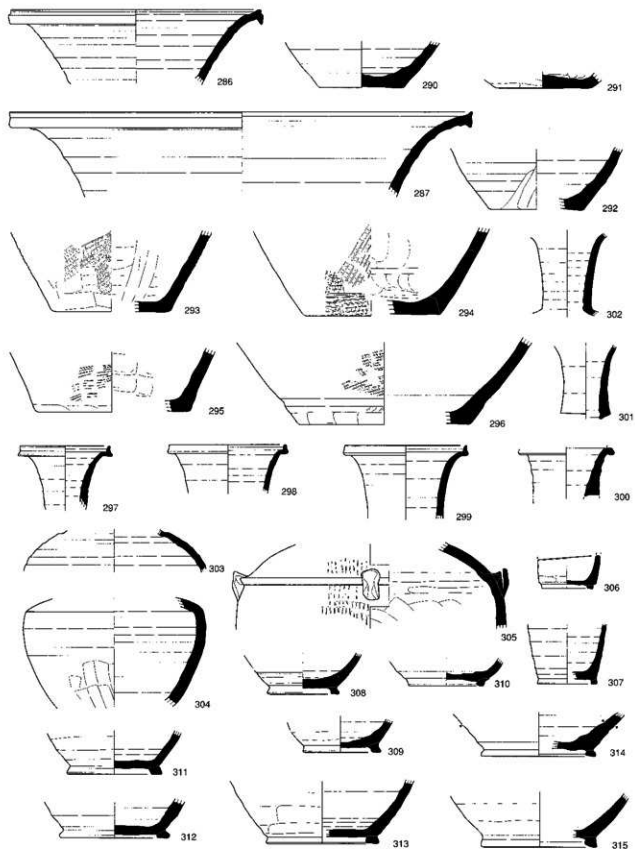


285

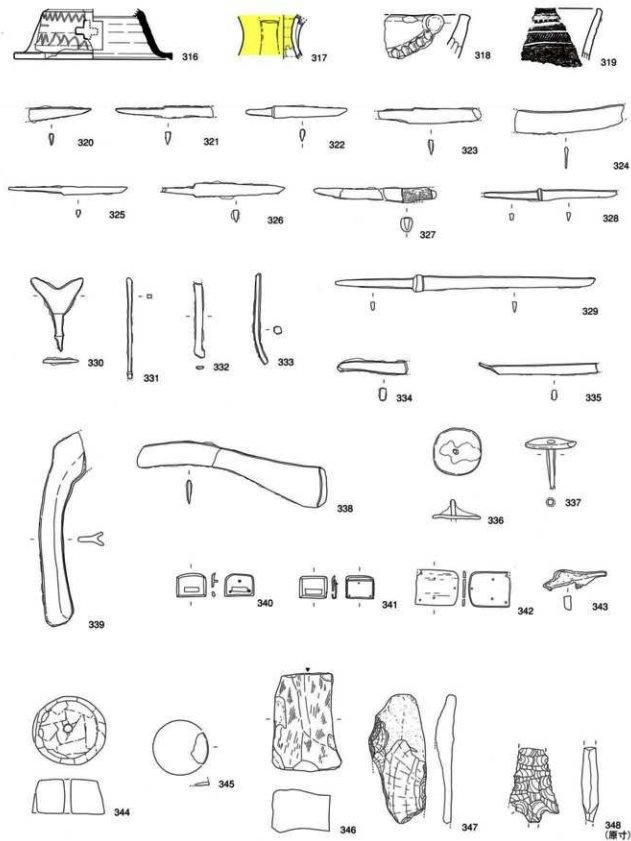


289

第133图 道桥外出土遗物(6)

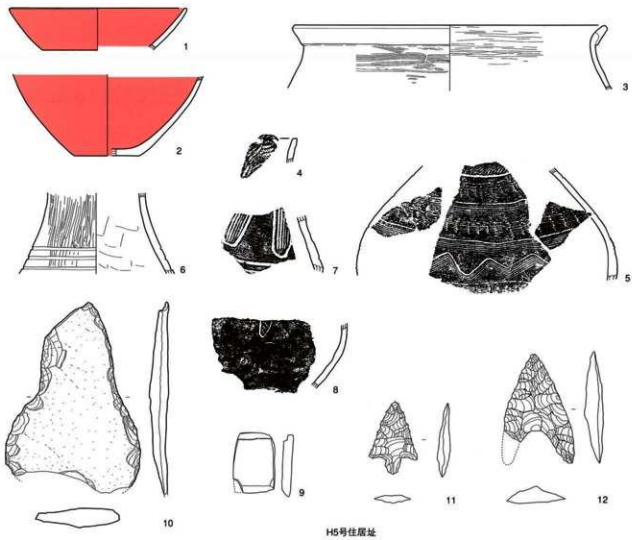
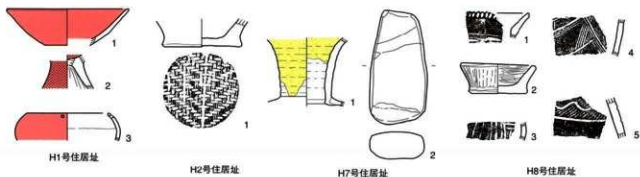


第134図 遺構外出土遺物(?)

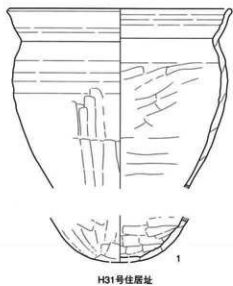


第135図 遺構外出土遺物(9)

- H19号住居址 (第136図、図版127) -V区で検出された。土師器坏1と土鉢2が出土した。坏は内面に粗いヘラミガキ後黒色処理が施され、ロクロからは回転方向不明糸切により切離される。土は紡錘形を呈する小型のものである。
- H31号住居址 (第137図、図版127) -H区で検出された。深堀ⅣのH22号住居址である。接合点が認められないものの、明らかに同一個体と思われる、土師器ロクロ甕が1点出土した。丸底を呈し、外面体部下半にはヘラケズリ、内面にはナデ調整が施される。
- H34号住居址 (第137図、図版127) -D区で検出された。深堀ⅣのH16号住居址である。弥生土器の壺片が1点出土した。内面ヘラケズリ後ナデ調整、外面赤色塗彩である。
- H37号住居址 (第137図、図版127) -H区で検出された。黒曜石製の石鏃が1点出土した。
- H42号住居址 (第137図、図版127) -H区で検出された。深堀ⅣのH44号住居址である。須恵器壺の底部片が出土した。高台内を甕として転用している。
- H49号住居址 (第137図、図版127) -M区で検出された。灰釉陶器の碗底部片が1点出土している。
- H50号住居址 (第137図、図版127) -G区で検出された。黒曜石製の打製石鏃が1点出土している。
- H52号住居址 (第137図、図版127) -H区で検出された。弥生土器の台部が1点出土しているが、器種は不明である。内面ハケメからヘラミガキ、外面ハケメからナデ調整が施される。
- H66号住居址 (第137図、図版127) -G区で検出された。土師器の皿が1点出土している。ロクロからは右回転糸切により切離されている。
- H89号住居址 (第137図、図版128) -M区で検出された。灰釉陶器碗の底部が1点出土している。
- H91号住居址 (第137図、図版128) -M区で検出された。大原2号窯場と思われる灰釉陶器碗の底部が1点出土している。
- H97号住居址 (第137図、図版128) -H区で検出された。深堀ⅣのH53号住居址である。灰釉陶器と縄文土器が出土している。1は灰釉陶器の皿、2・3は長頸壺である。4は後堀堀之内式の深鉢片である。
- H98号住居址 (第137図、図版128) -H区で検出された。土師器坏が1点出土している。体部には焼成前に穿孔された門孔が1カ所認められる。ロクロからは右回転糸切により切離されている。
- H100号住居址 (第137図、図版128) -H区で検出された。深堀ⅣのH54号住居址である。土師器の坏が1点出土している。ロクロからは右回転糸切により切離されている。
- H102号住居址 (第137図、図版128) -H区で検出された。深堀ⅣのH58号住居址である。内面黒色処理、外面に堀書が書かれる土師器坏片が1点出土している。堀書は判読不能である。
- H112号住居址 (第137図、図版128) -T区で検出された。内外面に赤彩が施される有段口縁壺の口縁部が出土している。
- H115号住居址 (第137図、図版128) -B区で検出された。H30号住居址と同一の住居址である。土師器の坏が3点出土している。1は内面黒色処理で右回転糸切によりロクロから切離される。2は方向不明の回転糸切によりロクロから切離される。3は内面ヘラミガキ後黒色処理が施される。
- H119号住居址 (第137図、図版128) -B区で検出された。磨石が1点出土している。
- D2号土坑 (第137図、図版128) -V区で検出された。須恵器坏が1点出土した。ロクロからは右回転糸切により切離されている。
- D4号土坑 (第137図、図版128) -O区で検出された。打製石斧の基部が1点出土した。
- D5号土坑 (第137図、図版128) -I区で検出された。深堀Ⅳの鍛冶址1である。判読不能な墨書が書かれ、右回転糸切によりロクロから切離されるロクロ甕底部片1と打製石斧の基部2が出土している。
- M1号溝址 (第138図、図版128) -M区で検出された。M4号溝址と同一の溝址である。破損した打製石斧が3点出土している。
- M4号溝址 (第138図、図版128) -M区で検出された。M8号溝址と同一の溝址である。判読不能な墨書が認められる。土師器坏片が2点出土している。1は内面黒色処理、2は放射状暗文と黒色処理が施される。
- M6号溝址 (第138図、図版128) -I面が使用された砥石が1点出土している。
- M8号溝址 (第138図、図版128) -H区で検出された。2面使用された砥石が1点出土している。
- M10号溝址 (第138図、図版128) -打製石斧の基部が1点出土している。
- 遺構外出土遺物 (第138図、図版128) -1・2は土師器坏である。2点共に墨書が認められるが、判読不能である。1は内面ヘラミガキ後黒色処理、2は黒色処理が施される。3は須恵器坏である。底部には回転ヘラケズリ調整が施



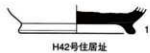
第136図 試掘調査出土遺物(1)



H31号住居址



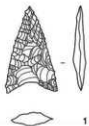
H34号住居址



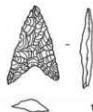
H42号住居址



H49号住居址



H37号住居址



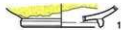
H50号住居址



H52号住居址



H66号住居址



H89号住居址



H91号住居址



H98号住居址



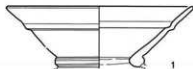
H100号住居址



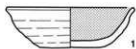
H97号住居址



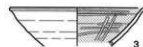
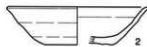
H102号住居址



H112号住居址



H115号住居址



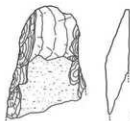
H119号住居址



D2号土坑

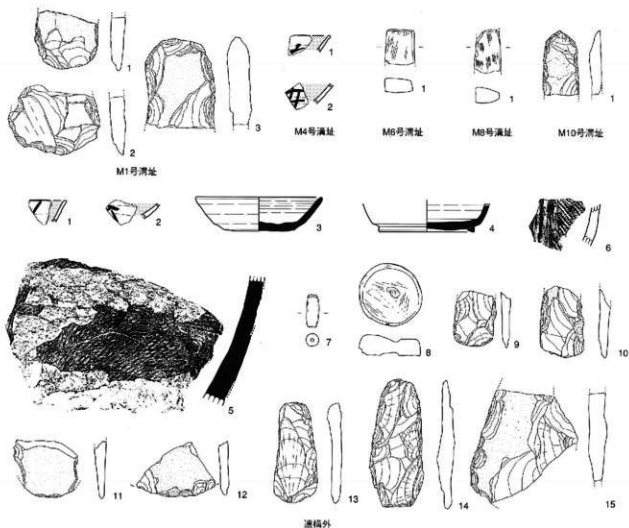


D5号土坑



D4号土坑

第137图 试掘調査出土遺物(2)



第138図 試掘調査出土遺物(3)

される。4は須恵器有台坏である。回転方向不明糸切によりロクロから切離され、周縁部ヘラケズリ後高台が貼付される。5は須恵器の甕である。縄状の印目が認められる。6は縄文時代中期後半加曾利E式の深鉢片である。7は管状の上鉢である。8は石製紡錘車の未製品である。9～15は打製石片である。すべてのものが欠損品である。

第4表 出土遺物整理表1

遺物 No	器 種	形 式	口徑(㎝)		底 徑(㎝)	器 高(㎝)	重 量(㌘)	外		内		備 考	
			口	底				成 形・調 整・文 飾	面				
H1	1	須恵器	杯	13.4	5.6	4.0						No.1	
	2	須恵器	杯	—	6.2	—		右面縁部切			火澤		
	3	須恵器	杯	—	6.0	—		右面縁部切			火澤		
	4	土師器	式	12.8	—	—		ヘラケズリ			ナデ	台付・No.3	
	5	土師器	式	21.2	4.0	—	27.3	ヘラケズリ・ヘラミダキ			ナデ		
	6	土師器	口	18.6	—	—	—	ロクロナデ			ロクロナデ		
	7	土師器	口	22.0	—	—	—	ロクロナデ			ロクロナデ		
	8	石製	瓶	7.6	4.2	4.0	110.3						立方体に磨磨 3面使用
	9	石製	瓶	12.8	9.4	3.8	390.0						
	H2	1	土師器	杯	12.0	5.8	4.1		右面縁部切				No.5
		2	土師器	杯	12.0	—	—		遺跡「7」				No.3・4・7
		3	土師器	杯	13.2	6.4	3.7		回転ヘラケズリ、遺跡「7」				No.1・3
		4	土師器	杯	13.0	5.2	4.0		右面縁部切				No.2・7
		5	土師器	杯	13.0	5.3	3.5		右面縁部切				No.3・4・6・7
		6	土師器	杯	13.0	6.6	3.6		右面縁部切				内面漆喰の付着物
		7	土師器	杯	13.2	5.0	4.0		右面縁部切、遺跡「7」				本来は内面?
		8	土師器	碗	—	6.6	—	—	方向不明部切、付高台				つかけがけ縁部
		9	土師器	碗	—	—	—	—	方向不明部切、付高台				つかけがけ縁部
		10	土師器	碗	—	—	—	—	方向不明部切、付高台				内面に粘付着、転用痕
11		土師器	碗	15.0	6.4	5.4		遺跡、付高台					
12		灰輪製	碗	—	8.0	—	—	回転ヘラケズリ、付高台、遺跡「本」					
13		灰輪製	碗	—	7.6	—	—	回転ヘラケズリ、付高台、遺跡「本」					
14		土師器	口	12.8	8.6	—	—	方向不明部切、回転ヘラケズリ、ロクロナデ					
15		土師器	口	22.4	—	—	—	ロクロナデ					
16		土師器	口	22.4	—	—	—	ロクロナデ					
17		土師器	瓶	7.0	8.1	3.0	540.0	ヘラケズリ、ロクロナデ					
18		石製	瓶	11.3	10.3	2.2	593.0						4面使用 2面使用
19		縄文土器	深	—	8.0	—	—	本要項					器入遺物
H3	1	土師器	杯	14.4	5.8	4.2		右面縁部切、表面縁部ヘラケズリ				No.7	
	2	土師器	杯	—	5.2	—		右面縁部切、底部・縁部ヘラケズリ					
	3	土師器	杯	—	5.6	—		右面縁部切、底部・縁部ヘラケズリ					
	4	土師器	杯	—	5.8	—		右面縁部切、ヘラケズリ、遺跡「7」				No.3	
	5	土師器	杯	—	6.0	—		方向不明部切、付高台					
	6	土師器	式	18.2	—	—	—	方向不明部切、付高台					
	7	縄文土器	瓶	—	—	—	—	ヘラケズリ					
	8	石製	瓶	10.0	4.8	2.5	220.0	半規竹葉押引					No.8 器入遺物
H4	1	土師器	杯	13.6	6.6	4.3		右面縁部切				筋割明式・面色処理	
	2	土師器	瓶	—	6.6	—	—	回転ヘラケズリ、付高台				筋割明式・面色処理	
	3	土師器	瓶	14.0	—	—	—	ヘラケズリ				筋割明式・面色処理	
	4	土師器	口	14.2	—	—	—	ロクロナデ				筋割明式・面色処理	
	5	土師器	口	22.6	—	—	—	ロクロナデ				筋割明式・面色処理	
	6	土師器	口	—	—	—	—	ロクロナデ				筋割明式・面色処理	
	7	須恵器	式	—	—	—	—	平行項目				筋割明式・面色処理 No.1	

第5表 出土遺物調査表2

遺跡	No	種類	形状	寸法			重量(g)	成形・調整・文様		備考
				口径(長)	底径(短)	高さ(厚)		内	外	
H5	1	土師器	杯	14.8	6.8	5.0	—	ヘラミガキ・黒色処理	NO1	
H6	2	土師器	杯	—	6.6	—	—	右側不明未切、底面凹陥ヘラケズリ		
	3	土師器	武蔵型	23.2	—	—	—	ヘラケズリ	ナデ	
	4	土師器	ロクロ型	17.0	—	—	—	ヘラケズリ	ナデ	
	5	土師器	ロクロ型	—	—	—	—	右側未切	ナデ	
H7	1	土師器	杯	12.8	5.8	4.3	—	右側未切、凹陥、器蓋「任」	ヘラミガキ・黒色処理	黒色処理2次火焼により消滅
	2	土師器	杯	12.8	6.2	4.3	—	右側未切	ヘラミガキ・黒色処理	
	3	土師器	杯	13.0	5.6	4.5	—	右側未切	ヘラミガキ・黒色処理	
	4	土師器	杯	13.2	5.6	4.1	—	右側未切	ヘラミガキ・黒色処理	
	5	土師器	杯	14.4	6.8	3.6	—	右側未切	ヘラミガキ・黒色処理	
	6	土師器	杯	—	4.6	—	—	右側未切	十字拍文・黒色処理	
	7	須恵器	杯	13.0	5.2	4.8	—	右側未切、凹陥、器蓋「任」	黒色処理	
	8	須恵器	杯	13.4	6.0	5.0	—	右側未切、凹陥	黒色処理	
	9	須恵器	杯	13.6	5.8	4.3	—	右側未切、凹陥	黒色処理	
	10	須恵器	杯	—	8.2	—	—	方向不明未切、次第	火焼	
H8	1	須恵器	有首埴	17.8	—	—	—	—	黒色処理	黒色処理2次火焼により消滅
	2	土師器	碗	13.8	—	—	—	—	口唇部ヘラミガキ・拍文・黒色処理	
	3	土師器	碗	15.8	—	—	—	—	—	
	4	土師器	碗	—	5.6	—	—	—	—	
	5	土師器	碗	—	7.0	—	—	—	—	
	6	土師器	碗	—	8.3	—	—	—	—	
	7	須恵器	皿	14.6	—	—	—	—	—	
	8	須恵器	皿	14.4	—	—	—	—	—	
	9	須恵器	皿	15.6	—	—	—	—	—	
	10	土師器	ロクロ型	13.0	—	—	—	—	—	
	11	土師器	ロクロ型	15.4	—	—	—	—	—	
	12	土師器	ロクロ型	15.4	—	—	—	—	—	
	13	土師器	ロクロ型	20.4	—	—	—	—	—	
	14	土師器	ロクロ型	—	5.0	—	—	—	—	
	15	土師器	ロクロ型	—	8.4	—	—	—	—	
	16	土師器	ロクロ型	—	12.0	—	—	—	—	
	17	土師器	武蔵型	19.0	—	—	—	—	—	
	18	土師器	武蔵型	21.0	—	—	—	—	—	
19	土師器	武蔵型	21.4	—	—	—	—	—		
20	土師器	武蔵型	—	5.1	—	—	—	—		
21	須恵器	刀子	4.5	0.9	0.6	6.0	—	—		
22	鉄器	7	2.3	0.4	0.4	—	—	—		
23	鉄器	釘	2.7	0.6	0.4	2.9	—	—		
24	鉄器	釘	7.2	4.3	1.8	77.1	—	—		
25	須恵器	鉢	13.2	7.2	4.2	—	—	—	2面使用	
26	須恵器	鉢	—	9.0	—	—	—	—	No1	
27	須恵器	鉢	16.0	—	3.5	—	—	—	No3	
28	土師器	杯	—	—	—	—	—	水滲	No4	
29	土師器	杯	—	—	—	—	—	ナデ		

第6表 出土遺物整理表3

遺構	No	遺種	遺形	法		量		外	内	備	考
				口徑(㎝)	底徑(㎝)	高さ(㎝)	重量(g)				
H8	5	土師器	壺	—	5.6	—	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	No.2	
	5	土師器	小型壺	31.6	4.8	12.4	—	ヘラミガキ	ナデ	No.2	
H9	1	須恵器	小形壺	16.4	—	—	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	No.1	
	3	土師器	鉢	16.4	—	—	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	No.1	
	3	土師器	武段壺	22.0	6.0	31.5	—	ヘラミガキ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・ナデ	No.3、1面使用	
	4	縄文土器	浮鉢	—	—	—	52% \pm 0	陶器・縄文	ナデ	No.3、1面使用	
	5	土師器	鉢	21.5	23.2	8.2	—	ヘラミガキ	ナデ		
	5	土師器	鉢	6.6	1.8	0.5	17.9	ヘラミガキ	ナデ		
H10	1	土師器	武段壺	17.4	—	—	—	ヘラミガキ	ナデ		
	2	土師器	武段壺	21.0	—	—	—	ヘラミガキ	ナデ		
	3	土師器	武段壺	21.2	—	—	—	ヘラミガキ	ナデ		
	4	土師器	武段壺	24.2	—	—	—	ヘラミガキ	ナデ		
	5	土師器	武段壺	22.0	—	—	—	ヘラミガキ	ナデ		
	6	土師器	武段壺	—	6.0	—	—	ヘラミガキ	ナデ		
	7	土師器	須恵壺	23.4	—	—	—	ヘラミガキ	ナデ		
	8	土師器	須恵壺	—	8.8	—	—	ヘラミガキ	ナデ		
	9	土師器	須恵壺	4.9	0.7	0.4	3.3	ヘラミガキ	ナデ		
	10	土師器	須恵壺	10.0	7.3	3.6	253.0	ヘラミガキ	ナデ		
	11	土師器	須恵壺	5.2	5.0	4.0	162.5	ヘラミガキ	ナデ		
H11	1	銅製品	柄	5.3	5.3	1.2	95.1	ヘラミガキ	ナデ	No.1	
	2	鉄器	柄	—	—	—	28.1	ヘラミガキ	ナデ	No.1	
H12	1	土師器	坏	14.4	5.4	4.0	—	白粉赤切	ヘラミガキ・黒色処理	No.4	
	2	土師器	坏	15.4	7.2	4.9	—	白粉赤切	ヘラミガキ・黒色処理	No.2	
	3	須恵器	坏	14.8	6.4	5.4	—	白粉赤切	火傷	No.3	
	4	須恵器	坏	14.0	8.2	4.0	—	白粉赤切	火傷	No.1	
	5	須恵器	坏	13.6	8.0	4.0	—	白粉赤切	火傷	No.1	
	6	須恵器	坏	15.0	—	—	—	ヘラミガキ	ナデ		
	7	土師器	武段壺	22.4	7.8	28.6	—	ヘラミガキ	ナデ		
	8	土師器	武段壺	20.2	—	—	—	ヘラミガキ	ナデ		
	9	土師器	武段壺	20.2	—	—	—	ヘラミガキ	ナデ		
	10	土師器	武段壺	—	4.2	—	—	ヘラミガキ	ナデ		
	11	土師器	小型ロクロ壺	12.2	—	—	—	ナデ	ロクロナデ		
	12	土師器	鉢	21.0	—	—	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理		
H13	1	須恵器	有台坏	13.8	8.5	3.8	—	白粉赤切	部分彩色ヘラミガキ	No.1	
	2	須恵器	有台坏	17.4	12.6	3.9	—	白粉赤切	部分彩色ヘラミガキ	1面使用	
	3	須恵器	有台坏	9.1	4.3	2.5	181.5	白粉赤切	ヘラミガキ		
H14	1	土師器	坏	13.3	6.4	3.8	—	手掛ヘラミガキ	陶文・黒色処理		
	2	土師器	坏	14.2	7.0	4.4	—	手掛赤切	十字陶文・黒色処理		
	3	土師器	小型ロクロ壺	8.4	—	—	—	ロクロナデ	陶文・黒色処理		
	4	土師器	ロクロ壺	—	6.4	—	—	白粉赤切	黒色処理		
	5	須恵器	壺	12.0	—	—	—	白粉赤切	ナデ		
	6	須恵器	釘?	2.6	0.1	0.4	1.7	ナデ	ナデ		
	7	須恵器	釘?	7.5	7.1	3.6	94.1	ナデ	ナデ		
	8	須恵器	柄	14.6	7.5	5.5	730.0	ナデ	ナデ		

第7表 出土文物目録表4

遺跡	No	土器部	器形	法			量			外	薬	備考
				口徑(㎝)	底径(㎝)	器高(㎝)	器重(㌘)	容量(㌘)				
H15	1	土器部	杯	12.2	3.8	3.5	—	—	手持ヘラケズリ	陶文・黒色処理	甲成系?、船土分析試料6 船土分析試料7	
	2	土器部	杯	14.2	6.2	4.0	—	—	手持ヘラケズリ	陶文・黒色処理		
	3	土器部	碗?	—	—	—	—	—	指書「匱」?	黒色処理		
	4	土器部	碗?	20.0	—	—	—	—	ハケ	ナデ		
	5	土器部	口タ口裏	20.8	—	—	—	—	ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ		
	6	土器部	口タ口裏	21.8	—	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ		
	7	土器部	口タ口裏	—	6.2	—	—	—	羅書「?」	ロクロナデ		
H16	1	土器部	杯	12.0	—	—	—	—	—	陶文・黒色処理	2次火焼により黒色処理済、船土分析試料8	
	2	土器部	杯?	15.0	—	—	—	—	—	陶文・黒色処理		
	3	土器部	碗?	17.0	—	—	—	—	ヘラミナデ、黒色処理	船土分析試料9		
	4	土器部	小口口口裏	12.6	6.2	13.6	—	—	ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ		
	5	土器部	口タ口裏	11.0	—	—	—	—	ロクロナデ、ヘラケズリ	ナデ		
	6	土器部	口タ口裏	27.2	—	—	—	—	ハケ	ナデ		
H17	1	土器部	杯	12.0	10.0	5.3	—	—	ヘラケズリ	ナデ、部分別にヘラミナデ	有口口縁系、No10、船土分析試料11	
	2	土器部	杯	12.6	13.3	5.6	—	—	ヘラケズリ→ヘラミナデ	ナデ		
	3	土器部	杯	12.8	10.6	4.6	—	—	ヘラケズリ→ヘラミナデ	ナデ		
	4	土器部	小型 碗	14.4	7.4	15.4	—	—	ヘラケズリ→ナデ	No9		
	5	土器部	小型 碗	21.8	—	—	—	—	ハケ	No5・6・7		
	6	土器部	碗	19.8	—	—	—	—	ハケ	ナデ		
	7	土器部	碗	—	—	—	—	—	ヘラケズリ→ナデ	ナデ		
	8	土器部	碗	—	—	—	—	—	ヘラケズリ→ナデ	ナデ		
	9	土器部	碗	12.1	—	—	—	—	ヘラケズリ→ナデ	ナデ		
	10	土器部	碗	—	5.4	—	—	—	ヘラケズリ→ナデ	ナデ		
	11	土器部	碗	—	—	—	—	—	ヘラケズリ→ナデ	ナデ		
	12	土器部	碗	14.4	—	9.9	—	—	ハケ	No4・5・8・7、船土分析試料12		
	13	土器部	碗	—	7.6	—	—	—	ヘラケズリ	No11		
H18	1	土器部	杯	16.2	7.6	5.0	—	—	手持カヘラケズリ	ヘラミナデ、黒色処理	本朝系、船土分析試料13 多孔、No2 多孔	
	2	土器部	杯	8.8	8.8	3.5	—	—	ナデ	ヘラミナデ、黒色処理		
	3	土器部	碗	17.0	6.6	—	—	—	ナデ	炭酸灰ヘラミナデ		
	4	土器部	碗	—	8.4	—	—	—	中心に方向不明な細糸切痕、付高台	ヘラミナデ、黒色処理		
	5	土器部	碗	—	—	—	—	—	指書「?」	ヘラミナデ、黒色処理		
	6	土器部	碗	—	—	—	—	—	指書「?」	ナデ		
	7	土器部	口タ口小口裏	8.8	—	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ		
	8	土器部	口タ口小口裏	11.2	—	—	—	—	ナデ	ロクロナデ		
	9	土器部	口タ口裏	19.5	—	—	—	—	ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ		
	10	土器部	口タ口裏	21.5	—	—	—	—	ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ		
	11	土器部	口タ口裏	29.0	—	—	—	—	ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ		
	12	土器部	頸口	—	—	—	—	—	—	ナデ		
	13	鉄部	釘	2.2	0.3	0.3	—	0.9	—	—		
H19	1	土器部	杯	13.2	5.8	4.9	—	—	肩縁ヘラケズリ	ヘラミナデ、黒色処理	No1 No3	
	2	土器部	杯	14.2	6.2	5.6	—	—	右側糸切	ヘラミナデ、黒色処理		
	3	土器部	有台 杯	12.6	6.8	4.9	—	—	右側ヘラケズリ→付高台	ナデ		
	4	須臾部	杯	—	6.0	—	—	—	右側糸切	ナデ		
	5	土器部	武 底 裏	3.0	—	—	—	—	ヘラケズリ	ナデ		

第8表 出土遺物調査表5

遺構	No	遺構種	屋形	口徑(径)	高さ(厚)	底径(底)	重量(重)	外	内	備考
H19	6	土師器	瓦	20.4	—	—	—	ヘラズリ	ナデ	No.3・4・5
	7	土師器	瓦	31.0	—	—	—	ヘラズリ	ナデ	No.2
	8	土師器	瓦	8.4	—	—	—	ナデ	ナデ	右部
	9	土師器	瓦	18.8	—	—	—	ナデ	ナデ	No.3・4
	10	石器	石	19.6	8.0	5.6	290.0	ヘラズリ	ヘラズリ	4.面使用, No.8
	11	石器	石	14.7	6.1	4.4	687.0	ヘラズリ	ヘラズリ	4.面使用, No.9
H20	1	土師器	坏	11.8	6.0	4.0	—	口許へワガキ, 方向不明同底糸切→頭部へヘラズリ	ヘラミガキ・黒色処理	
	2	土師器	坏	14.0	7.2	3.6	—	方向不明同底糸切	ヘラミガキ・黒色処理	
	3	土師器	坏	7.0	7.0	—	—	方向不明同底糸切→横縁へヘラズリ	ヘラミガキ・黒色処理	
	4	土師器	坏	14.2	7.0	5.4	—	同底方向不明同底糸切→付高台	ヘラミガキ・黒色処理	
	5	土師器	坏	7.4	7.4	—	—	右側糸切→付高台	ヘラミガキ・黒色処理	
	6	灰輪陶器	甕	—	6.0	—	—	底部中央に方向不明同底糸切痕、同底へヘラズリ→付高台	垂れ縁	
	7	土師器	瓦	—	5.8	—	—	ヘラズリ	ヘラズリ	
	8	土師器	口蓋	—	5.4	—	—	ヘラズリ	ハケム	
	9	土師器	蓋	—	6.6	—	—	同底方向不明同底糸切→付高台	ナデ	
H21	1	灰輪陶器	小	—	5.4	—	—	同底糸切、ヘラズリ、横縁	ナデ	
H22	1	土師器	坏	13.0	5.6	4.1	—	方向不明同底糸切、墨書「下」	暗文・黒色処理	
	2	灰輪陶器	甕	14.0	6.4	2.8	—	同底へヘラズリ→付高台、横縁	垂れ縁	つけがけ輪
	3	弥生土器	甕	—	—	—	—	横縁工具による刺突列	ナデ	中閉、墨入遺物
H23	1	土師器	坏	12.6	5.0	4.2	—	ヘラズリ・墨書「下」	ヘラミガキ・黒色処理	No.5
	2	土師器	坏	16.8	6.4	5.7	—	ヘラズリ	ヘラミガキ・黒色処理	No.6
	3	土師器	坏	11.0	5.8	4.4	—	右側糸切、墨書「下」	ヘラミガキ・黒色処理	No.2
	4	土師器	坏	12.4	6.0	4.0	—	右側糸切	ヘラミガキ・黒色処理	No.3
	5	土師器	坏	12.8	4.6	4.1	—	右側糸切	ヘラミガキ・黒色処理	No.1
	6	土師器	坏	13.0	5.0	3.8	—	右側糸切	ヘラミガキ・黒色処理	No.7
	7	土師器	坏	13.0	5.0	3.8	—	右側糸切	ヘラミガキ・黒色処理	
	8	土師器	坏	14.6	6.2	5.0	—	右側糸切	ヘラミガキ・黒色処理	
	9	土師器	坏	—	5.0	—	—	右側糸切	ヘラミガキ・黒色処理	
	10	土師器	坏	11.8	—	—	—	右側糸切	ヘラミガキ・黒色処理	
	11	土師器	坏?	13.4	—	—	—	右側糸切	ヘラミガキ・黒色処理	
	12	土師器	坏	14.8	—	—	—	右側糸切	ヘラミガキ・黒色処理	
	13	土師器	坏	—	—	—	—	方向不明同底糸切	ヘラミガキ・黒色処理	
	14	土師器	坏	15.0	—	—	—	方向不明同底糸切	ヘラミガキ・黒色処理	
	15	土師器	坏?	—	—	—	—	墨書「下」	暗文・黒色処理	
	16	土師器	坏?	—	—	—	—	墨書「上」	ヘラミガキ・黒色処理	
	17	土師器	口蓋	21.0	—	—	—	口蓋ナデ・ヘラズリ	ヘラミガキ・黒色処理	
	18	縄文土器	深	—	—	—	—	横文・横帯	ハケム	
	19	土師器	甕	12.4	4.8	2.3	188.4	同底糸切、墨書「下」	ヘラミガキ・黒色処理	中閉後半留付筒型
H24	1	土師器	坏	14.6	7.0	4.4	—	右側糸切、墨書「下」	ヘラミガキ・黒色処理	
	2	土師器	坏	13.8	—	—	—	黒色処理	ヘラミガキ・黒色処理	
	3	土師器	坏	14.0	—	—	—	黒色処理	黒色処理	
	4	土師器	坏	—	6.4	—	—	右側糸切	黒色処理	
	5	土師器	坏	—	—	—	—	墨書「上」	黒色処理	
	6	土師器	坏	—	—	—	—	墨書「下」	黒色処理	

第9表 出土遺物目録表6

遺物 No	種別	形状	口径(㎜)	底径(㎜)	高さ(㎜)	重量(㌘)	外 形	内 容	備 考
H24	7 土師器	坏	—	—	—	—	遺跡「？」 器蓋「？」	黒色粘土・黒色処理	
8	土師器	坏	13.5	7.0	4.0	—	胴輪ヘラナズリ→付首付、胴輪	黒色粘土 重厚肌・胴輪	つけかけ
9	灰釉器	碗	15.4	—	—	—	胴輪	胴輪	つけかけ
10	灰釉器	碗	—	8.6	—	—	ロクロナズリ	重厚肌・胴輪	
11	灰釉器	ロクロ小窓	14.2	—	—	—	ロクロナズリ	ナズリ	
12	土師器	ロクロ小窓	21.0	—	—	—	方角不明胴輪糸切	ハケメ・ナズリ	No3
13	土師器	ロクロ小窓	—	9.0	—	—	方角不明胴輪糸切	別荘跡・ナズリ	
14	須恵器	甕	—	12.8	—	—	平付(厚目、ヘラナズリ)		
15	須恵器	甕	—	15.0	—	—	ヘラナズリ		
16	須恵器	甕	—	—	—	—	平付(厚目、ヘラナズリ)		
17	須恵器	甕	—	—	—	—	胴輪		
18	灰釉器	長頸壺	19.1	—	0.5	22.2	—		内通円筒、転出機と思われる
19	灰釉器	7	—	4.2	—	—	右胴輪糸切	ヘラミガキ・黒色処理	No2
H25	1 土師器	坏	—	6.0	—	—	右胴輪糸切、器蓋「？」	ヘラミガキ	
2	土師器	坏	—	7.1	—	—	胴輪ヘラナズリ→付首付	京道貝の形跡、胴輪	角部付
3	灰釉器	段	—	—	—	—	—	ヘラミガキ・黒色処理	
H27	1 土師器	坏	15.3	7.2	3.9	—	方角不明胴輪糸切	ロクロナズリ	
2	土師器	ロクロ小窓	17.5	—	—	—	ロクロナズリ、ヘラナズリ	胴輪	
3	須恵器	白釉支脚付甕	—	—	—	—	平付(厚目)		
4	土製土器	口	—	—	—	—	—		
5	土製土器	口	—	—	—	—	—		
6	土製土器	刀	14.2	1.1	2.5	12.3	—		
7	石器	砥	11.5	15.2	5.5	830.0	—		4面使用、No1
H28	1 土師器	坏	13.8	6.8	3.4	—	方角不明胴輪糸切	ヘラミガキ	
2	土師器	坏	—	5.4	—	—	右胴輪糸切	陶文、黒色処理	
3	土師器	ロクロ小窓	13.5	—	—	—	ロクロナズリ	ロクロナズリ	
4	土師器	ロクロ小窓	19.4	—	—	—	ロクロナズリ、ヘラナズリ	ハケメ、ロクロナズリ	
5	土師器	ロクロ小窓	29.8	—	—	—	ロクロナズリ、ヘラナズリ	ナズリ	
H29	1 土師器	坏	12.4	6.2	3.5	—	胴輪ヘラナズリ	ヘラミガキ・黒色処理	
2	土師器	坏	12.8	5.8	4.7	—	右胴輪糸切	ヘラミガキ	No3
3	土師器	坏	12.8	6.2	3.9	—	右胴輪糸切→胴輪ヘラナズリ	ヘラミガキ・黒色処理	
4	土師器	坏	14.8	7.8	4.2	—	手付ヘラナズリ	ヘラミガキ・黒色処理	
5	土師器	坏	13.2	6.0	6.9	—	右胴輪糸切	ヘラミガキ・黒色処理	No1
6	土師器	坏	13.4	—	—	—	—	ヘラミガキ・黒色処理	
7	土師器	坏	—	6.6	—	—	胴輪ヘラナズリ・胴輪「外」	ヘラミガキ・黒色処理	
8	土師器	甕	15.0	7.0	5.2	—	右胴輪糸切付・付首付	ヘラミガキ・黒色処理	
9	土師器	甕	14.8	6.0	5.2	—	方角不明胴輪糸切→胴輪ヘラナズリ→付首付	ヘラミガキ・黒色処理	欠損した部分を除きして使用、No4
10	土師器	甕	17.8	—	—	—	—	ヘラミガキ・黒色処理	
11	土師器	甕	—	—	—	—	器蓋「？」	ヘラミガキ・黒色処理	No2
12	須恵器	坏	13.6	4.8	5.1	—	右胴輪糸切		
13	土師器	坏	12.0	—	—	—	ロクロナズリ	ロクロナズリ	
14	土師器	ロクロ小窓	12.2	—	—	—	ロクロナズリ	ロクロナズリ	
15	土師器	ロクロ小窓	—	7.6	—	—	ロクロナズリ	ロクロナズリ	
16	土師器	式底甕	19.0	—	—	—	ヘラナズリ	ハケメ	

第31表 出土遺物調査表-7

遺構	No	器種	器形	法			重量(g)	内 径	備 考	
				口径(φ)	底径(φ)	器高(φ)				
H29	17	鉄 器	7	12.8	7.1	1.0	33.4		N65	
	18	銅 文 土 器	7	3.2	0.6	0.6	4.1		中期後半加群層Ⅱ	
	H30	1	土 師 器	杯	11.4	4.4	4.3		縄文・土線	
		2	土 師 器	杯	11.6	5.4	4.5		石目絵糸切	
		3	土 師 器	杯	12.0	5.8	4.5		石目絵糸切	
		4	土 師 器	杯	12.8	4.8	4.2		石目絵糸切	
		5	土 師 器	杯	13.4	6.2	4.2		石目絵糸切	
		6	土 師 器	杯	13.4	6.0	4.5		回転方向不明糸切	
		7	土 師 器	杯	13.4	7.2	4.2		石目絵糸切・取柄	
		8	土 師 器	杯	14.0	7.0	4.3		石目絵糸切・取柄	
		9	土 師 器	碗	13.6	6.4	6.6		付高付・取柄「J」	
		10	土 師 器	碗	16.0	(6.2)	(5.7)		回転方向不明糸切→付高付	
	11	土 師 器	小形甕	15.4	7.0	11.6	12.4	回転方向不明糸切→付高付		
12	鉄 文 土 器	刀	6.5	1.4	0.4		ロウコナテ・ヘラケズリ			
13	鉄 文 土 器	刀	—	—	—		縄文・土線			
H31	1	土 師 器	杯	13.6	6.4	4.0	64.9	石目絵糸切	中期後半加群層Ⅱ	
	2	土 師 器	盃	7.4	11.0	0.6				
H32	1	土 師 器	杯	12.8	6.0	4.3		石目絵糸切		
	2	土 師 器	杯	13.0	5.4	4.2		回転方向不明糸切→取柄ヘラケズリ		
	3	土 師 器	杯	15.2	6.8	4.9		石目絵糸切		
	4	土 師 器	碗	14.2	7.0	5.8		回転方向不明糸切。ケズリにより黒色消去		
	5	土 師 器	碗	15.2	—	—		方向不明回転糸切→取柄ヘラケズリ→付高付		
	6	土 師 器	武 儀 甕	20.0	—	—		ヘラケズリ		
	7	土 師 器	武 儀 甕	—	4.4	—	65.0			
	8	鉄 器	武 儀 甕	12.0	3.8	0.3				
	9	鉄 器	石	1.2	1.3	0.3				
H33	1	土 師 器	杯	14.1	—	—		「龍」と思われる目跡		
	2	土 師 器	杯	14.2	—	—		ヘラミガキ・黒色処理		
	3	土 師 器	杯	16.2	—	—		ヘラミガキ・黒色処理		
	4	須 忌 器	外 甕	14.4	—	—		ヘラミガキ・黒色処理		
	5	土 師 器	武 儀 甕	18.2	—	—		ナデ		
	6	土 師 器	武 儀 甕	—	3.4	—		ナデ		
H34	1	土 師 器	杯	14.8	7.4	3.8		ヘラケズリ		
	2	土 師 器	碗	13.2	7.4	5.3		方向不明回転糸切→ヘラによる回転ナデ		
	3	土 師 器	碗	15.6	—	—		石目絵糸切→付高付		
	4	土 師 器	武 儀 甕	13.5	—	—		ヘラミガキ		
	5	土 師 器	武 儀 甕	18.6	—	—		ナデ		
	6	土 師 器	武 儀 甕	10.2	—	—		ハヤタ・ナデ		
	7	鉄 器	武 儀 甕	8.1	—	—	24.2	ハヤタ・ナデ		
H35	1	土 師 器	杯	12.0	6.4	4.0		方向不明回転糸切		
	2	土 師 器	杯	13.2	5.6	4.6		石目絵糸切		
	3	土 師 器	杯	14.4	8.2	4.6		ヘラミガキ・黒色処理		
	4	土 師 器	杯	13.2	—	—		取柄「J」		

第11表 出土物種別表9

遺構	No	源 器	器 形	口 徑(㎝)	底 径(㎝)	器 高(㎝)	重 量(㌘)	外 形	成 形・装 飾・文 飾	内 装	備 考
H35	1	土 師 器	罎	—	6.4	—	—	右面転染切	ヘラミダキ・黒色処理	No1	
	2	須 恵 器	坏	13.0	5.6	3.7	—	右面転染切	ナデ		
	3	土 師 器	ロクロ小壺	10.0	—	—	—	ヘラケズリ・ナデ	ナデ		
	4	土 師 器	瓦 瓦 葺	21.4	—	—	—	ヘラケズリ・ナデ	ハケミ・ナデ		
	5	土 師 器	ロクロ口罎	23.4	—	—	—	編文・踏	ハケミ		
	6	土 師 器	深 鉢	—	—	—	—	編文・踏			中期後半木加群E
	7	土 師 器	深 鉢	—	—	—	—	編文			中期後半木加群E
	8	土 師 器	深 鉢	—	—	—	—	編文			後群E之内
	9	土 師 器	深 鉢	—	—	—	—	押付踏・編文・波線			
	10	土 師 器	深 鉢	—	—	—	—	右面転染切	黒色処理・ナデ		
	11	土 師 器	白 罎	17.1	15.7	11.0	359.0	右面転染切	ヘラミダキ・黒色処理		
	12	土 師 器	坏	11.8	4.7	4.6	—	方向不明転染切	ヘラミダキ・黒色処理		粘土分析試料14
	H36	1	土 師 器	坏	14.8	6.0	5.0	—	方向不明転染切	ヘラミダキ・黒色処理	
2		土 師 器	坏	13.8	—	—	—	加敷方向不明転染切	ヘラミダキ・黒色処理		
3		土 師 器	坏	14.8	6.6	6.3	—	加敷方向不明転染切	ヘラミダキ・黒色処理		
4		土 師 器	瓦 瓦 葺	14.0	6.4	5.6	—	加敷方向不明転染切	ヘラミダキ・黒色処理		
5		須 恵 器	瓦 瓦 葺	—	—	—	—	右面転染切・ヘラケズリ・ナデ	ロクロケズリ		
6		土 師 器	双 月 蓋	—	8.8	—	—	ロクロケズリ	ロクロケズリ		
7		土 師 器	ロクロ小壺	13.6	—	—	—	ロクロケズリ	ロクロケズリ		
8		土 師 器	ロクロ口罎	21.8	—	—	—	ロクロケズリ	ロクロケズリ		
9		土 師 器	刀	9.0	1.2	0.5	16.4	ロクロケズリ	ヘラケズリ		No1
10		土 師 器	坏	11.8	7.4	5.4	—	右面転染切	ヘラミダキ・黒色処理		
11		土 師 器	坏	12.8	7.4	4.6	—	ナデ	十字脚文・黒色処理		
12		土 師 器	外 坏	13.6	6.2	4.9	—	右面転染切	ヘラミダキ・黒色処理		No1
H37		1	土 師 器	坏	14.0	5.4	4.4	—	ナデ	十字脚文・黒色処理	
	2	土 師 器	坏	14.2	—	—	—	ナデ	十字脚文・黒色処理		
	3	土 師 器	坏	14.0	5.4	4.4	—	ナデ	十字脚文・黒色処理		
	4	土 師 器	坏	14.2	—	—	—	ナデ	十字脚文・黒色処理		
	5	土 師 器	坏	14.6	—	—	—	ナデ	十字脚文・黒色処理		
	6	土 師 器	坏	14.6	8.0	5.3	—	ナデ	十字脚文・黒色処理		
	7	土 師 器	坏	15.0	7.4	5.0	—	ナデ	十字脚文・黒色処理		
	8	土 師 器	ロクロ罎	21.4	—	—	—	ナデ	十字脚文・黒色処理		
	9	須 恵 器	罎	—	15.0	—	—	ナデ	十字脚文・黒色処理		
	10	須 恵 器	肥 手 付 罎	—	—	—	—	ナデ	十字脚文・黒色処理		
	11	土 師 器	罎	10.0	8.9	5.3	639.0	右面転染切	ヘラミダキ・黒色処理		
	12	土 師 器	罎	14.0	6.0	4.2	—	右面転染切	ヘラミダキ・黒色処理		
	H38	1	土 師 器	罎	—	5.6	—	—	右面転染切	ヘラミダキ・黒色処理	
2		土 師 器	罎	—	5.8	—	—	ナデ	ヘラミダキ・黒色処理		
3		土 師 器	罎	16.0	—	—	—	ナデ	ヘラミダキ・黒色処理		
4		土 師 器	罎	15.0	—	—	—	ナデ	ヘラミダキ・黒色処理		
5		須 恵 器	罎	—	6.2	—	—	右面転染切	ヘラミダキ・黒色処理		
6		須 恵 器	罎	4.0	1.7	1.7	16.0	右面転染切	ヘラミダキ・黒色処理		
7		土 師 器	土 罎	4.0	1.7	1.7	10.0	右面転染切	ヘラミダキ・黒色処理		
8		土 師 器	土 罎	4.6	2.0	2.0	12.9	右面転染切	ヘラミダキ・黒色処理		
9		土 師 器	罎	9.3	5.2	2.8	—	右面転染切・踏 [付]	ヘラミダキ・黒色処理		No1
10		土 師 器	罎	11.6	10.0	3.5	—	ヘラケズリ	ナデ		
11		土 師 器	罎	12.0	6.4	4.5	—	ヘラケズリ	ナデ		
12		土 師 器	罎	15.2	13.0	4.4	—	ヘラケズリ	陶文・口唇部		
13		土 師 器	罎	12.4	11.6	—	—	ヘラケズリ	陶文・口唇部		
14	土 師 器	罎	—	—	—	—	右面転染切・踏 [付]	ナデ			
15	須 恵 器	有 坏 罎	—	5.8	—	—	右面転染切・踏 [付]	ナデ			
16	須 恵 器	有 坏 罎	—	6.8	—	—	右面転染切・踏 [付]	ナデ			

遺構 No	遺構 No	遺構 種類	遺構 形状	遺構 位置			遺構 面積(㎡)	遺構 容量(貯)	内外	面	備考
				口 径(段)	底 径(段)	高 度(段)					
H40	7	須置器	壺	14.8	—	—	—	—	ヘラクサズリ	ヘラクサズリ	第1分析試料②
	8	須置器	杯	14.6	3.4	—	—	—	ナデ・部分的なヘラミガキ	ナデ・部分的なヘラミガキ	つまみ欠損
	9	土師器	杯	6.6	7.4	10.7	—	—	ヘラクサズリ・ヘラミガキ	ヘラクサズリ	徳成前穿孔
	10	土師器	壺	15.4	—	4.8	—	—	ナデ	ナデ	
	11	土師器	壺	17.6	—	—	—	—	ナデ	ナデ	
	12	土師器	壺	17.6	—	—	—	—	ナデ	ナデ	
	13	土師器	壺	—	—	—	—	—	ナデ	ナデ	
	14	土師器	壺	—	—	—	—	—	ナデ	ナデ	No3
	15	土師器	壺	—	—	—	—	—	ナデ	ナデ	
	16	土師器	壺	—	—	—	—	—	ナデ	ナデ	
	17	土師器	壺	14.6	—	—	—	—	ナデ	ナデ	
	18	土師器	壺	22.0	5.0	38.2	—	—	ナデ	ナデ	No1, 第1分析試料②
	19	土師器	壺	21.4	—	—	—	—	ナデ	ナデ	No2, 第1分析試料②
	20	鉄器	釵	6.0	2.8	—	—	15.1	ナデ	ナデ	No4
	21	石器	石製品	4.2	—	2.3	—	37.0	ナデ	ナデ	
	22	石器	石製品	4.0	—	2.0	—	48.7	ナデ	ナデ	
	23	石器	石製品	6.4	7.5	4.6	—	418.0	ナデ	ナデ	
24	石器	石製品	12.2	4.9	3.9	—	419.0	ナデ	ナデ		
25	石器	石製品	10.0	4.1	3.9	—	304.0	ナデ	ナデ		
26	石器	石製品	13.7	5.9	2.3	—	286.0	ナデ	ナデ		
27	石器	石製品	12.0	4.9	2.6	—	247.0	ナデ	ナデ		
H42	1	土師器	杯	12.0	6.3	3.0	—	—	手持ヘラクサズリ	手持ヘラクサズリ	
	2	土師器	壺	—	3.2	—	—	—	ヘラクサズリ	ヘラクサズリ	
	3	鉄器	針	11.6	6.5	0.7	—	17.2	ヘラクサズリ	ヘラクサズリ	
H43	1	土師器	鉢	20.4	—	—	—	—	ヘラクサズリ	ヘラクサズリ	
	2	土師器	壺	—	7.9	—	—	—	ヘラクサズリ	ヘラクサズリ	
	3	瓦葺陶器	長皿	12.4	—	—	—	—	ヘラクサズリ	ヘラクサズリ	
H44	1	弥生土器	鉢	19.4	—	—	—	—	赤彩	赤彩	
	2	弥生土器	壺	—	—	—	—	—	赤彩	赤彩	
	3	弥生土器	壺	—	4.9	—	—	—	赤彩	赤彩	
	4	弥生土器	壺	8.6	—	—	—	—	赤彩	赤彩	
	5	弥生土器	壺	9.0	—	—	—	—	赤彩	赤彩	
	6	弥生土器	壺	12.4	—	—	—	—	赤彩	赤彩	
	7	弥生土器	壺	—	—	—	—	—	赤彩	赤彩	
	8	弥生土器	壺	—	—	—	—	—	赤彩	赤彩	
	9	弥生土器	壺	—	—	—	—	—	赤彩	赤彩	
	10	弥生土器	壺	—	—	—	—	—	赤彩	赤彩	
	11	弥生土器	壺	—	—	—	—	—	赤彩	赤彩	
	12	弥生土器	壺	—	—	—	—	—	赤彩	赤彩	
	13	弥生土器	壺	—	—	—	—	—	赤彩	赤彩	
	14	弥生土器	壺	—	—	—	—	—	赤彩	赤彩	
	H45	1	土師器	壺	11.4	3.9	—	—	—	赤彩	赤彩
2		土師器	杯	13.4	3.2	—	—	—	赤彩	赤彩	

遺物 No	遺物 種	器 形	法		量		外	内		備 考		
			口 径(㎝)	底 径(㎝)	器 高(㎝)	重 量(g)		内 容	重 量			
目45	3 土 師 器	杯	13.8	—	—	—	ナブ	—	—	種族の付着物 目45同一個体? 目47同一個体? No1		
	4 土 師 器	杯	14.4	—	—	—	胎文・黒色処理	—	—			
	5 須 恵 器	杯	14.2	6.0	—	—	地 輪	—	—			
	6 灰 輪 陶 器	皿	15.2	—	—	—	ヘラミガキ・黒色処理	—	—			
	7 土 師 器	鉢	17.2	9.0	—	—	石目結ぶ切	—	—			
	8 土 師 器	鉢	10.2	—	—	—	方向不明な切	—	—			
	9 土 師 器	コタロ小型	13.8	—	—	—	コタロナブ	—	—			
	10 土 師 器	コタロ小型	21.8	—	—	—	コタロナブ	—	—			
	11 土 師 器	武蔵	19.0	—	—	—	コタロナブ	—	—			
	12 土 師 器	武蔵	33.4	—	—	—	ヘラミガキ	—	—			
	13 土 師 器	武蔵	—	8.0	—	—	ナブ	—	—			
	14 灰 器	子	9.5	1.8	0.4	15.1	ナブ	—	—			
	15 灰 器	刀	4.8	0.4	0.6	2.1	ナブ	—	—			
	16 灰 器	動 車	8.2	5.1	0.6	25.4	ナブ	—	—			
	目47	1 弥生土器	罎	—	5.2	—	—	ハケメ	ハケメ・ヘラミガキ		—	No1, つながり輪縁 つりがけ風輪
		2 土 師 器	壺	14.0	5.6	3.5	—	赤彩・神代工具による平付浅彫・顔面文	ハケメ		—	
3 土 師 器		杯	15.0	8.6	3.9	—	石目結ぶ切・墨書「内」	ナブ	—			
4 土 師 器		杯	15.6	6.4	5.1	—	胎文・黒色処理	胎文・黒色処理	—			
5 土 師 器		杯	14.4	—	—	—	手付ヘラミガキ	胎文・黒色処理	—			
6 土 師 器		杯	14.8	—	—	—	墨書「7」	胎文・黒色処理	—			
7 灰 輪 陶 器		碗	14.2	7.8	4.5	—	墨書「7」	墨輪縁	—			
8 土 師 器		碗	14.6	—	—	—	墨書「7」	墨輪縁	—			
9 土 師 器		鉢	23.4	—	—	—	墨書「7」	墨輪縁	—			
10 土 師 器		コタロ実	25.0	—	—	—	コタロナブ	コタロナブ	—			
11 土 師 器		コタロ実	25.6	—	—	—	コタロナブ	コタロナブ	—			
12 土 師 器		刀	8.0	1.1	0.4	3.0	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—			
13 土 師 器		子	2.5	0.3	0.3	1.1	—	—	—			
目49	1 土 師 器	杯	11.4	4.4	3.0	—	方向不明な胎文	ナブ	—	No1, つながり輪縁 つりがけ風輪		
	2 土 師 器	杯	13.4	—	—	—	墨書「室」	胎文	—			
	3 土 師 器	碗	13.4	7.0	—	—	胎文	胎文	—			
	4 灰 輪 陶 器	碗	13.4	—	—	—	胎文	胎文	—			
	5 土 師 器	コタロ実	24.0	—	—	—	コタロナブ	コタロナブ	—			
	6 土 師 器	コタロ実	—	7.2	—	—	コタロナブ	コタロナブ	—			
	7 陶文土器	鉢	—	—	—	—	比喩	ナブ・ハケメ	—			
	8 石 器	打製石片	14.6	6.0	2.7	275.0	—	—	—			
	9 灰 器	?	4.3	0.6	0.5	4.3	—	—	—			
	10 灰 器	?	1.7	0.4	0.4	0.9	—	—	—			
目50	1 弥生土器	鉢	26.3	6.8	10.5	—	口唇部に1本の甲線・赤彩	赤彩	—	No1-4 No2 No3		
	2 弥生土器	杯	—	5.6	—	—	赤彩	ヘラミガキ・ヘラミガキ	—			
	3 弥生土器	罎	20.4	10.0	43.2	—	口唇部・縦江による胎文・乳・墨書 縦江に上唇周文	ヘラミガキ	—			
	4 弥生土器	罎	—	—	—	—	胎文・ヘラミガキ・赤彩・刻目	ナブ	—			
	5 弥生土器	罎	14.4	—	—	—	胎文・ヘラミガキ・赤彩・刻目	口唇部赤彩・ハケメ・ナブ	—			

第14表 出土土器類様式1

遺跡 No	器種	器形	法		量		外		内		備考
			口径(底)	底径(底)	高さ(厚)	重量(g)	形状・胎地	成形・表面	文様・文様	面	
H50	1	縄文土器 甕	—	—	—	—	—	縄文・赤彩	—	—	中層後半加群同正
	2	弥生土器 鉢	21.4	5.2	9.0	—	赤彩	ハタメヘラミガキ	赤彩	—	No5
	3	弥生土器 手	21.4	4.0	—	—	ハタメヘラミガキ	ヘラケズリ	ナデ	—	No2
	4	弥生土器 甕	—	8.0	—	—	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	—
	5	弥生土器 甕	—	—	—	—	縄文・古銅・明細状工具による赤線	ハタメヘラミガキ・ヘラケズリ	ヘラミガキ	—	No3-4
	6	弥生土器 甕	11.6	—	—	—	縄文・古銅・明細状工具による赤線	ハタメヘラミガキ・ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	No1
	7	弥生土器 甕	12.6	—	—	—	細線状工具による赤線・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	赤彩	—	No6
	8	弥生土器 甕	—	9.0	—	—	ヘラミガキ	ヘラケズリ	縄文・黒色処理	—	—
	9	弥生土器 甕	13.4	11.2	4.4	—	右面転染切	ヘラケズリ→付高台	—	—	—
H51	1	須恵器 付台	—	9.2	—	—	ヘラケズリ・次第	水澤	ナデ	—	—
	2	須恵器 杯	15.9	—	—	—	ヘラケズリ	ナデ	ナデ	—	—
	3	須恵器 武	20.0	—	—	—	ヘラケズリ	ナデ	ナデ	—	—
	4	須恵器 武	22.6	4.0	—	—	ヘラケズリ	ナデ	ナデ	—	—
	5	須恵器 武	—	4.0	—	—	ヘラケズリ	ナデ	ナデ	—	—
	6	須恵器 紙	6.7	2.9	1.7	67.2	ヘラケズリ	ナデ	ナデ	—	—
	7	須恵器 杯	11.6	5.0	4.8	—	右面転染切	ヘラケズリ	ヘラミガキ	—	—
	8	須恵器 杯	12.8	5.2	4.4	—	右面転染切	方角不明転染切	取付筒状ヘラミガキ・黒色処理	—	—
	9	須恵器 杯	13.4	8.0	5.4	—	右面転染切	方角不明転染切・黒線「等」	十字筒文・黒色処理	—	—
	10	須恵器 杯	—	—	—	—	右面転染切	黒線「等」	ヘラミガキ・黒色処理	—	No1
H52	1	須恵器 杯	12.8	6.0	4.5	—	右面転染切	右面転染切	ロクロナデ	—	—
	2	須恵器 杯	13.4	5.2	4.5	—	右面転染切	右面転染切	ロクロナデ	—	—
	3	須恵器 杯	14.4	—	—	—	右面転染切	右面転染切	ロクロナデ	—	—
	4	須恵器 杯	20.8	—	—	—	右面転染切	右面転染切	ロクロナデ	—	—
	5	須恵器 杯	20.6	—	—	—	右面転染切	右面転染切	ヘラケズリ	—	—
	6	須恵器 杯	20.6	—	—	—	右面転染切	右面転染切	ヘラケズリ	—	—
	7	須恵器 杯	15.2	7.6	3.5	—	方角不明転染切	方角不明転染切	ヘラケズリ	—	—
	8	須恵器 杯	12.4	5.4	—	—	方角不明転染切	方角不明転染切	ヘラミガキ・黒色処理	—	—
	9	須恵器 杯	—	—	—	—	方角不明転染切	方角不明転染切	ヘラミガキ・黒色処理	—	—
	10	須恵器 杯	17.0	—	—	—	方角不明転染切	方角不明転染切	ヘラミガキ・黒色処理	—	—
H55	1	須恵器 小型口口甕	—	4.8	—	—	黒線	右面転染切・ロクロナデ	ロクロナデ	—	—
	2	須恵器 口口口甕	21.0	—	—	—	黒線	右面転染切・ロクロナデ	ロクロナデ	—	—
	3	須恵器 口口口甕	25.2	—	—	—	黒線	右面転染切・ロクロナデ	ロクロナデ	—	—
	4	須恵器 口口口甕	25.2	—	—	—	黒線	右面転染切・ロクロナデ	ロクロナデ	—	—
	5	須恵器 口口口甕	7.0	0.8	0.5	7.6	黒線	ナデ転染のヘラケズリ	ロクロナデ	—	—
	6	須恵器 口口口甕	11.8	5.4	4.5	—	黒線	右面転染切	黒色処理	—	—
	7	須恵器 口口口甕	12.2	6.2	4.0	—	黒線	右面転染切	ヘラミガキ・黒色処理	—	—
	8	須恵器 口口口甕	12.5	5.3	4.0	—	黒線	右面転染切	ヘラミガキ・黒色処理	—	—
H56	1	須恵器 杯	12.0	6.0	5.5	—	黒線	右面転染切・黒線「等」	ヘラミガキ・黒色処理	—	—
	2	須恵器 杯	13.0	5.4	3.6	—	黒線	右面転染切	ヘラミガキ・黒色処理	—	—
	3	須恵器 杯	13.0	5.3	4.2	—	黒線	右面転染切	ヘラミガキ・黒色処理	—	—
	4	須恵器 杯	13.0	6.0	4.3	—	黒線	右面転染切	ヘラミガキ・黒色処理	—	—
	5	須恵器 杯	13.2	6.0	4.2	—	黒線	右面転染切	ヘラミガキ・黒色処理	—	—
	6	須恵器 杯	13.2	6.0	4.2	—	黒線	右面転染切	ヘラミガキ・黒色処理	—	—
	7	須恵器 杯	13.2	6.0	4.2	—	黒線	右面転染切	ヘラミガキ・黒色処理	—	—
	8	須恵器 杯	13.2	6.0	4.2	—	黒線	右面転染切	ヘラミガキ・黒色処理	—	—
	9	須恵器 杯	13.2	6.0	4.2	—	黒線	右面転染切	ヘラミガキ・黒色処理	—	—

遺物 番号	器 種	器 形	口 径(φ)	底 径(φ)	高 度(φ)	重 量(g)	外 形・面 積・文様	内 面 積	備 考
1156	No	土 師 器	13.3	6.5	4.4				
11	土 師 器	杯	13.6	6.2	4.6		右側底辺切	紺文・黒色風麗	No3
12	土 師 器	杯	14.4	6.0	4.8		右側底辺切・周縁部へラケズリ	へラミガキ・黒色風麗	
13	土 師 器	杯	14.4	5.4	4.6		右側底辺切・黒色風麗	黒色風麗	
14	土 師 器	杯?	15.6	—	—		黒澤「?」	紺文・黒色風麗	
15	土 師 器	杯?	—	8.6	—		右側底辺切・周縁部へラケズリ・黒澤「?」	へラミガキ・黒色風麗	
16	土 師 器	碗	15.2	—	—		脚板方向不明辺切	へラミガキ・黒色風麗	
17	土 師 器	碗	16.0	7.5	5.7		脚板方向不明辺切	へラミガキ・黒色風麗	
18	土 師 器	碗	16.4	7.2	5.6		ナデ	紺文・黒色風麗	
19	土 師 器	碗	16.0	—	—		脚板方向不明辺切	へラミガキ・黒色風麗	
20	土 師 器	碗	—	—	—		黒澤「集?」	へラミガキ・黒色風麗	
21	土 師 器	碗	—	—	—		黒澤「?」	へラミガキ・黒色風麗	
22	土 師 器	皿	11.5	6.6	3.1		脚板方向不明辺切・付蓋台	へラミガキ・黒色風麗	
23	土 師 器	皿	12.4	6.4	3.4		付蓋台・黒澤「割?」	へラミガキ・黒色風麗	
24	土 師 器	皿	12.4	6.8	3.0		脚板方向不明辺切・付蓋台・黒澤「割六十牛?」	へラミガキ・黒色風麗	No4
25	土 師 器	皿	12.6	6.4	3.7		脚板方向不明辺切・付蓋台	へラミガキ・黒色風麗	
26	土 師 器	皿	12.8	6.4	3.4		脚板方向不明辺切・付蓋台	へラミガキ・黒色風麗	
27	土 師 器	皿	12.8	6.8	3.1		脚板方向不明辺切・付蓋台	へラミガキ・黒色風麗	
28	土 師 器	皿	14.0	6.4	3.2		ナデ・付蓋台	へラミガキ・黒色風麗	
29	土 師 器	皿	14.0	7.4	3.3		ナデ・付蓋台	へラミガキ・黒色風麗	
30	土 師 器	皿	14.0	—	—		脚板方向不明辺切・付蓋台	へラミガキ・黒色風麗	
31	土 師 器	皿	12.2	—	—		脚板方向不明辺切・付蓋台	へラミガキ・黒色風麗	
32	土 師 器	皿	12.2	—	—		黒澤「?」	へラミガキ・黒色風麗	
33	土 師 器	皿	12.8	—	—		黒澤「?」	へラミガキ・黒色風麗	
34	土 師 器	皿	—	—	—		黒色風麗	紺文・黒色風麗	
35	須 恵 器	杯	12.6	5.6	4.5		右側底辺切		
36	須 恵 器	杯	12.6	5.4	4.2		右側底辺切		
37	須 恵 器	杯	13.0	5.6	5.1		右側底辺切		
38	須 恵 器	杯	13.0	7.8	3.4		手持へラケズリ		
39	須 恵 器	杯	13.2	5.6	4.7		右側底辺切		
40	須 恵 器	杯	13.4	5.6	4.2		右側底辺切		
41	須 恵 器	杯	13.8	5.0	4.2		右側底辺切		
42	須 恵 器	杯	13.8	5.2	4.2		右側底辺切		
43	須 恵 器	杯	13.8	8.6	3.6		手持へラケズリ		
44	須 恵 器	杯	14.0	5.6	4.1		右側底辺切		
45	須 恵 器	杯	14.0	5.0	4.1		右側底辺切		
46	須 恵 器	杯	14.0	5.0	4.2		右側底辺切		
47	須 恵 器	杯	14.0	5.0	4.1		右側底辺切		
48	須 恵 器	杯	14.4	5.5	4.6		右側底辺切		
49	須 恵 器	杯	14.4	5.8	4.8		右側底辺切		
50	須 恵 器	杯	14.4	6.4	4.5		右側底辺切		
51	須 恵 器	杯	14.0	3.3	4.5		右側底辺切		
52	須 恵 器	杯	14.8	5.0	4.4		右側底辺切・黒澤「牛?」		
53	須 恵 器	杯	15.0	5.0	4.9		右側底辺切・黒澤「?」		

第16表 出土貨幣総数表13

遺跡	No	図形	図形	法			量			外	内	品	考
				口	部	長	重	高	重				
H56	54	須恵器	環	15.4	7.4	3.9				目録方向不明承切			No7 車轡類品から不詳。高麗具の使用、記号?
	55	須恵器	有舌環	13.0	9.4	3.8				石目録承切・目録へラケズリ→行蓋台		火押	
	56	須恵器	有舌環	17.4	11.8	5.1				ヘラケズリ		黒陶	
	57	須恵器	環	14.0	—	—				目録方向不明承切・火押		ロクロナデ	
	58	須恵器	環	—	—	—				目録へラケズリ→行蓋台		ナデ	
	59	須恵器	環	15.4	7.8	2.3				ヘラケズリ		ナデ	
	60	須恵器	小環(口径)	8.4	—	—				ナデ		ナデ	
	61	須恵器	武履	13.0	—	—				ヘラケズリ		ナデ	
	62	須恵器	武履	21.0	5.0	—				ナデ		ナデ	
	63	須恵器	武履	22.5	—	—				ナデ		ナデ	
	64	須恵器	武履	22.4	—	—				平片甲目・ヘラケズリ		ナデ	
	65	須恵器	武履	—	—	—						ナデ	
	66	須恵器	武履	—	—	—						ナデ	
	67	須恵器	斧	7.0	3.8	1.8	104.3						
	68	須恵器	刀	9.0	4.1	0.3	(13.7)						
	69	須恵器	刀	5.0	1.0	0.3	(9.1)						
	70	須恵器	刀	7.0	1.2	0.4	(12.9)						
71	須恵器	刀	6.8	1.0	0.3	(8.8)							
72	須恵器	刀	10.5	0.8	0.5	(27.3)							
H57	1	土師器	環	13.0	5.4	4.7				石目録承切			車轡? へラミガキ・黒色磁器 へラミガキ・黒色磁器 火押
	2	土師器	環	14.8	—	—				底部に魯状口目による同心円、行蓋台			
	3	須恵器	環	12.2	6.2	4.0				方向不明目録承切・火押			
	4	須恵器	環	14.4	8.0	4.2				へら切り・ヘラケズリ			
	5	須恵器	環	—	—	—				右目録承切		火押	
	6	須恵器	環	—	—	—				方向不明目録承切・火押		火押	
	7	土師器	武履	12.2	7.0	—				へラケズリ		ナデ	
	8	須恵器	武履	—	—	—				新子甲目・ヘラケズリ		ナデ	
	9	須恵器	石	13.6	0.8	0.8	15.2						
	10	須恵器	石	1.5	1.5	0.3	1.3						
H58	1	土師器	環	16.4	6.6	5.0				手押へラケズリ			へラミガキ・黒色磁器 へラミガキ・黒色磁器 火押 火押 火押 火押 火押 火押 火押 ナデ ナデ
	2	土師器	環	17.5	10.4	5.6				手押へラケズリ			
	3	須恵器	環	12.8	8.0	3.9				手押へラケズリ			
	4	須恵器	環	11.8	5.0	3.4				右目録承切		火押	
	5	須恵器	環	13.8	7.0	3.9				右目録承切		火押	
	6	須恵器	環	14.2	8.0	4.1				方向不明目録承切		火押	
	7	須恵器	環	14.6	7.2	3.9				右目録承切		火押	
	8	須恵器	環	16.3	—	—				へら切り		ナデ	
	9	土師器	武履	15.2	—	—				へラケズリ			
	10	須恵器	武履	34.8	2.4	0.3	3.0						
	11	銅製品	帯金具部	2.4	2.7	0.3	—						
	12	石	石	2.3	1.5	0.3	0.6						
H59	1	須恵器	環	13.4	6.0	3.7				石目録承切・火押		火押	車轡 車轡 車轡
	2	須恵器	環	13.6	6.0	4.3				右目録承切・火押		火押	
	3	須恵器	環	14.2	6.0	4.2				右目録承切		火押	

第17表 出土遺物整理表(4)

遺蹟	No	器名	器形	測定			重量(g)	外	成形・調整・文様	内	備考	
				口径(㎝)	底径(㎝)	高さ(㎝)						
H59	4	須恵器	坏	14.5	6.4	4.4	右側縁欠切	火押				
	5	須恵器	坏	14.0	7.4	3.9	右側縁欠切・火押	ヘラケズリ・付着物				
	6	須恵器	有台坏	16.3	10.7	6.8						
	7	須恵器	坏	18.4	—	—						
	8	土師器	小形武蓋	10.6	—	—					ナデ	
	9	土師器	武蓋	24.4	—	—					ナデ	
	10	土師器	武蓋	4.9	4.8	—					ヘラケズリ・ナデ	
	11	鉄器	刀	1.2	—	0.4						
	H60	1	土師器	甕	—	—	—					ヘラミガキ・黒色処理
		2	須恵器	坏	—	6.0	—					ヘラミガキ・黒色処理
		3	土師器	甕	11.6	—	—					ロクロナデ
H61	1	土師器	坏	12.4	6.0	4.1	右側縁欠切				粘土・黒色処理	
	2	土師器	坏	12.4	6.4	4.5	右側縁欠切				ヘラミガキ・黒色処理	
	3	土師器	坏	13.2	6.2	5.0	方向不明部縁欠切				ヘラミガキ・黒色処理	
	4	土師器	坏	13.4	6.6	3.8	右側縁欠切				ヘラミガキ・黒色処理	
	5	土師器	坏	13.4	5.2	4.7	右側縁欠切				ヘラミガキ・黒色処理	
	6	土師器	坏	14.6	6.4	4.5	右側縁欠切・指溝「短」				ヘラミガキ・黒色処理	
	7	土師器	坏	12.6	—	—					ヘラミガキ・黒色処理	
	8	須恵器	坏	13.4	6.4	4.5	右側縁欠切				火押	
	9	須恵器	坏	14.0	6.4	3.9	右側縁欠切				ヘラミガキ・黒色処理	
	10	須恵器	坏	14.0	6.4	4.4	右側縁欠切				ヘラミガキ・黒色処理	
	11	須恵器	坏	—	—	—					ヘラケズリ・火押	
H62	12	土師器	甕	12.6	—	—	右側縁欠切・行高台				ヘラミガキ・黒色処理	
	13	土師器	甕	15.0	7.0	5.5	方向不明部縁欠切・行高台				ヘラミガキ・黒色処理	
	14	土師器	甕	15.0	7.0	5.5	方向不明部縁欠切・行高台				ヘラミガキ・黒色処理	
	15	土師器	甕	15.6	—	—	方向不明部縁欠切・行高台				ヘラミガキ・黒色処理	
	16	土師器	甕	25.0	—	—	斜縁・ヘラケズリ				ヘラミガキ・黒色処理	
	17	須恵器	甕	22.0	—	—					ナデ	
	18	陶文土器	甕	—	—	—	押捺跡				ナデ	
	19	鉄器	刀	4.9	0.5	5.5					後開?	
H63	2	須恵器	坏	15.2	7.4	4.3	右側縁欠切・ヘラケズリ・赤砂				ヘラミガキ・黒色処理	
	3	須恵器	坏	13.8	6.2	3.7	方向不明部縁欠切・火押				火押	
H64	1	土師器	行	(2.33)	(1.2)	(0.7)					ヘラミガキ・黒色処理	
	2	土師器	行	13.8	—	—					黒燐石	
H65	1	土師器	ロウロ蓋	—	—	—					ヘラケズリ	
	2	土師器	甕	12.0	6.0	4.0	右側縁欠切				ヘラミガキ・黒色処理	
	3	土師器	甕	12.4	6.2	3.3	右側縁欠切				ヘラミガキ・黒色処理	
	4	土師器	甕	13.0	6.0	4.2	右側縁欠切				ヘラミガキ・黒色処理	
	5	土師器	甕	13.0	6.0	4.5	右側縁欠切				ヘラミガキ・黒色処理	
	6	土師器	甕	13.6	5.8	4.0	右側縁欠切				ヘラミガキ・黒色処理	
	7	土師器	甕	13.6	6.0	3.8	右側縁欠切				ヘラミガキ・黒色処理	
	8	土師器	甕	14.4	6.0	4.0	右側縁欠切				ヘラミガキ・黒色処理	

遺物 No	遺種	遺形	法		重量(g)	外	成形・調整・文様	内	備考
			口径(㎝)	底径(㎝)					
H65	9	須恵器 壺	16.2	—	—	右側方角不明染切、付高台	ヘラミガキ・黒色処理	高台欠損	
	10	須恵器 坏	13.8	6.0	3.7	右側染赤切			
	11	須恵器 坏	—	5.0	—	右側染赤切			
	12	土師器 钵	10.0	—	—	ヘラミガキ・黒色処理	ヘラミガキ・黒色処理		
	13	土師器 钵	—	10.0	—	右側染赤切	ヘラミガキ・黒色処理		
	14	土師器 ロクロ変	—	5.4	—	右側染赤切、ロクロナデ	ロクロナデ		
	15	土師器 ロクロ変	—	4.0	—	ヘラケズリ	ヘラケズリ		
	17	須恵器 長頸壺	—	—	10.0	無傷	無傷		
	18	須恵器 短頸壺	13.4	—	—	無傷	無傷		
	19	須恵器 短頸壺	6.4	—	—	無傷	無傷		
	H66	1	土師器 坏	15.2	8.2	4.3	右側ヘラケズリ→付高台、墨書「7」	ヘラミガキ・黒色処理	
		2	土師器 坏	17.8	3.2	5.0	右側ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	
		3	須恵器 坏	13.4	6.0	4.0	右側ヘラケズリ	火焼	
		4	須恵器 坏	15.4	8.4	3.7	右側方角不明染切、火焼	火焼	
		5	須恵器 坏	14.0	7.2	4.6	右側染赤切、火焼	火焼	
6		須恵器 有口坏	15.8	10.6	5.0	無傷	無傷		
7		須恵器 有口坏	17.8	13.0	3.8	無傷	無傷		
8		須恵器 有口坏	—	10.0	—	無傷	無傷		
9		須恵器 坏	15.0	—	—	無傷	無傷		
10		須恵器 坏	15.0	—	—	無傷	無傷		
11		須恵器 坏	16.8	—	—	無傷	無傷		
12		土師器 武段	—	—	—	無傷	無傷		
13		土師器 武段	13.8	—	—	無傷	無傷		
14		須恵器 武段	—	—	4.4	無傷	無傷		
15		土師器 羽	—	—	15.6	無傷	無傷		
H67	1	土師器 坏	14.2	6.0	4.0	右側染赤切	ヘラミガキ・黒色処理		
	2	土師器 坏	11.2	5.0	4.5	右側染赤切	ヘラミガキ・黒色処理		
	3	須恵器 坏	12.4	5.4	4.0	右側染赤切	火焼		
	4	須恵器 坏	13.8	6.0	4.5	右側染赤切			
	5	須恵器 坏	14.0	6.0	3.8	右側染赤切			
	6	須恵器 坏	14.2	6.0	4.4	右側染赤切			
	7	須恵器 坏	13.8	5.4	4.0	右側染赤切、火焼			
H68	5	土師器 石	2.5	1.3	0.5	1.1 無傷	無傷	黒曜石	
	1	土師器 坏	—	6.8	—	無傷	無傷		
	2	須恵器 有舌坏	—	8.0	—	無傷	無傷		
	3	須恵器 坏	—	8.2	—	無傷	無傷		
H70	1	須恵器 坏	13.0	6.8	3.9	右側方角不明染切、火焼	火焼		
	2	須恵器 坏	—	6.4	—	右側染赤切、火焼	火焼		
	3	須恵器 坏	—	—	—	右側染赤切、火焼	火焼		
	4	土師器 钵	4.2	—	—	無傷	無傷		
H71	1	土師器 坏	7.8	8.2	7.2	ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理		
	2	土師器 坏	—	4.0	—	右側染赤切	陶文・黒色処理		

遺物 No	器 種	備 考	法		重 量(g)	容 積(cc)	厚 度(mm)	外 形・断面	内 面	備 考
			口 径(mm)	底 径(mm)						
H171	2 須臾器	環	—	7.6	—	—	ヘラ切り	—	—	—
3	須臾器	有台杯	—	8.8	—	—	付設台	—	—	—
4	土師器	碗	—	6.8	—	—	ナデ・付設台	—	—	—
5	須臾器	甕	—	9.4	—	—	付設台・ヘラタズリ	—	—	—
6	土師器	ロクロ甕	21.2	—	—	—	ロクロナデ・ヘラタズリ	—	—	ロクロナデ
7	土師器	甕	—	5.0	—	—	ヘラタズリ	—	—	ナデ
H172	1 土師器	杯	14.4	7.0	4.0	—	同軸方向不明条切	—	—	黒色処理
2	土師器	ロクロ甕	22.6	—	—	—	ロクロナデ・ヘラタズリ	—	—	カキメ状のナデ
H173	1 土師器	杯	12.4	7.0	4.0	—	右面条切・黒色処理	—	—	黒斜付短文・黒色処理
2	土師器	環	12.6	5.7	5.0	—	右面条切・黒色処理	—	—	粗いヘラミミガキ・黒色処理
3	土師器	環	12.8	4.4	4.7	—	右面条切・黒色処理	—	—	黒斜付短文・黒色処理
4	土師器	環	13.0	4.8	4.9	—	右面条切・黒色処理	—	—	ヘラミミガキ・黒色処理
5	土師器	環	13.2	6.3	4.1	—	右面条切	—	—	粗いヘラミミガキ・黒色処理
6	土師器	杯	14.0	6.0	3.9	—	方向不明条切	—	—	粗い放射状ヘラミミガキ・黒色処理
7	土師器	杯	16.0	7.6	5.8	—	右面条切・黒色処理	—	—	粗いヘラミミガキ・黒色処理
8	土師器	杯	12.6	—	—	—	右面条切	—	—	短文・黒色処理
9	土師器	杯	13.4	—	—	—	—	—	—	粗いヘラミミガキ・黒色処理
10	土師器	杯	13.6	—	—	—	—	—	—	粗いヘラミミガキ・黒色処理
11	土師器	杯	—	6.4	—	—	—	—	—	粗いヘラミミガキ・黒色処理
12	土師器	杯	—	—	—	—	—	—	—	粗いヘラミミガキ・黒色処理
13	土師器	碗	—	6.3	—	—	—	—	—	粗いヘラミミガキ・黒色処理
14	土師器	碗	—	7.2	—	—	—	—	—	粗いヘラミミガキ・黒色処理
15	土師器	耳	7.6/5.2	3.0	2.0/1.1	—	—	—	—	粗いヘラミミガキ・黒色処理
16	土師器	耳	—	2.2	—	—	—	—	—	粗いヘラミミガキ・黒色処理
17	土師器	ロクロ小甕	9.6	—	—	—	—	—	—	粗いヘラミミガキ・黒色処理
18	土師器	ロクロ小甕	21.2	—	—	—	—	—	—	粗いヘラミミガキ・黒色処理
19	須臾器	環	—	8.6	—	—	方向不明条切	—	—	粗いヘラミミガキ・黒色処理
20	須臾器	甕	—	—	—	—	—	—	—	粗いヘラミミガキ・黒色処理
21	須臾器	土製品	3.9	1.6	1.5	—	—	—	—	粗いヘラミミガキ・黒色処理
22	土製品	練	—	3.3	1.0	—	—	—	—	粗いヘラミミガキ・黒色処理
23	土製品	龍脚の跡5筋	3.4	6.6	—	—	—	—	—	粗いヘラミミガキ・黒色処理
24	石	粗大石製	6.1	6.1	0.4	—	—	—	—	粗いヘラミミガキ・黒色処理

No.1

黒曜石

第20表 出土遺物調査表17

遺構 No	器種	器形	法			量			外形・調整・文様	内面	備考
			口径(径)	底径(径)	器深(厚)	器深(厚)	重量(g)				
F 8	1	炊器	3.2	0.3	0.4		22.0				

第21表 出土遺物調査表18

遺構 No	器種	器形	法			量			外形・調整・文様	内面	備考
			口径(径)	底径(径)	器深(厚)	器深(厚)	重量(g)				
M4	1	土師器	14.2	7.0	4.6			右目取込切	ヘラミガキ・黒色処理		
	2	灰輪陶器	18.0	—	—			器底ヘラケズリ	編織	甲斐系?	
	3	土師器	—	7.0	—			方向不明な赤褐色・ロウロナデ	ロケロナデ		
	4	土師器	16.4	—	—			ハケメ	ハケメ		
	5	鉄器	14.2	2.4	0.8	(23.2)					
	6	鉄器	4.7	(0.5)	(0.8)	(6.3)					
	7	縄文土器	—	—	—			沈澱・縄文		漆黒焼之片	
	8	縄文土器	—	—	—			沈澱・縄文		漆黒焼之片	
M5	1	土師器	13.0	—	—			口脣部ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理		
M8	1	土師器	—	—	—			ヘラケズリ→ヘラミガキ・黒色処理	ナデ	No 1	
	2	須恵器	13.6	4.4	10.0			手持ヘラケズリ	ナデ		
	3	土師器	16.8	—	—			ヘラケズリ	ナデ		
M12	1	土師器	—	9.6	—			ヘラケズリ	鉄刷毛文		
	2	土師器	—	12.0	—			ヘラケズリ→黒いヘラミガキ	ヘラミガキ・ヘラミガキ		
M16	1	土師器	12.8	5.6	3.8			右目取込切	ヘラミガキ・黒色処理		
	2	土師器	—	—	—			器底「方」	ヘラミガキ		
	3	灰輪陶器	15.0	—	—			編織	編織		
	4	須恵器	—	—	—			平行甲目	当貝柄→ナデ		
	5	須恵器	—	—	—			平行甲目・漆状文	当貝柄→ナデ		
	6	弥生土器	—	—	—			赤砂			
M17	1	土師器	12.0	5.8	3.8			器底方格不明赤切→編織部ヘラケズリ	黒色処理		
	2	土師器	13.4	7.2	5.2			右目取込切→付着台	黒色処理	2次火焼により黒色処理済	
	3	土師器	—	—	—			ハケメ	ハケメ	古墳時代前期	
	4	弥生土器	—	—	—			貝殻印文	ナデ		
	5	弥生土器	—	—	—			ヘラ黒色焼文	ナデ		
M18	1	石器	12.5	6.5	2.2	151.3					
M20	1	土師器	18.4	—	—			ヘラケズリ	ナデ		
	2	土師器	—	5.0	—			ヘラケズリ	ナデ		
M23	2	石器	2.35	1.6	0.5	1.1		平行甲目	当貝柄		
M25	1	須恵器	—	9.8	—			ヘラケズリ			
	2	石器	14.5	7.5	1.6	201.0					
M28	1	土師器	34.0	—	—			ヘラケズリ	ナデ		
M31	1	須恵器	—	—	—			平行甲目→ナデ	ナデ		

第22表 出土器物類表19

遺物 No	器 種	器 形	法			量		外	成 形・調 整・文 様	内 題	備 考
			口 径(㎝)	底 径(㎝)	體 深(㎝)	體 積(㎖)	重 量(g)				
M2	石 器	打 製 石 斧	15.7	6.8	2.0	—	230.0				
M1	土 器 器	杯	—	6.0	—	—	—	右側底辺切り		ヘラミガキ・黒色処理	
M2	土 器 器	杯?	16.2	—	—	—	—			ヘラミガキ・黒色処理	
M2	土 器 器	環?	14.2	1.1	6.0	—	—			ナデ	
M3	1 土 器 器	須 恵 器 ワタロ罍	—	5.8	—	—	—	同様、方格不明縁切り・ヘラケズリ		ナデ	
3	弥生土器	杯	—	—	—	—	—	平行脚田		ヘラミガキ	
4	弥生土器	高 臺	—	20.0	—	—	—	ヘラケズリ		ヘラミガキ	
5	石 器	磨 盤	1.75	1.1	4.0	—	5.0			ナデ	
M4	1 土 器 器	碗?	16.0	—	—	—	—	右側底辺切り・墨書「7」		縄文・黒色処理	墨書は表外縁をよりにより判明
2 土 器 器	杯	—	—	5.5	—	—	—	墨書「7」		縄文・黒色処理	
3 土 器 器	碗?	—	—	—	—	—	—	同様ヘラケズリ→付高台		黒色処理	
4 灰 輪 陶 器	碗	—	—	5.0	—	—	—	同様ヘラケズリ→付高台・墨書		黒色処理	
5 灰 輪 陶 器	碗	—	—	6.6	—	—	—	同様ヘラケズリ→付高台・墨書		黒色処理	
6 土 器 器	ワタロ罍	—	20.8	—	—	—	—	ロクロナデ		ロクロナデ	
M6	1 須 恵 器	有 台 杯	—	10.6	—	—	—	方向不明縁底縁切り・同様ヘラケズリ→付高台		ナデ	
2 土 器 器	須 恵 器	—	—	—	—	—	—	ハナメ		ナデ	
3 須 恵 器	壺	—	—	10.4	—	—	—	付高台		ナデ	
4 弥生土器	壺	—	—	—	—	—	—	縄文・炭黒付染		ナデ	
M9	1 土 器 器	壺	—	—	—	—	—	ハナメ		ナデ	
2 土 器 器	壺	—	—	—	—	—	—	ハナメ		ナデ	
M7	1 土 器 器	碗	—	—	—	—	—	右側底縁切り→付高台		ナデ	
M2	1 縄 文 土 器	深 鉢	—	—	—	—	—	縄文		十字陶文	
M5	1 須 恵 器	深 鉢	14.0	8.4	4.0	—	—	手得ヘラケズリ・火染		火染	
2 土 器 器	武 藏 罍	—	25.4	—	—	—	—	ヘラケズリ		ナデ	
M8	1 土 器 器	杯	10.5	—	—	—	—	右側底縁切り→付高台		ヘラミガキ・黒色処理	
2 土 器 器	碗	—	—	—	—	—	—	墨書		墨書	
3 灰 輪 陶 器	碗	—	16.2	—	—	—	—			ナデ	
4 須 恵 器	壺	—	—	—	—	—	—	平行脚田		ナデ	
											中期後半加磨得三

第23表 出土遺物観察表20

遺構	No	器種	器形	法				成形・調整・文様			備考
				口径(換)	底径(換)	器高(換)	重量(g)	外 面		内 面	
D 1	1	土師器	坏	—	5.8	—	—	右回転糸切	暗文・黒色処理		
	2	須恵器	坏	—	6.8	—	—	右回転糸切	火押		
D 6	1	土師器	坏	—	7.0	—	—	ヘラケズリ	暗文・黒色処理		
	2	灰釉陶器	小瓶	—	—	—	—	旋輪	旋輪		
D 7	1	土師器	坏	12.0	6.0	4.4	—	右回転糸切	ヘラミガキ・黒色処理		
D13	1	土師器	坏	12.6	6.1	4.6	—	右回転糸切	十字暗文・黒色処理		
D16	1	土師器	坏	12.4	6.4	4.1	—	右回転糸切	ヘラミガキ・黒色処理		
D22	1	土師器	坏	15.0	—	—	—	—	ヘラミガキ・黒色処理		
	2	土師器	坏	12.4	—	—	—	—	ヘラミガキ・黒色処理		
	3	須恵器	口口壺	—	12.4	—	—	口口壺	口口壺		
D25	1	土師器	坏	—	—	—	—	ヘラケズリ	ヘラケズリ		
	2	土師器	口口壺	—	12.4	—	—	口口壺	口口壺		
D28	1	鉄器	鏃	(16.8)	3.4	1.0	(34.0)	鑄造。両刃・両丸。鍔被。編組。長茎			
D29	1	土師器	坏	14.2	—	—	—	—			
D30	1	土師器	坏	—	5.4	—	—	ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理		
D32	1	土師器	口口壺	18.2	—	—	—	口口壺→ヘラケズリ	口口壺		
D41	1	土師器	坏	13.0	5.0	4.5	—	右回転糸切・磨削「方」	ヘラミガキ・黒色処理	No 1	
	2	土師器	坏	13.0	7.5	4.7	—	右回転糸切	ヘラミガキ・黒色処理	No 2	
D44	1	土師器	甕	—	4.5	—	—	右回転糸切・ナデ	ナデ		
D45	1	土師器	坏	13.8	6.0	4.5	—	右回転糸切→ヘラケズリ・磨削「W」?	ヘラミガキ・黒色処理		
D49	1	土師器	坏	12.2	5.8	3.7	—	右回転糸切	十字暗文・黒色処理	No 1	
	2	土師器	坏	12.2	5.3	4.4	—	右回転糸切	十字暗文・黒色処理	No 3	
	3	土師器	坏	15.2	6.8	6.0	—	手持ヘラケズリ	十字暗文・黒色処理	No 5	
	4	土師器	小瓶(口口壺)	—	4.2	5.8	—	右回転糸切→口口壺	口口壺	No 4	
	5	土師器	口口壺	12.6	6.8	12.2	—	右回転糸切→回転ヘラケズリ	口口壺	No 2	
	6	灰釉陶器	皿	16.0	—	—	—	—	—		
	7	鉄器	?	5.2	0.3	0.5	4.3	—	—		
D50	1	土師器	坏	12.8	—	—	—	—	暗文・黒色処理		
	2	土師器	坏	13.0	—	—	—	—	—		
	3	土師器	坏	—	6.0	—	—	右回転糸切	十字暗文・黒色処理		
	4	土師器	羽口	—	—	—	—	—	—		
	5	土師器	羽口	—	—	—	—	—	—	No 2, 本図化	
D56	1	土師器	坏	15.2	7.6	5.1	—	右回転糸切	放射状暗文・黒色処理		
	2	土師器	碗	12.5	—	—	—	回転方向不明糸切→付高台	ヘラミガキ・黒色処理		
D57	1	土師器	坏	—	6.2	—	—	右回転糸切	ヘラミガキ・黒色処理		
	2	弥生土器	壺	—	—	—	—	縄文・磨蝕波状文	ナデ		
	3	弥生土器	壺	—	—	—	—	縄文波状文	ナデ		
	4	石	磨製石斧	(7.7)	(5.5)	(3.6)	(430.0)	縄文・磨蝕波状文	ハケメ		
D63	1	土師器	坏	17.6	—	—	—	—	ヘラミガキ・黒色処理		
	2	土師器	碗	—	7.5	—	—	方向不明磨蝕糸切→(高台・磨削?)ない!「土師」?	ヘラミガキ・黒色処理		
	3	鉄器	鏃	(1.5)	(3.8)	(0.2)	(9.8)	—	—		
D54	1	土師器	坏?	12.8	—	—	—	磨削「?」	ヘラミガキ・黒色処理		
	2	灰釉陶器	碗	—	6.3	—	—	回転ヘラケズリ→付高台	旋輪		
	3	土師器	口口壺	—	5.2	—	—	手持ヘラケズリ	—		
D55	1	土師器	坏	11.4	4.8	3.8	—	方向不明回転糸切→周縁部ヘラケズリ	黒色処理		
D56	1	土師器	口口壺	21.6	—	—	—	口口壺	口口壺		
D67	1	土師器	坏	—	5.4	—	—	右回転糸切	ヘラミガキ・黒色処理		
D68	1	石器	磨製石斧	(8.5)	(6.6)	(3.1)	(215.0)	—	—		
D72	1	須恵器	坏	13.2	5.8	4.1	—	右回転糸切	—		
	2	須恵器	坏	—	6.6	—	—	右回転糸切・火押	—		
	3	土師器	碗	15.6	—	—	—	—	暗文・黒色処理		
	4	土師器	碗	—	3.0	—	—	回転ヘラケズリ→付高台	ヘラミガキ		
	5	須恵器	坏	15.0	—	3.0	—	回転ヘラケズリ	—		
	6	須恵器	坏	16.4	—	—	—	回転ヘラケズリ・火押	火押		
	7	須恵器	坏	17.4	—	—	—	火押	火押		
	8	須恵器	長頸壺	11.5	—	—	—	—	—		
	9	鉄器	鉄鍬車	(15.5)	3.6	0.7	(49.2)	—	—		
	10	鉄器	鏃	(9.0)	(3.3)	0.5	(19.7)	—	—		
D77	1	弥生土器	壺	—	—	—	—	平行波線周縁磨蝕工具による刷削文	ヘラケズリ→ナデ		

第24表 出土遺物観察表21

遺構 No	器種	器形	法 量				成 形 ・ 装 飾 ・ 文 様		備 考	
			口径(φ)	底径(φ)	器高(厚)	器重(g)	外 面	内 面		
P133	1	須恵器	有台	11.2	7.2	4.6		ヘラケズリ→付高台・火葬	火葬	
P147	1	灰釉陶器	長筒壺	—	—	—		陶輪	陶輪	
P159	1	須恵器	壺	—	—	—		樹皮状工具による削突		
P170	1	須恵器	埴	13.8	6.5	4.1		右回転糸切、火葬	火葬	
P195	1	須恵器	埴	13.6	9.8	3.7		右回転糸切→手持ヘラケズリ		
P200	1	土師器	有台皿	14.0	7.6	2.4		右回転糸切→付高台、磨面「?」	ヘラミガキ・黒色処理	
P202	1	須恵器	埴蓋	18.0	—	—		ヘラケズリ		
P208	1	土師器	鉢	21.0	9.3	6.3		手持ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	
P211	1	須恵器	埴	12.6	6.0	3.8		右回転糸切		
2	須恵器	埴	—	—	—	—		右回転糸切	火葬	
3	須恵器	有台	埴	—	—	—		ヘラケズリ→付高台、火葬		「×」の陶印
4	須恵器	埴	16.6	—	—	—		ヘラケズリ		
5	土師器	鉢	20.4	—	—	—				
6	須恵器	埴	29.6	—	—	—			ヘラミガキ・黒色処理	
P270	1	須恵器	埴蓋	—	—	—		ヘラケズリ		
P275	1	須恵器	埴	—	6.6	—		右回転糸切		
2	須恵器	有台	埴	—	9.0	—		ヘラケズリ→付高台		
3	須恵器	埴	13.2	—	—	—		ヘラケズリ		
4	須恵器	埴	18.4	—	—	—		ヘラケズリ		

第25表 出土遺物観察表22

遺構 No	器種	器形	法 量				成 形 ・ 装 飾 ・ 文 様		備 考	
			口径(φ)	底径(φ)	器高(厚)	器重(g)	外 面	内 面		
350-4	1	銅製品	耳環	3.2	2.9	0.7	26.5			銅芯金箔
号古墳	2	鉄製品	?	(5.6)	(0.8)	(0.5)	(13.0)			
	3	鉄製品	?	(7.1)	(1.8)	(0.2)	(8.4)			
	4	鉄製品	?	(5.2)	(2.5)	(8.0)	(25.0)			
	5	鉄製品	鏡具?	6.9	(5.5)	1.0	(21.1)			
	6	鉄製品	鏡具	6.1	5.0	1.3	37.4			
	7	鉄製品	鏡具	(5.0)	(3.4)	(1.0)	(20.1)			
	8	鉄製品	?	7.1	(5.5)	1.5	(22.3)			
	9	鉄器	斧	8.9	4.0	2.4	132.9			
	10	土師器	埴	13.6	9.4	4.9		ヘラケズリ・ナデ	放射状暗文	周辺部出土
	11	土師器	埴?	—	—	—	—	磨面「?」	黒色処理	
	12	土師器	陶	—	7.2	—	—	付高台	黒色処理	
	13	須恵器	埴	12.0	—	—	—	ヘラケズリ、火葬	火葬	
	14	土師器	埴	—	10.0	—	—	ヘラケズリ	ハケメ	
	15	須恵器	壺	23.4	—	—	—			
	16	須恵器	壺	—	—	—	—			17と同一個体
	17	須恵器	壺	—	—	—	—	1条の目録		16と同一個体
	18	須恵器	壺	—	—	—	—			
	19	須恵器	壺	—	—	—	—	波状文		
	20	須恵器	壺	—	—	—	—	波状文		
	21	須恵器	壺	—	—	—	—	平行印目		当具痕
	22	須恵器	壺	—	—	—	—	平行印目		ナデ
	23	石器	打撃石斧	(14.5)	5.9	2.0	(210.0)			
	24	石器	石 鏃	2.4	1.6	4.0	1.4			黒曜石製
	25	石器	石 鏃	1.8	1.3	0.3	0.7			黒曜石製
	350-5	1	銅製品	耳環	2.7	3.0	0.6	19.5		
2		石製品	丸玉	1.4	1.5	0.2	5.3			緑色凝灰岩
3		石製品	切玉	2.4	1.4	0.1	5.8			水晶
4		石製品	管玉	2.1	0.8	0.1	2.9			緑色凝灰岩
5		鉄製品	鏡具	7.2	5.3	1.6	39.4			
6		鉄製品	鏡具	4.9	3.8	0.8	29.5			
7		鉄器	刀	(7.3)	(1.5)	(0.5)	(16.2)			
8		鉄器	鏃	(4.2)	(0.3)	(0.4)	(2.4)			
9		鉄器	鏃	(4.0)	(0.6)	(0.5)	(2.2)			
10		鉄器	鏃	(3.5)	(0.6)	(0.6)	(3.4)			
11		鉄器	釘	(3.2)	(0.2)	(0.2)	(16.2)			
12		鉄器	釘	(1.7)	(0.9)	(0.2)	(1.0)			
13		石器	打撃石斧	(11.8)	(5.8)	(2.1)	(230.0)			
14		須恵器	埴	13.8	5.4	4.0		右回転糸切		
15		須恵器	埴	14.3	—	—	—			
16		須恵器	埴	—	6.0	—	—	右回転糸切・火葬	火葬	
17		須恵器	埴	—	5.2	—	—	右回転糸切	火葬	
18		須恵器	長筒壺	—	—	—	—			
19		須恵器	壺	19.0	—	—	—			
20		須恵器	壺	—	—	—	—			
21		須恵器	壺	—	—	—	—	箱印目	ナデ	
22		須恵器	壺	—	—	—	—	平行印目→カキメ	青海波文の当具痕	
23		須恵器	壺	—	—	—	—	箱印目	青海波文の当具痕	
24		土師器	高式	—	—	—	—	ヘラケズリ・ナデ	ヘラミガキ	
25		土師器	高式	18.1	—	—	—	ヘラケズリ	ナデ	
26	土師器	高式	21.0	7.6	25.2		ヘラケズリ→皿いヘラミガキ	ナデ		

No	規格	形状	法			重量			外形	成形・加工・文様	内面	備考
			口径(φ)	縦径(φ)	部高(φ)	重量(g)	重量(g)	重量(g)				
1	土脚器	环	11.0	6.0	4.7				右側面糸切		ヘラミダキ・黒色処理	
2	土脚器	环	13.6	6.5	4.2				右側面糸切		黒色処理	
3	土脚器	环	14.0	5.0	4.0				右側面糸切		ヘラミダキ・黒色処理	
4	土脚器	环	14.6	5.2	4.2				右側面糸切		黒色処理	
5	土脚器	环	14.6	8.2	4.6				右側面糸切		ヘラミダキ・黒色処理	
6	土脚器	环	17.2	6.8	6.9				右側面糸切		ヘラミダキ・黒色処理	
7	土脚器	环	14.0	6.0	5.0				側面ヘラミダキ、外底面線ヘラミダキ		黒色処理	
8	土脚器	环	12.6	5.4	4.2				手付ヘラミダキ、外底面線ヘラミダキ		ヘラミダキ・黒色処理	
9	土脚器	环	13.3	8.0	4.2				手付ヘラミダキ		ヘラミダキ・黒色処理	
10	土脚器	环	13.4	5.6	3.7				手付ヘラミダキ		ヘラミダキ・黒色処理	
11	土脚器	环	13.4	5.8	4.2				手付ヘラミダキ		ヘラミダキ・黒色処理	
12	土脚器	环	13.4	6.6	4.1				手付ヘラミダキ		ヘラミダキ・黒色処理	
13	土脚器	环	13.6	8.1	4.9				手付ヘラミダキ		ヘラミダキ・黒色処理	
14	土脚器	环	13.8	8.0	4.7				手付ヘラミダキ、外底面線ヘラミダキ		ヘラミダキ・黒色処理	
15	土脚器	环	14.0	7.0	5.1				手付ヘラミダキ		ヘラミダキ・黒色処理	
16	土脚器	环	16.0	8.0	5.6				手付ヘラミダキ、外底面線ヘラミダキ		ヘラミダキ・黒色処理	
17	土脚器	环	16.4	8.0	4.9				手付ヘラミダキ		ヘラミダキ・黒色処理	
18	土脚器	环	16.8	8.0	5.0				手付ヘラミダキ		ヘラミダキ・黒色処理	
19	土脚器	环	13.8	—	—						ヘラミダキ・黒色処理	
20	土脚器	环	15.8	—	—				面線(白)		ヘラミダキ・黒色処理	
21	土脚器	环	18.0	—	—				外底面線ヘラミダキ		ヘラミダキ・黒色処理	
22	土脚器	环	20.4	—	—						ヘラミダキ・黒色処理	
23	土脚器	环	—	6.5	—				手付ヘラミダキ		ヘラミダキ・黒色処理	
24	土脚器	环	—	8.0	—				手付ヘラミダキ		ヘラミダキ・黒色処理	
25	須臾器	环	11.2	6.4	3.5				右側面糸切、火押		火押	
26	須臾器	环	12.6	6.2	3.9				右側面糸切、火押		火押	
27	須臾器	环	12.8	5.6	4.0				右側面糸切		火押	
28	須臾器	环	12.8	7.2	3.6				右側面糸切、火押		火押	
29	須臾器	环	12.8	7.6	4.3				右側面糸切、火押		火押	
30	須臾器	环	13.0	6.8	3.3				右側面糸切、火押		火押	
31	須臾器	环	13.0	7.0	4.0				右側面糸切、火押		火押	
32	須臾器	环	13.0	7.0	4.5				右側面糸切、火押		火押	
33	須臾器	环	13.0	7.6	4.2				右側面糸切、火押		火押	
34	須臾器	环	13.2	5.0	3.5				右側面糸切		火押	
35	須臾器	环	13.2	5.5	3.9				右側面糸切		火押	
36	須臾器	环	13.2	6.0	4.2				右側面糸切		火押	
37	須臾器	环	13.2	6.4	3.4				右側面糸切		火押	
38	須臾器	环	13.2	7.0	3.2				右側面糸切		火押	
39	須臾器	环	13.4	6.2	3.9				右側面糸切、火押		火押	
40	須臾器	环	13.4	6.2	4.2				右側面糸切、火押		火押	

船土分析試験法

船土分析試験法

No	品 種	品 形	口 径(φ)	深 度(mm)	高 度(寸)	重 量(kg)	外 径	成 形・製 法・文 庫	内 径	備 考
81	須 置 器	环	16.0	6.0	4.3		右回転糸切		火押	船土分析試料29
82	須 置 器	环	16.4	5.0	4.2		右回転糸切、火押		火押	
83	須 置 器	环	12.6	6.0	4.1		回転方向不明糸切、火押		火押	
84	須 置 器	环	12.6	6.2	3.5		回転方向不明糸切、火押		火押	
85	須 置 器	环	12.8	7.2	4.1		回転方向不明糸切、火押		火押	
86	須 置 器	环	13.0	6.6	4.1		回転方向不明糸切、火押		火押	
87	須 置 器	环	13.0	7.8	3.6		回転方向不明糸切、火押		火押	
88	須 置 器	环	13.4	7.0	3.7		回転方向不明糸切、切線部ヘラケズリ、火押		火押	
89	須 置 器	环	13.4	7.2	3.5		回転方向不明糸切、切線部ヘラケズリ、火押		火押	
90	須 置 器	环	13.4	7.2	3.6		回転方向不明糸切		火押	
91	須 置 器	环	13.6	7.0	4.2		回転方向不明糸切		火押	
92	須 置 器	环	13.8	8.4	4.0		回転方向不明糸切		火押	
93	須 置 器	环	14.0	6.0	4.0		回転方向不明糸切		火押	
94	須 置 器	环	14.0	7.4	4.0		回転方向不明糸切		火押	
95	須 置 器	环	14.2	7.0	3.2		回転方向不明糸切		火押	
96	須 置 器	环	14.6	6.0	3.6		回転方向不明糸切		火押	
97	須 置 器	环	14.6	6.0	4.2		回転方向不明糸切		火押	
98	須 置 器	环	14.8	10.0	3.2		回転方向不明糸切→手持ヘラケズリ		火押	船土分析試料30
99	須 置 器	环	12.0	8.0	4.1		ヘラ切り→手持ヘラケズリ		火押	船土分析試料31
100	須 置 器	环	13.0	7.0	4.0		回転ヘラ切り、火押		火押	
101	須 置 器	环	13.4	7.2	3.3		右回転ヘラ切り、火押		火押	
102	須 置 器	环	13.4	9.2	4.5		ヘラ切り→手持ヘラケズリ		火押	
103	須 置 器	环	13.6	8.0	3.7		ヘラ切り、火押、切線部		火押	船土分析試料32
104	須 置 器	环	13.6	8.4	3.8		右回転ヘラ切り、火押		火押	
105	須 置 器	环	13.6	8.7	3.9		右回転ヘラ切り、火押		火押	
106	須 置 器	环	14.0	7.5	4.5		右回転ヘラ切り→ヘラケズリ		火押	
107	須 置 器	环	14.0	7.8	4.2		右回転ヘラ切り→ナデ		火押	
108	須 置 器	环	14.4	7.4	3.5		右回転ヘラ切り、火押		火押	
109	須 置 器	环	14.6	8.2	3.9		ヘラ切り、火押		火押	製法による変色
110	須 置 器	环	14.8	8.4	4.3		回転ヘラ切り		火押	
111	須 置 器	环	12.0	5.8	3.2		手持ヘラケズリ、火押、切線部		火押	船土分析試料33
112	須 置 器	环	12.8	7.5	3.6		船舶作業工具によるヘラケズリ、火押		火押	
113	須 置 器	环	12.8	8.0	3.0		手持ヘラケズリ		火押	
114	須 置 器	环	13.0	6.4	4.0		手持ヘラケズリ		火押	
115	須 置 器	环	13.4	7.5	3.6		手持ヘラケズリ、火押		火押	
116	須 置 器	环	13.8	6.0	3.8		手持ヘラケズリ		火押	
117	須 置 器	环	13.8	6.0	4.0		手持ヘラケズリ		火押	
118	須 置 器	环	14.0	7.9	4.2		手持ヘラケズリ		火押	
119	須 置 器	环	14.0	8.0	4.0		手持ヘラケズリ、火押		火押	
120	須 置 器	环	14.2	8.0	4.0		手持ヘラケズリ		火押	

No	部 類	部 形	法			量		外 形	成 形・装 飾・文 様	内 装	備 考
			口 径(㎝)	底 径(㎝)	底 厚(㎝)	高 度(㎝)	重 量(㌘)				
121	須臾器	有 台 环	14.2	5.4	3.9			手付ヘラケズリ			船上分析試料34
122	須臾器	环	14.1	5.4	3.1			手付ヘラケズリ	火押		
123	須臾器	环	14.6	8.6	3.7			手付ヘラケズリ、火押	火押		
124	須臾器	环	14.8	9.4	3.8			手付ヘラケズリ、火押	火押		
125	須臾器	环	15.4	8.6	3.8			回縁ヘラケズリ	火押		
126	須臾器	环	15.6	9.4	4.0			回縁ヘラケズリ、火押	火押		
127	須臾器	环	13.0	—	—			同群			
128	須臾器	环	13.0	—	—						
129	須臾器	环	13.4	—	—						
130	須臾器	环	13.4	—	—						
131	須臾器	环	13.8	—	—			火押	火押		
132	須臾器	环	13.8	—	—			火押	火押		
133	須臾器	环	13.8	—	—						
134	須臾器	环	14.2	—	—			火押	火押		
135	須臾器	环	14.4	—	—			火押	火押		
136	須臾器	环	14.4	—	—			火押	火押		
137	須臾器	环	—	5.4	—			右回縁糸切			酸化磁器成
138	須臾器	环	—	5.4	—			右回縁糸切			
139	須臾器	环	—	6.0	—			右回縁糸切、火押	火押		
140	須臾器	环	—	6.0	—			右回縁糸切			
141	須臾器	环	—	6.0	—			右回縁糸切			
142	須臾器	环	—	6.2	—			右回縁糸切、火押	火押		
143	須臾器	环	—	7.4	—			右回縁糸切、火押	火押		
144	須臾器	环	—	6.6	—			右回縁糸切、火押	火押		
145	須臾器	环	—	7.8	—			右回縁ヘラケズリ、火押	火押		
146	須臾器	环	—	—	—			同群			
147	須臾器	有 台 环	11.6	8.1	3.6			方向不明回縁糸切→周縁部ヘラケズリ→付高台、火押	火押	船上分析試料35 船上分析試料36	
148	須臾器	有 台 环	11.6	7.8	4.2			方向不明回縁糸切→周縁部ヘラケズリ→付高台	火押		
149	須臾器	有 台 环	12.8	8.8	3.9			方向不明回縁糸切→周縁部ヘラケズリ→付高台	火押		
150	須臾器	有 台 环	13.0	11.0	3.3			方向不明回縁糸切→周縁部ヘラケズリ→付高台	火押		
151	須臾器	有 台 环	13.2	5.4	4.2			方向不明回縁糸切→周縁部ヘラケズリ→付高台	火押		
152	須臾器	有 台 环	14.4	7.4	6.1			回縁方向不明糸切→付高台、周縁「又」?	火押		
153	須臾器	有 台 环	15.0	5.0	6.5			方向不明回縁糸切→付高台	火押		
154	須臾器	有 台 环	10.6	7.8	5.4			回縁ヘラケズリ→付高台	火押	船上分析試料37	
155	須臾器	有 台 环	10.8	6.4	4.0			回縁ヘラケズリ→付高台	火押		
156	須臾器	有 台 环	11.8	5.0	4.1			回縁ヘラケズリ→付高台	火押		
157	須臾器	有 台 环	12.0	8.6	3.7			回縁ヘラケズリ→付高台、火押	火押		
158	須臾器	有 台 环	12.6	9.2	3.5			回縁ヘラケズリ→付高台、火押	火押		
159	須臾器	有 台 环	12.8	5.8	3.5			回縁ヘラケズリ→付高台	火押		
160	須臾器	有 台 环	13.0	5.0	4.3			回縁ヘラケズリ→付高台、火押	火押		

第33表 出土遺物整理表27 (遺構外)

No	器 種	器 形	口 径(㎝)	法 置 深(㎝)	器 高(㎝)	重 量(㌘)	外 形	内 面	備 考
131	須臾器	有台杯	13.0	16.4	4.7		黒釉ヘラタズリ→付高台		
132	須臾器	有台杯	13.4	9.6	3.8		右黒釉ヘラタズリ→付高台		
133	須臾器	有台杯	15.4	9.6	6.1		右黒釉ヘラタズリ→付高台		
134	須臾器	有台杯	16.0	10.0	6.7		右黒釉ヘラタズリ→付高台		
135	須臾器	有台杯	12.2	8.2	3.3		手持ヘラタズリ→付高台		
136	須臾器	有台杯	13.0	9.2	3.9		手持ヘラタズリ→付高台、水滲		
137	須臾器	有台杯	12.8	9.6	3.6		手持ヘラタズリ→付高台、水滲、[X]裏印		
138	須臾器	有台杯	14.4	9.0	4.5		手持ヘラタズリ→黒釉ヘラタズリ→付高台		
139	須臾器	有台杯	16.0	10.8	6.1		手持ヘラタズリ→付高台、水滲		瓶上分析高性器
170	須臾器	有台杯	17.6	11.0	7.0		付高台、水滲		酸化磁器成
171	須臾器	有台杯	12.6	9.6	3.7		付高台、水滲		酸化磁器成
172	須臾器	有台杯	13.0	9.4	4.2		付高台		
173	須臾器	有台杯	14.4	10.0	3.7		付高台、水滲		
174	須臾器	有台杯	14.4	10.6	3.7		付高台、水滲		
175	須臾器	有台杯	15.2	9.0	6.2		付高台		
176	須臾器	有台杯	8.2	—	—		自然釉付着(ガラス質の緑色)		
177	須臾器	有台杯	11.0	—	—		黒釉ヘラタズリ、付高台欠損		
178	須臾器	有台杯	13.0	—	—		付高台割落		
179	須臾器	有台杯	13.8	—	—		黒釉方向不明糸切→黒釉ヘラタズリ、付高台割落		
180	須臾器	有台杯	15.0	—	—				
181	須臾器	有台杯	16.6	—	—				
182	須臾器	有台杯	—	6.0	—		右黒釉糸切→付高台		
183	須臾器	有台杯	—	6.4	—		右黒釉糸切→付高台		
184	須臾器	有台杯	—	7.2	—		黒釉方向不明糸切→付高台		
185	須臾器	有台杯	—	9.6	—		黒釉方向不明糸切→付高台		
186	須臾器	有台杯	—	10.3	—		黒釉方向不明糸切→付高台		
187	須臾器	有台杯	—	12.0	—		黒釉方向不明糸切→付高台		
188	須臾器	有台杯	—	7.2	—		黒釉ヘラタズリ→付高台		
189	須臾器	有台杯	—	16.0	—		黒釉ヘラタズリ→付高台、水滲		
190	須臾器	有台杯	—	7.0	—		手持ヘラタズリ→付高台、水滲		
191	土 師 器	杯	—	—	—		ヘラタズリ、割落		ヘラタズリ、割落処理
192	須臾器	杯	10.6	—	2.5		ヘラタズリ		
193	須臾器	杯	14.0	—	3.4		ヘラタズリ		
194	須臾器	杯	14.0	—	2.9		ヘラタズリ、水滲		
195	須臾器	杯	14.0	—	3.9		ヘラタズリ、水滲		
196	須臾器	杯	14.3	—	2.8		ヘラタズリ、水滲		
197	須臾器	杯	14.6	—	2.7		ヘラタズリ		
198	須臾器	杯	14.6	—	2.9		ヘラタズリ		
199	須臾器	杯	14.6	—	3.8		ヘラタズリ、水滲		
200	須臾器	杯	15.6	—	3.0		ヘラタズリ、水滲		瓶上分析高性器

第31表 出土遺物数量表2 (遺物外)

No	器 種	器 形	法			量		外 面	内 面	備 考
			口 径(㎝)	透 径(㎝)	透 径(㎝)	透 径(㎝)	透 径(㎝)			
201	須臾器 坏	蓋	15.6	—	—	2.9	—	ヘラケズリ、火押	火押	胎土分析試料40
202	須臾器 坏	蓋	15.8	—	—	2.8	—	ヘラケズリ、火押	火押	
203	須臾器 坏	蓋	16.0	—	—	2.9	—	ヘラケズリ	火押	
204	須臾器 坏	蓋	16.0	—	—	4.1	—	ヘラケズリ	火押	
205	須臾器 坏	蓋	16.0	—	—	4.0	—	ヘラケズリ	火押	
206	須臾器 坏	蓋	16.0	—	—	2.9	—	ヘラケズリ、火押	火押	胎土分析試料41
207	須臾器 坏	蓋	16.4	—	—	3.9	—	ヘラケズリ、火押	火押	
208	須臾器 坏	蓋	16.6	—	—	3.0	—	ヘラケズリ	火押	
209	須臾器 坏	蓋	16.6	—	—	3.2	—	ヘラケズリ、火押	火押	
210	須臾器 坏	蓋	17.0	—	—	3.8	—	ヘラケズリ	火押	
211	須臾器 坏	蓋	17.8	—	—	3.4	—	ヘラケズリ	火押	胎土分析試料42
212	須臾器 坏	蓋	12.8	—	—	—	—	ヘラケズリ、火押	火押	
213	須臾器 坏	蓋	13.8	—	—	—	—	ヘラケズリ、火押	火押	
214	須臾器 坏	蓋	14.4	—	—	—	—	ヘラケズリ、火押	火押	
215	須臾器 坏	蓋	14.6	—	—	—	—	ヘラケズリ	火押	
216	須臾器 坏	蓋	14.8	—	—	—	—	ヘラケズリ	火押	胎土分析試料42
217	須臾器 坏	蓋	15.0	—	—	—	—	ヘラケズリ、火押	火押	
218	須臾器 坏	蓋	15.0	—	—	—	—	ヘラケズリ、火押	火押	
219	須臾器 坏	蓋	15.4	—	—	—	—	ヘラケズリ	火押	
220	須臾器 坏	蓋	15.4	—	—	—	—	ヘラケズリ、火押	火押	
221	須臾器 坏	蓋	15.4	—	—	—	—	ヘラケズリ、火押	火押	胎土分析試料42
222	須臾器 坏	蓋	15.4	—	—	—	—	ヘラケズリ、火押	火押	
223	須臾器 坏	蓋	15.6	—	—	—	—	火押	火押	
224	須臾器 坏	蓋	15.8	—	—	—	—	ヘラケズリ、火押	火押	
225	須臾器 坏	蓋	15.8	—	—	—	—	墨漬 [Q]	火押	
226	須臾器 坏	蓋	15.8	—	—	—	—	ヘラケズリ、火押	火押	胎土分析試料42
227	須臾器 坏	蓋	15.6	—	—	—	—	ヘラケズリ	火押	
228	須臾器 坏	蓋	17.0	—	—	—	—	ヘラケズリ、火押	火押	
229	須臾器 坏	蓋	—	—	—	—	—	ヘラケズリ、火押	火押	
230	須臾器 坏	蓋	—	—	—	—	—	ヘラケズリ	火押	
231	須臾器 坏	蓋	—	—	—	—	—	ヘラケズリ、火押	火押	胎土分析試料42
232	須臾器 坏	蓋	—	—	—	—	—	ヘラケズリ、火押	火押	
233	須臾器 坏	蓋	—	—	—	—	—	ヘラケズリ	火押	
234	須臾器 坏	蓋	—	—	—	—	—	ヘラケズリ	火押	
235	須臾器 坏	蓋	—	—	—	—	—	ヘラケズリ	火押	
236	須臾器 坏	蓋	—	—	—	—	—	ヘラケズリ、火押	火押	胎土分析試料42
237	須臾器 坏	蓋	—	—	—	—	—	ヘラケズリ、火押	火押	
238	須臾器 坏	蓋	—	—	—	—	—	ヘラケズリ、火押	火押	
239	須臾器 坏	蓋	—	—	—	—	—	ヘラケズリ、火押	火押	
240	須臾器 坏	蓋	—	—	—	—	—	ヘラケズリ	火押	

第32表 出土文物群表29 (遺構外)

No	器種	器形	口徑(㎝)	底径(㎝)	高さ(㎝)	重量(g)	外 形・質量・文様	内 面	備 考
241	須恵器 坏	盃	—	—	—	—	ヘラケズリ、火押	火押	
242	須恵器 坏	盃	—	—	—	—	ヘラケズリ、火押	火押	
243	須恵器 坏	盃	—	—	—	—	ヘラケズリ、火押	ヘラミガキ、黒色処理	
244	須恵器 坏	盃	—	—	—	—	ヘラケズリ、火押	ヘラミガキ、黒色処理	
245	土師器 碗	碗	14.6	7.6	4.7	—	方向不明形態承切一付高台	ヘラミガキ、黒色処理	
246	土師器 碗	碗	12.6	—	—	—	同形ヘラケズリ一付高台、焼成前習書「大下」	ヘラミガキ、黒色処理	
247	土師器 碗	碗	—	8.8	—	—	同形ヘラケズリ一付高台、焼成前習書「大下」	ヘラミガキ、黒色処理	
248	土師器 碗	碗	—	—	—	—	同形ヘラケズリ一付高台、焼成前習書「基本」	ヘラミガキ、黒色処理	
249	灰輪陶器 碗	碗	10.0	5.0	3.6	—	同形ヘラケズリ一付高台、遺物	遺物	高台欠損
250	灰輪陶器 碗	碗	—	6.8	—	—	同形ヘラケズリ一付高台、遺物	遺物	
251	灰輪陶器 碗	碗	—	7.6	—	—	同形ヘラケズリ一付高台、遺物	遺物	
252	緑輪陶器 碗	碗	6.0	—	—	—	遺物	遺物	
253	土師器 皿	皿	13.0	6.8	2.9	—	同形ヘラケズリ一付高台	ヘラミガキ、黒色処理	
254	土師器 皿	皿	13.4	6.2	3.3	—	付高台	ヘラミガキ、黒色処理	
255	土師器 皿	皿	13.6	6.2	3.5	—	付高台	ヘラミガキ、黒色処理	
256	土師器 皿	皿	14.0	7.2	3.3	—	付高台	ヘラミガキ、黒色処理	
257	土師器 皿	皿	12.0	—	—	—	方向不明形態承切一付高台	ヘラミガキ、黒色処理	
258	土師器 皿	皿	18.4	—	—	—	付高台、焼成前習書「S」	ヘラミガキ、黒色処理	
259	土師器 皿	皿	—	—	—	—	遺物	遺物	
260	灰輪陶器 武流	武流	13.8	—	—	—	ヘラケズリ	ナデ	
261	土師器 武流	武流	9.6	—	—	—	ヘラケズリ	ナデ	
262	土師器 武流	武流	14.0	—	—	—	ヘラケズリ	ナデ	
263	土師器 武流	武流	18.4	—	—	—	ヘラケズリ	ナデ	
264	土師器 武流	武流	—	3.6	—	—	ヘラケズリ	ナデ	
265	土師器 武流	武流	—	4.5	—	—	ヘラケズリ	ナデ	
266	土師器 武流	武流	—	5.2	—	—	ヘラケズリ	ナデ	
267	土師器 武流	武流	—	7.2	—	—	ヘラケズリ	ナデ	
268	土師器 ロクロ焼	ロクロ焼	10.4	—	—	—	ヘラケズリ	ナデ	
269	土師器 ロクロ焼	ロクロ焼	12.6	—	—	—	ヘラケズリ	ナデ	
270	土師器 ロクロ焼	ロクロ焼	13.0	—	—	—	ヘラケズリ	ナデ	
271	土師器 ロクロ焼	ロクロ焼	—	5.4	—	—	ヘラケズリ	ナデ	
272	土師器 ロクロ焼	ロクロ焼	—	8.2	—	—	ヘラケズリ	ナデ	
273	土師器 実	実	—	5.0	—	—	ヘラケズリ	ナデ	
274	土師器 実	実	—	11.0	—	—	ヘラケズリ	ナデ	
275	土師器 豆	豆	—	7.4	—	—	ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	
276	須恵器 実	実	34.5	16.4	—	34.5	平行線目、ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	能土式式滅土土質
277	須恵器 実	実	10.8	—	—	—	火押	ハケメ	
278	須恵器 実	実	13.7	—	—	—	—	—	
279	須恵器 実	実	16.4	—	—	—	—	—	
280	須恵器 実	実	20.0	—	—	—	—	—	

第31表 出土遺物目録表(3) (遺物外)

No	圖 種 別 形	法			量		外 形・構造・文様	内 圖	備 考
		口徑(㎝)	底徑(㎝)	底厚(㎝)	器高(㎝)	重量(g)			
321	鉄 器 刀	子	10.4	1.3	0.5	14.5			
322	鉄 器 刀	子	10.8	1.3	0.4	14			
323	鉄 器 刀	子	10.9	1.7	0.4	19.7			
324	鉄 器 刀	子	11.4	2.3	0.3	26.2			
325	鉄 器 刀	子	12.6	5.0	0.4	9.1			
326	鉄 器 刀	子	12.8	1.5	0.5	20.8			
327	鉄 器 刀	子	13.0	1.6	0.5	11.4			
328	鉄 器 刀	子	14.0	1.2	0.4	14.7			
329	鉄 器 刀	子	27.5	1.8	0.5	50.4			
330	鉄 器 鉄	鏃	7.9	5.5	0.7	21			
331	鉄 器 鉄	鏃	10.8	6.4	0.3	7.8			
332	鉄 器 鉄	鏃	8.0	6.8	0.2	11			
333	鉄 器 鉄	鏃	9.7	6.7	0.7	15.6			
334	鉄 器 鉄	鏃	7.4	6.7	0.6	27.1			
335	鉄 器 鉄	鏃	12.6	1.1	0.4	19.4			
336	鉄 器 鉄	鏃	5.5	—	—	26.4			
337	鉄 器 鉄	鏃	5.4	—	0.5	48.4			
338	鉄 器 鉄	鏃	20.0	4.3	0.4	90.1			
339	銅 器 銅	鏃	20.5	3.6	1.4	162			
340	銅 製 品	鏃	2.5	3.0	0.6	4.5			
341	銅 製 品	鏃	2.3	2.9	0.5	7.2			
342	銅 製 品	鏃	3.8	4.4	0.2	10.5			
343	銅 製 品	鏃	1.5	6.6	0.7	22.5			
344	土 製 品	鏃	—	7.2	3.6	270			4面使用
345	石 製 品	鏃	—	—	—	(2.8)			
346	石 器 砥	石	10.5	7.3	4.5	360			
347	石 器 打製石斧	石	13.7	5.9	1.9	145.1			
348	石 器 打製石鏃	石	2.0	1.3	0.6	1			

第三章 総括

第1節 土器様相

「西一本柳Ⅲ・Ⅳ」の土器編年を基準に、小山岳夫の弥生土器編年の一連の成果、「芝宮遺跡群 上芝宮遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ 下宮根遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ」の成果、鉢師屋遺跡群での堀隆の編年、高村博文の「瀬沢遺跡-佐久地方の平安時代土器編年試論」の成果、を援用して、深堀遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅴの調査で検出された住居址の時期を明らかにする。

検出された73軒の住居址は、第37表のように弥生時代中期、古墳時代後期、奈良・平安時代に大別される。更に、古墳時代後期は「西一本柳Ⅲ・Ⅳ」の時期区分による古墳時代Ⅳ期、奈良・平安時代はⅠ期～Ⅶ期に細別される。以下、各時代毎に土器様相を概観していく。

時代	時期	住居址
弥生時代中期後半		H44・H47・H50・H51
古墳時代後期	Ⅳ	H17・H40・H52
	Ⅰ	H8・H9・H13
奈良・平安時代	Ⅱ	
	Ⅲ	
	Ⅳ	H10・H12・H58・H59・H66・H68・H69
	Ⅴ	H1・H5・H19・H53・H57・H62・H67・H70
	Ⅵ	H3・H6・H7・H25・H28・H29・H32・H33・H34・H35・H38・H39・H45・H54 H56・H60・H65・H71・H72
	Ⅶ	H2・H4・H14・H15・H16・H18・H20・H21・H22・H23・H24・H27・H30・H31 H36・H37・H42・H43・H48・H49・H55・H61・H64・H73
不明		H11・H26・H41・H46・H63

第37表 時期別住居址一覧表

弥生時代中期後半

佐久地方の弥生中期後半の編年案としては、小山岳夫の新・旧ふたつの編年案が提示されている。ここでは、一旦小山の編年案から離れ、既存資料に加え、近年飛躍的に増加した概期の住居址出土資料のなかから、一括性の高い資料を抽出し、佐久市の弥生時代中期後半の土器変遷を捉え、その後小山の新編年案との整合性を考察する。

○抽出した住居址は以下のとおりである。

五里田遺跡-H1・H2・H11・H20号住居址

円正坊Ⅱ-H3号住居址

西一本柳Ⅲ・Ⅳ-H26・H41号住居址・M8号溝址

北西ノ久保-Y1・Y23・Y75・Y126号住居址

根々井芝宮-Y6・Y14・Y25号住居址

○各遺跡の住居址毎に、口縁部が残存する姿を第139図の口縁部の分類により分類し、第140図の計測位置において計測した。更に第141図の1～5文様帯の有無による分類を行った。その結果は以下のとおりである。(口径÷最小径=1.5以下、最大径÷最小径=3.0以下のものを太頭とした)

1) 五里田遺跡

H1-計測可能な個体は5点である。

口縁部形態はB(4)、D(1・5・6・8)である。計測不可能な資料中にはAが認められる。

文様帯は1と3しか認められないが、計測不可能な資料中には2・5が認められる。

H2-計測可能な個体は1点である。

口縁部形態はD(2)であり、口径÷最小径=1.36、最大径÷最小径=2.64が太頭である。計測不可能な資

料中にはAが認められる。

文様帯は1と3を有する。計測不可能な資料中には2・4・5が認められる。

H11—計測可能な個体は4点である。

口縁部形態はB(2)、D(3・4)、F(1)である。2は口径÷最小径=1.25で太頸である。計測不可能な資料中にはAが認められる。

文様帯は1と3が認められる。計測不可能な資料中には2・4・5が認められる。

H20—計測可能な個体は6点である。

口縁部形態はB(11)、D(1・3・4)、E(9・10)である。11は口径÷最小径=1.52で太頸である。

文様帯は1・3・5が認められる。計測不可能な資料中には4が認められる。

2) 円正坊

H3—計測可能な個体は1点である。

口縁部形態はAを呈する。

文様帯は1・2・3に認められる。

3) 西一本脚Ⅲ・Ⅳ

H26—計測可能な個体2点である。

口縁部形態はC(5)、D(6)である。

文様帯は1・2・3・4に認められる。

H41—後期の資料である。計測可能な個体は6点である。

口縁部形態はC(48・49・50・52)、E(47・63)である。

文様帯は2・3に認められる。

M8—計測可能な個体は19個体である。

口縁部形態はA(87・88・90・91)、D(69~81)、E(82・100)である。87は口径÷最小径=1.5、79は口径÷最小径=1.37で太頸である。

文様帯は1・2・3・5に認められる。計測不可能な資料中には4が認められる。

4) 北西ノ久保

Y1—計測可能な個体は3点である。

口縁部形態はD(1・2)とE(3)が認められる。3は口径÷最小径=1.25で太頸である。

文様帯は1・3が認められる。

Y23—計測可能な個体は8点である。

口縁部形態はD(1~6)とE(7・10)が認められる。10は口径÷最小径=1.45で太頸である。計測不可能な資料中にはAが認められる。

文様帯は1・3が認められる。計測不可能な資料中には2・5が認められる。

Y75—計測可能な個体は3点である。

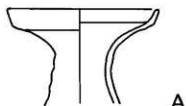
口縁部形態はA(1)、D(2・3)が認められる。

文様帯は1・2・3に認められる。

Y126—計測可能な個体は1点である。

口縁部形態はAである。

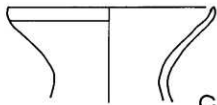
文様帯は1・2・3に認められる。計測不可能な資料中には



A



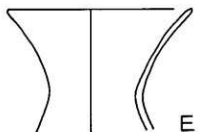
B



C



D



E



F

第139図 壺口縁部の分類

4・5が認められる。

5) 根々井芝宮

Y6—計測可能な個体は7点である。

口縁部形態はA(10)、D(3~8)が認められる。10は口径÷最小径=1.5で太頸である。

文様帯は1・3・4・5に認められる。

Y14—計測可能な個体は11点である。

口縁部形態はC(2)、D(3・5・10・14・15・17~19)、E(6・13)が認められる。3は口径÷最小径=1.55、最大径÷最小径=2.52、6は口径÷最小径=1.23、最大径÷最小径=2.08で太頸である。

文様帯は1・2・3・4・5に認められる。

Y25—計測可能な個体は9点である。

口縁部形態はA(8・14・21)、D(4・6・7・9・10・13)が認められる。

文様帯は1・2・3・4・5に認められる。

以上を整理したものが第38表である。

○L口縁部形態はDが基本である。D形態が認められない住居址の理由は、円正坊ⅡH3と北西ノ久保Y126は壺の出度量の少なさに、西一本柳Ⅲ・ⅣH41は唯一後期の住居址であることによる。文様帯も必然的に1・3を有するもの大半となる。佐久市内出土の弥生中期後半の壺は時期に関係なく、D口縁で文様帯1・3に施文されるものが普遍的であると考えられる。

後期前半の資料である西一本柳Ⅲ・ⅣH41はC・Eの口縁部形態で文様帯2・3に施文される。これは、同一の口縁部形態を有する西一本柳Ⅲ・ⅣH26-5や、根々井芝宮H14-2が文様帯1を有するのとは異なることから、C形態で文様帯2・3を有する壺は、後期前半の特徴と捉える。

文様帯2はL口縁部形態A・B・Cの受口縁部に特有の文様帯である。受口縁部の出現が単純L口縁と異なるのであれば、時期比定の根拠のひとつであるが、今回の抽出資料においては判断が難しい。

F形態は、五里田H11において1点のみ認められる形態であり、他地域の影響を受けたものとする。

B形態も五里田においてのみ認められる形態である。その原因が時期によるものか、場所によるものかは不明である。

E形態はD形態と共存しない場合、D形態を伴う資料より新しい様相と捉えられる。

今回の分析から導き出された事象ではないが、現状での該期土器研究の共通認識から、文様帯3・4・5すべてを有するものは古い様相と考える。しかし、横位と縦位では横位の方が古い時期で消失し、縦位は存続時間が長いと考えられる。L口縁部は時期が下がるにつれ、外反(開口角度)が強まり、伸長する。

○前記の考えを基に抽出資料を時間的に位置付けると以下のような順序となる。

根々井芝宮—Y6・Y14・Y25



五里田—H1・H2・H11・H20 北西ノ久保—Y1・Y23・Y75・Y126 西一本柳Ⅲ・Ⅳ—H26・M8 円正坊Ⅱ—H3



西一本柳Ⅲ・Ⅳ—H41

以上の区分と小山編年案の並行関係は、

根々井芝宮—Y6・Y14・Y25⇒二期古、

五里田—H1・H2・H11・H20、北西ノ久保—Y1・Y23・Y75・Y126、西一本柳Ⅲ・Ⅳ—H26・M8、円正坊Ⅱ—H3⇒二期新

西一本柳Ⅲ・Ⅳ—H41⇒後期I期

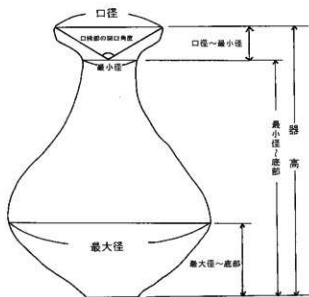
と考えられる。しかし、根々井芝宮—Y6は小山編年案では二期新、北西ノ久保—Y1・Y75は二期古、円正坊Ⅱ—H3は二期新に位置付けられており、個々の資料の位置付けに關しては若干の齟齬が認められる。

○今回の抽出資料には認められなかった、小山のI期に該当する資料や各区分の過渡的様相の資料、各区分の副分については以下のように想定している。

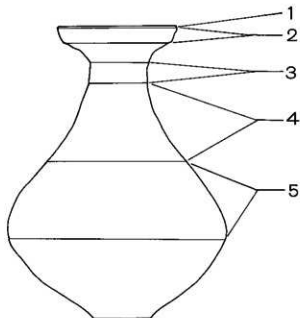
I期の資料としては、深堀Ⅰ—第2号住居址と今回の調査により検出された、深堀Ⅲ・Ⅳ—H50号住居址を該当させる。深堀Ⅰの住居址出土資料は、従来は第1号住居址出土土器と第2号住居址出土土器を包括して、深堀住居址出土資料として資料化されていたが、報告書の記載に従い第2号住居址出土土器に限定して、本期に該当させる。

II期古の資料に和田上南Y5号住居址出土資料を加える。

II期新の資料は細分化も可能と思われる。



第140図 壺の計測位置



第141図 壺の文様帯

遺構名	口縁部の形態						文様帯				
	A	B	C	D	E	F	1	2	3	4	5
瓦里川 H 1	*	1		4			○	△	○		△
H 2	*			①			○	△	○	△	△
H11	*	①		2		1	○	△	○	△	△
H20		①		3	2		○		○	△	○
円正坊Ⅱ H 3	1						○	○	○		
西一本柳Ⅲ・Ⅳ H26			1	1			○	○	○	○	
H41			4								
M 8	3+①			12+①	2		○	○	○	△	○
北西ノ久保 Y 1				2	①		○		○		
Y23	*			6	1+①		○	△	○		△
Y75	1			2			○	○	○		
Y126	1						○	○	○	△	△
根々井芝宮 Y 6	①			6			○		○	○	○
Y14			1	7+①	1+①		○	○		○	○
Y25	3			6			○	○	○	○	○

第38表 口縁部形態と文様帯 (○は太頸の表現)

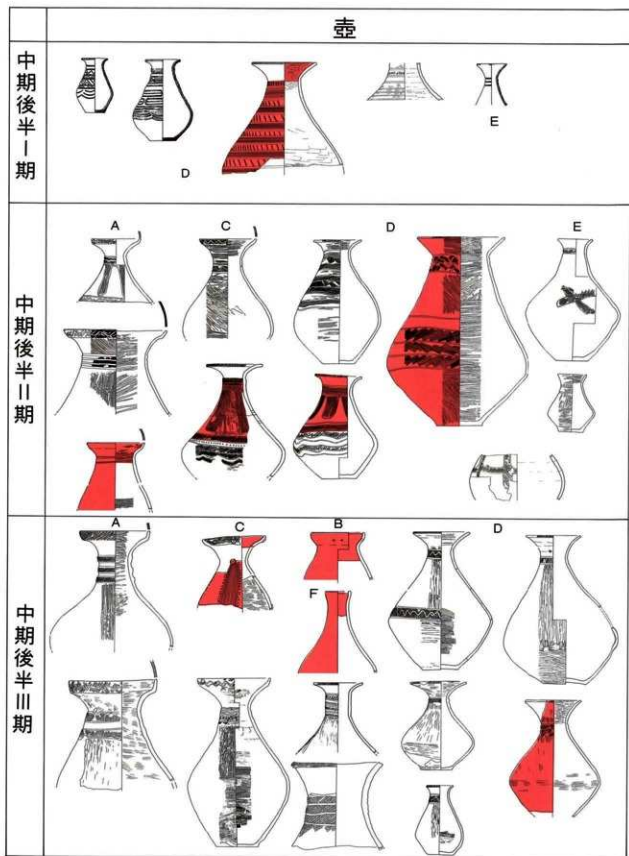
Ⅲ期として竹田峯18住を該当させる。

各期の名称は小山編年案との対比のため、小山編年案の名称を使用してきたが、Ⅱ期占とⅡ期新は同一時期の新と古以上の変化が認められるため独立した時期区分を行う。新たな時期区分名称は次のとおりである。

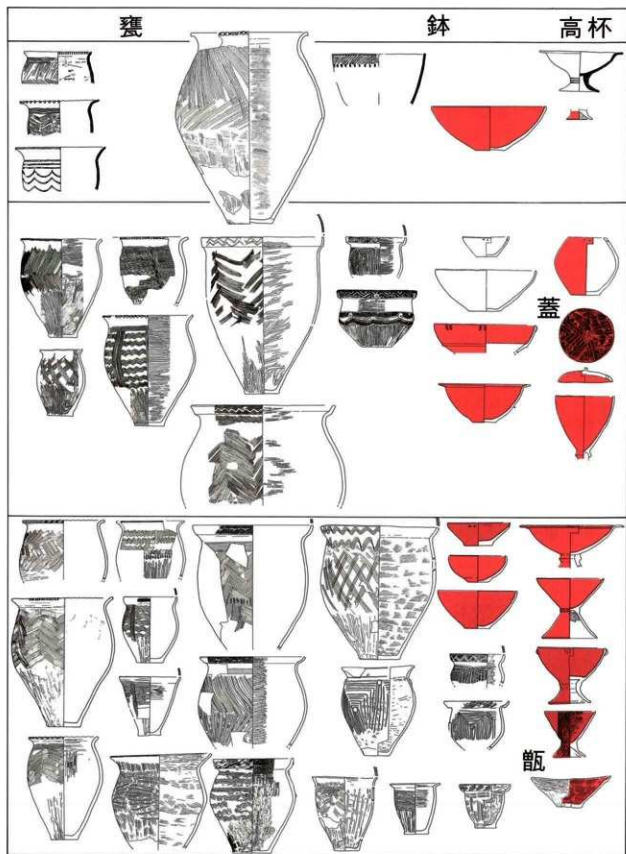
中期後半 I期→I期、Ⅱ期占→Ⅱ期、Ⅱ期新→Ⅲ期、Ⅲ期→Ⅳ期

後期前半 I期→I期

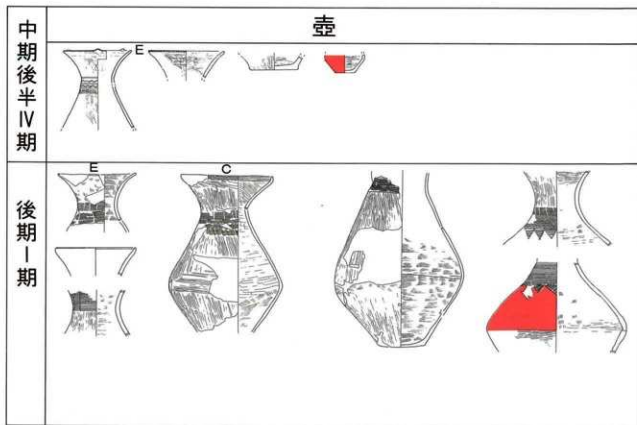
以上の時期区分に、今回の調査で検出されたH50号住居址以外の住居址を位置付けると、H44・47・51はⅡ期に比定されるが、Ⅱ期の中でもI期に近い時期の所産と思われる。現時点において、佐久市内弥生中期後半遺跡の中で最も古く集落が形成された遺跡は深城遺跡である。



第142圖 佐久市弥生時代中期後半編年表(1)



第143圖 佐久市弥生時代中期後半編年表(2)



第144図 佐久市弥生時代中期後半編年表(3)

古墳時代後期～平安時代

該当する69軒の住居址を、前記の基準により分類すると第37表のように捉えられた。以下に各期の土器様相の概略を記していく。

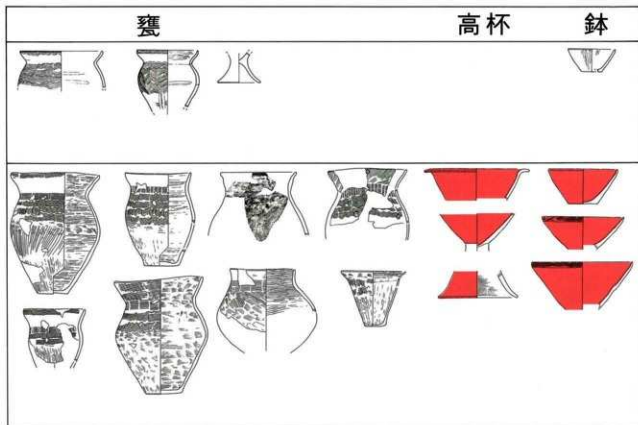
古墳時代Ⅳ期—「西一本柳Ⅲ・Ⅳ」においては7世紀代の実年代を想定している。この期に比定される住居址は3軒である。H17号住居址はE3・F4・G2の土師器環が認められ、土師器甕は長胴である。口縁部に最大径を有しており、縦位ヘラケズリ調整を基本とするが、ハケメも認められる。体部下半で底部に向かい内湾気味に弱く屈折するものも認められる。球胴を呈する大・小の土師器壺ないし甕や、小型多孔の甕も存在する。H40号住居址はE2・E3の土師器環が認められ、E2の坏身を有する、やや短脚の高杯も伴う。土師器甕は底部がやや突出するものや、頸部下に横方向のヘラケズリ調整が施されるものも存在するが、H17と同様に、体部下半で底部に向かい内湾気味に弱く屈折するものも認められる。大型の甕、小型の無頸壺なども認められる。H52号住居址はE3の土師器環が1点だけ出土している。

いずれの住居址もD系の土師器環を伴わないこと、E系の環が主体であることから、本期に比定される。7世紀代の前半を想定している。

奈良・平安時代Ⅰ期—「西一本柳Ⅲ・Ⅳ」においては8世紀第1四半期の実年代を想定している。この期に比定される住居址は3軒である。H8号住居址は回転ヘラ切りの須恵器環、扁平な擬宝珠つまみを有する須恵器環蓋、厚手で体部が強く張る土師器小型甕などが認められる。H9号住居址は口縁部に最大径を有し、「く」字口縁を呈する、厚手の武蔵甕や、半球状を呈し、内面黒色処理が施される土師器鉢などが出土している。H13号住居址は身が浅く、底部回転ヘラケズリが施される、須恵器有台環が出土している。

奈良・平安時代Ⅱ期・Ⅲ期—比定される住居址は存在しない。

奈良・平安時代Ⅳ期—「西一本柳Ⅲ・Ⅳ」においては8世紀第4四半期～9世紀初頭の実年代を想定している。比定



第145図 佐久市弥生時代中期後半編年表(4)

される住居址はH10・H12・H58・H59・H66・H68・H69の7軒である。須恵器環は回転糸切痕を残すものが主体であるが、ヘラケズリ調整のものも存在する。有台環は身の深いものになる。土師器環はヘラケズリのものが主体であり、糸切痕を残すものが少数である。ロクロ成形で、内面黒色処理が施される。土師器甕は武蔵甕が主体であり、「く」字口縁を呈し、口縁部に最大径を有するものが大半であるが、「コ」字口縁を呈し、体部に最大径を有するものも見受けられる。また、ロクロ甕や羽釜など、所謂ロクロ土師器も存在する。

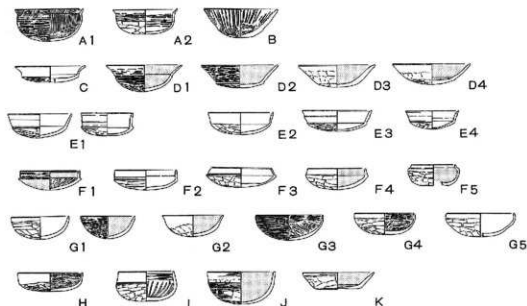
奈良・平安時代V期—「西一本柳Ⅲ・Ⅳ」においては9世紀前半の実年代を想定している。H1・H5・H19・H53・H57・H62・H67・H70の8軒の住居址が比定される。須恵器環は糸切痕を残し、底径は小さくなる。土師器環は糸切痕を残すものと、ヘラケズリ調整のものが共伴し、内面黒色処理が施される。土師器甕は「コ」字口縁を呈し、体部に最大径を有する武蔵甕とロクロ甕が存在する。灰軸陶器が伴う。

奈良・平安時代VI期—「西一本柳Ⅲ・Ⅳ」においては9世紀後半の実年代を想定している。H3・H6・H7・H25・H28・H29・H32・H33・H34・H35・H38・H39・H45・H54・H56・H60・H65・H71・H72の19軒の住居址が比定される。環は糸切痕を残し、内面黒色処理が施される土師器が主体となり、土師器碗や皿も多く認められる。須恵器環は少数が認められる。土師器甕はロクロ甕が主体となり、「コ」字口縁の武蔵甕が僅かに存在する。K-14期・光ケ丘1号窯期と思われる灰軸陶器が伴う。墨書土器が多く認められるのも特徴である。

奈良・平安時代VII期—「西一本柳Ⅲ・Ⅳ」においては10世紀前半の実年代を想定している。H2・H4・H14・H15・H16・H18・H20・H21・H22・H23・H24・H27・H30・H31・H36・H37・H42・H43・H48・H49・H55・H61・H64・H73の24軒の住居址が比定される。基本的に須恵器環は伴わず、土師器環・碗・皿が主体である。これらの内面処理はVI期においてはヘラミガキ後黒色処理が施されていたものが、暗文や部分的なヘラミガキ、あるいはヘラミガキを施さないものが認められる。黒色処理が施されないものも存在する。土師器甕はロクロ甕が主体であり、武蔵甕は存在しない。灰軸陶器は大原2号窯期のものが伴う。VII期よりは減少するが墨書土器も多く認められる。

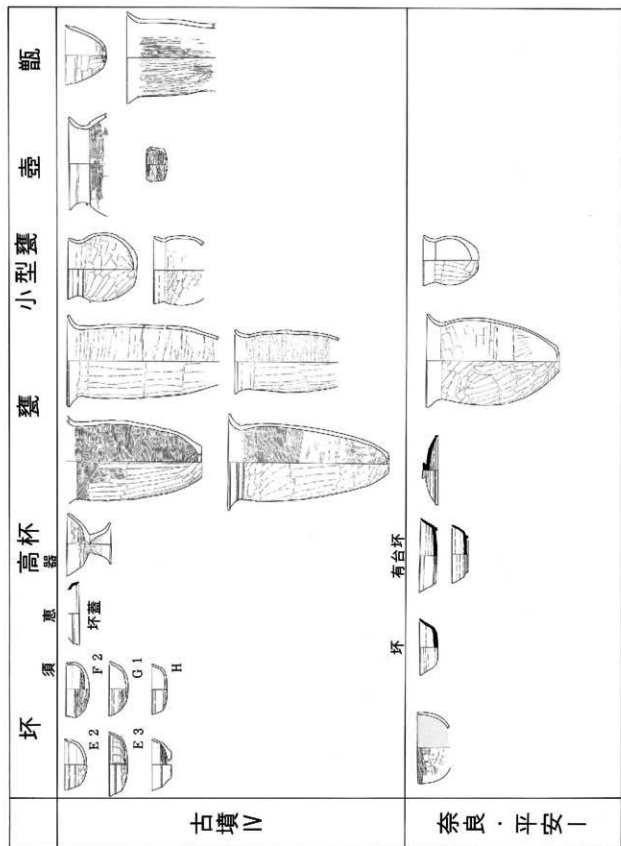
以上の同一時期内において、IV期ではH66・H68をH58が切る、V期ではH70をH67が切るといった新旧関係が存

在するが、時期を細分するほどの内容の変化は認められない。深塚Ⅲ・Ⅴの調査範囲に限ってであるが、古墳時代Ⅳ期～奈良・平安時代Ⅰ期にかけて集落が成立し、一旦消滅するものの、奈良・平安時代Ⅳ期になって再び集落が形成され、規模を拡大し、Ⅵ・Ⅶ期において最盛期を迎えるが、Ⅷ期を最後に突如として集落は消滅している。

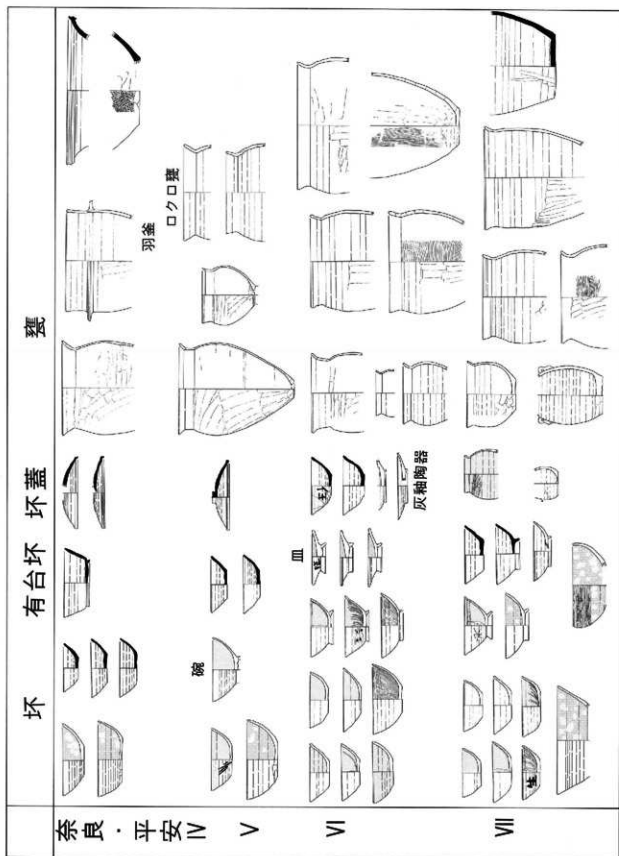


第146図 古墳時代土器器杯の分類

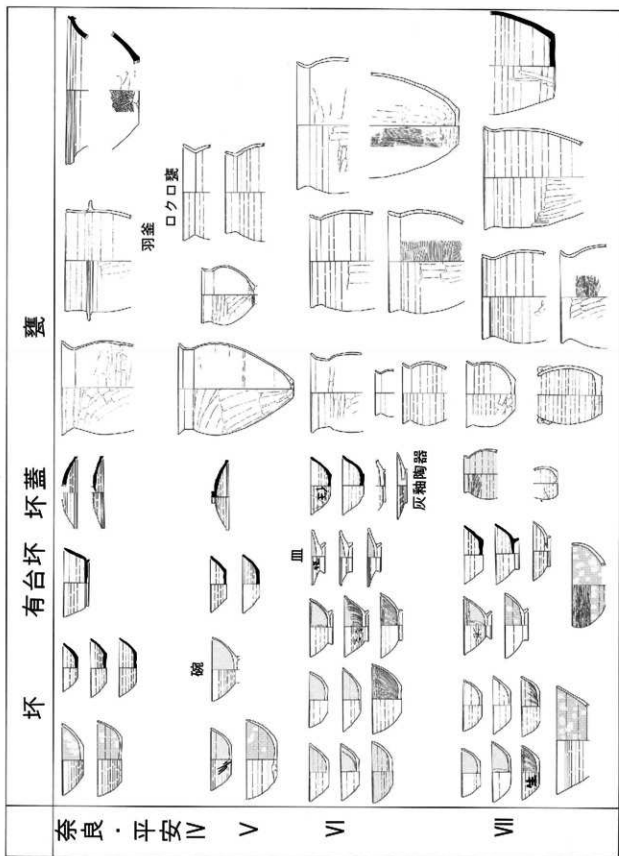
- A1—丸底の底部から体部が内湾しながら立ち上がり、短い口縁部が強く外反する。
 A2—A1の口縁部がやや長く、緩やかに外反する。
 B—A1に共存する高杯の脚部が省略された形態。
 C—A2の口縁部が更に長くなり、口縁部と体部の境に稜を形成して外反するもの。
 D1—Cの底部が半球状に丸く、深くなったもの。口縁部と体部の境の稜は調整による段や、凹に変化する。
 D2—D1の体部下が浅いもの。
 D3—D2の口縁部と体部の境の、段や凹が省略されたもの。D1・D2に施されていた蒺磨き調整も省略化される。
 D4—D3において僅かに名残を止めていた、口縁部と体部の屈曲がなくなり、浅い半球状を呈するもの。内面の底部と体部の境に段を有する。
 E1—須恵器杯蓋の模倣、あるいは模倣を原形とするものの内、体部と口縁部の境の段を有するもの。
 E2—須恵器杯蓋の模倣を原形とするものの内、体部と口縁部の境の段を有せず、稜を有するもの。
 E3—所謂有段口縁杯。
 E4—E1同様の形態を呈し、橙色で陶質と表現できるような焼成が施されたもの。概して、小型で、器壁が薄い特徴を有する。
 F1—須恵器杯身の模倣、あるいは杯身の模倣を原形とするもので口縁部と体部の境に段を有するもので、口縁部が直立するもの。
 F2—須恵器杯身の模倣を原形とするものの内、体部と口縁部との境に段を有せず、稜を有するもので、口縁部が直立するもの。
 F3—F1の口縁部が内傾するもの。
 F4—F2の口縁部が内傾するもの。
 F5—F1の体部が平底から内湾する形態のもの。
 G1—半球状で、口縁部が垂直に開くもの。
 G2—半球状で、口縁部が外反するもの。
 G3—半球状で、口縁部が直立するもの。
 G4—半球状で、口縁部が内湾するもの。
 G5—半球状で、口縁部が弱く内傾するもので、口縁部と体部の境が明瞭なもので、E4と同質な橙色陶質なものを含む。
 H—丸みを帯びた平底から口縁部が直立するもの。
 I—平底から体部が内湾して立ち上がり、口縁部に至るもの。
 J—深い丸底の底部から、内湾気味に立ち上がった体部から、口縁部が緩やかに外反するもの。体部と口縁部の境に稜を有する。
 K—平底から口縁部が外傾して開くもの。



第147图 古墳、奈良・平安時代属年表(1)



第148図 古墳、奈良・平安時代編年表(2)



第148图 古墳、奈良・平安時代編年表(2)

第2節 文字関係資料

文字関係資料としては、土器に記録された文字及び記号、絵、視が認められる。土器に記録された文字及び記号は更に墨書、刻書に細別できる。刻書については焼成前と後の細別も可能なわけであるが、今回の出土資料には焼成後の刻書は存在しない。また、視については視として製作されたものと、本来は異なる用途のために製作されたものを、視に転用する転用視の2種類が存在するが、転用視とされているものの大部分は須恵器や灰釉陶器であり、特に灰釉陶器の内面見込み部分は多くのものが平滑な状態に使用されており、この状態を視として使用した結果と見るのか、視以外の使用方の結果なのかは判断しかねるため、灰釉陶器に限らず、転用視は焼成が残存するなど、確実に視として使用されたことが明らかなもの以外は除外した。

第10・11表がその内容である。時期が明らかなものは、1点を除き奈良・平安時代Ⅳ・Ⅴ期の所産である。実年代にすれば9世紀後半～10世紀前半に集中していることとなる。器種的には土師器内黒環・碗・皿が大半を占め、器種的な選定が想定される。墨書と刻書では圧倒的に墨書が多く、文字等による土器の性格付けは、土器の製作時よりは、使用時に行われている。また、製作時と使用時には、記録される文字等の性格が異なるのかもしれない。文字等が書かれる部位は、体部外面が大半を占める。向きは正か逆が多いが、これは、文字等を認識する、ないしは認識してもらいたい状況において、土器が正位に置かれているか、倒位に伏せられているかに起因するのであろう。同様な想像は、底部外面に記録された文字等に対しても有効であろう。文字そのものについては、特殊なものとして「守」が3点出土している。また「U」字状の文字あるいは記号も多く認められた。更に、蛙と思われる線刻画は県内では初例と思われる。また、内面視も1面出土した。

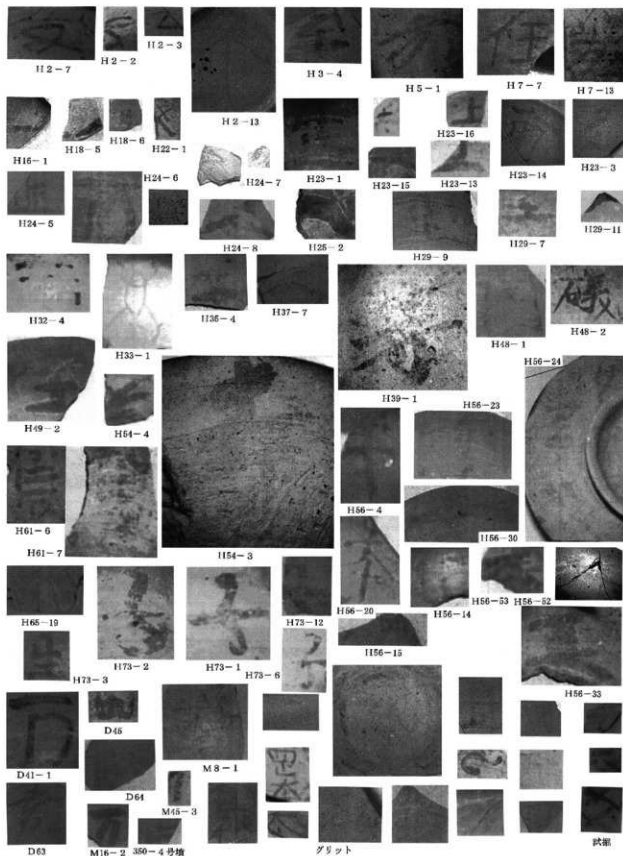
今回は赤外線カメラによる観察を、報告書掲載のすべての土器に対して行うことができた。結果として、墨書の存否・正確な文字の識別に対しては多くの成果が得られた。

遺跡名	時期	土器の種類・器種	部位	向き	内	容	備	考
H12	奈・平Ⅳ	土師器内黒環	体・外	?	?			
		土師器内黒環	体・外	?	?			
		土師器内黒環	体・外	?	?			
H13	奈・平Ⅴ	灰釉陶器碗	底・外	正	木			内面に朱墨、転用視
		土師器内黒環	体・外	止	?			
H15	奈・平Ⅴ	土師器内黒環	体・外	横	方			
H17	奈・平Ⅴ	土師器内黒環	体・外	逆	任			
		土師器内黒環	体・外	?	?			
H115	奈・平Ⅴ	土師器内黒環	体・外	正	?			
H16	奈・平Ⅴ	土師器内黒環	体・外	?	?			
H18	奈・平Ⅴ	土師器内黒環	体・外	?	?			
		土師器内黒碗	体・外	?	?			
H22	奈・平Ⅴ	土師器内黒環	体・外	?	?			
H23	奈・平Ⅴ	土師器内黒環	体・外	正	生			
		土師器内黒環	体・外	?	?			
		土師器内黒環	体・外	?	?			
		土師器内黒環	体・外	?	?			
		土師器内黒碗	体・外	正	南			赤外線により判明
		土師器内黒環	体・外	正	上			
H124	奈・平Ⅴ	土師器内黒環	体・外	止	上			
		土師器内黒環	体・外	逆	方			
		土師器内黒環	底・外	?	?			
		土師器内黒環	体・外	?	?			
		土師器内黒環	底・外	正	☆?			赤外線により判明 転用視
H25	奈・平Ⅴ	土師器内黒環	底・外	?	?			
H29	奈・平Ⅴ	土師器内黒環	体・外	逆	寺			
		土師器内黒碗	体・外	正	生			
		土師器内黒碗	体・外	?	?			
H30	奈・平Ⅴ	土師器内黒碗	体・外	?	?			焼成前
H132	奈・平Ⅴ	土師器内黒碗	体・外	?	?			墨書を削って消去
H33	奈・平Ⅴ	土師器内黒環	体・外	正	蛙の線画			焼成前
H35	奈・平Ⅴ	土師器内黒環	体・外	?	?			
H37	奈・平Ⅴ	土師器内黒碗	体・外	?	?			
H39	奈・平Ⅴ	土師器内黒環	体・外	横	寺			赤外線により判明
H48	奈・平Ⅴ	土師器内黒環	体・外	正	内			
		土師器内黒環	体・外	逆	碗			
H49	奈・平Ⅴ	土師器内黒環	体・外	正	碗			赤外線により判明

第40表 文字関係資料一覽表(1)

遺物名	時期	土器の種類・器種	部位	向き	内容	備考
H54	奈・平Ⅵ	土師器内黒环	体・外	止	寺	赤外線により判明
		土師器内黒环	体・外	?	?	
H56	奈・平Ⅵ	土師器内黒环	体・外	正	牛?	
		土師器内黒环	体・外	?	?	
		土師器内黒环	体・外	?	?	
		土師器内黒碗	体・外	横	奉?、?大十?	
		土師器内黒碗	体・外	?	?	
		土師器内黒皿	体・外	正	御?	
		土師器内黒皿	体・外	横	御大十牛?	
		土師器内黒皿	体・外	?	十?	
		土師器内黒皿	体・外	?	?	
		須恵器环	体・外	正	?	
		須恵器环	体・外	正	?	
H61	奈・平Ⅵ	土師器内黒环	体・外	正	信	
		土師器内黒环	体・外	正	信	
H65	奈・平Ⅵ	灰釉陶器?	底・外	?	?	
H73	奈・平Ⅵ	土師器内黒环	体・外	止	子	
		土師器内黒环	体・外	正	子	
		土師器内黒环	体・外	逆	生	
		土師器内黒环	体・外	正	子	
		土師器内黒环	体・外	正	万	
D41		土師器内黒环	体・外	?	W?	
D45		土師器内黒环	体・外	?	?	
D63		土師器内黒碗	底・外	?	寺 or 土万?	
D64		土師器内黒环	体・外	?	?	
M 8		土師器环	底・外	?	?	
M16		土師器环	体・外	止	万	
M45		土師器内黒环	体・外	?	?	
350-4号墳		土師器内黒环	体・外	?	?	
グリット		土師器内黒环	体・外	?	U	
		須恵器环	底・内	?	?	
		須恵器环	体・外	?	?	
		須恵器环	底・外	?	大	焼成前刻書
		須恵器环	体・外	?	U	
		須恵器环	体・外	?	?	
		須恵器环	体・外	?	U	
		須恵器有台环	底・内	?	大	焼成前刻書
		須恵器有台环	体・外	正	?	
		須恵器环	体・外	?	U	
		土師器内黒碗	体・外	逆	大?	焼成前刻書
		土師器内黒碗	体・外	逆	雲本?	焼成前刻書
		土師器内黒皿	体・外	?	の	焼成前刻書
試掘		土師器内黒环	体・外	?	?	
		土師器	体・外	?	?	
		土師器内黒环	体・外	?	?	
		土師器内黒环	体・外	?	?	
		土師器内黒环	体・外	?	?	
		土師器内黒环	体・外	?	?	

第41表 文字関係資料一覧表(2)



第149図 出土文字・記号資料写真

付 編

1. 深堀遺跡Ⅲ・Ⅴ出土土師器の胎土分析

第4紀 地質研究所 井上 巖

目 次

- I 実験条件
- II 実験結果の取扱
- III 土師器
 - 1 X線回折試験結果
 - 1-1 タイプ分類
 - 1-2 石英-斜長石の相関について
 - 2 化学分析結果
 - 2-1 SiO_2 - Al_2O_3 の相関について
 - 2-2 Fe_2O_3 - MgO の相関について
 - 2-3 K_2O - CaO の相関について
 - 3 まとめ
- IV 須恵器
 - 1 X線回折試験結果
 - 1-1 タイプ分類
 - 1-2 石英-斜長石の相関について
 - 2 化学分析結果
 - 2-1 SiO_2 - Al_2O_3 の相関について
 - 2-2 Fe_2O_3 - MgO の相関について
 - 2-3 K_2O - CaO の相関について
 - 3 まとめ

図 表 目 次

- 第1図 三角ダイヤグラム位置分類図
- 第2図 菱形ダイヤグラム位置分類図
- 第3図 土師器 Mo-Mi-Hb 三角ダイヤグラム
- 第4図 土師器 Mo-Ch, Mi-Hb 菱形ダイヤグラム
- 第5図 土師器 Qt-Pl 図
- 第6図 土師器 SiO_2 - Al_2O_3 図
- 第7図 土師器 Fe_2O_3 - MgO 図
- 第8図 土師器 K_2O - CaO 図
- 第9図 須恵器 Mo-Mi-Hb 三角ダイヤグラム
- 第10図 須恵器 Mo-Ch, Mi-Hb 菱形ダイヤグラム
- 第11図 須恵器 Qt-Pl 図
- 第12図 須恵器 SiO_2 - Al_2O_3 図
- 第13図 須恵器 Fe_2O_3 - MgO 図
- 第14図 須恵器 K_2O - CaO 図
- 図-1 須恵器 Qt-Pl 図 (佐久市)
- 図-2 須恵器 SiO_2 - Al_2O_3 図 (佐久市)
- 図-3 須恵器 Fe_2O_3 - MgO 図 (佐久市)
- 図-4 須恵器 K_2O - CaO 図 (佐久市)

- 第1表 土師器胎土性状表
- 第2表 土師器化学分析表
- 第3表 土師器タイプ分類一覧表
- 第4表 土師器土器分類表
- 第5表 須恵器胎土性状表
- 第6表 須恵器化学分析表
- 第7表 須恵器タイプ分類一覧表
- 第8表 須恵器土器分類表

I 実験条件

1 試料

分析に供した試料は第1表胎土性状表に示す通りである。

X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。化学分析は上器をダイヤモンドカッターで小片に切断し、表面を洗浄し、乾燥後、試料表面をコーティングしないで、直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入し、分析した。

2 X線回折試験上器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験による。測定には日本電子製JDX-8020X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40kV, Current: 30mA, ステップ角度: 0.02°

計数時間: 0.5秒。

3 化学分析

元素分析は日本電子製5300LV型電子顕微鏡に2001型エネルギー分散型蛍光X線分析装置をセットし、実験条件は加速電圧: 15kV、分析法: スプリント法、分析倍率: 200倍、分析有効時間: 100秒、分析指定元素10元素で行った。

II 実験結果の取扱い

実験結果は第1表胎土性状表に示す通りである。

第1表右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示されており、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。

1 組成分類

1) Mont-Mica-Hb 三角ダイヤグラム

第1図に示すように三角ダイヤグラムを1-13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土上の位置を数字で表した。

Mont, Mica, Hbの三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいい、別に検討した。三角ダイヤグラムはモンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)のX線回折試験におけるチャートのピーク強度をパーセント(%)で表す。

モンモリロナイトはMont/Mont+Mica+Hb*100でパーセントとして求め、同様にMica, Hbも計算し、三角ダイヤグラムに記載する。

三角ダイヤグラム内の1-4はMont, Mica, Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は第1図に示す通りである。

2) Mont-Ch, Mica-Hb 菱形ダイヤグラム

第2図に示すように菱形ダイヤグラムを1-19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。

モンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)、緑泥石(Ch)の内、

- a) 3成分以上含まれない、b) Mont, Chの2成分が含まれない、
- c) Mica, Hbの2成分が含まれない、の3例がある。

菱形ダイアグラムは Mont-Ch, Mica-Hb の組合せを表示するものである。

Mont-Ch, Mica-Hb のそれぞれの X 線回折試験のチャートの強度を各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、Mont/Mont+Ch*100 と計算し、Mica, Hb, Ch も各々同様に計算し、記載する。

菱形ダイアグラム内にある 1-7 は Mont, Mica, Hb, Ch の 4 成分を含み、各辺は Mont, Mica, Hb, Ch のうち 3 成分、各頂点は 2 成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は第 2 図に示すとおりである。

3) 化学分析結果の取り扱い

化学分析結果は酸化物として、ノーマル法 (10 元素全体で 100% になる) で計算し、化学分析表を作成した。化学分析表に基づいて $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ 図、 $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-MgO}$ 図、 $\text{K}_2\text{O-CaO}$ 図の各図を作成した。これらの図をもとに、土器類を元素の面から分類した。

Ⅲ 土師器

1 X 線回折試験結果

1-1 タイプ分類

第 1 表胎土性状表には深堀遺跡Ⅲ・Ⅳより出土した土師器と明野村から出土した土師器の甲斐型土器の X 線回折試験結果が記載してある。

第 3 表タイプ分類一覧表に示すように土器胎土は A-F の 6 タイプに分類された。

A タイプ: Hb 1 成分を含み、Mont, Mica, Ch の 3 成分に欠ける。

B タイプ: Mica, Hb, Ch の 3 成分を含み、Mont 1 成分に欠ける。

C タイプ: Mica, Hb の 2 成分を含み、Mont, Ch の 2 成分に欠ける。

D タイプ: Mica, Hb の 2 成分を含み、Mont, Ch の 2 成分に欠ける。

組成は C タイプと類似するが検出強度が異なる。

E タイプ: Mica 1 成分を含み、Mont, Hb, Ch の 3 成分に欠ける。

F タイプ: Mont, Mica, Hb, Ch の 4 成分に欠ける。

主に、 $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot \text{H}_2\text{O}$ (アロフェン質ゲル) で構成される。

最も多いタイプは A タイプで、29 個の土師器のうち 16 個が該当する。次いで、C タイプの 4 個、D タイプの 3 個、B、E、F タイプが各 2 個である。

1-2 石英 (Qt) - 斜長石 (Pl) の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を制作する過程で、ある胎土にある量の砂を混合して素地上を作るということは個々の集団が持つ土器制作上の固有の技術であると考えられる。

自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地の砂はおのおの固有の石英と斜長石比を有していると言える。

第 5 図 Qt-Pl 図に示すように、Qt (石英) の強度が低い領域から高い領域にかけて 3 グループと“その他”に分類した。(化学分析結果に基づいて、 $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ の分類で、深堀遺跡の土師器は I-Ⅲ の 3 タイプに分類され、明野村の土師器は I と II の 2 タイプに分類されており、記述ではこの分類を使用した。)

Qt 小: Qt が 600~1600、Pl が 300~700 の領域に集中する。

深堀遺跡出土の土師器 I-Ⅲ の 3 タイプが共存する。

Qt 中: Qt が 1500~2000、Pl が 200~600 の領域に集中する。

明野村土師器 I・II が集中する。

Qt 大:Qt が1800~3400、Pl が400~1200の領域に集中する。

深堀遺跡の土師器Ⅲの10世紀・ロクロ甕3個が集中する。

“その他”：深堀-12・18はP1の強度が高く異質。深堀-14はP1の強度が低いとQt小の土師器の領域に近い。
深堀-4はどのグループにも属さず異質。

2 化学分析結果

第2表化学分析表に示すように、深堀遺跡Ⅲ・Ⅳより出土した土師器と明野村の土師器を化学分析した。
分析結果に基づいて第6図SiO₂-Al₂O₃図、第7図Fe₂O₃-MgO図、第8図K₂O-CaO図を作成した。

2-1 SiO₂-Al₂O₃の相関について

第6図SiO₂-Al₂O₃図に示すように、深堀遺跡の土師器はSiO₂が低い領域から高い領域に土師器Ⅰ~Ⅲの3グループと“その他”に分類された。明野村土師器はAl₂O₃が高い領域でグループを形成する。

土師器Ⅰ：SiO₂が57~62%、Al₂O₃が22~26%の領域に集中する。

土師器Ⅱ：SiO₂が62~64%、Al₂O₃が20~25%の領域に集中する。

10世紀のロクロ甕が集中する。

土師器Ⅲ：SiO₂が64~68%、Al₂O₃が20~25%の領域に集中する。

9~10世紀の甕と坏が共存する。

明野村土師器Ⅰ・Ⅱ：SiO₂が58~65%、Al₂O₃が23~27%の領域に集中する。

“その他”：深堀-8はAl₂O₃が34%と高く異質である。深堀-17はSiO₂が52%と低く異質。深堀-4と12はAl₂O₃が21%と低く異質。

2-2 Fe₂O₃-MgOの相関について

第7図Fe₂O₃-MgO図に示すように、深堀遺跡の土師器はFe₂O₃が高い領域から低い領域に向かって須恵器Ⅰ~Ⅲの3グループと“その他”に分類された。明野村土師器は明野村土師器ⅠとⅡの2つのグループに細分される。

土師器Ⅰ：Fe₂O₃が7~12%、MgOが0~0.5%の領域に集中する。

土師器Ⅱ：Fe₂O₃が7~9%、MgOが0.1~0.7%の領域に集中する。

土師器Ⅲ：Fe₂O₃が4~8%、MgOが0.1~0.8%の領域に集中する。

明野村土師器Ⅰ：Fe₂O₃が4~8%、MgOが0~0.4%の領域に集中する。

明野村土師器Ⅱ：Fe₂O₃が7~8%、MgOが0.9~1.2%の領域に集中する。臼州型の土師器?のグループ。

“その他”：深堀-12はMgOの値が2%と高く異質である。深堀-4と14はMgOの値が1%と高く異質である。深堀-17はFe₂O₃が12%と高く異質である。

2-3 K₂O-CaOの相関について

第8図K₂O-CaO図に示すようにK₂Oが低い領域から高い領域にかけて深堀遺跡の土師器は土師器Ⅰ~Ⅲの3グループと“その他”に分類される。明野村土師器は明野村土師器ⅠとⅡに分類される。

土師器Ⅰ：K₂Oが1.6~3.5%、CaOが0.7~1.3%の領域とK₂Oが0.8~1.7%、CaOが1.5~2.2%の領域に分れる。

土師器Ⅱ：K₂Oが1.2～1.5%、CaOが0.7～1.0%の領域にある。

土師器Ⅲ：K₂Oが1.2～2.6%、CaOが0.5～1.0%の領域にある。

明野村土師器Ⅰ：K₂Oが0.8～1.8%、CaOが0.7～1.2%の領域にある。

明野村土師器Ⅱ：K₂Oが0.8～1.1%、CaOが1.8～2.1%の領域にある。

“その他”：深堀-5、12、17、21、23の5個はK₂Oが0.8～1.8%、CaOが1.0～1.8%の領域にある。他の元素との組成的な関連性が薄く、“その他”とした。明野-4はK₂Oが4.5%と高く異質。

3 まとめ

X線回折試験と蛍光X線分析による土器胎土の分析結果に基づく分類では、深堀遺跡出土土師器は土師器Ⅰ～Ⅲの3タイプに分類され、Qt-Plの相関からQt大-小の3タイプに細分された。明野村土師器は明野村土師器ⅠとⅡに分類された。その結果を取りまとめたものが第4表組成分類表である。

- 1) 土器胎土はA～Fの6タイプに分類され、最も多いタイプはAタイプで20個のうち16個が該当する。Aタイプは深堀遺跡の9～10世紀の在地型の土師器の甕と坏が主体となる。明野村土師器はDタイプが主体で深堀遺跡の土師器とはタイプが異なる。
- 2) 第4表に示すように深堀遺跡の土師器と明野村の土師器は鉱物組成も化学組成も異なる。

深堀：土師器Ⅰ：SiO₂小・Qt小で、10世紀の深堀遺跡の土師器3個で構成される。

深堀：土師器Ⅱ：SiO₂小・Qt小・CaO大で、7世紀の深堀遺跡の土師器の坏2個で構成される。

深堀：土師器Ⅲ：SiO₂中・Qt小で、深堀遺跡の10世紀のロクロ甕で構成される。

深堀：土師器Ⅳ：SiO₂大・Qt小で、深堀遺跡の9～10世紀の在地の甕で構成される。明野-6の甲斐型坏が含まれる。

深堀：土師器Ⅴ：SiO₂大・Qt大で、深堀遺跡の7世紀の土師器坏で構成される。

深堀“その他”：深堀-4、12、17、23は深堀遺跡の土師器とも明野村の土師器とも組成が異なり、各土器がそれぞれ集団を代表している。

明野村土師器Ⅰ：SiO₂中・Qt中で、9～10世紀の甲斐型土器の坏で構成される。

明野村上師器Ⅱ：SiO₂中・CaO大・Qt中で、9世紀の甲斐型甕と信州型の坏で構成される。

明野村“その他”：明野-4はK₂Oが高く異質。明野-8のロクロ整形甕は深堀遺跡の土師器とも、明野村の土師器とも異なる組成を示す。

IV 須恵器

1 X線回折試験結果

1-1 タイプ分類

第1表胎土性状表には深堀遺跡Ⅲ・Ⅳより出土した須恵器のX線回折試験結果が記載してある。

第3表タイプ分類一覧表に示すように土器胎土はA～Dの4タイプに分類された。

Aタイプ：Hb1成分を含み、Mont,Mica,Chの3成分に欠ける。

Bタイプ：Mica,Hbの2成分を含み、Mont,Chの2成分に欠ける。

Cタイプ：Mica,Hbの2成分を含み、Mont,Chの2成分に欠ける。

組成はBタイプと類似するが検出強度が異なる。

Dタイプ：Mont,Mica,Hb,Chの4成分に欠ける。高温で焼成されているため、鉱物はガラスに変質し、4成分は検出されない。

最も多いタイプはDタイプで、21個の須恵器のうち16個が該当する。次いで、Aタイプの3個、BとCタイプが各1個である。

1-2 石英 (Qt) - 斜長石 (Pl) の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を制作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るといったことは個々の集団が持つ土器制作上の固有の技術であると考えられる。

自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地の砂はおおの固有の石英と斜長石比を有していると言える。

第5図 Qt-Pl 図に示すように、Qt (石英) の強度が低い領域から高い領域にかけて3グループと“その他”に分類した。

(化学分析結果に基づいて、 SiO_2 - Al_2O_3 の分類で、深堀遺跡の須恵器はⅠ～Ⅲの3タイプに分類されており、記述ではこの分類を使用した。)

Qt 小: Qt が 800~2200、Pl が 0~500 の領域に集中する。
須恵器Ⅰ～Ⅲのタイプが共存する。

Qt 中: Qt が 2000~2300、Pl が 100~200 の領域に集中する。
須恵器Ⅲの深堀-30と31の2個が該当する。

Qt 大: Qt が 3700~4200、Pl が 0~150 の領域に集中する。
須恵器Ⅲの深堀-34、37、41の3個が集中する。

“その他”: 深堀-20の陶器? で、どのグループにも属さない。

2 化学分析結果

第2表化学分析表に示すように、深堀遺跡Ⅲ・Ⅳより出土した須恵器を化学分析した。

分析結果に基づいて第6図 SiO_2 - Al_2O_3 図、第7図 Fe_2O_3 - MgO 図、第8図 K_2O - CaO 図を作成した。

2-1 SiO_2 - Al_2O_3 の相関について

第6図 SiO_2 - Al_2O_3 図に示すように、深堀遺跡の須恵器は SiO_2 が低い領域から高い領域に須恵器Ⅰ～Ⅲの3グループと“その他”に分類された。

須恵器Ⅰ: SiO_2 が 59~63%、 Al_2O_3 が 19~22% の領域に集中する。

須恵器Ⅱ: SiO_2 が 64~67%、 Al_2O_3 が 18~23% の領域に集中する。
8世紀と9世紀の有台環が集中する。

須恵器Ⅲ: SiO_2 が 67~73%、 Al_2O_3 が 16~22% の領域に集中する。
8世紀の坏と坏蓋、9世紀の有台環と坏蓋が共存する。

“その他”: 深堀-28は Al_2O_3 が 27% ほど高く、異質である。

2-2 Fe_2O_3 - MgO の相関について

第7図 Fe_2O_3 - MgO 図に示すように、深堀遺跡の須恵器は高い領域から低い領域に向かって須恵器Ⅰ～Ⅲの3グループと“その他”に分類された。

須恵器Ⅰ: Fe_2O_3 が 9~13%、 MgO が 0~0.5% の領域に集中する。

須恵器Ⅱ：Fe₂O₃が7～11%、MgOが0～0.5%の領域に集中する。
須恵器Ⅲ：Fe₂O₃が3～8%、MgOが0.1～1.0%の領域に集中する。
“その他”：深堀-38はMgOの値が2%と高く、異質である。

2-3 K₂O-CaOの相関について

第8図K₂O-CaO図に示すようにK₂Oが低い領域から高い領域にかけて2グループに分類される。

須恵器Ⅰ・Ⅱ：K₂Oが0.9～2.5%、CaOが0.4～1.7%の領域にあり、須恵器Ⅰ・Ⅱの土器が集中する。
須恵器Ⅲ：K₂Oが1.0～3.0%、CaOが0.0～0.5%の領域にある。

3 まとめ

X線回折試験と蛍光X線分析による土器胎土の分析結果に基づく分類では、深堀遺跡出土須恵器は大きくは須恵器Ⅰ～Ⅲの3タイプに分類され、Qt-Plの相関からQt大～小の3タイプに細分された。その結果を取りまとめたものが第4表土器分類表である。

- 1) 土器胎土はA～Dの4タイプに分類され、高温で焼成されているためにガラスに変質したものが21個の須恵器のうち16個が該当する。
- 2) 第4表による分類では

須恵器Ⅰ SiO₂小・Qt小：特にSiO₂が低く異質である。

須恵器Ⅱ SiO₂中・Qt小：在地の8～9世紀の須恵器の坏で構成される。
7個の須恵器が該当し、最も多いタイプである。

須恵器Ⅲ SiO₂大・Qt中：8世紀の在地の須恵器・坏2個で構成される。

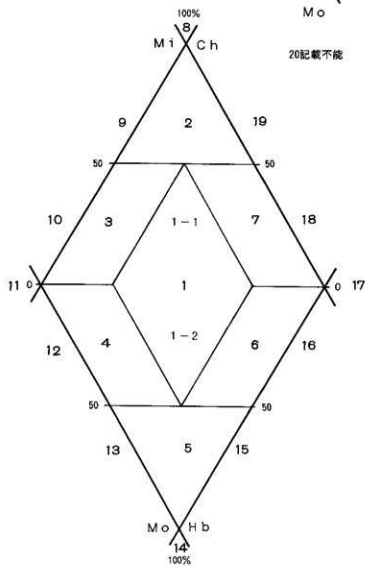
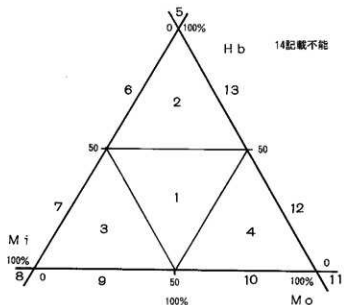
須恵器Ⅳ SiO₂大・Qt小：8～9世紀の在地の須恵器・坏、坏蓋、有台坏各1個で構成される。

須恵器Ⅴ SiO₂大・Qt大：8～9世紀の在地の須恵器・坏、坏蓋、有台坏各1個で構成される。

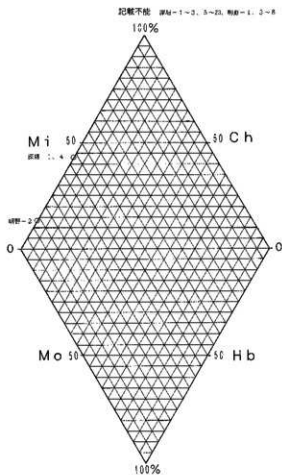
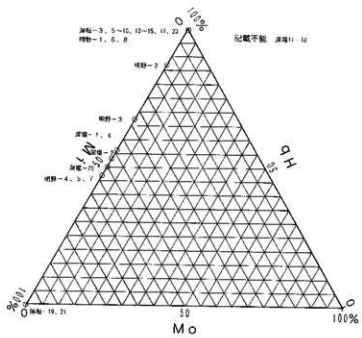
“その他”：深堀-28はAl₂O₃の値が高く、異質である。深堀-20はどのグループにも属さず、異質である。

陶器窯跡群（第9図～第12図）と対比すると大庭寺窯跡の組成と類似する。深堀-38はMgOの値が高く、異質である。

- 3) 深堀遺跡出土須恵器を佐久市周辺の窯跡出土須恵器と下谷根遺跡出土須恵器（図1～図4）と対比したが此分が一致するものがなく、異なる窯跡の須恵器である可能性が推察される。



第1図 三角ダイヤグラム位置分類図 第2図 菱形ダイヤグラム位置分類図

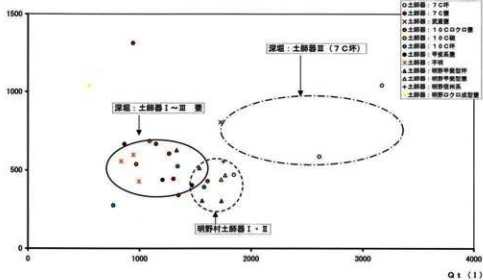
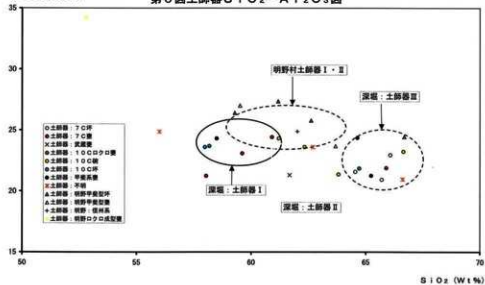


第3図 土師器 Mo-Mi-Hb 三角ダイヤグラム

第4図 土師器 Mo-Ch, Mi-Hb 菱形ダイヤグラム

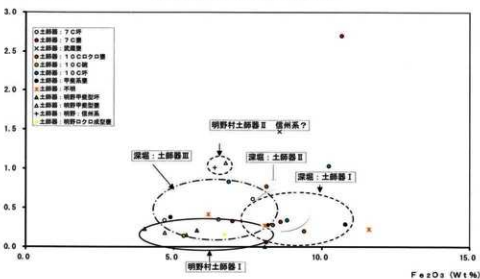
P I (1)

第5図土師器Qt-P I 図

Al₂O₃ (Wt%)第6図土師器SiO₂-Al₂O₃図

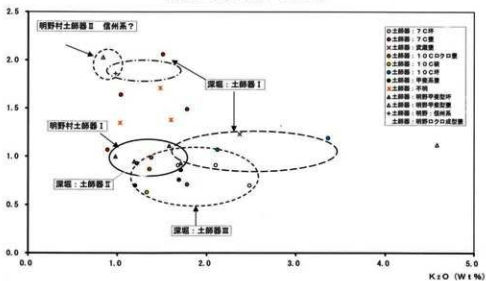
MgO (Wt%)

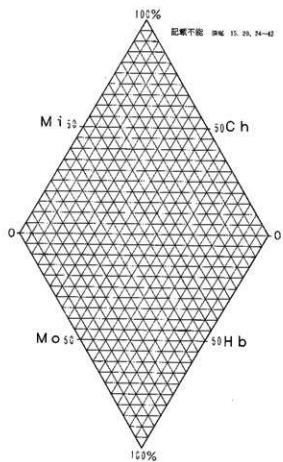
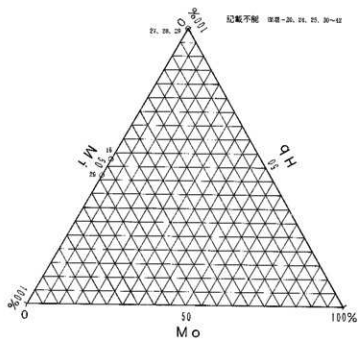
第7図土師器 Fe_2O_3-MgO 図



CaO (Wt%)

第8図土師器 K_2O-CaO 図



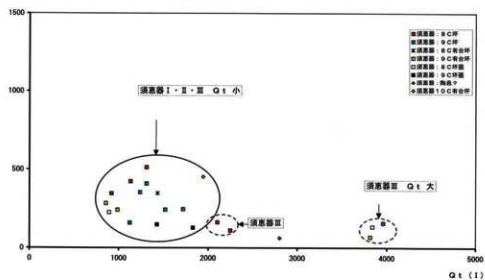


第9図 須志器 Mo-Mi-Hb 三角ダイヤグラム

第10図 須志器 Mo-Ch, Mi-Hb 菱形ダイヤグラム

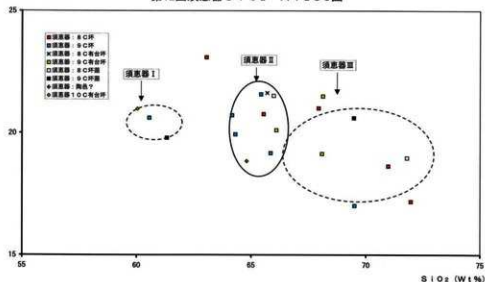
P I (1)

第11回須惠器Qt-P I 図



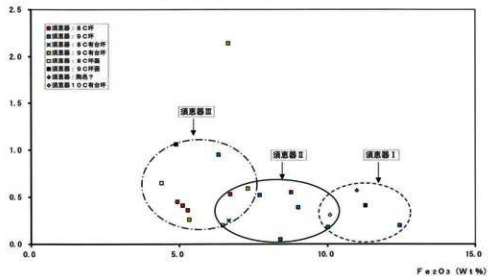
A l z O₃ (Wt%)

第12回須惠器S i O₂-A l z O₃ 図



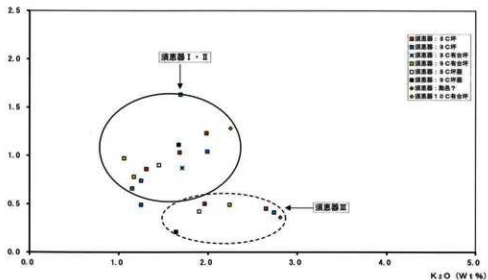
MgO (Wt%)

第13回須惠器 Fe₂O₃-MgO 図



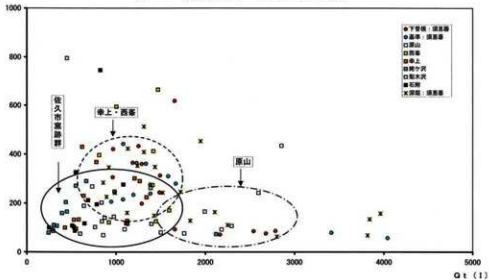
CaO (Wt%)

第14回須惠器 K₂O-CaO 図



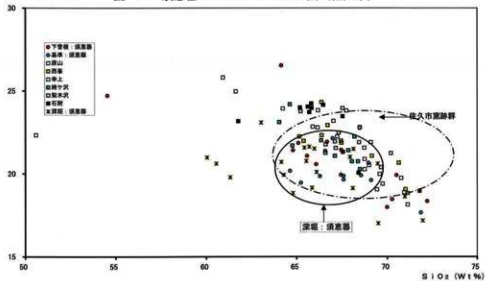
P1 (1)

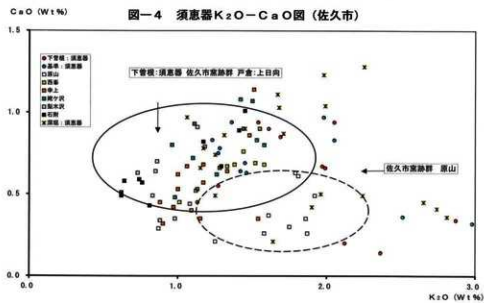
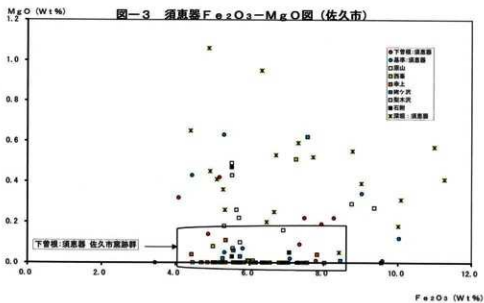
图一 須惠器Qt-P1图 (佐久市)



Al₂O₃ (Wt%)

图二 須惠器SiO₂-Al₂O₃图 (佐久市)





第1表 胎土性状表

試料 No	タイプ 分類	組成分類				粘土質物および泥岩成分										備考	産物番号							
		Mo-Mt-Hb	Ms-Qtz-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Gt	Pl	Criet	Mullite	K-fels	Hobby	Kaol			Pyrite	Au					
深堀-1	C	6	20	94	120			1,341	524	139										土師器	環	10世紀	在 地	H4-1
深堀-2	C	6	20	95	111			865	686											土師器	小型環	10世紀	甲斐産	H4-3
深堀-3	A	5	20		90			1,509	629											土師器	ロク口環	10世紀	在 地	H4-5
深堀-4	D	6	10	137	169		137	1,726	805	112										土師器	式部環	9世紀	在 地	H10-3
深堀-5	A	5	20		68			944	597											土師器	羽釜	9世紀	?	H10-7
深堀-6	A	5	20	104				1,295	438											土師器	環	10世紀	甲斐産	H15-4
深堀-7	A	5	20		90			1,349	340											土師器	ロク口環	10世紀	在 地	H15-5
深堀-8	A	5	20	110				1,578	361											土師器	環	10世紀	在 地	H16-2
深堀-9	A	3	20	83				971	538											土師器	アサギ口環	10世紀	在 地	H16-4
深堀-10	A	5	20	90				1,459	403											土師器	環	10世紀	甲斐産	H16-6
深堀-11	F	14	20					3,170	1,041	154										土師器	環	7世紀	在 地	H17-1
深堀-12	A	5	20	166				942	1,315	152										土師器	環	7世紀	在 地	H17-8
深堀-13	A	5	20	120				1,265	606	241										土師器	環	7世紀	在 地	H17-11
深堀-14	A	5	20	103				785	275	219										土師器	環	10世紀	在 地	H36-2
深堀-15	A	5	20	111				1,091	685	199										土師器	環	10世紀	在 地	H36-4
深堀-17	A	5	20	121				836	536											土師器	双耳壺	10世紀	?	H36-6
深堀-18	F	14	20					2,611	586	205										土師器	環	7世紀	在 地	H40-2
深堀-19	F	8	20	72				1,845	470	189										土師器	片	7世紀	在 地	H40-3
深堀-21	E	8	20	113				1,304	444	211										土師器	環	7世紀	在 地	H40-17
深堀-22	C	6	20	118				1,148	667											土師器	環	7世紀	在 地	H40-18
深堀-23	A	5	20	114				994	427	185										土師器	器身	9世紀	?	H56-34
明野-1	A	5	20		99			1,733	303	124										甲斐型	環	9 C M	村之内	
明野-2	B	6	10	116	760	136		1,731	439											甲斐型	環	9 C M	村之内	
明野-3	C	6	20	115	246			1,535	513											甲斐型	環	9 C M	國敏産	
明野-4	D	7	20	124	107			1,767	467											甲斐型	環	10 C M	村之内	
明野-5	D	7	20	113	93			1,560	305											甲斐型	環	9-10 C M	村之内	
明野-6	A	5	20		96			1,332	627											甲斐型	環	9 C M	村之内	
明野-7	D	7	20	118	108			1,751	554											灯州型	環	9 C M	村之内	
明野-8	A	5	20		79			347	1,040											ロク口型	羽釜	9 C M	村之内	

Mont: モンモリロナイト Mica: 雲母類 Hb: 角閃石 Ch: 緑泥石 (Ch: Fe 二次成射) Ch: Mg 二次成射) Qt: 石英 Pl: 斜長石 Criet: クリストバライト

Mullite: ムライト K-fels: カリ長石 Hobby: ハロイタイト Kaol: カオリナイト Pyrite: 黄鉄鉱 Au: 普温輝石 Py: 葉綠輝石

大小径タイプ
大小径タイプ

第2表 化学分析表

試料番号	NiO	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	FeO ₃	NiO	Total	形式	用途	時代	地域分類	遺物番号
深溝-1	1.78	0.34	23.39	57.86	3.36	1.19	1.70	1.09	4.89	0.14	100.00	土師器	灰	10世紀	在地	H10-1
深溝-2	1.03	0.38	24.35	64.63	1.69	0.76	1.52	0.63	8.83	0.11	99.99	土師器	小形壺	10世紀	甲斐系	H4-3
深溝-3	1.18	0.77	21.36	63.81	1.22	0.93	1.41	1.10	8.13	0.10	100.00	土師器	ロクロ壺	10世紀	在地	H4-5
深溝-4	0.88	1.47	21.31	61.68	2.37	1.23	1.28	0.98	8.57	0.22	99.99	土師器	武蔵燵	9世紀	在地	H10-3
深溝-5	1.51	0.42	20.95	66.61	1.90	1.38	1.10	0.28	6.16	0.00	100.00	土師器	羽蓋	9世紀	?	H10-7
深溝-6	0.57	0.29	24.30	58.49	1.71	0.86	1.71	1.29	10.78	0.00	100.00	土師器	壺	10世紀	甲斐系	H10-4
深溝-7	0.71	0.28	23.60	62.34	1.38	0.99	1.37	0.97	8.35	0.00	99.99	土師器	ロクロ壺	10世紀	在地	H10-5
深溝-8	0.88	0.83	21.85	61.71	1.78	0.71	1.31	0.86	6.85	0.22	100.00	土師器	灰	10世紀	在地	H10-2
深溝-9	0.44	0.20	24.31	61.21	1.36	0.87	1.35	0.88	9.40	0.00	100.00	土師器	ワタコ壺	10世紀	在地	H10-4
深溝-10	0.73	0.28	21.25	65.23	1.20	0.70	1.48	0.95	8.18	0.00	100.00	土師器	壺	10世紀	甲斐系	H10-6
深溝-11	1.44	0.34	22.94	66.07	2.48	0.70	0.99	0.31	4.69	0.04	100.00	土師器	灰	7世紀	在地	H17-1
深溝-12	1.40	2.70	21.24	38.03	1.78	1.49	1.03	1.61	10.96	0.03	100.00	土師器	燵	7世紀	在地	H17-8
深溝-13	1.43	0.32	23.06	59.61	1.51	2.06	1.81	1.37	8.91	0.16	99.99	土師器	燵	7世紀	在地	H17-11
深溝-14	1.00	1.03	23.68	38.17	2.12	1.07	1.21	1.08	10.23	0.38	100.00	土師器	灰	10世紀	在地	H30-2
深溝-15	1.03	0.14	21.22	66.61	1.33	0.63	0.87	0.62	5.34	0.18	100.00	土師器	壺	10世紀	在地	H30-4
深溝-17	1.23	0.23	24.85	56.00	1.18	1.71	1.47	1.47	11.57	0.00	100.00	土師器	双耳壺	10世紀	7	H30-6
深溝-18	1.83	0.35	20.92	65.69	2.10	0.91	0.82	0.68	6.51	0.19	100.00	土師器	灰	7世紀	在地	H40-2
深溝-19	1.36	0.61	21.57	64.54	1.68	0.91	0.79	0.68	7.67	0.18	99.99	土師器	灰	7世紀	在地	H40-3
深溝-21	0.80	0.33	21.86	65.89	0.89	1.07	1.21	0.83	6.98	0.11	99.99	土師器	燵	7世紀	在地	H40-17
深溝-22	1.20	0.06	24.41	60.91	1.01	1.64	1.58	0.67	8.12	0.37	100.00	土師器	燵	7世紀	在地	H40-18
深溝-23	0.96	0.28	23.59	62.70	1.03	1.35	1.12	0.91	8.07	0.09	100.00	土師器	灰	9世紀	?	H50-24
明野-1	1.22	0.21	28.78	62.62	1.71	0.93	0.91	0.76	5.78	0.01	99.99	甲斐型壺	灰	9 C M 村之内		9分付遺
明野-2	1.16	1.07	27.00	59.51	0.81	2.03	0.86	0.76	6.73	0.00	100.00	甲斐型壺	燵	9 C M 村之内		7分付遺
明野-3	1.15	0.00	26.40	39.28	1.19	0.95	1.30	0.97	8.08	0.18	100.00	甲斐型壺	灰	9 C M 層敷		
明野-4	0.37	0.18	23.68	63.66	4.38	1.12	0.88	0.80	4.70	0.00	99.99	甲斐燵	燵	10 C M 村之内		2分付遺
明野-5	1.04	0.15	27.35	61.18	1.38	1.11	1.00	0.78	5.43	0.38	100.00	甲斐型壺	灰	9-10 C M 村之内		6分付遺
明野-6	1.10	0.22	24.43	66.66	0.98	1.60	1.23	0.33	4.02	0.00	100.00	甲斐型壺	灰	9 C M 村之内		7分付遺
明野-7	1.13	1.01	24.87	62.02	0.98	1.86	1.02	0.73	6.38	0.00	100.00	甲斐型壺	灰	9 C M 村之内		9分付遺
明野-8	0.84	0.16	34.20	52.79	2.07	1.10	1.27	0.85	6.71	0.00	99.99	ロクロ型甲斐燵	燵	9 C M 村之内		9分付遺
											0.00					

大小久保タイプ
大小久保タイプ

第3表 タイプ分類表

試料 No	タイプ 分類	備 考				地域分類
		形 式	器 種	時 代		
深堀-3	A	土 師 器	ロクロ甕	10世紀	在 地	
深堀-5	A	土 師 器	羽 釜	9世紀	?	
深堀-6	A	土 師 器	甕	10世紀	甲斐系	
深堀-7	A	土 師 器	ロクロ甕	10世紀	在 地	
深堀-8	A	土 師 器	環	10世紀	在 地	
深堀-9	A	土 師 器	ロクロ小型甕	10世紀	在 地	
深堀-10	A	土 師 器	甕	10世紀	甲斐系	
深堀-12	A	土 師 器	甕	7世紀	在 地	
深堀-13	A	土 師 器	甕	7世紀	在 地	
深堀-14	A	土 師 器	環	10世紀	在 地	
深堀-15	A	土 師 器	碗	10世紀	在 地	
深堀-17	A	土 師 器	火 耳 壺	10世紀	?	
深堀-23	A	土 師 器	環 蓋	9世紀	?	
明野-1	A	甲斐型環	環	9 C M	村之内	
明野-6	A	甲斐型環	環	9 C M	村之内	
明野-8	A	ロクロ型土師器	甕	9 C M	村之内	
深堀-4	B	土 師 器	武蔵甕	9世紀	在 地	
明野-2	B	甲斐型甕	甕	9 C M	村之内	
深堀-1	C	土 師 器	環	10世紀	在 地	
深堀-2	C	土 師 器	小型甕	10世紀	甲斐系	
深堀-22	C	土 師 器	甕	7世紀	在 地	
明野-3	C	甲斐型環	環	9 C M	屈放派	
明野-4	D	甲斐型甕	甕	10 C M	村之内	
明野-5	D	甲斐型環	環	9-10CM	村之内	
明野-7	D	信州系次	環	9 C M	村之内	
深堀-19	E	土 師 器	環	7世紀	在 地	
深堀-21	E	土 師 器	甕	7世紀	在 地	
深堀-11	F	土 師 器	環	7世紀	在 地	
深堀-18	F	土 師 器	環	7世紀	在 地	

第4表 組成分類表

試料 No	備 考					地域分類
	形 式	器 種	時 代			
深黒：土師器・SiO ₂ 小・Qt小						
深黒-1	上 師 器	坏	10 世紀	在 地		Qt:小
深黒-6	土 師 器	甕	10 世紀	甲斐系		Qt:小
深黒-14	土 師 器	坏	10 世紀	在 地		Qt:小
深黒：土師器・SiO ₂ 小・CaO大・Qt小						
深黒-13	上 師 器	甕	7 世紀	在 地		Qt:小
深黒-22	土 師 器	甕	7 世紀	在 地		Qt:小
深黒：土師器・SiO ₂ 中・Qt小						
深黒-3	上 師 器	ロクロ甕	10 世紀	在 地		Qt:小
深黒-7	土 師 器	ロクロ甕	10 世紀	在 地		Qt:小
深黒-9	土 師 器	ロクロ小型甕	10 世紀	在 地		Qt:小
深黒：土師器・SiO ₂ 大・Qt小						
深黒-2	上 師 器	小型甕	10 世紀	甲斐系		Qt:小
深黒-5	土 師 器	羽 蓋	9 世紀	?		Qt:小
深黒-8	土 師 器	坏	10 世紀	在 地		Qt:小
深黒-10	上 師 器	甕	10 世紀	甲斐系		Qt:小
深黒-15	土 師 器	甕	10 世紀	在 地		Qt:小
深黒-21	土 師 器	甕	7 世紀	在 地		Qt:小
明野-6	甲斐型 坏	坏	9 C M	村之内		Qt:小
深黒：土師器・SiO ₂ 大・Qt大						
深黒-11	土 師 器	坏	7 世紀	在 地		Qt:大
深黒-18	上 師 器	坏	7 世紀	在 地		Qt:大
深黒-19	土 師 器	坏	7 世紀	在 地		Qt:大
深黒：その他						
深黒-4	上 師 器	武蔵甕	9 世紀	在 地		分散
深黒-12	土 師 器	甕	7 世紀	在 地		分散
深黒-17	土 師 器	双耳 甕	10 世紀	?		Qt:小
深黒-23	上 師 器	坏 蓋	9 世紀	?		Qt:小
明野村：土師器・SiO ₂ 中・Qt中						
明野-1	甲斐型 坏	坏	9 C M	村之内		Qt:中
明野-3	甲斐型 坏	坏	9 C M	屋敷 浜		Qt:中
明野-5	甲斐型 坏	坏	9~10C M	村之内		Qt:中
明野村：土師器・SiO ₂ 中・CaO大・Qt中						
明野-2	甲斐型 甕	甕	9 C M	村之内		Qt:中
明野-7	信州系 坏	坏	9 C M	村之内		Qt:中
明野村：その他						
明野-4	甲斐型 甕	甕	10 C M	村之内		Qt:中
明野-8	ロクロ整形土師器甕	甕	9 C M	村之内		分散

第5表 胎土性状表

試料 No	タイプ 分類	組成分欄				粘土動物および岩質等				Pyrite	Kaol	Holloy	Au	備考	遺物番号			
		Mo-Hb	Mk-Cu-Hb	Mont. Mica	Hb	Ch(Fe)	Qt	Pl	Crist							Mullite	K-fels	
深堀-16	B	6	20		74		1,945	453	202					須恵器	須恵器有台環	10世紀	在 地	H40-5
深堀-20	D	14	20				2,803	63	404	105				須恵器	須恵器有台環	7世紀	陸上と水	H40-7
深堀-24	D	14	20				1,724	246	371	67				須恵器	須恵器有台環	9世紀	在 地	グレット25
深堀-25	D	14	20				1,124	160	1,279	86				須恵器	須恵器有台環	9世紀	在 地	グレット30
深堀-26	C	7	20		93		1,312	469	163					須恵器	須恵器有台環	9世紀	在 地	グレット50
深堀-27	A	5	20		73		1,521	243	230					須恵器	須恵器有台環	9世紀	在 地	グレット54
深堀-28	A	5	20		76		1,133	423	201	76				須恵器	須恵器有台環	8世紀	在 地	グレット75
深堀-29	A	5	20		62		1,240	338	187	62				須恵器	須恵器有台環	9世紀	在 地	グレット81
深堀-30	D	14	20				2,249	110	461	157	104			須恵器	須恵器有台環	8世紀	在 地	グレット89
深堀-31	D	14	20				2,105	103	229	107				須恵器	須恵器有台環	8世紀	在 地	グレット100
深堀-32	D	14	20				920	346	247					須恵器	須恵器有台環	8世紀	在 地	グレット103
深堀-33	D	14	20				1,312	513	262	65				須恵器	須恵器有台環	8世紀	在 地	グレット111
深堀-34	D	14	20				3,659	157						須恵器	須恵器有台環	9世紀	在 地	グレット128
深堀-35	D	14	20				1,436	348	567	67				須恵器	須恵器有台環	8世紀	在 地	グレット147
深堀-36	D	14	20				654	284	848	124				須恵器	須恵器有台環	9世紀	在 地	グレット148
深堀-37	D	14	20				3,816	68						須恵器	須恵器有台環	9世紀	在 地	グレット153
深堀-38	D	14	20				988	242	847	124				須恵器	須恵器有台環	9世紀	在 地	グレット170
深堀-39	D	14	20				803	226	867	89				須恵器	須恵器有台環	8世紀	在 地	グレット200
深堀-40	D	14	20				1,428	149	716	60				須恵器	須恵器有台環	9世紀	在 地	グレット205
深堀-41	D	14	20				3,830	134						須恵器	須恵器有台環	8世紀	在 地	グレット211
深堀-42	D	14	20				1,830	128	708	59				須恵器	須恵器有台環	9世紀	在 地	グレット225

Mont: モンモリロナイト Mica: 雲母類 Hb: 角閃石 Ch: 綠泥石 (Ch: Fe 一次放射; Mg 二次放射) Qt: 石英 Pl: 斜長石
Mullite: ムライト K-fels: カリ長石 Halloy: ハロイサイト Kaol: カオリナイト Pyrite: 黄鉄鉱 Au: 普通輝石 Py: 紫鉄輝石
Crist: クリスタライト

第6表 化学分析表

試料番号	Na2O	MgO	Al2O3	SiO2	K2O	CaO	TiO2	MnO	Fe2O3	NiO	Total	形式	器種	時代	地域	遺物番号
深層-16	1.75	0.31	20.98	60.04	2.25	1.28	1.81	1.51	10.08	0.00	100.01	灰 壺	有台 坏	10 世紀	在 地	H30-5
深層-20	0.11	0.57	18.84	64.80	2.84	0.36	0.63	0.90	10.38	0.00	100.00	灰 壺	器 坏	7 世紀	飛 越 池 地	H40-7
深層-24	0.60	0.18	20.71	64.16	1.25	0.49	1.58	0.96	10.01	0.06	99.99	須 恵 器	器 坏	9 世紀	花 地	グリット25
深層-25	0.67	0.52	21.57	65.43	1.15	0.65	1.50	0.79	7.71	0.00	100.00	須 恵 器	器 坏	9 世紀	花 地	グリット39
深層-26	0.91	0.05	19.16	65.85	1.69	1.63	1.59	0.98	8.41	0.05	100.00	須 恵 器	器 坏	9 世紀	在 地	グリット50
深層-27	0.72	0.20	20.01	60.55	1.25	0.74	1.75	1.75	12.43	0.00	100.00	須 恵 器	器 坏	9 世紀	在 地	グリット54
深層-28	0.39	0.55	23.09	63.04	1.31	0.86	1.14	0.84	8.77	0.00	99.99	須 恵 器	器 坏	8 世紀	在 地	グリット75
深層-29	0.95	0.39	19.93	64.30	1.99	1.04	1.32	1.05	9.01	0.00	100.00	須 恵 器	器 坏	9 世紀	在 地	グリット81
深層-30	0.32	0.41	18.63	70.97	2.65	0.45	0.84	0.63	5.11	0.00	100.01	須 恵 器	器 坏	8 世紀	在 地	グリット89
深層-31	1.32	0.45	17.48	71.96	1.95	0.50	1.21	0.40	4.93	0.07	99.98	須 恵 器	器 坏	8 世紀	在 地	グリット100
深層-32	1.38	0.33	20.76	65.34	1.86	1.23	1.25	0.61	6.71	0.00	99.99	須 恵 器	器 坏	8 世紀	在 地	グリット103
深層-33	1.14	0.36	21.00	67.94	1.68	1.03	0.99	0.59	5.28	0.00	100.01	須 恵 器	器 坏	8 世紀	在 地	グリット111
深層-34	0.95	0.55	17.00	69.30	2.74	0.41	1.27	0.50	6.32	0.36	100.02	須 恵 器	器 坏	9 世紀	在 地	グリット128
深層-35	1.26	0.25	21.63	65.70	1.71	0.87	1.27	0.65	6.66	0.00	100.00	須 恵 器	有台 坏	8 世紀	在 地	グリット147
深層-36	1.01	0.26	21.49	68.13	1.17	0.78	1.08	0.52	5.33	0.22	99.99	須 恵 器	有台 坏	9 世紀	在 地	グリット148
深層-37	0.00	0.39	19.13	68.69	2.24	0.49	0.91	1.16	7.31	0.08	100.00	須 恵 器	有台 坏	9 世紀	在 地	グリット153
深層-38	1.10	2.14	20.10	66.10	1.06	0.97	0.85	0.93	6.65	0.00	100.00	須 恵 器	有台 坏	9 世紀	在 地	グリット170
深層-39	1.19	0.20	21.51	65.98	1.45	0.90	1.24	1.04	6.46	0.02	99.99	須 恵 器	器 坏	8 世紀	在 地	グリット200
深層-40	1.00	0.41	19.79	61.32	1.67	1.11	1.86	1.43	11.27	0.14	100.00	須 恵 器	器 坏	9 世紀	在 地	グリット205
深層-41	0.00	0.65	18.96	71.79	1.90	0.42	0.81	0.76	4.40	0.31	100.00	須 恵 器	器 坏	8 世紀	在 地	グリット211
深層-42	0.65	1.06	20.60	69.47	1.64	0.21	0.89	0.59	4.89	0.00	100.00	須 恵 器	器 坏	9 世紀	在 地	グリット225
											0.00					

第7表 タイプ分類表

試料 No	タイプ 分類	備 考			
		形 式	器 種	時 代	地域分類
深堀-27	A	須恵器	坏	9世紀	在 地
深堀-28	A	須恵器	坏	8世紀	在 地
深堀-29	A	須恵器	坏	9世紀	在 地
深堀-16	B	須恵器	有台坏	10世紀	在 地
深堀-26	C	須恵器	坏	9世紀	在 地
深堀-20	D	須恵器	坏蓋	7世紀	阿曇と比較
深堀-24	D	須恵器	坏	9世紀	在 地
深堀-25	D	須恵器	坏	9世紀	在 地
深堀-30	D	須恵器	坏	8世紀	在 地
深堀-31	D	須恵器	坏	8世紀	在 地
深堀-32	D	須恵器	坏	8世紀	在 地
深堀-33	D	須恵器	坏	8世紀	在 地
深堀-34	D	須恵器	坏	9世紀	在 地
深堀-35	D	須恵器	有台坏	8世紀	在 地
深堀-36	D	須恵器	有台坏	9世紀	在 地
深堀-37	D	須恵器	有台坏	9世紀	在 地
深堀-38	D	須恵器	有台坏	9世紀	在 地
深堀-39	D	須恵器	坏蓋	8世紀	在 地
深堀-40	D	須恵器	坏蓋	9世紀	在 地
深堀-41	D	須恵器	坏蓋	8世紀	在 地
深堀-42	D	須恵器	坏蓋	9世紀	在 地

第8表 組成分類表

試料 No	備 考				
	形 式	器 種	時 代	地域分類	
深堀：須恵器・SiO ₂ 小・Qt：小					
深堀-27	須恵器	坏	9世紀	在 地	Qt：小
深堀-16	須恵器	有台坏	10世紀	在 地	Qt：小
深堀-40	須恵器	坏蓋	9世紀	在 地	Qt：小
深堀：須恵器・SiO ₂ 中・Qt：小					
深堀-29	須恵器	坏	9世紀	在 地	Qt：小
深堀-26	須恵器	坏	9世紀	在 地	Qt：小
深堀-24	須恵器	坏	9世紀	在 地	Qt：小
深堀-25	須恵器	坏	9世紀	在 地	Qt：小
深堀-32	須恵器	坏	8世紀	在 地	Qt：小
深堀-35	須恵器	有台坏	8世紀	在 地	Qt：小
深堀-39	須恵器	坏蓋	8世紀	在 地	Qt：小
深堀：須恵器・SiO ₂ 大・Qt：中					
深堀-30	須恵器	坏	8世紀	在 地	Qt：中
深堀-31	須恵器	坏	8世紀	在 地	Qt：中
深堀：須恵器・SiO ₂ 大・Qt：小					
深堀-33	須恵器	坏	8世紀	在 地	Qt：小
深堀-36	須恵器	有台坏	9世紀	在 地	Qt：小
深堀-42	須恵器	坏蓋	9世紀	在 地	Qt：小
深堀：須恵器・SiO ₂ 大・Qt：大					
深堀-34	須恵器	坏	9世紀	在 地	Qt：大
深堀-37	須恵器	有台坏	9世紀	在 地	Qt：大
深堀-41	須恵器	坏蓋	8世紀	在 地	Qt：大
深堀：須恵器・Al ₂ O ₃ 大・Qt：小					
深堀-28	須恵器	坏	8世紀	在 地	Qt：小
深堀：須恵器 大庭寺？					
深堀-20	須恵器	坏蓋	7世紀	阿曇と比較	Qt：中
深堀：須恵器・SiO ₂ 中・MgO大・Qt：小					
深堀-38	須恵器	有台坏	9世紀	在 地	Qt：小

2. 佐久市、深堀遺跡の自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 深堀遺跡における種実同定

1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また、出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

2. 試料

試料は、深堀遺跡の H27号住居址堀方（平安時代）より検出された選別済み植物遺体1点である。

3. 方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

4. 結果

草本1が同定された。学名、和名および粒数を表1に示し、分類群を写真に示す。以下に同定の根拠となる形態的特徴を記す。

〔草本〕

キク科 Compositae 果実

長楕円形を呈する。黒褐色で扁平である。背腹両面の正中線上には、それぞれ1個の縦隆条がある。アキノノゲシに類似している。

5. 所見

同定の結果、深堀遺跡の H27号住居址堀方（平安時代）より検出された選別済み植物遺体はキク科の果実であった。キク科の植物は、陽当たりのよい乾燥地を好み、人里植物の性格を持つ。このことから、周辺に比較的乾燥した人為環境が分布していたと考えられる。

参考文献

笠原安夫（1985）日本雑草図説、養賢堂、494p。

笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類。弥生文化の研究第2巻生業、雄山閣 出版、p131-139。

II. 深掘遺跡における樹種同定

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、その構造は年輪が形成され針葉樹材や広葉樹材で特徴ある組織をもつ。そのため、解剖学的に概ね属レベルの同定が可能となる。木材は大型の植物遺体であるため移動性が少なく、堆積環境によっては現地性の森林植生の推定が可能になる。考古学では木材の利用状況や流通を探るのみに加えて、

2. 試料

試料は、深掘遺跡の H30号住居址（平安時代）および H45号住居址 I 区（平安時代）より出土した炭化材 16点である。

3. 方法

試料を割削して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柘目と同義）、接線断面（板目と同義）を作製し、落射顕微鏡によって 75~750 倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

結果は表 1 に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

サワラ *Chamaecyparis pisifera* Endl. ヒノキ科 図版 1・2

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型からヤスギ型を示し、1 分野に 2 個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりサワラに同定される。サワラは岩手県以前の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ 30m、径 1m に達する。材は木理通直、肌目緻密であるが、ヒノキより軽軟でもろいが、広く用いられる。

コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 図版 3・4

横断面：大型の道管が、年輪のはじめに 1~3 列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、散在しないし斜線状に配列する。早材部から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ 15m、径 60cm に達する。材は強靱で弾力性に富み、建築材などに用いられる。

エノキ属 *Celtis* ニレ科 図版 5・6

横断面：中型から大型の道管が、年輪のはじめに 1~3 列配列する環孔材である。孔部外側の小道管は多数複合して、円形ないし斜線状に配列する。早材部から晩材部にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部に方形細胞が見られる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1~2 細胞幅の小型のものと、8~10 細胞幅ぐらいで帯細胞をもつ大型のものからなる。

以上の形質よりエノキ属に同定される。エノキ属にはエゾエノキ、エノキなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。落葉の高木で、高さ 25m、径 1.5m に達する。材は、建築、器具、薪炭などに用いられる。

5. 所見

同定の結果、深堀遺跡出土の炭化材は、サワラ5、コナラ属コナラ節6、エノキ属5であった。サワラは、日本特産の常緑高木で、信州や東海地方において地域的に使われる。コナラ属コナラ節は、温帯上部の冷温帯に主に分布する落葉広葉樹である。エノキ属は、温帯に広く分布し谷あいなどの適潤地に生育する落葉高木である。いずれの樹種も本遺跡の周辺地域に分布する樹木である。

参考文献

- 佐伯浩・原田浩 (1985) 針葉樹材の細胞。木材の構造、文永堂出版、p20-48。
佐伯浩・原田浩 (1985) 広葉樹材の細胞。木材の構造、文永堂出版、p49-100。
島地謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、296p。

深堀遺跡の種実写真



1、キク科果実
_____ : 1.0mm



2、キク科果実
_____ : 1.0mm



3、キク科果実
_____ : 1.0mm



4、キク科果実
_____ : 1.0mm



5、キク科果実
_____ : 1.0mm



6、キク科果実
_____ : 1.0mm

深堀遺跡の木材I



横断面 ————— : 0.2mm
1、H30号住居址 No12 サウラ



放射断面 ————— : 0.1mm



接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.2mm
2、H45号住居址 1区 サウラ



放射断面 ————— : 0.1mm



接線断面 ————— : 0.1mm



横断面 ————— : 0.4mm
3、H30号住居址 No17 コナラ属コナラ節



放射断面 ————— : 0.4mm



接線断面 ————— : 0.4mm

深堀遺跡の木材II



横断面 ————— : 0.4mm



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.4mm
5、H30号住居址 №15 エノキ属



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.4mm
6、H30号住居址 №13 エノキ属



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.1mm

3、長野県佐久市深堀遺跡から出土した 近世およびそれ以前の古人骨について

長野県看護大学 多賀谷 昭

長野県佐久市大字瀬戸の深堀遺跡において、平成10年度から平成12年度にかけて佐久市教育委員会によって行われた発掘調査により、5基の土坑(D14号、D46号、D47号、D52号、D67号)から人骨各1体計5体が出土した。これらの人骨は、中世以前と推定されるもの(D14号、D67号出土)から、平安時代以降(D46号、D47号出土)、さらに、江戸時代以降(D52号出土)のものを含んでいる。これらの人骨について記載し、性と年齢を推定し、さらにうち保存の良い一体(D52号出土)についてマルチン式計測(Martin-Saller, 1957)を行い、計測値を他の資料と比較分析し、時代的特徴を検討した。

D14号土坑出土人骨

長骨の骨体の破片5個で、何れも風化が著しい。そのうち最も大きい長さ13cm、幅2cmのものは、ヒト左大腿骨内側上部と推定されるが、表面の風化が著しいため、確実な同定はできない。これ以外にも、大腿骨の骨体の一部と思われる破片が2個存在する。年齢は、大きさからみて、いずれも成人あるいはそれに近いと推定される。性別は判定できない。

D46号土坑出土人骨

小児の骨で、残存部位は、頭骨では左上顎骨歯槽部、下顎骨体の前部、左右の側頭骨の錐体で、乳歯は右上顎側切歯以外のすべてが残存し、下記の永久歯冠が存在する。乳歯は、すべて歯根が完成しており、永久歯は中切歯と第一大臼歯は歯冠がほぼ完成し、側切歯と犬歯は歯冠の下部1/4程度が未形成である。

--6--3-1	12--6--
e d c b a	a - c d e
e d c b a	a b c d e
--6--3--	-----
- : 不明	

頭蓋以外では、左右の大腿骨および脛骨の骨体が残存する。年齢は、歯の萌出状態から、3歳程度と推定される。性別は判定できない。

D47号土坑出土人骨

小児の骨で、頭骨では、下顎骨の左下顎体後半部から下顎枝、後頭骨の左右外側部と頭部下分、左右の側頭骨錐体、蝶形骨の右大翼が残存し、歯は、下の歯式に示すものが残存する。乳臼歯は、歯根の先端が開いており、永久歯の歯冠は中切歯と第一大臼歯では半分、犬歯と第二大臼歯では咬頭の先端付近のみが形成されている。永久歯のうち、上顎犬歯は右であるかも知れない。肋骨では、椎骨と肋骨の破片が多数残存し、四肢骨では左の脛骨、右大腿骨骨体上部が残っている。

-76-----1	1-3--6-
e d e b -	-
e d e - -	a b c d e
--6-----	----d e
- : 不明	-----6-

年齢は、歯の萌出状態から、生後1年から1年半と推定される。性別は判定できない。

D52号土坑出土人骨 (227P)

保存状態は良好で、ほぼ全身にわたる骨が残っている。

残存部位：頭蓋骨は頭蓋底と左の前頭結節付近、下顎骨の左側関節突起以外は、顔面を含めてほぼ完全に残っている。歯は、次の歯式に示すものが釘立して存在する。

--●●	4 3 2 ●		1 ● 3 ●	-----
--	6 5 4 3 ●		-- 3 4 5 6 7 ●	--

—：不明、●：脱落

胴骨では、下位の胸椎とすべての腰椎および仙骨、少量の肋骨片が残っている。上肢骨では、左右肩甲骨の関節窩から肩甲棘基部および肩峰にかけての部分、右鎖骨の全体、左鎖骨の肩峰端付近、左右の上腕骨、橈骨、尺骨が残っている。下肢骨では、右の恥骨以外の左右寛骨、左右の大腿骨と脛骨、右腓骨の骨体上部、左の踵骨と距骨、左右の第1中足骨が残っている。

性別：大坐骨切痕、恥骨下角ともに狭く、明らかに男性と判定される。

年齢：3主歯は、矢状縫合の内板のみ閉鎖している。歯の咬耗は、第1、第2大白歯とも歯冠の半ばまで摩滅し、象牙質が広く歯状に露出している。腰椎の椎体には、骨嘴の形成が見られる。これらのことから、40ないし50歳代と推定される。

特記事項：上顎右第2小臼歯および第1大臼歯は歯槽骨の吸収が進んでおり、死亡時にはすでに脱落寸前であったと思われる。また、腰椎の椎体は全体に高さが低く扁平椎の状態になっており、特に、第1腰椎では椎体前部が開道骨折を起こして楔状になっている。

計測値：頭蓋計測値を表1に、四肢骨計測値を表2に示す。左の上腕骨、大腿骨、脛骨からピアソン式により推定した身長は、それぞれ152.0 cm、155.0 cm、153.8 cm、これらの平均は153.6 cmで、男性としてはやや小柄である。頭蓋骨計測値からみた特徴については後で触れる。

D67号土坑出土人骨

一体分の成人骨であるが、骨質は脆く、破片になっているものが多い。

残存部位：頭骨では、左側頭骨の錐体、右側頭骨の頬骨突起基部から乳様突起までと錐体の先端部、蝶形骨体の一部、後頭骨鱗部の右側縦内側半を含む部分、下顎骨の骨体左後外側部、右下顎頭付近のほか、頭蓋冠の一部と思われる破片が4個存在する。歯は、下記の永久歯が残存し、これ以外に他の個体の右上顎第1大臼歯が存在する。

-- 6 5 -----		-- 3 4 - 6 7 -
-- 6 5 4 3 --		1 - 3 4 5 - 7 8

—：不明

胴骨では、椎骨の破片が少量存在し、環椎の右外側塊と軸椎の歯突起が含まれる。上肢骨では、左鎖骨中央やや肩峰端寄りの部分、右肩甲骨外側部、右側頭骨下1/3が残っている。下肢骨では、右寛骨の寛骨臼外側部から大坐骨切痕にかけての部分、左寛骨の寛骨臼の一部と、大坐骨切痕の一部、左右大腿骨頭、左大腿骨体上1/3、右大腿骨体上半分、右脛骨骨体中央部、右腓骨体下部、左右の脛骨下部と距骨および踵骨の距骨関節面付近、左右不明の角状骨の一部と足の中脛骨2本が残っており、これら以外に四肢骨の破片が多数存在する。

性別：大坐骨切痕は狭く、男性と判定できる。乳様突起の大きさ、乳突上隆線の発達度、大腿骨の太さもこれと矛盾しない。

年齢：第1大臼歯は咬耗により咬頂が消失し、歯冠面積の約半分にわたり象牙質が露出している。第2大臼歯の象牙質露出は点状ないし小斑状である。これらのことから、30歳代と推定される。

特記事項：左の上顎第2大臼歯および下顎第2大臼歯の歯頸部頰側に齧食が認められる。歯髓腔には達していないが、深さは歯冠径の1/4程度に達している。大腿骨に柱状性は認められない。

顔面計測値からみた D52号土坑出土土人骨の位置づけ

D52号土坑出土土人骨の時代的特徴を明らかにするために、その顔面計測値を、報告されている諸集団の平均値と比較した。使用したのは以下のマルチン計測値7項目である。

- 45 頬骨弓幅
- 46 中顔幅
- 48 上顔高
- 51 眼窩幅 (左)
- 52 眼窩高 (左)
- 54 鼻幅
- 55 鼻高

平均値を比較に用いた集団 (時代、報告者、年) は次の通りである。

- 津雲 (縄文時代、清野・宮本、1925)
- 上井ヶ浜 (弥生時代、永井・他、1984)
- 古母浜 (中世、中橋・永井、1985)
- 畿内江戸 (江戸後期、欠田、1959)
- 畿内現代 (現代、宮本、1924)

形状の主成分分析の結果を図1に示す。変異の大部分 (78.3%) は横軸で説明され、この軸は顔面の幅径と高さ、特に頬骨弓幅と鼻高および上顔高の割合に関係しており、右に行くほど幅に比べて高さが低い。津雲縄文人の顔面は幅に比べて低く、現代近畿人はその逆で、上井ヶ浜弥生人、古母浜中世人、畿内江戸後期人はその中間で、畿内現代人に比較的近い。D52号土坑出土土人骨 (図中の「深堀」) は古母浜中世人や畿内江戸後期人に近く位置する。

以上のことから、この人骨は、縄文人とはかなり異なり、西日本の中世以降の人々に一般的にみられる現代日本人に近い顔面形態を持っているといえる。

謝 辞

本資料を調査する機会を与えていただいた仕久市教育委員会の各位に感謝の意を表したい。

文 献

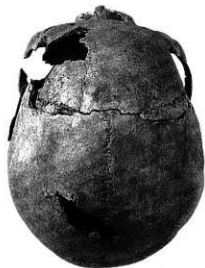
- 欠田早苗、1959：畿内人頭蓋骨の人類学的研究。人類学報25：53-83。
- 清野謙次・宮本博人、1925：津雲貝塚土人骨の人類学的研究：第二部 頭蓋骨の研究。人類学雑誌41。
- Martin-Saller, 1957: Lehrbuch der Anthropologie. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart.
- 宮本博人、1924：現代日本人骨の人類学的研究。人類学雑誌39。
- 永井昌文・中橋孝博・土肥直美・他、1984：土井ヶ浜遺跡第9次調査出土人骨。豊北町教育委員会「上井ヶ浜遺跡第9次発掘調査概報」、pp. 24-37。
- 中橋孝博・永井昌文、1985：山口県下関市古母浜遺跡出土の弥生・中世人骨。下関市教育委員会「古母浜遺跡」

表1 D52号土坑出土の近世人骨(男性)の頭蓋計測値と示数

番号	計測項目	測定値・示数
8	最大幅	140
9	最小前頭幅	82
10	最大前頭幅	109
11	両耳幅	109
13	基底幅	(106)
20	頬耳高	105
23	水平周	(503)
24	楕弧長	296
26	前頭弧長	109
27	頭頂弧長	136
29	前頭弦長	98
30	頭頂弦長	119
8/1	頭蓋長軸示数	78.7
20/1	長耳プレグマ示数	59.0
9/10	横前頭示数	75.2
9/8	横前頭頭頂示数	58.6
9/26	矢状前頭示数	89.9
0/27	矢状頭頂示数	87.5
44	両眼窩幅	90
45	頬骨門幅	129
46	中顔幅	93
45/8	横頭頂示数	92.1
47	頭高	110
48	上顔高	65
50	前眼窩間幅	16
51	眼窩幅(左)	38
52	眼窩高(左)	31
54	鼻幅	23
55	鼻高	45
57	鼻骨最小幅	5
F	鼻根横弧長	21
7/45	コルマン頭小示数	85.3
8/45	コルマン上頭示数	50.4
4/55	鼻示数	51.1
2/51	眼窩示数(左)	81.6
0/44	前眼窩間小示数	17.8
50/F	鼻根湾曲小示数	75.2
66	下顎角幅	(104)
68	下顎骨長	(65)
71	下顎枝幅	左31, 右30
74	兩槽側面角	67

表2 D52号土坑出土の近世人骨(男性)の四肢骨計測値と示数

計測項目	計測値	
	左	右
上腕骨		
1 最大長	284	
4 下端幅	—	59
5 中央最大径	21	(21)
6 中央最小径	19	(18)
7 骨体最小周	61	61
7 a 中央周	65	(65)
7/1 長厚示数	21.5	—
6/5 骨体横断示数	90.5	(85.7)
橈骨		
3 骨体最小周	40	38
4 骨体横径	19	17
5 骨体矢状径	12	12
5/4 骨体横断示数	63.2	70.6
尺骨		
3 骨体最小周	35	—
11 骨体矢状径	12	12
12 骨体横径	17	16
11/12 骨体横断示数	70.6	75.0
大腿骨		
1 最大長	392	397
2 全長	387	392
6 中央欠状径	27	27
7 中央横径	29	29
8 中央周	89	89
9 上部横径	33	34
10 上部欠状径	23	22
8/2 長厚示数	23.0	22.7
6/7 中央横断示数	93.1	93.1
10/9 上骨体横断示数	69.7	64.7
脛骨		
1 全長	311	—
1 a 最大長	316	—
8 中央最大径	28	(29)
8 a 栄養孔位最大径	33	36
9 中央横径	20	(21)
9 a 栄養孔位横径	21	21
10 骨体周	76	(82)
10 a 栄養孔位周	89	92
10 b 最小周	71	—
10 b/1 長厚示数	22.8	—
9/8 中央横断示数	71.4	(72.4)
9 a/8 a 栄養孔位横断示数	63.6	58.3



D52号土坑出土人骨

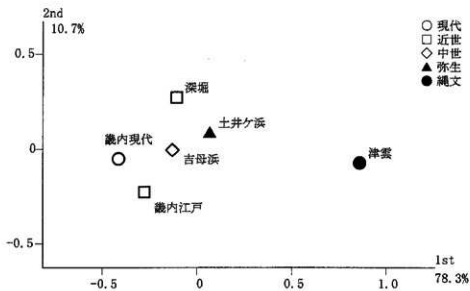


図1. 7項目の顔部計測値に基づく形状の比較

引用・参考文献

- | | | |
|---------|--|---|
| 1966 | 陶邑古窯址群Ⅰ | 平安学園考古学クラブ |
| 1972 | 佐久市中込深塚遺跡発掘調査概報 | 藤沢平治 (長野県考古学会誌13) |
| 1978 | 陶器Ⅲ | (財)大坂文化財センター |
| 1986 | 西浦・竹田峯 | 佐久市教育委員会 |
| 1984・87 | 北西ノ久保遺跡 | 佐久市教育委員会 |
| 1987 | 前田遺跡 | 御代田町教育委員会 |
| 1987 | 長野県考古学会誌 55・56号 | 長野県考古学会 |
| 1988 | 十二遺跡 | 御代田町教育委員会 |
| 1988 | 鯖沢・葛石 | 佐久埋蔵文化財調査センター |
| 1988 | 長野県史 考古資料編 遺構・遺物 | 長野県史刊行会 |
| 1989 | 前田遺跡 | 佐久市教育委員会 |
| 1989 | 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3
塩尻市内その2 古田川西遺跡 | 日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会
(財)長野県埋蔵文化財センター |
| 1989 | 根岸遺跡 | 御代田町教育委員会 |
| 1989 | 宮の上Ⅱ | 佐久埋蔵文化財調査センター |
| 1990 | 赤い土器を追う | 佐久考古学会 |
| 1990 | 研究入門 須恵器 | 柏書房 |
| 1990 | 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4
松本市内その1 総論編 | 日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会
(財)長野県埋蔵文化財センター |
| 1991 | 石附窯址群Ⅲ | 佐久市教育委員会 |
| 1992 | 国道141号線関係遺跡 | 佐久市教育委員会 |
| 1995 | 曾根新城遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ
上久保田遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ
西曾根遺跡Ⅱ・Ⅲ | 佐久市教育委員会 |
| 1995 | 東国土器研究4号 | 東国土器研究会 |
| 1996 | 長野県考古学会誌79 | 長野県考古学会 |
| 1997 | 出土した古代の土器 | 群馬県埋蔵文化財調査センター |
| 1997 | 長野県埋蔵文化財センター 紀要3 | (財)長野県埋蔵文化財センター |
| 1998 | 根々井芝宮遺跡 | 佐久市教育委員会 |
| 1999 | 長野県の弥生土器 | 長野県考古学会弥生部会編 |
| 1999 | 西一本柳Ⅲ・Ⅳ | 佐久市教育委員会 |
| 1999 | 五里田遺跡 | 佐久市教育委員会 |
| 2001 | 榛名平遺跡 | 佐久市教育委員会 |
| 2001 | 川原端遺跡 | 佐久市教育委員会 |
| 2001 | 上芝宮Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ 下曾根Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ | 佐久市教育委員会 |

圖

版



H1号住居址(南から)



H1号住居址カマド(南から)



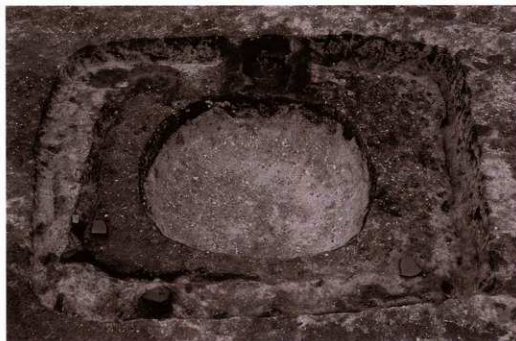
H2号住居址カマド(南から)



H2号住居址(南から)
(南側H5号)



H3号住居址(北から)



H4号住居址(南から)
(中央D5号土坑)



H4号住居址カマド

H6号住居址(南から)



H5号住居址(南から)



H6号住居址
(南から)
→



H7号住居址(南から)





H8号住居址(南から)



H8号住居址カマド(南から) | H9号住居址カマド(南から)†



H9号住居址(南から)



H10号住居址(南から)

H10号住居址カマド(南から)



H11号住居址(東から)





H12号住居址(西から)



H12号住居址カマド(西から)



H12号住居址旧カマド(西から)



H13号住居址(南から)

H14号住居址(南から)



H15号住居址カマド(西から)



H14号住居址カマド(南から)

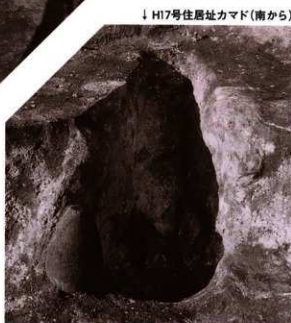


H15号住居址(西から)
(東D 30)





H16号住居址(南から)



↓ H17号住居址カマド(南から)

H17号住居址(南から)



↓ H17号住居址カマド 遺物出土状況



H18号住居址(南から)



H19号住居址(南から)



H19号住居址カマド(南から)





H20号住居址 (南から)



H21号住居址 (東から)



H22号住居址 (南から)

H23号住居址 (南から)



H23号住居址 (南から)



H24号住居址カマド (南から)

H24号住居址 (南から)
(中央Ta1)





H25号住居址(東から)



H25号住居址(南から)



H26号住居址(北から)→

H27号住居址(北から)



H28号住居址(南から)



H28号住居址カマド(南から)



H29号住居址(南から)





H29号住居址カマド(南から)



H30号住居址
(南から)



H30号住居址カマド(南から)

H31号住居址(南から)



← H32号住居址カマド(南から)

↓ H32号住居址(南から)





H33号住居址(南から)

↓ H33号住居址カマド(南から)



↓ H34号住居址(南から)



H34号住居址カマド(南から)



H35号住居址カマド(南から)



H35号住居址(北から)





H36号住居址(南から)

H36号住居址カマド(南から)



H37号住居址カマド(南から)



↑ H37号住居址(南から)

H38号住居址カマド(東から)



↓ H38号住居址(南から)





H39号住居址
(西から)



H40号住居址
(東から)



H40号住居址カマド(南から)



↑H41号住居址(東から)



H42号住居址(北から)→

↓H43号住居址(西から、東M48)





H44号
住居址
(南から)



H45号住居址・D 74号土坑
(東から)



H46号住居址・D 73号土坑
M57号溝址
(西から)



↑H47号住居址(南から)



↑H48号住居址(南から)

H49号住居址(西から)



H49号住居址カマド(西から)



H50号住居址 炉(南から)



H50号住居址(南から)

H50号住居址 出土遺物



↓ H50号住居址出土遺跡



↓ H50号住居址 出土遺物



H51号住居址(西から)





H51号住居址 炉址周辺遺物出土状況

↓H52号住居址 (西から)





↑H53号住居址(南から)



H53号住居址カマド(南から)



↑ H54号住居址 (南から)



H55号住居址 (南から)



↑ H56号住居址(南から)



H56号住居址カマド
(南から)→

↓ H57号住居址(西から)

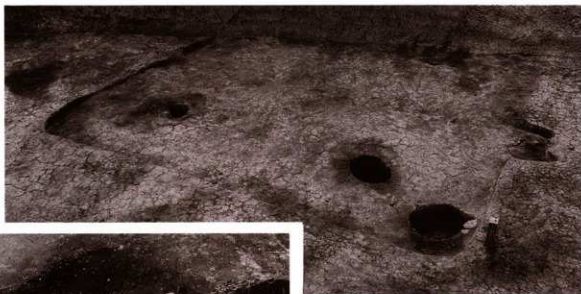




↑ H58号住居址 (南から)



↑ H59号住居址 (南から)



↑ H60号住居址(東から)



← H61号住居址(南から)

↓ H61号住居址(東から)





H62号住居址(南から)



H64号住居址(南から)



H63号住居址(東から)



H65号住居址(南から)



H65号住居址カマド(南から)



H66号住居址(南から)



H66号住居址カマド(南から)



H67号住居址(東から)



H67号住居址カマド(南から)

H68号住居址
(南から、東H58、南H61)





H70号住居址(西から)



H69号住居址(南から)

H71号住居址(西から)



H72号住居址(北から)



H73号住居址カマド(東から)



H72号住居址(南から)





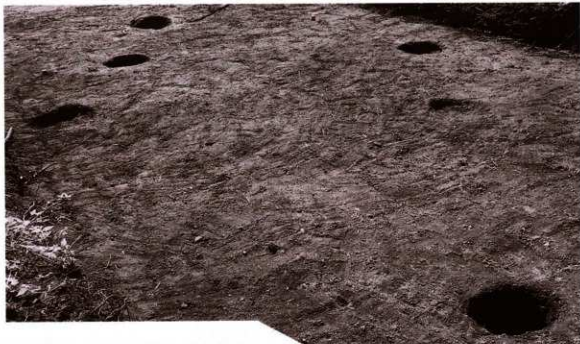
F1号堀立柱建物址(北から)



F2号堀立柱建物址(南から)



F3号堀立柱建物址(北から)



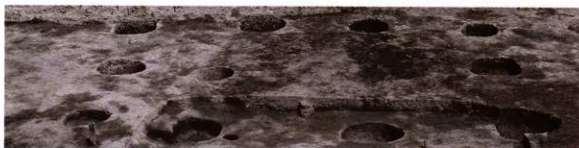
F 4号掘立柱建物址



F 6号掘立柱建物址

F 5号掘立柱建物址





F 7号掘立柱建物址(東より)



D1号 土坑



D2号 土坑



D4号 土坑



D3号 土坑



D6号 土坑



D7号 土坑



D8号 土坑



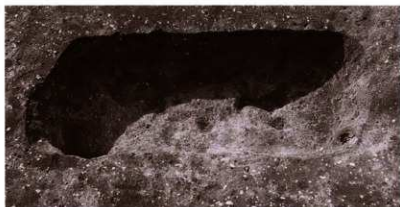
D9号 土坑



D10号 土坑



D11号 土坑



D13号 土坑



D12号 土坑



D14号 土坑



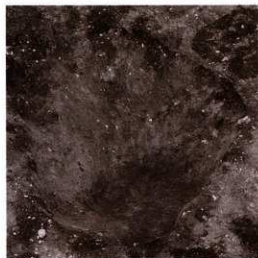
D15号 土坑



D16号 土坑



D18号 土坑



D17号 土坑



D20号 土坑



D19号 土坑



D21号 土坑



D22号 土坑



D23号 土坑



D24号 土坑



D26号 土坑



D27号 土坑



D28号 土坑



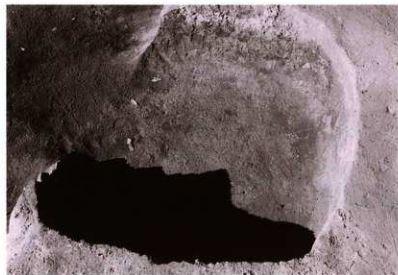
D29号 土坑



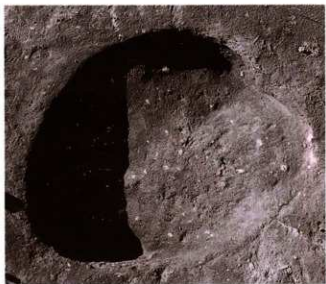
D31号 土坑



D32号 土坑



D33号 土坑



D34号 土坑



D39号 土坑



D38号 土坑



D40号 土坑



D41号 土坑



D45号 土坑



← D43号 土坑

← D42号 土坑

↑ D44号 土坑

↓ D46号 土坑





D50号 土坑



D51号 土坑 セクション



D51号 土坑



D52号 土坑



D53号 土坑

D54号 土坑





D55号 土坑



D56号
土坑



D57号 土坑



D58号 土坑



D59号 土坑 (上部曝検出状況)



D59号 土坑 (完掘)



D59号 土坑 (人骨出土状況)

D60号 土坑





D61号 土坑



←D64号 土坑

←D63号 土坑



D65号 土坑



D66号 土坑



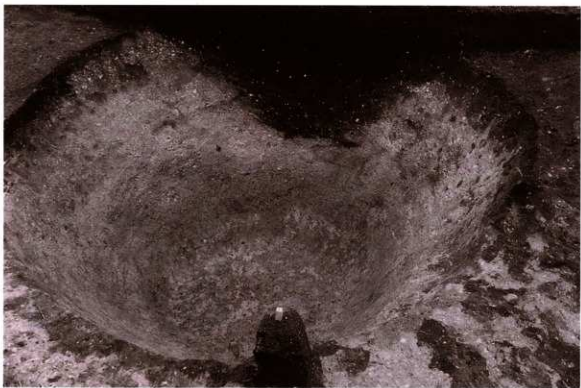
D68号 土坑



D70号 土坑



D67号 土坑



D69号 土坑



D71号 土坑



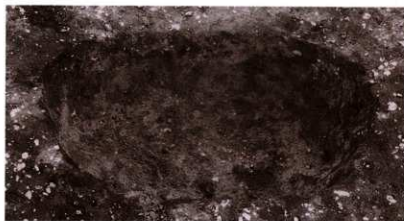
D73号 土坑



D74号 土坑



D75号 土坑



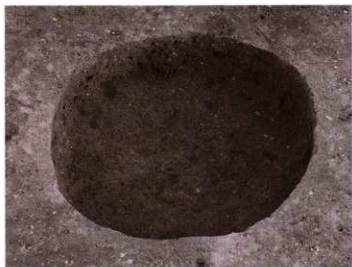
D76号 土坑



D77号 土坑



D78号 土坑



D79号 土坑



D47号 土坑



M1号 溝址



M1号 溝址 セクション



M2号 溝址



M3号 溝址



M4号 溝址



M7号 溝址



M7号 溝址 セクション



M10号 溝址



M5号 遗址



M8号 遗址



M9号 溝址



M9号 溝址 セクション



M11号 溝址

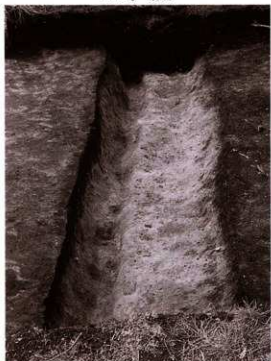


M12号 沟址

M12号 沟址



M13号 沟址





M14号 溝址



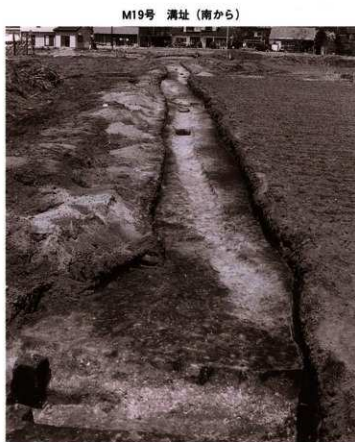
M15号 溝址



M16号 溝址 (東から)



M17号 溝址 (北から)



M19号 溝址 (南から)



M18号 溝址 (北から)



M19号 溝址 (東から)



M19号 溝址 (西から)



M21号 溝址 (北から)



M23号 溝址 (南から)



M23号 溝址 セクション



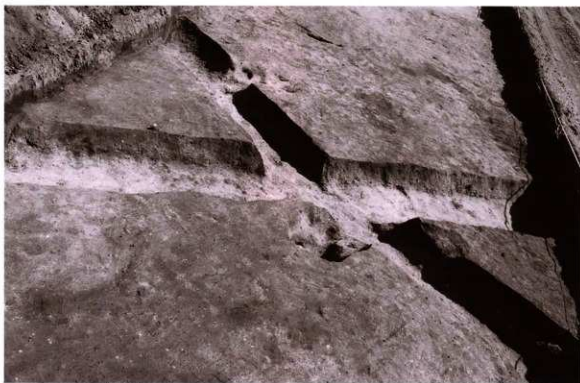
M22号 溝址 (北から)



M24号 溝址 (南から)



M22号 溝址 セクション



↑ M25号 溝址 (南から)

M26号 溝址 (南から) ↑



M28号 溝址 (西から)



M29号 溝址 (北から)



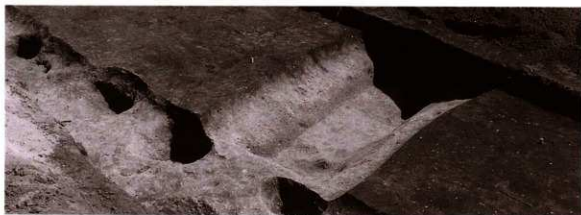
M30号 溝址



M31号 溝址 (北から)



M32号 溝址 (北から)



M33号 溝址 (北西から)



M34号 溝址 (北から)



M38号 溝址 (西から)



M35号 溝址



M35号 溝址 セクション



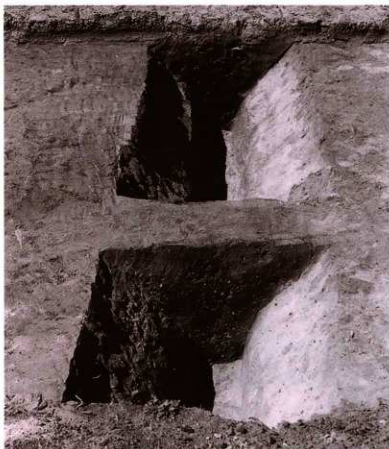
M36号 溝址



M36号 溝址 セクション



M37号 沟址



M40号 沟址



M40号 溝址 セクション



←M41号 溝址

←M39号 溝址



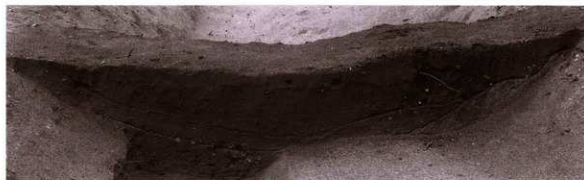
M42号 溝址 西半 (北から)



M42号 溝址 東半



M42号 溝址 西半 セクション



M42号 溝址 東半 セクション



M43号 溝址 (北から)



M43号、M44号 溝址 (南から)



M43号 溝址 セクション



M44号 溝址 セクション



M45号 溝址



M45号 溝址 セクション



M46号 溝址 (南から)



M46号 溝址 セクション



M47号 溝址



M48号 溝址



←M50号 溝址



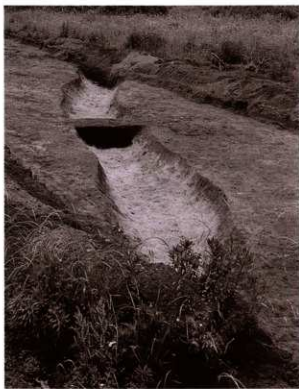
M51号 沟址



M52号 沟址



M53号 沟址



M54号 沟址



M55号 沟址



M56号 沟址

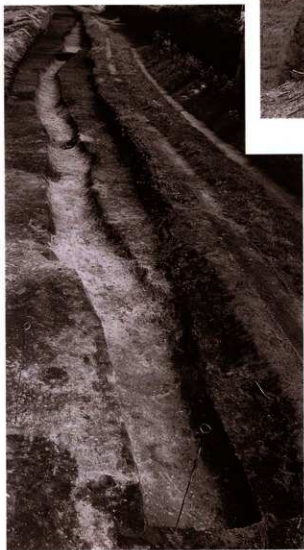


M57号 沟址

M58号 沟址一



↓ M60号 沟址



M61号 沟址



M61号 溝址 セクション



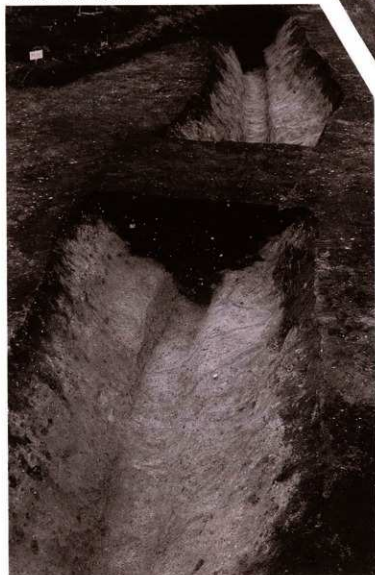
M62号 溝址



M63号 溝址



↓ M65号 溝址 (南から)



↑ M64号 溝址 (南から)



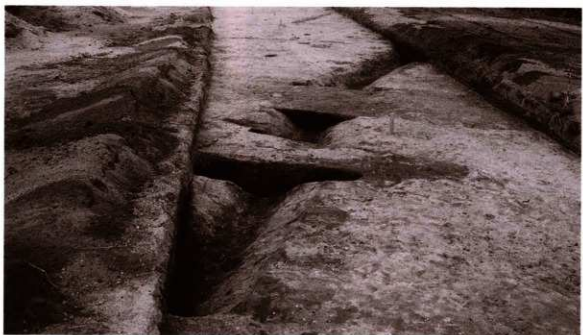
M68号 溝址



M66号 溝址



M67号 溝址



M69号 溝址



350-4号墳 (北から)



350-4号墳 (西から)



350-4号墳（東から）



350-4号墳（南から）



350-4号墳（北から）



350-4号墳（西から）



350-4号墳 掘方(南から)



350-5号墳 セクション(西から)



↑ 350-5号墳 (西から)



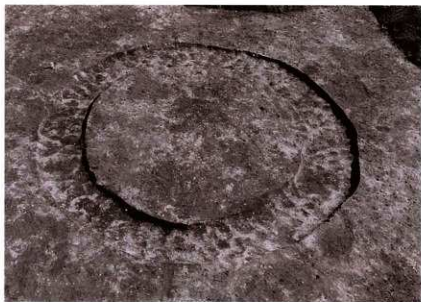
← 350-5号墳 (南から)

350-5号墳 (北から)→

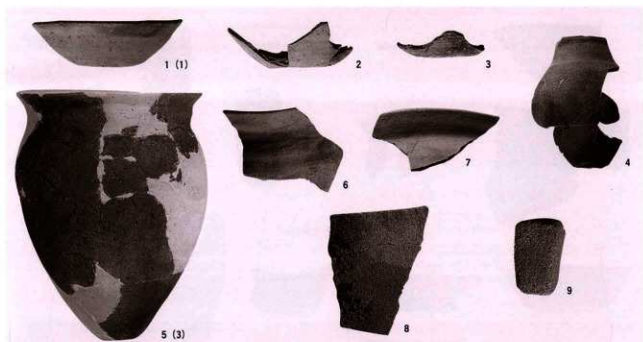




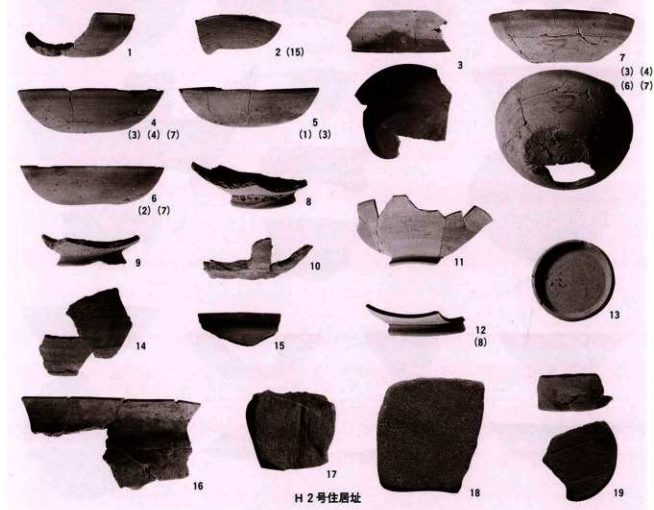
350-5号墳（西から）



環状溝址1

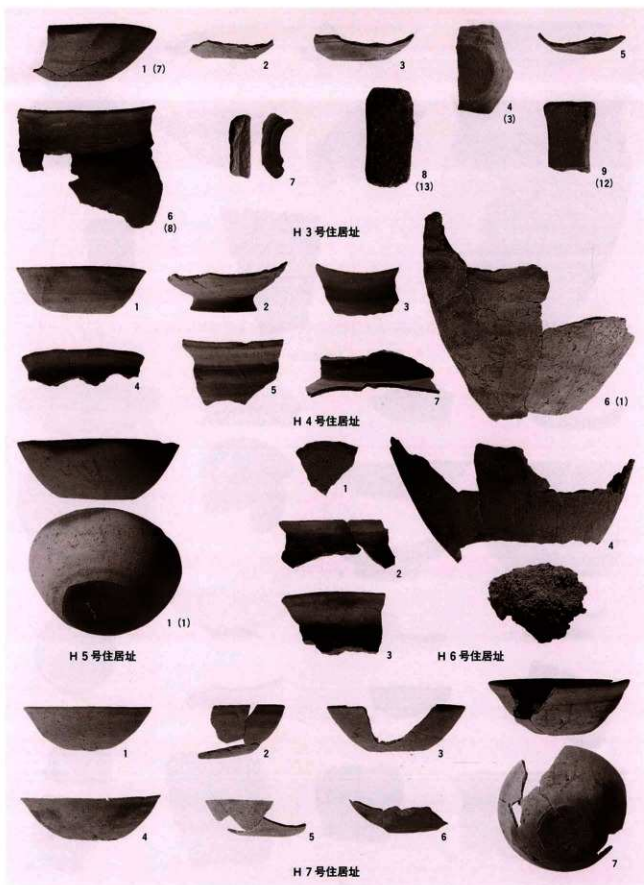


H 1 号住居址

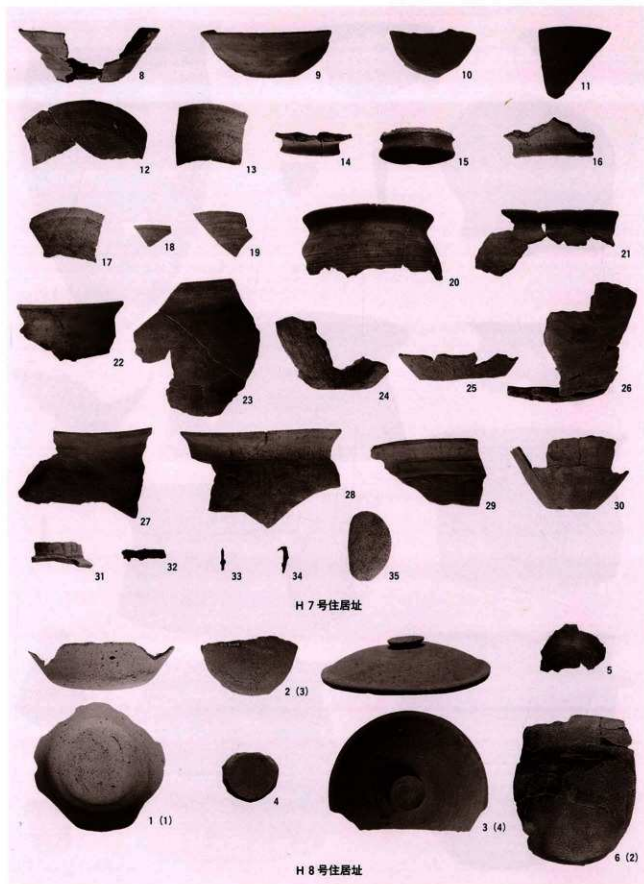


H 2 号住居址

(H 1 H 2)



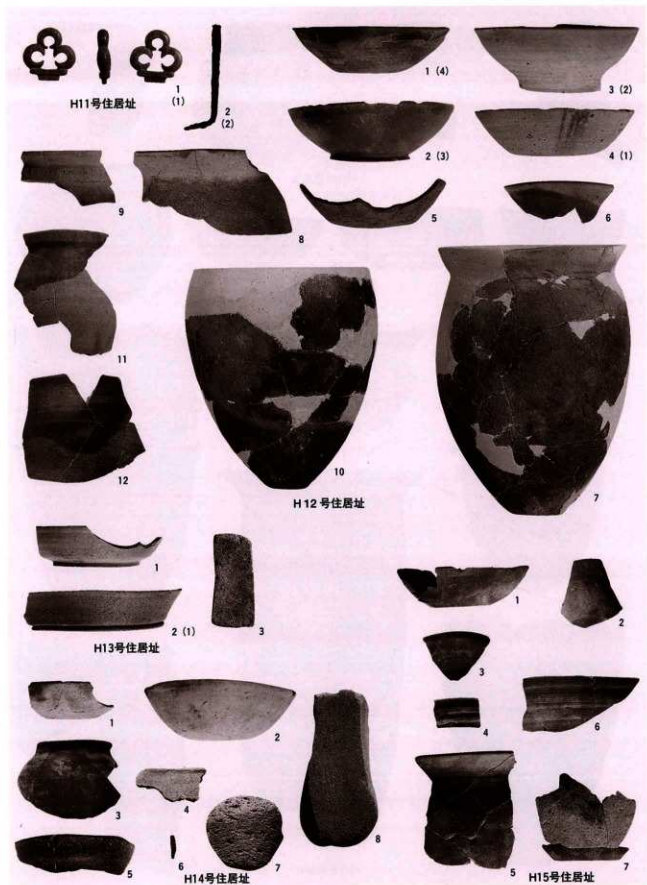
(H 3 H 4 H 5 H 6 H 7①)



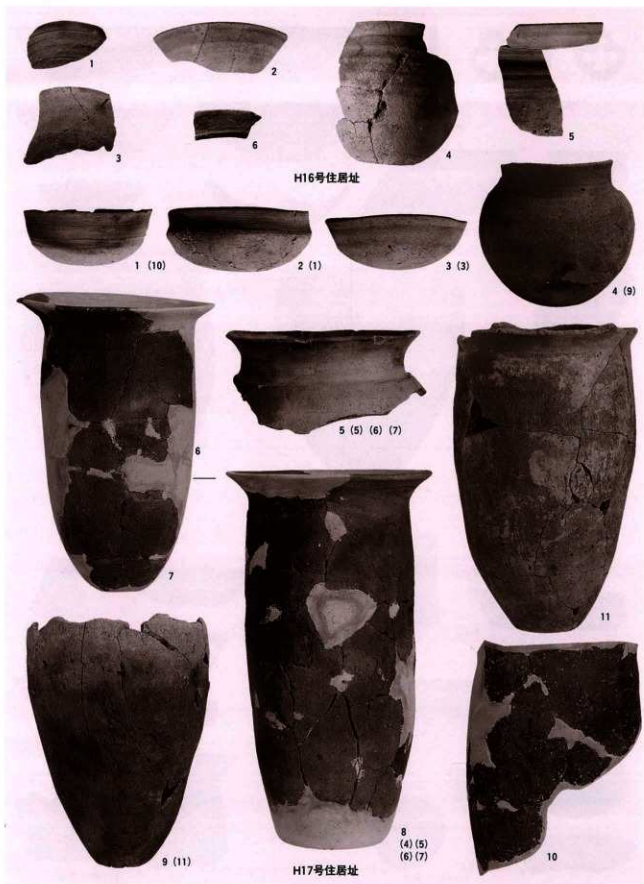
H 7号住居址

H 8号住居址

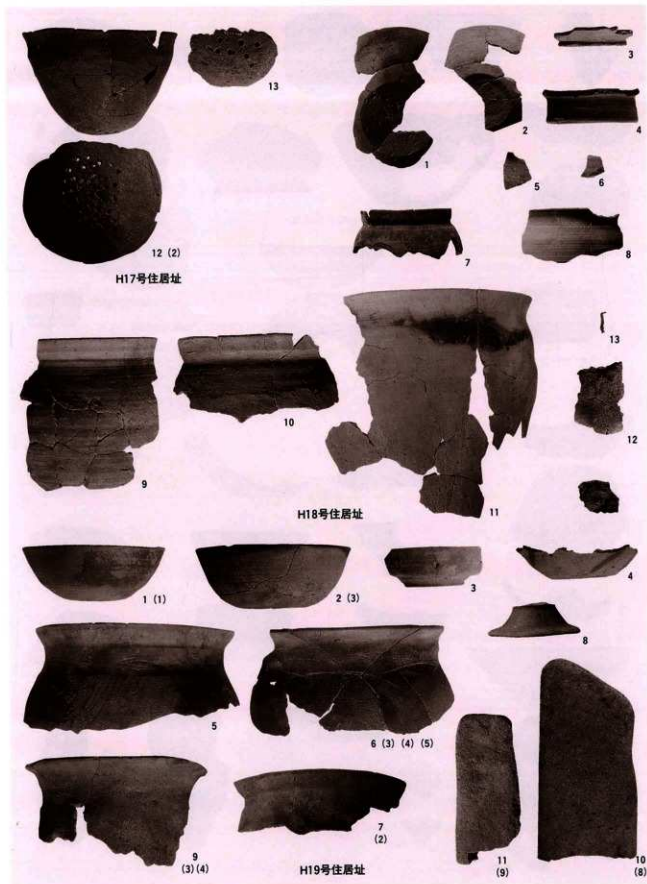
(H 7② H 8)



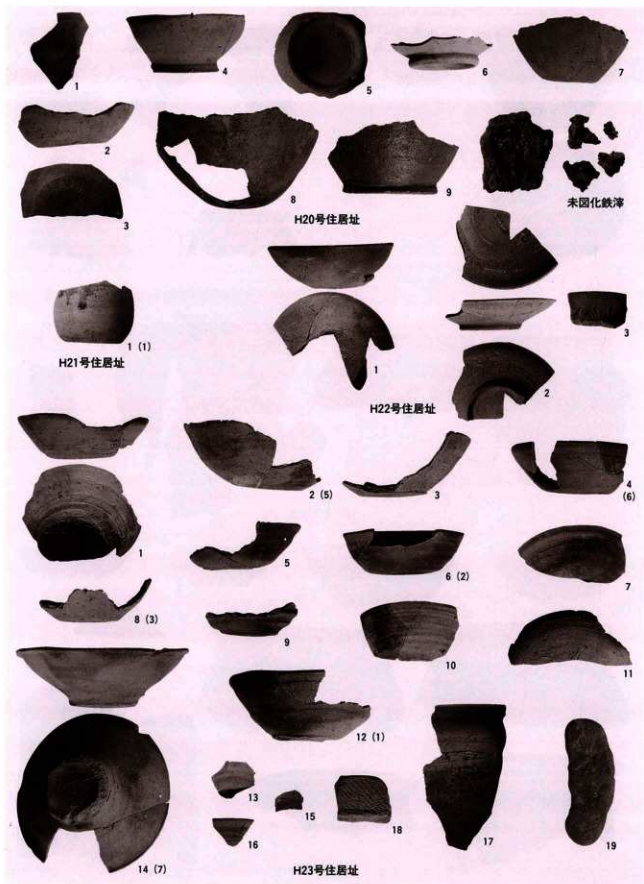
(H11 H12 H13 H14 H15)



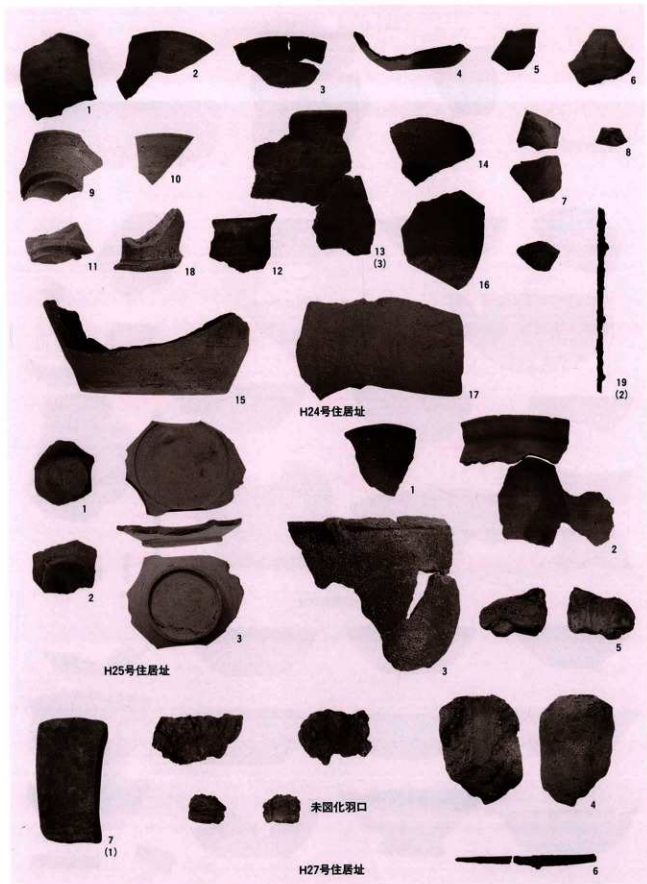
(H 16 H 17①)



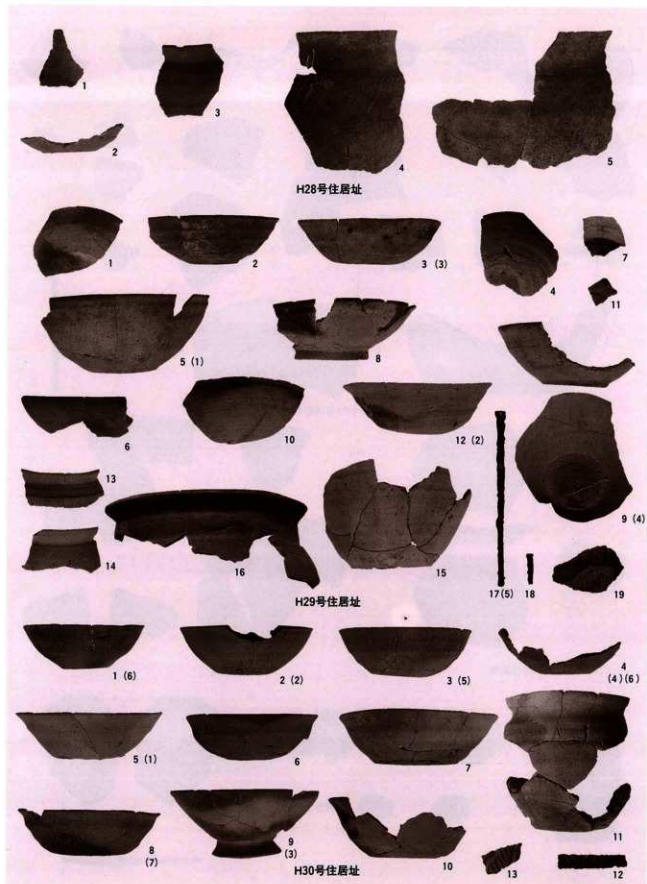
(H17② H18 H19)



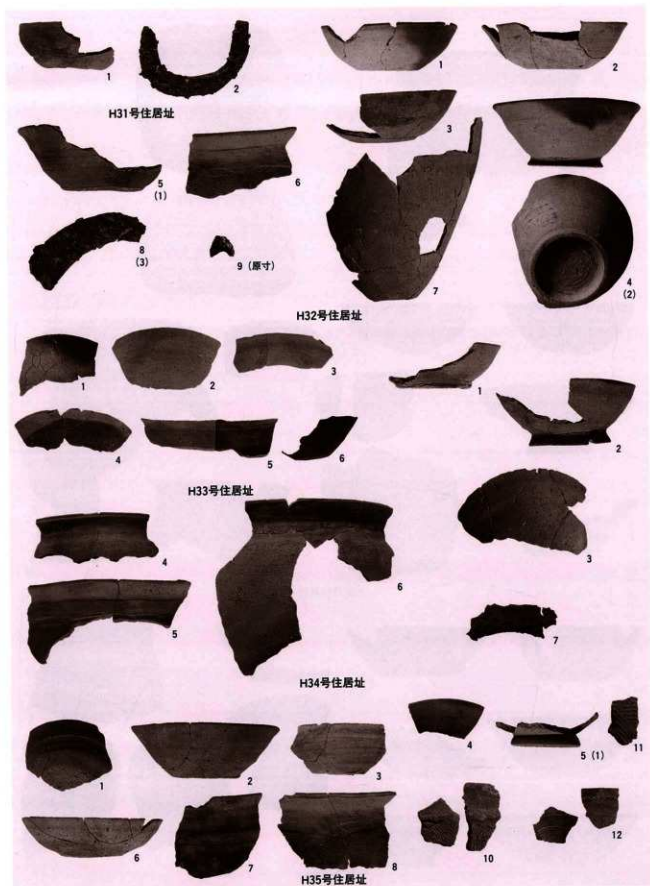
(H20 H21 H22 H23)



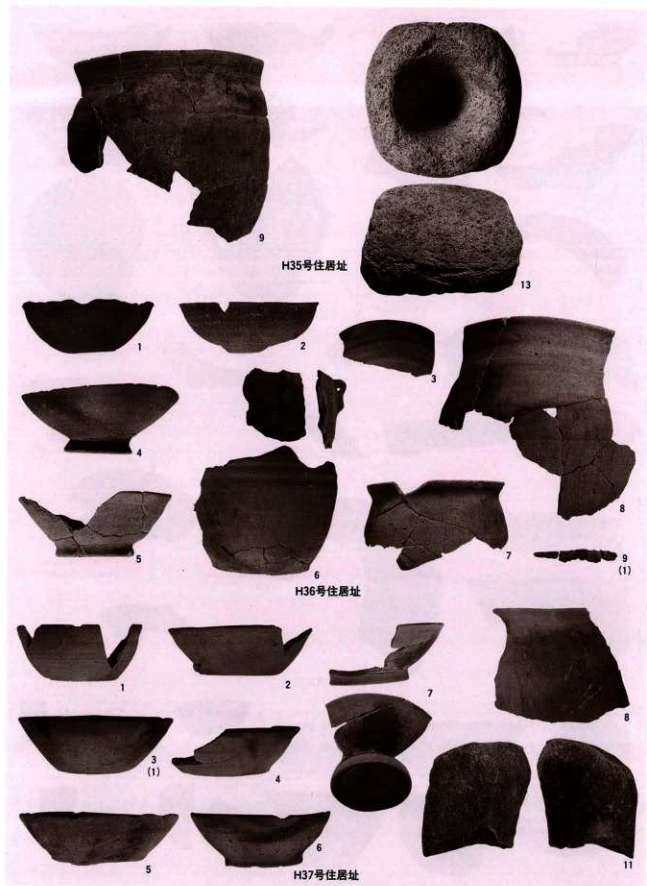
(H24 H25 H27)



H28 H29 H30



(H31 H32 H33 H34 H35①)

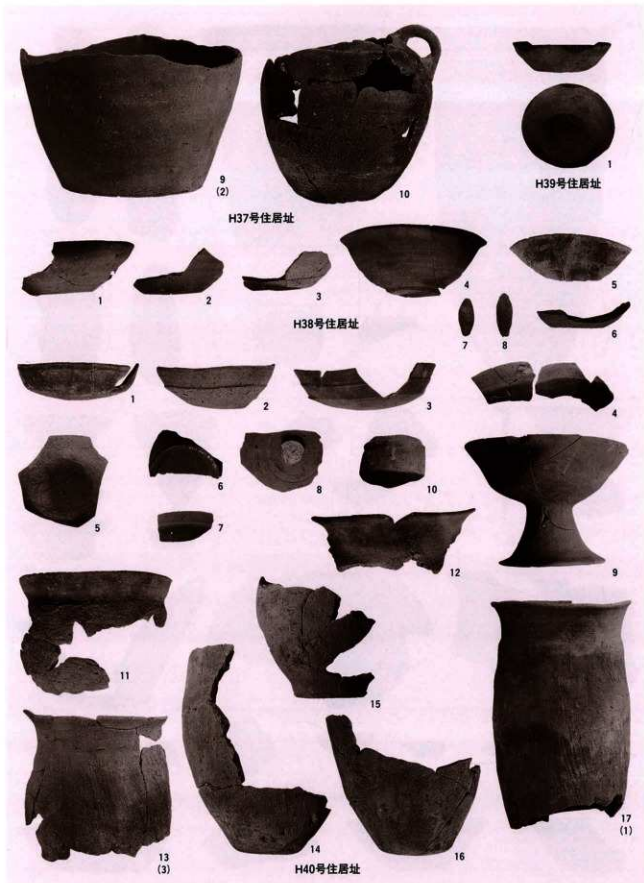


H35号住居址

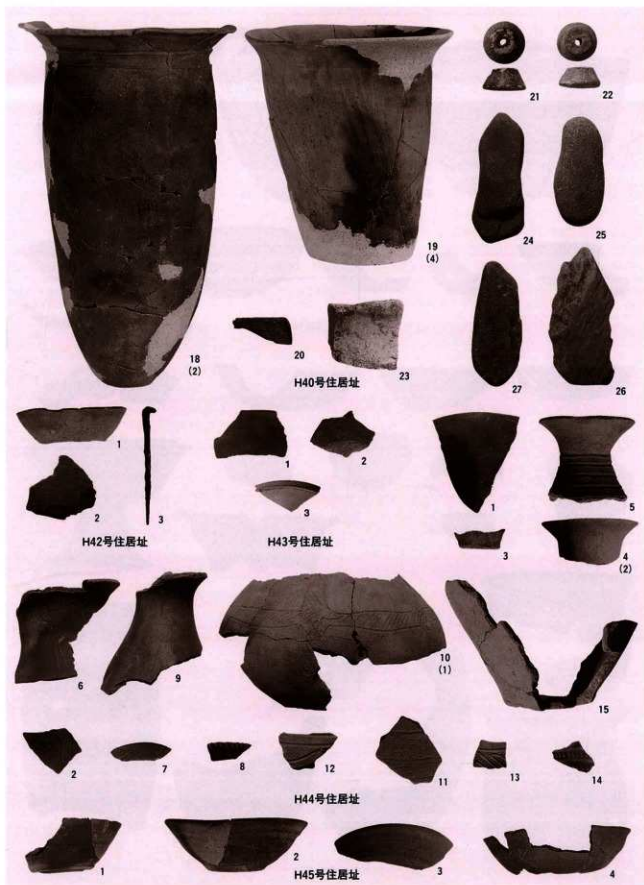
H36号住居址

H37号住居址

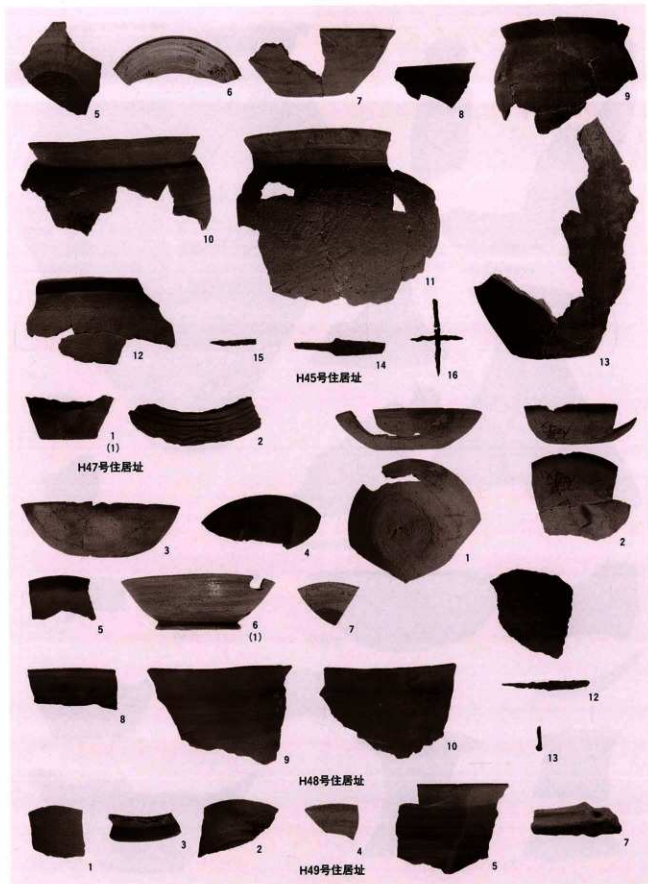
(H35② H36 H37①)



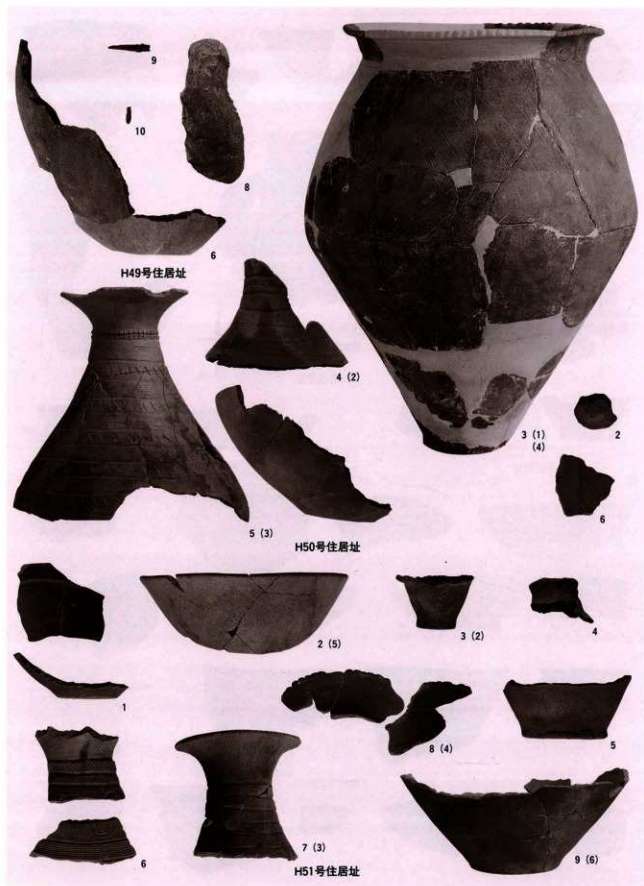
(H37② H38 H39 H40①)



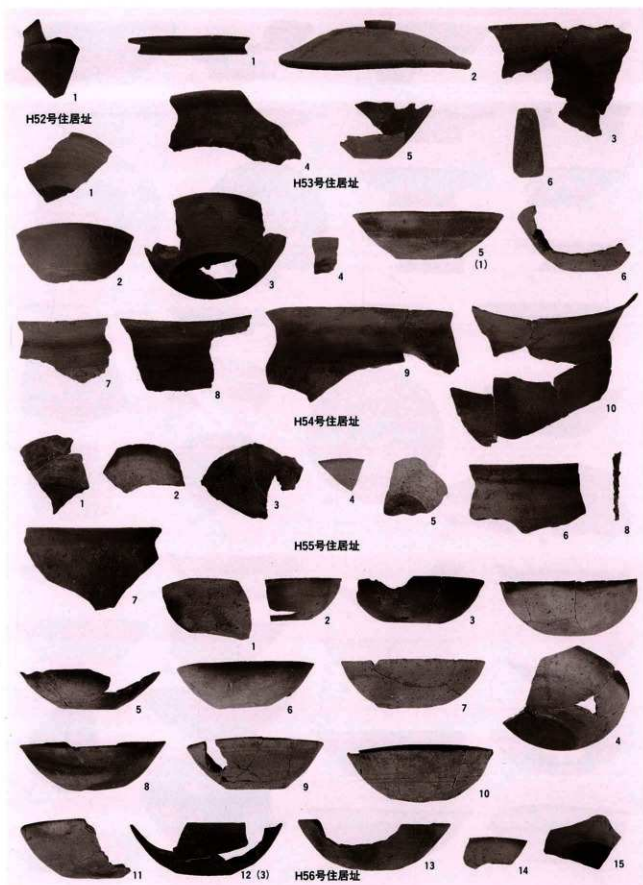
(H40② H42 H43 H44 H45①)



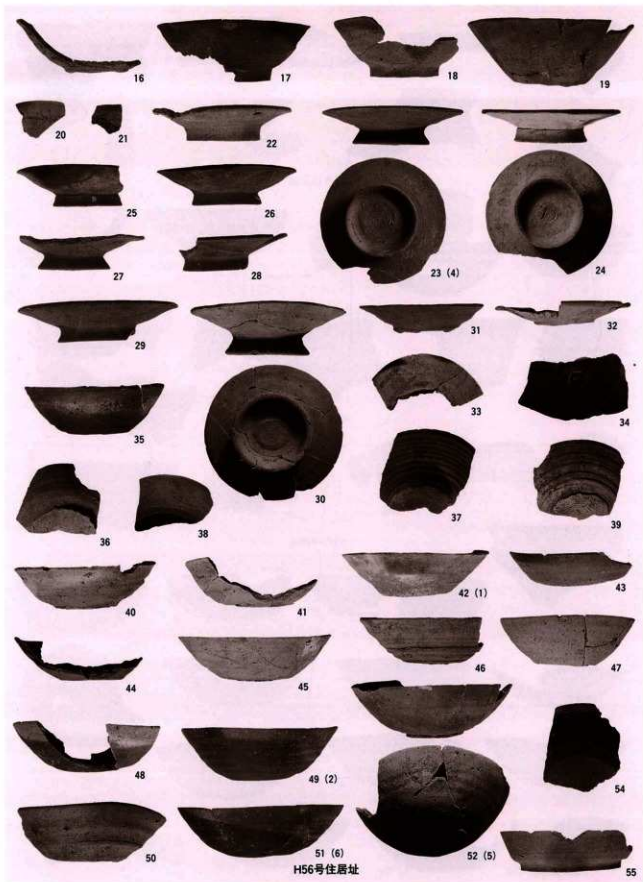
(H45② H47 H48 H49①)



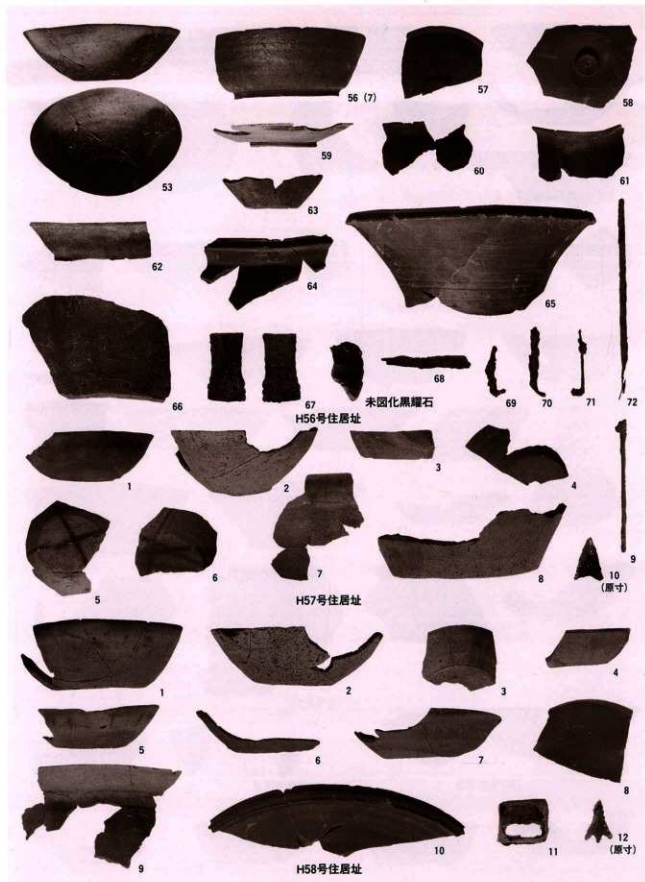
(H49② H50 H51)



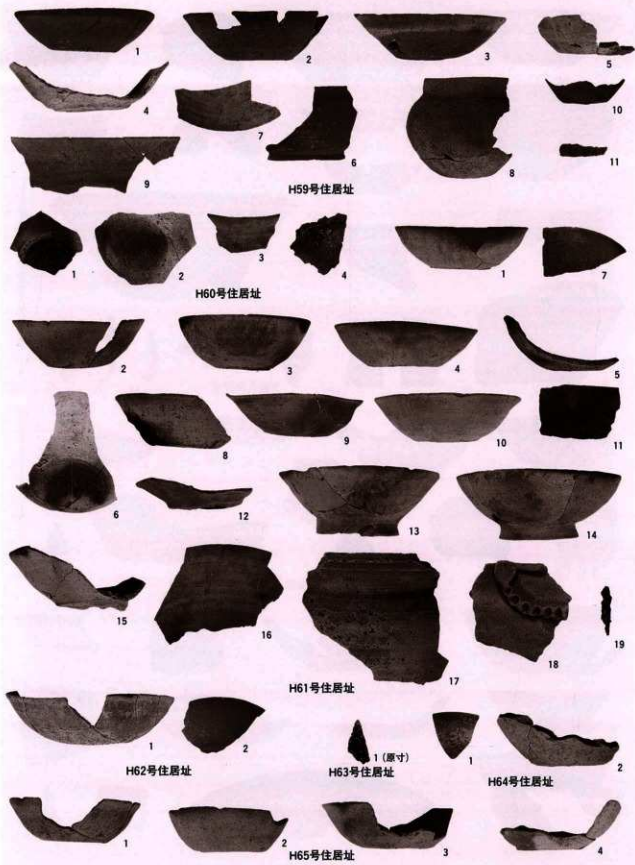
(H52 H53 H54 H55 H56①)

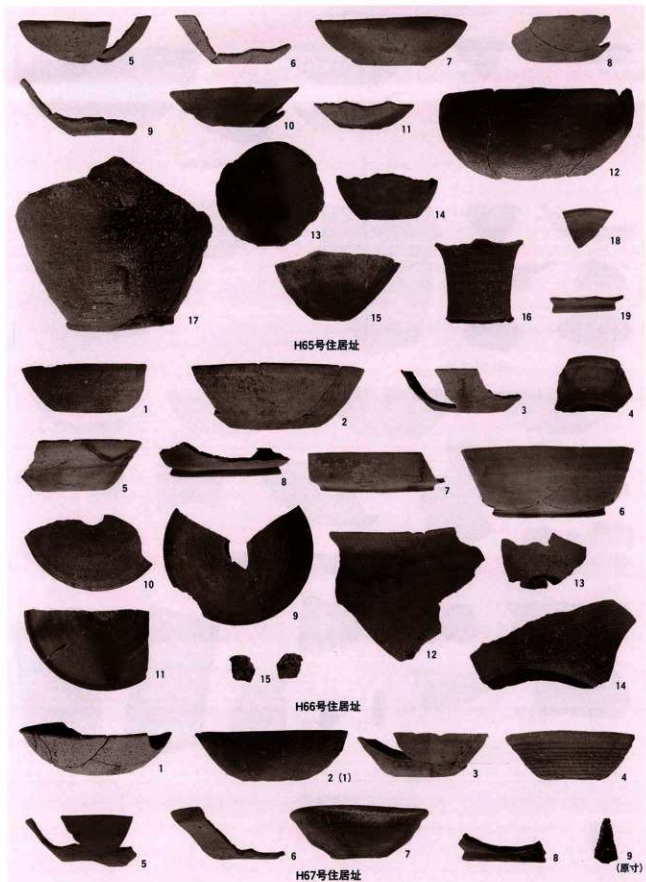


(H56②)

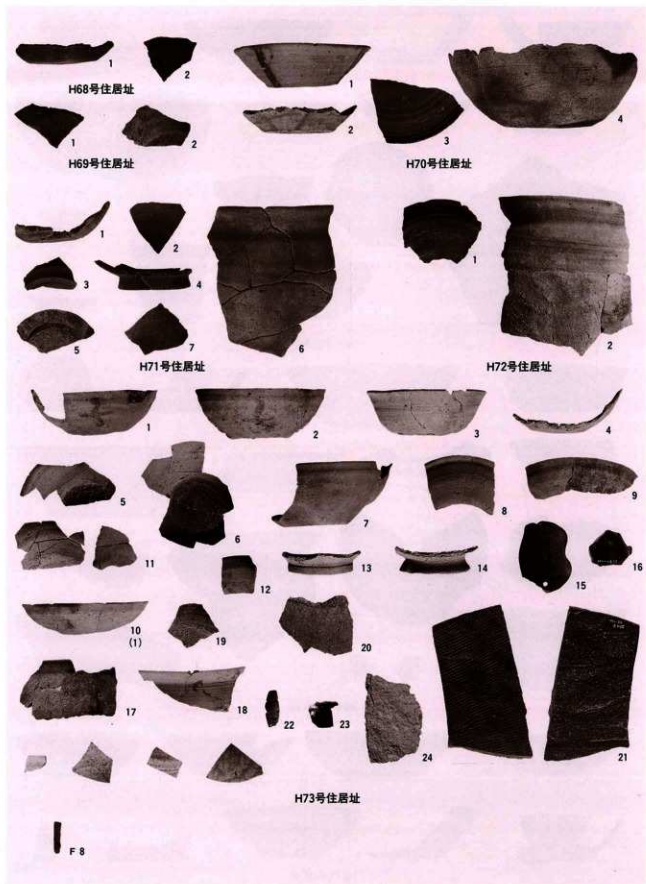


(H56③ H57 H58)

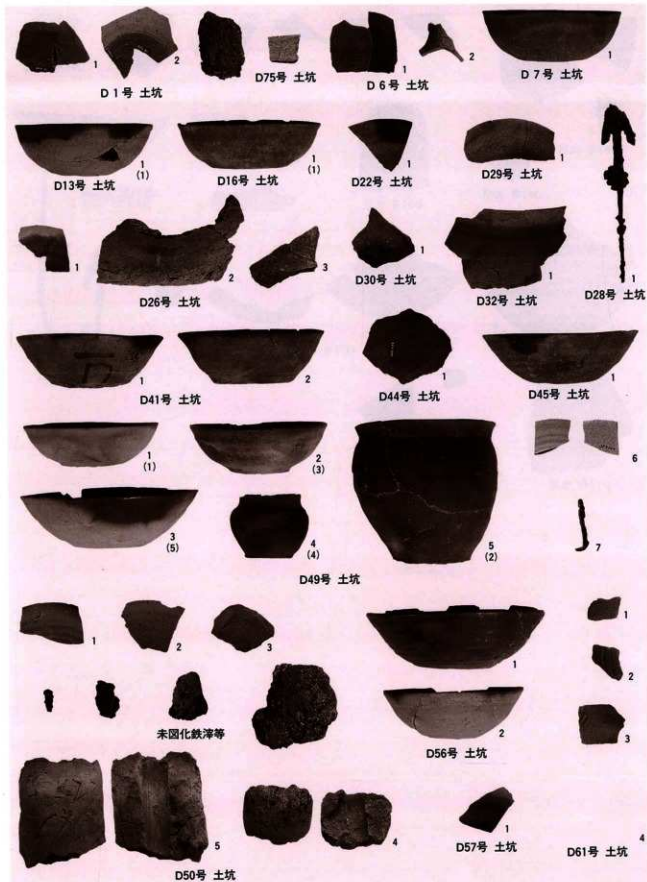




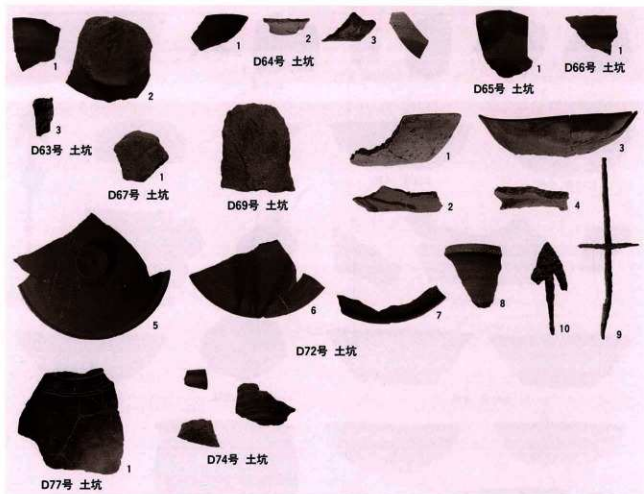
(H65② H66 H67)

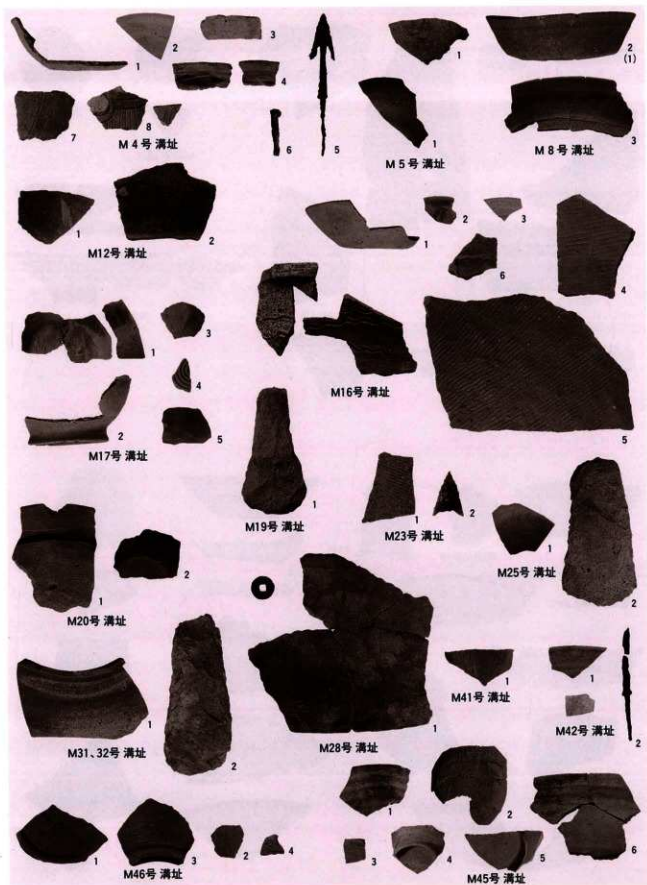


(H68 H69 H70 H71 H72 H73 F 8)

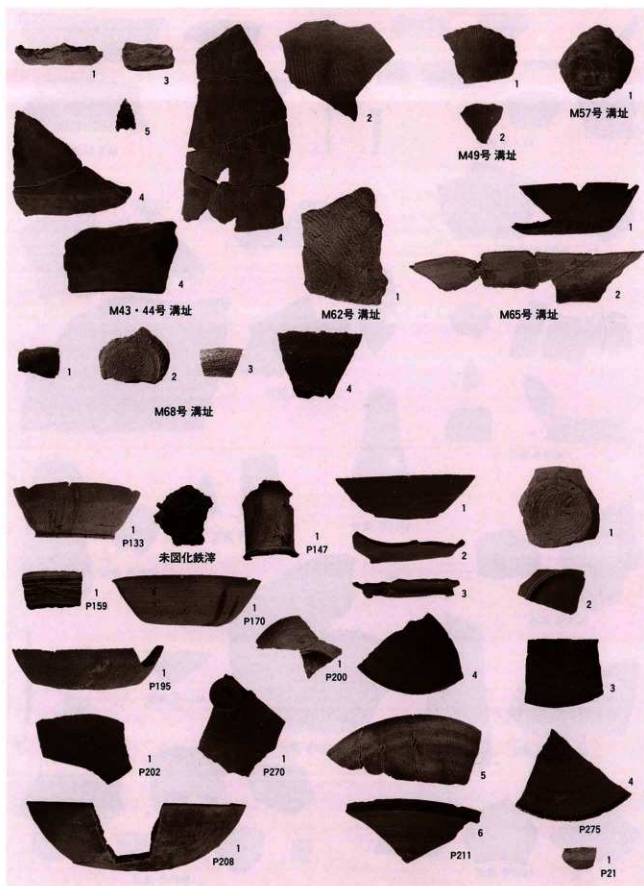


(D1 D6 D7 D13 D16 D22 D26 D28 D29 D30 D32 D41 D44 D45 D49 D50 D56 D57 D61)





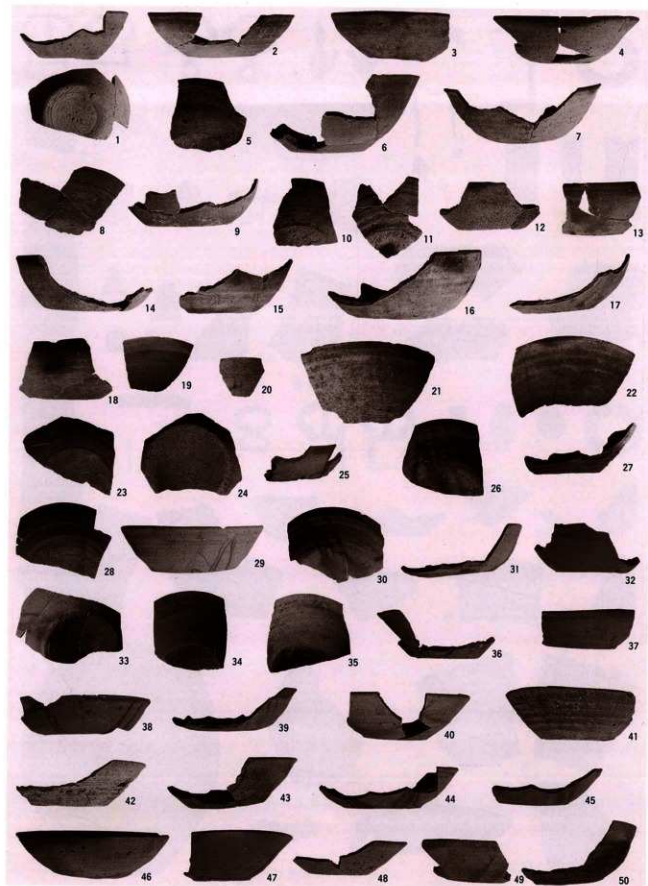
(M4 M5 M8 M12 M16 M17 M19 M20 M23 M25 M28 M41 M42 M45 M46)



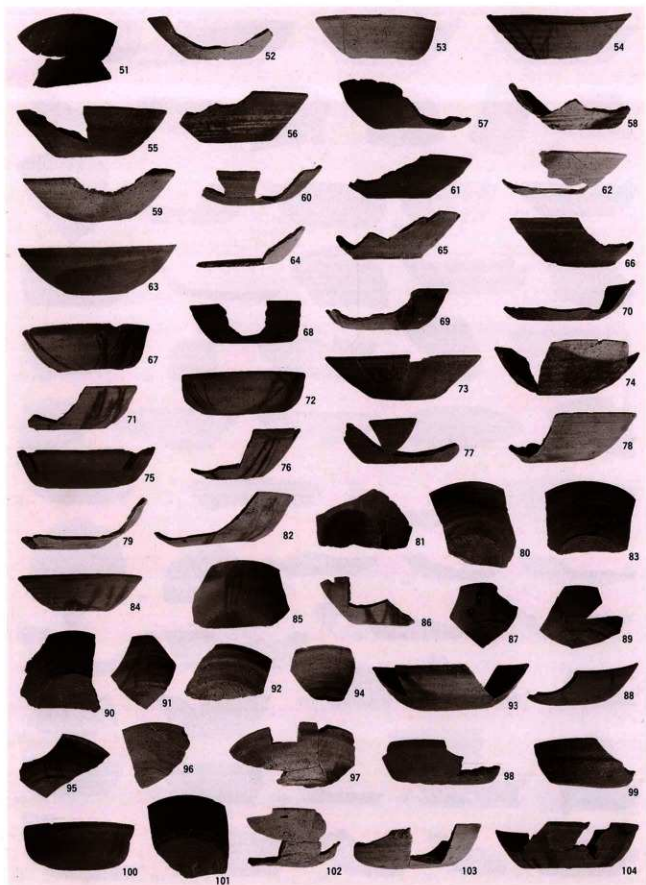
(M43 M44 M57 M62 M65 M68)
(P21 P133 P147 P159 P170 P195 P200 P202 P208 P211 P270 P275)



(350-4号古墳 350-5号古墳)



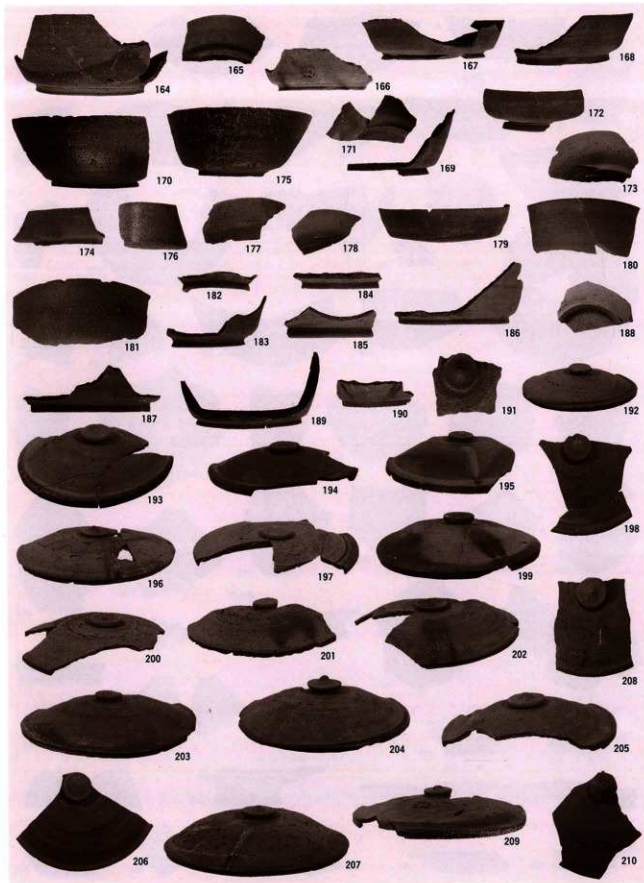
(遺構外① 1~50)



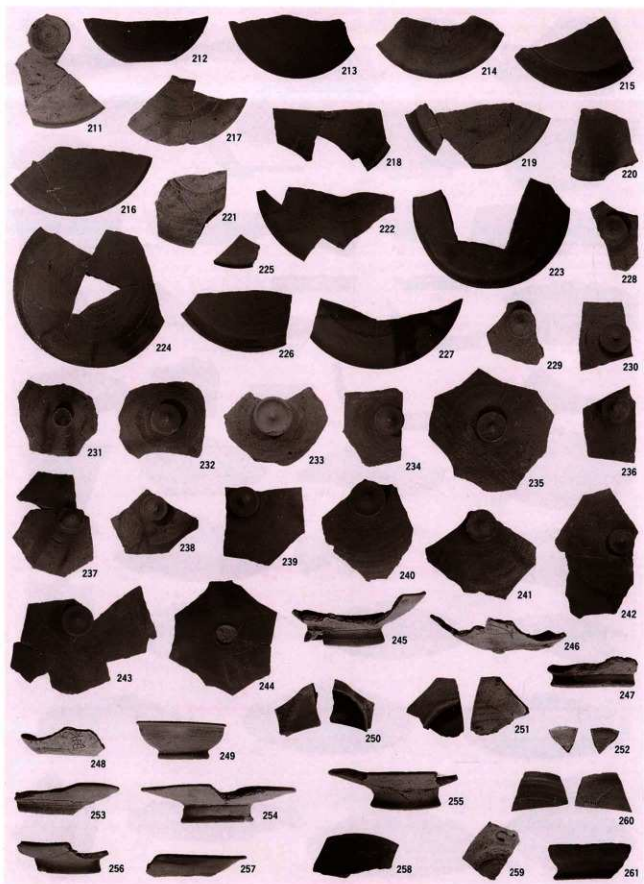
(遺構外② 51~104)



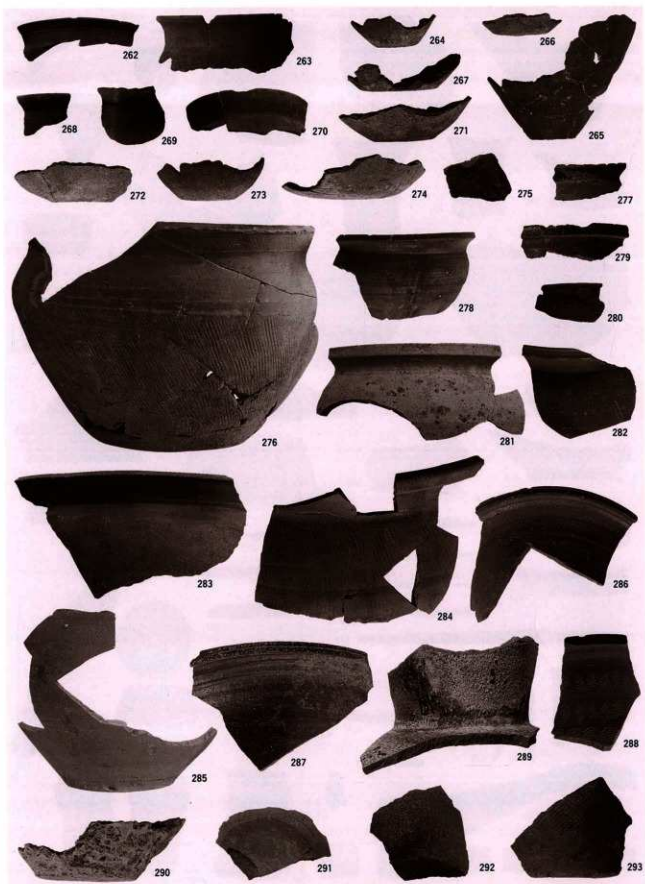
(遺構外③) 105~163)



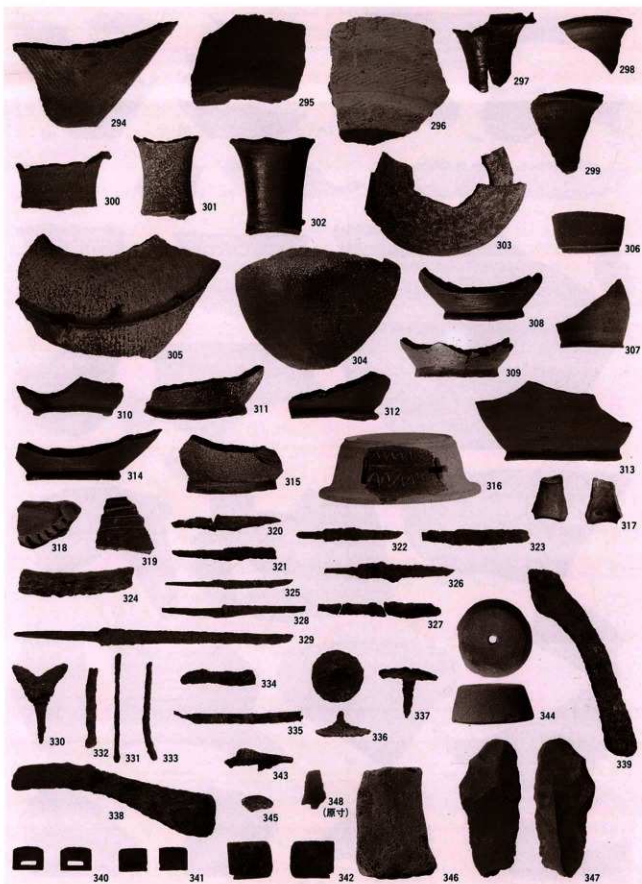
(遺構外④ 164~210)



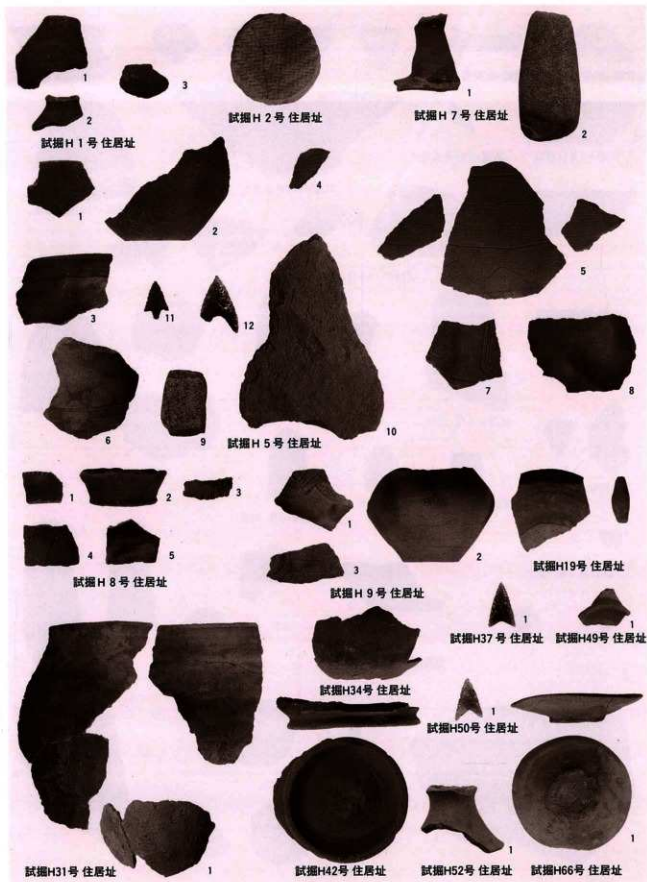
(遺構外⑤ 211~261)



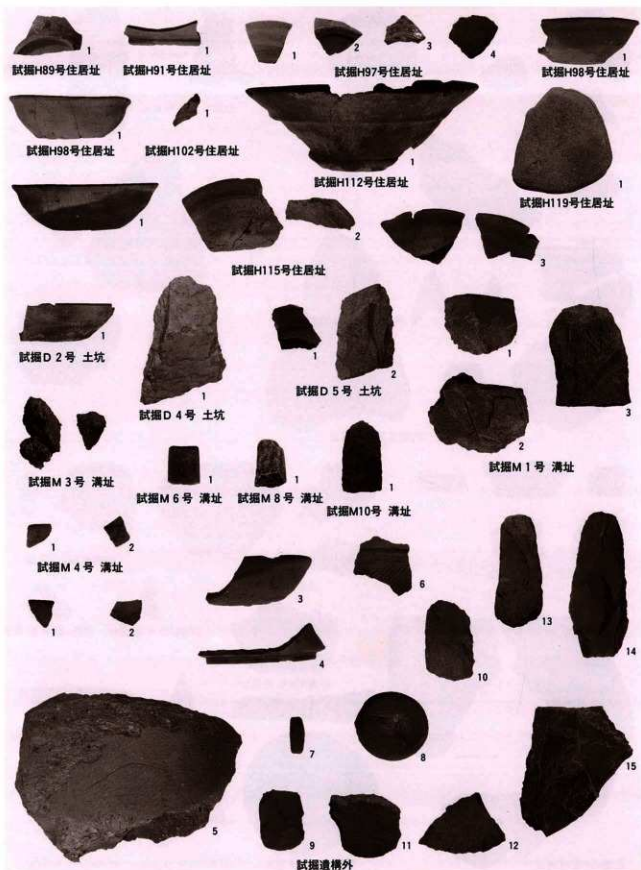
(遺構外⑥ 262~293)



(遺構外⑦) 294~347)



(试掘① H1~H66)



(試掘② H 89~H 119 D2~D5 M1~M10)
(試掘遺構外)

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第98集

深堀Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ

2002年3月

編集・発行 〒385-8501 長野県佐久市大字中込3056

佐久市教育委員会

〒385-0006 長野県佐久市大字志賀5953

☎0267-68-7321

文化財課

印刷 株式会社 佐久印刷所